

黄昏の王国



アレスミリアンがイーリアスを失い、ロンダルトの主となった頃、イズマイルのペルジアは反乱の季節に見舞われていた。

イズマイルの、力による支配が、クラコワでの敗戦により揺らいだ。

征服された民人達は、ペルジア中央の力が弱まった今であれば、その支配を覆せるのではないかと考えた。

度重なる戦争に男達を動員され、収穫を税に奪われ、残されたものは明日への希望を奪われた。こんな暮らしが何時まで続くのだ。篡奪者達は、いつまで我々から奪い続けるのだと。

或る民族が反旗を翻し、代官を襲い、ペルジア人を追い立てた。その部族の反乱が成功すると、その噂は他の部族に飛び火し、火がついた部族で燃え上がり、また他の部族へと燃え広がった。こうして反乱はペルジア全域に広がっていった。

アレスミリアンが、ペルジア以外の男達を無傷で返した思惑の一つはそこにあった。

彼等はイズマイルに刃向かうだろう。その反乱を鎮めるまでは、ペルジアは再びクラコワ・ロンダルトに遠征することは出来ない。

次こそペルジアに打ち勝つために、アレスミリアンは連合王国を、我が手の内に掌握するまでの“時”が必要だった。

アルシャーファとペルジア各地の間を、何度も急使が行き交った。

早馬が駆け抜けると、アルシャーファの街中には、もうもうと土埃が立った。今は丁度乾期にあたり、ただでさえ湿りの少ない大地は乾ききり、蹄に蹴り上げられた土は、粉末のように漂っては道行く人の頭に降りかかった。

都の人々は馬の前を逃げ惑い、振り返ると不安そうにその行く手を見送った。

空の青と、水の青の装飾壁に覆われたウイナイダル宮殿では、イズマイルが反乱の鎮圧に忙殺されていた。

「カルシア族とストーク、キニルはしばらく捨てておけ。パルミールもだ。

たいした力はないし、お互い離れている。奴らの領地から我々を追い出したところで気が済むだろう。後で個別に叩けばよい。いまは、ベシュイン族とムハル族に集中するのだ。この方面の司令官は誰だ。」

「ハイダイダル王子でございます、陛下。」

「ふむ。ラジル將軍はどこにいる。」

「キリクス川の下流で、サスキス人と対陣しています。」

「東と西か、ハイダイダルにはこれ以上兵は割けんな・・・。」

子飼いの兵の半分を失ったとはいえ、この東の一郭では、イズマイルに対抗する勢力が無いことには変わらなかった。

ただ彼方此方で、山猫のように発生する反乱を鎮圧するには、多少の時間がかかった。征服した部族から徴兵することで拡大した軍は、その補助兵がいつ反乱側に付くかも知れない状態では、混成軍を運用するのは危険性が高く、極力純粋なペルジア兵で戦わなければならなかったからである。

あのアレスミリアンという男、やはりあの時切っておけばよかったのだ。この反乱もやつの差し金かもしれん。だが覚えておれ、このままでは済まさんぞ。この次、出会ったときには・・・。

イズマイルは、先の逃亡以来、これまでも何度も思ったことを、思い返した。屈辱を思い出すたびに、彼の全身は熱湯となった汗を吹き出す。

夜ごと昼ごと、その考えは突然イズマイルを襲い、時に彼は、己の気が狂うかと思うほどの怒りに包まれた。

些細な落ち度の召使いを、皮が裂けるほども叩きのめしたこともあった。壁の絨毯が気に入らんとって剣で引き裂いた事もある。

次第に、誰も彼もイズマイルを避けるようになり、イズマイルもまた孤独の中にあった。

あの男。

古城の外で自らを餌に、わしの軍を罠に引きずり込んだ男。今頃はさぞかし得意であることだろう。

だが、何時までもそれが続くとは思うなよ。

それにしても、だ。諸部族出身の兵士を帰した理由は想像がついても、なぜイズマイル自身を、生きて帰したかには納得がなかった。

ペルジアに逃げ込むまでに、殺そうと思えば出来たはず・・・。
奴の息の根を止める前に、それだけは聞いてみたい。

「陛下。」

声をかけられて、まだ臣下達が残っていたことに気が付いた。
もうお前達に用はないのだ。下がってよい、というように手を振ると、自らは宮殿のさらに奥、後宮のほうへと歩みだした。

イズマイルが歩くところ、奴隷達は道を譲り、決して目を合わさぬようにと顔を伏せた。柱は身をよじてイズマイルを避け、行く手の壁が左右に割けた。

お追従を言う大臣も、金の無心をする官吏も居ない。甘い乳香の煙と、みずみずしい緑と、静けさ。
わしが心を休められるのは此処だけだ。

女達はひたすらに、わしの訪れを待っているし、奴隷達は口を開くことなく、ただ奉仕し続ける。まだまだ老いなどは感じ無いが、昔のようには行かなくなった。

もう自ら馬を攻め、剣を振るって戦うことは出来ない。羊が居なくなった、女がさらわれた、水場を横取りされた。

「わしが統一するまでは、お互いが争い、傷つけあい、殺しあっていたくせに。」
今度は共同して、わしに逆らい始めた。

小さな部族が争いあってどうするのだ。みすぼらしい、小汚い、小さな部族が。

一時代前であれば、わしが馬を向けると聞くだけで、騒ぎは収まったものを。息子達では侮られるだけ。

後宮には数多くの部屋があり、異民族出身の彼の妻たちが住んでいた。さまざまな異なる言語、異なる源流をもつ民族を、ペルジアが築く国と秩序が包み込む。
この後宮が、彼の世界観だった。

「みよこの都を、この宮殿の美しさを。」

帝国の首都にふさわしい。帝国だからこそ築くことが出来るこの富、この誇り。それが奴らには分からないのだ。

「もう少しで、あの王国が手に入るところだった。」

そして命からがら逃げ帰った。

また行くのだ。そうだ、もちろんまた行くのだ。あの国を征服して、わしは古の王を越えるのだ。

後宮との境には、彼以外の男の侵入を阻む、屈強な番人が立ちふさがっていた。外の騒動とは隔絶された、石造りの宮殿の奥には緑の灌木が茂り、草は花をつけ、中庭は流水を湛えた。

その中庭を囲んだ後宮の、その最も奥の一室で、一人の少女が鳥と遊んでいた。絶え間なく注がれる水泉の水音と、気まぐれに揺れる灌木のざわめき。鳥のなく声。

「鳥よ鳥よ、私におくれ。その翼をおくれ・・・。」

鳥は手の中の餌をついばむと、小首をかしげ、四角い空に向かって飛び立っていった。

少女の目は、その羽ばたきをいつまでも追っていた。

シルヴェスタに呼び止められて、イテカレスは立ち止まった。

「どうだい、そっちのほうは。」

「ええなんとか。でも忙しくて。ニールもいないし。こっちの貴族で、見込みのあるものを取り込もうとしていますが、なかなか。」

イテカレスは大きくため息をついた。

「それがいいだろう。奴らだいぶ不満がたまっているらしいぞ。いい空気抜きになるだろう。で、王様のご機嫌は。」

「ふう・・・。」

と、彼には珍しく、がっくりと肩を落とした。為す術がないといったような、気落ちの仕方だった。

「あれ以来、すっかり変わってしまわれました。ずっと宮殿に引っ込んで、どこにも出て行こうとはされません。それこそ、少し息抜きされたほうがいいと思うのですが。」

こういうときは、どちらかと言えばニールのほうがいいのです。あいつの方が付き合いが長いし、私のようにがさつでもないし。」

「お前も相棒がいなくて寂しそうだな。」

同情するような顔で、シルヴェスタが相づちを打った。

「みんな寂しいですよ。イーリアス様がいなくなって。この宮殿も寂しそうだ。」

二人はしょうがないとでも言うように、天蓋を見上げた。

天蓋では、鳥や楽士が永遠の春を歌い、春の花はしおれることもなく咲き乱れていた。誰がこんな、偽物の永遠など描いたのだろうか。それとも命がいつか尽きることを嘆いて、せめてもの慰みを、描かせたのだろうか。

「どおれ、今度は俺が会ってくるか。」

ニールよりも付き合いが古いからな。それが基準なら、何かの役に立つかも知れん。」

いまやロンダルトの商人の代表で、一代限りの貴族の称号を持つ独身男、がアレスミリアンを訪れたのは久々のことだった。

彼の並外れた冒険心が、南回りの航路を試してみると、そそのかして収まらなかったからだ。南回りは、それまでロンダルトの商人たちが交易路としていたこともあり、クラコワの商人であったシルヴェスタは商人の間の礼儀として、それには手を出さないようにしていた。

しかし、ロンダルトで正式な活動を始めた今では、形式上の問題は無かった。船は大きく突き出た半島を迂回し、ペルジアの港町オルスラに着くと荷を下ろし、それよりまたはるかに遠い東の国々の荷揚げを行った。

様々な香りの新しい香辛料。桂皮、茴香、胡椒、白檀、麝香・・・どれもこれも噂には聞いていたが、直接手に取るのは初めてだった。

孔雀とか言う鳥の羽は女達に受けるだろう。このオルスラのさらに東の世界へも、いつか行ってみたいものだ。

シルヴェスタは、船が荷下ろしする間、悠然と港町を歩き回り、酒場を覗き、店先を冷やかして、付き添いの男達をはらはらさせた。

彼は、おそらく此の国では、賞金首とでもいったいいような扱いのはずである。けれどもアルシャーファから遠く離れたこのような港町では、その顔を直接知るものは居ないようであった。

彼は港町の雰囲気、風を、匂いをそのよく効く鼻で嗅いで回った。

この町での、第一の話題は部族の反乱だった。

昨日は何族が立った。今日はどこそこが鎮圧された。明日のアルシャーファの天気は雨か。いざこざが此処まで及ばねばいいのだが。

そして最後に「イズマイルをこけにしたアレスミリアンという男はだな、・・・」。

獅子よりも強い爪を持ち、熊のような大男で、目は赤く燃え、肌はさめのように硬い、という話を聞いたときは、口に含んでいた酒を吹き出しそうになった。

「いや俺は見たんだ。なにせ、あのペルジアのイズマイルが、尻っからげで逃げ出したほどの大男だからな。」

そんな男が、この地上にいるはずが無いではないか。けれどもシルヴェスタは、船よりもはるかに大きな魚というより地上の動物に近い生き物をまだ見たことが無かったし、空を飛ぶ羽を持った魚や、ハイアルトの槍のようなものを鼻先につけた魚も見たことは無かった。

その男が、椅子にかけ、頬杖を突き、窓の外を眺めている。

初夏を迎えようとする青葉が揺れていた。少しやせた頬と、額にかかったままの髪が痛々しかった。

シルヴェスタは、しばらく声をかけずに戸口に寄りかかり、たっていた。

「そんなところに立っていないで、中に入ればどうですか。」

アレスミリアンが、姿勢を変えずに言った。

「うん、いやなに、どう言ったものかなと思ったものでね。」

セシリーが、白い陶の水差しと器を運び入れた。濃い新緑の香りが、辺りに広がった。

アレスミリアンがようやく振り向いた、抜け殻に、なけなしの魂がひと時だけ戻ってきたようだった。

白い器に注がれた、透通った清浄な茶色の液体を覗き込んだ。

「これは？」

やれやれ、「ずっと東の産物で、茶というものだ。」

「木の葉をつみ、人の手でもみながら何日か乾燥させ、湯の中に入れて煮出した汁を飲む。此処より西では、めったに手に入らないものだ。」

アレスミリアンは一口含んでみて、

「うん……。さすがロンダルトーの商人と言うところですね。」

「いくらなら買う？」

「私から金を取るのですか。」

「当たり前だ。自前の船を何隻か持ちたいんでね。ペルジアの船乗りも雇って、そのずっと先に行こうと思うんだ。ま、特別に安くはしてやろう、王様。」

何を見る、というでもなく、

「その船に、人は沢山乗れますか。」と尋ねた。

「どういう意味だね。」

「いずれ必要になるような気がする。それだけです。」

アレスミリアンは残りの茶を口に含むと、また黙った。こんなときでも、こんな状態でも、いづれ……。か、とシルヴェスタは哀れに思った。

「姫にも飲ませて上げたかった、とか思っているんだろう。」

アレスミリアンは、微笑んだように見えたが寂し気だった。

「ペルジアでもあなたの噂を耳にしたよ。獅子だ熊だサメだ、とね。あなたを彼らの前に連れて行っても、誰も信じないだろうな。」

アレスミリアンがそれを聞き、何を思っているかは分からなかった。

「セシリー。」

呼ばれた娘が、前に進み出た。

「この茶というものを、みなに振舞ってください。足りなければ、シルのところから回してもらおうといい。私がふがいなくて、みなに迷惑をかけている……。」

セシリーは、一度、後ずさりして下がろうとしたが足を止め、思い詰めたような表情で言った。

「誰も、アレスミリアン様が、ふがないなどとは思ってはおりません。

ただあなた様のことを、ご心配申し上げます。いくさから私どもの命をお救いになり、長い間この国にかかっておりました黒い雲を払おうとされています。

けれども、私どもの悲しみまで背負おうとなさることはありません。

あなた様は、何もかもをご自分の責めとされる。けれども、時にはご自分の弱さを許してあげるべきです。

おそばに仕えながら、私共も何も出来ませんでした。姫様の深い悲しみを救うことなど、姫様の潔い決心を止めることなど誰にも出来なかったのです。姫様は、あなた様への愛に殉じられたのです。

「姫様もきっと……。」

そう言うと、涙の溢れる顔を伏せ下がっていった。

シルヴェスタは、

「やれやれ、こんな善人ばかりだと居心地が悪いな。」

といいながら、満更でもないようすで頬をなで、顔をほころばせていた。

「イーリアスの侍女だった、セシリーといいます。」

ああ、「どおりで、見覚えがあったよ。」

「帰るところが無いというので……。家はあるのですが兄嫁がいて、いまさら戻っても年頃の娘がうろうろしていると迷惑がかかるだけだというので……。イテカレスが喜ぶでしょうし。」

「そうだ、思い出した。奴には、もったいない、いい娘だな。」

まったく、もったいない、というように首を振った。

「自分の弱さを許す……か。」

シルヴェスタが、傍らに立った。

「忘れていた。私は弱い人間だった。」
そして、まあいいさ、とでも言うように年下の王の肩に手を置いた。

アレスミアンは、久しぶりに深く息を吸い込んだ。

茶の残り香が、した。

クラコワは、ニールリングとキリアンデルが切り盛りし、雪解けとともに、打ち壊された村や埋められた堀の改修が始められていた。

カラバ公は、イーリアスの後をしばらく空位とすることに決めた。イーリアスの記憶を人々の心から追い出すようなことを、しばらくはしたくなかった。

村々では新しい年の作付けが始まった。男たちは種をまき、女たちは早朝から乳を搾り、パンを焼いた。山間には、牧童の牛を追う声と、牛のつける鐘の音が響き、雪解け水で羊の毛を洗う準備が始まっている。

この冬の間生まれた子牛たちは、草の中を飛び跳ね、親牛たちは青草に埋もれて昼寝した。青空と星空が何度も入れ替わり、時には山を駆け下りてくる雲と雨が馬の背をぬらし、雷鳴が梟の目を驚かせた。

狼はあいかわらず腹をすかせていたが、羊を襲うほどの危険は冒さなかった。

夏風が麦の葉を揺らし、大きな緑の波を起こすころ、忘れられかけた人に関わる事件が起こった。

取次ぎの侍従の「ザルウィー伯がお目通りを。」という声がした。

「よい、通せ。」

この宮は少し広すぎるかもしれない。通せとってから現れるまでに随分かかるものだ。

「わが主。わが王よ。ご機嫌はいかがか。」

いつもながらのことだが、

「あなただけです。そんな古式ばった言い方をするのは。」

ザルウィー伯ヨクアルは、長身で碧眼。癖のある濃い砂色の髪を長く伸ばし、齢もまだ四十を越えたばかりの貴種であったが、外見に合わず言葉遣いが古臭かった。

アレスミリアンはこの伯を見ると、ハイアルト卿を思い出して妙に可笑しく、懐かしかった。外見だけでなく、古風な時代の人間のもつ、何とは無しの振る舞いが、ハイアルトを彷彿とさせたのだ。

「もっとふんぞり返られるがよい。王なのだから。」

「では。 何用じゃ、とく申せ。」

「うーん、どうもしっくり来ませんなあ。まあよい。今日はわたくしでは無く、この男がお願いに参った次第。本来直接のお目通りは適わぬ身分であるが。」

といい、背後の男を見せるために小脇に体を寄せた。

「構わぬ。面をあげよ。」

声をかけられた男は、その、これといって特徴の無い顔を、少しばかり上げた。

「クワスルトンと申します。アレスミリアン陛下。一度だけ御前に。」

そう言われて、アレスミリアンはあの夜のことを思いだし「あっ」と声を上げそうになった。忘れようとしても忘れ得ぬ、生涯心に残る亀裂の、夜のことであった。

「ウエルモンテ伯に何かあったのか。」

男はこくりと頷き、乾いて出ないつばを無理に飲み込んだ。

「私は、代々ウエルモンテ家の家宰をしており、クワスルトンの名前を継いでおります。

このほどわが主、ラグリマ・ボルドクレイン・ウエルモンテは心の病により、言行不安のため当主の任にあたわず、隠居といたしました。

代わりに、分家より、ロバクサ・ルマタル・ウエルモンテを迎えたく。何卒よしなにお取り計らいのほどをお願い申し上げます。

本来であればウエルモンテ家当主が申し出るべきところ、かような事情によりザルウィー伯爵様に仲介の労をおとり頂き、まかりこしてまいりました。

何卒ウエルモンテ家へのお怒りを解き頂き、当主交代の儀、お許しいただきますよう。」

ここまで一息に言うと、クワスルトンはその、これといって特徴の無い顔を大急ぎで伏せた。一世一代の大仕事であった。

「気がふれた、と言うか。」

「御意にございます。」

「ウエルモンテがなあ……。本当のところは、押し込めたのか。」

「いや、ああ……。はい。仰せのごとくでございます。」

クワスルトンは顔を伏せたまま答えた。もしこのとき彼が顔を上げて答えたとしても、その無表情からは何も読み取れなかったろう。

「事と次第によるぞ。」

他の家のことであれば、その家の事情に任せてもいい。

けれどもウエルモンテ。

「このままでは、ウェルモンテ家は奈落の底まで落ちて行きます。

そうなれば一族のもの、郎党のもの、みな路頭に迷うことになります。忠義第一とはいえ、それは家門への忠義が第一であり、主が一族を省みぬのであれば、一族は主を守ることが出来ません。

我が主は、今後は所領の古城にて起居することとなります。二度とその敷地を出ることは叶いません。」

クワスルトンの服の下は、土砂降りの中を走ってきた子供のように汗で濡れそぼった。

「分かった。許そう。下がってよい。」

クワスルトンは、心の底からほっとして部屋を辞去した。

「まあ、あれです。」

ザルウィー伯は、何か気の利いたことでも言おうとしたが、思い浮かばず

「意外なところから幕が下ろされたというか。」

そして周りを、アストアシタ宮をみまわすようにすると、

「私も、あの男が実権を握ってからというもの、極力このアストアシタには近づかぬようにしておりました。恐れとかそういうことではない。ただ関わりになりたくなかったという理由で、ですが。」

それが、良くなかったのかもしれないと思った。

ザルウィー伯は、アレスミリアンと黒の宰相との確執を一応知ってはいる。世間で噂された程度に、と言うことだ。故に、真実でないことでも知っていることはあるし、本当にあったことでも、知らないことはある。

「たしかに幕は下りた、のかもしれない。が、役者はまだ退場していない。」

アレスミリアは暗い表情で考えを巡らせた。其れだけで済むような話ではないだろうと。

「と、いわれますと。」

「相当、恨みを買っているだろうということです。所領などに引き込んでしまえば、何が起こっても不思議ではないでしょう。」

ザルウィーは、慎重に言った。

「命を、狙うものがあると仰せですか。」

「山のよう。」

「それはいかん。いかに悪人とはいえ、暗殺はいかん。もし他家の者が殺せば、ウエルモンテも見過ごすわけには行くまい。面子が立ちませんからな。」

ヨクアルは、私怨の前に公としてどうあるべきかを判断できる男だった。
アレスミアンはそれに好意を持った。

「私にどうしろと。」

「いや、王に向かってどうしろということは。滅相も無いことです。」

「私は父を殺され、命を狙われた。イーリアスは、その板ばさみとなり、死を選んだ。」

「なんと！は、はじめて給われました。そんなことが。いや、決して他には漏らしませんが・・・。にわかには信じがたいが、その様なことがあったとは・・・。」

ザルウィー伯ヨクアルは、まだ驚きの影響を残したままで、しばらく考えていたが、

「私には、先の戦で、ロンダルトの落城を見送った負い目があります。それにはそれなりの理由があるのですが・・・、以来、心に釈然とせぬものを残したまま、今日まで永らえて参りました。

先王を失い、王子を見殺しにした。本当にこれで良かったのかと惑い続けて毎日を・・・故に、この件はお任せ頂きとうございます。

ながらく、世上を厭う暮らしをしておりましたが、今は、再びこの国のために働くときが来たような気がしております。このようなことで、我が君のお手を煩わす必要はありません。」
という、深い礼をし、その古雅な足どりでアストアシタ宮を後にした。

ザルウィー伯の後ろ姿を見送った後、

「忘れようとしても・・・。」

苦い思いは蘇ってくる。

まるで人が振り向くのを待つ捨て犬のように、背後の草むらにじっと目を光らせて隠れている。

一人残された部屋で、アレスミリアンは肘掛についた右手に頭を乗せ、しばらく動かなかった。身体を動かすことが億劫な事が多かった。心が動きを止めていたからだろうか。

クラコワで、ペルジアの戦いに備えてあわただしい日々を送っていたころ。不安だったがそれを共有し、共に立ち向かう人がいた。今はこの寂しさを共有する人はいない。いないから寂しい。ぐるぐると同じところを回って抜け出せない。

“肉親を一度に失うのはつらいことだ。自分と血のつながりのあるものがみないなくなるというのは、世界にたった一人になってしまったような気がする。寒くて、寂しいものだ。”

いつかカラバ公が言っていた言葉を思い出した。カラバ公もまた、誰かを失ったのだろうか。

気がつくまで泣いている。

「アレスミリアンさま。」

不意に声がした。セシリーだった。

「何かお持ちしましょうか。」

そうだな「茶というのは、まだあるかな。」

「はい。」

「では、それと、城中で暇そうなものを何人か。」

「承知いたしました。」

「そなたも。」

「はい。」

帰る家が無いなどと・・・。嘘つきめ。

“こんな善人ばかりだと居心地が悪い。”

全くだ。

寂しさに浸っている暇も、ありはしない。

数日後、ウェルモンテは身内のものに半ば脅されてロンダルトを後にした。

騎馬と、鎧戸を下ろし、外からは中を伺い知れぬ馬車。内に閉ざされた一行は西へ西へと向かい、ウェルモンテ所領の居館にたどり着くまでは、五日の道のりだった。

奇妙なことに、出発した人数と到着した人数は同じだったが、最後に目撃された一行の中にウェルモンテはいなかった。それ以来、黒の宰相の消息は知れなくなった。

一代の権勢を誇ったウェルモンテの最後が、どのようなものであったかは記録に残っていない。もちろん墓も知れ無い。

様々な憶測が飛び交い、噂話が広がったが、どれもこれも不確かだった。

新たに家を継いだロバクサは、分を越えるような欲望を持たぬ、平凡な男であった。平凡であるからこそ、クワスルトンもその後継者として選んだのであろう。

一度だけ、新王への目通りをしたが、其れ以外に宮廷内で目立つような所行を働く男ではなかった。自然とウェルモンテ家は、黒の宰相時代の過分な富と権力をはき出し、元の鞆へと収まるような坂道を、ゆっくりと下り始めた。

ヨクアルも、特徴の無い顔の男も共に何も語らなかった。が、シルヴェスタの調べによると「殺しはしていない。が、退屈で死にたくなるかもしれない。」ということであった。そしてシルヴェスタをもってしても「それがどこかは分からない。」ということだった。

ザルウィー家が、アズールの血を引く王家にしたがってから六百年がたとうというのに、その広大な領地は、独立国のような固有の文化と言語すら維持してきた。

商人といえど、何もかもが自由に振舞えるというものではない。いくら自由人とはいえ、商人は街道を通るしか目的地へ向かうすべを持たない。そして、王の仕事は街道の安全を守ることだ。自然、行動は制約される。

ザルウィーの国では、ウェルモンテが何者かを知るものも限られたし、言葉も満足に通じることは無かっただろう。

たどった糸は、その境を越えるや否やぱつぱりと切れてしまっていた。

「おくさま。」

ロンダルトなどに比べると、はるかに遅く初夏を迎えた村に、便りが届いた。

新緑の薄い黄緑が野や山を覆い、花虻がブンといううなりを上げて忙しげに飛び回っている。

古びた屋敷は、ひところの屋根が崩れかけたり、床が腐って抜け落ちる、というような危機は脱していたが、貴族の館というよりは、多少裕福な農夫の家といってもよいぐらいの外観はあまり変わりなかった。

冬の間枯れたかのように見えた蔓草も、黄緑の葉を蘇らせて日、の光にきらきらと輝いて館の一面を覆っている。

この館の主の、出来るだけ昔のままに、彼女の目がまだ不自由ではなく、夫と思い定めた人がまだこの世にいて、この館をしばしば訪れていたころのままに残しておきたいという希望から、あまり見かけを変えるような手は入れられなかった。

どこからどこまでがこの館の敷地という区別もなく、歩き続ければ小川に行き当たることもあれば、森の入り口に至ることもある。屋敷のすぐ前を、うずらの家族連れが通ることもあれば、軒下に渡り鳥が巣をかけることもある、実にのどかな田舎の領主の館の風景であった。

「おくさま、文が届きました。お読みしましょうか。」

それが届けばそれはエルシーが読むのが慣わしだったが、彼女がその都度リードヴェルトに問うのも習慣だった。

エルシーも、クラコワに来たときとは随分様子が違って、もう少女とは言えない、すっかり娘の姿になっていた。

「そうですね。読んでくれますか。」

二人は、日当たりのよい窓辺に椅子を移した。

初夏の気まぐれな風が、林をゆらす音が時折聞こえるだけの、いつもと変わらない昼下がりに。農夫たちは午前の作業を終え、木陰でささやかな昼食の後の眠りの中にいた。

空に目を移すと、上昇気流を捕まえた鳥が、飽きもせずにくるくると輪を描いて空高くにいた。

エルシーは文を開け、小卓を挟んだ向かい側に座り、いつものささやくような声で、最初の一文から最後の読点までを余さず読み上げた。

リードヴェルトに宛てられた文は、こうして総てエルシーの知ることになったが、彼女がそれを他に漏らすようなことは全くなかった。

エルシーは元々口数の多い方ではないが、彼女はこの仕事を「何か高貴なもの」と考えているので、なおさら人に話すことはない。

「高貴なもの」というのは、高級な教育を受けたことのない、彼女の知る言葉から選んだ独特の言い回しで、意図するところは、自分の存在証明とでも言うべきかも知れない。

今日のこの文には、ただ音読するだけではすまされない、エルシーの心を揺する言葉が書かれていた。

「お聞きしてもよろしいですか。」

「ええ。」

「アレス様は、王様になられたのですか。」

「その様ね。」

「ロンダルトの？、クラコワでもなく・・・。」

「ええ、ロンダルトの。」

「どうしてなのでしょう、・・・信じられない。王様というのは誰でもなれるものではないのでしょうか。」

「あの子が王になるぐらいですから、王様というのも、思いの外たいしたものでは無いのかも知れませんね。」

ふーん、そんなものかと思った。

「イーリアス様は亡くなられたと。」

「そうですね、なにがあったとは書いてないのですね。」

「はい。」

もう一度目を通したが、読み飛ばしたところは無かった。

「そう。お気の毒に。」

「アレス様も。」

その間にまた、風と木のざわめきと、鳥が飛び立つ音がした。

「身分や位は、生まれながらに付いてきても、幸せというのはどうすれば恵まれるものか、分かりませんね。」

イーリアス様がお幸せだったかどうか……。けれど、もっと生きていたかったのではないかと思うのです。アレスミリアンもこの家に生まれて、王様などになってしまったけど、それが本当の望みだったかどうか。あの子達に比べれば、この辺境の小さな村の農夫達の方が、余程幸せなのではと思うことがありますね。」

あまり、悲しみの感情をあらわにしない、リードヴェルトの表情が騒っていた。

「リードヴェルト様はお幸せではないのですか。」

「いいえ、私は幸せですよ。この美しい村で、美しい思い出と共に、村の人々にもよくしてもらっているし。見たくないものも見ずに済むし。」

あなたは、エルシー。」

「私は、幸せでございます。」

「それは良かった。でも、あなたもそろそろ嫁に行く年頃ね。」

エルシーは、うっすらと頬を染めた。

「私は嫁になど行きません。ずっと奥様にお仕えいたします。」

「それはうれしいけれど、私はあなたより先に死んでしまいますから、その時はあなた一人になってしまいます。それはよくありません。」

「嫁に行っても、リードヴェルト様のお世話が出来るのなら、私は構いません。」

エルシーはこの「なにか高貴な」役割を、ずっと続けていたいと思っていた。

「ごめんなさいまし。」

庭先で、といってもどこまでが庭で、どこからが野原か分からないが、男の声がした。

「ご・め・ん・な・さ・い・ま・しい。」

エルシーが出てみると、

「ルークス様の使いでめーりやした。あたしゃビードルともうしやす。

本当はウィードルと言いますが、みな言いにくいと言いますんで、ビードルにしちまいました。」

少し鼻に掛かった声をした、どこから何処までが額で、どこからが頭か判らないが、よく日に焼けたしわくちな顔の男が馬に引かせた荷車を背にして立っていた。

「ウィードルさん？」

「いんや、ビードルでけっこうで。」

「はい。ビードルのウィードルさん。」

エルシーは引き受けたというように、にっこりと笑った。

「まあなんでもけっこうでさ。ルークス様の使いで、リドヴェルトの奥様に、贈り物を持ってめえりやした。」

「リードヴェルト奥様。」

「へい、リドヴェールト様。今年も贈り物を持ってめえりやした。なにせアレス様は、あしどもいちぞくの恩人。頂いた小麦で、どれだけのこっこやじじいがたすかったかしれやーせん。

でもルークス様は、アレス様ではなくリドヴェルト様に送れーていうもんで、こちらにもって来さしていただきやあした。」

「リードヴェルト様は、アレス様のお母さまです。」

「ほい、さいでごぜーますか。そういえばそんなこともいっておりました。あんまり沢山言われてもいちどにはおぼえられません。」

エルシーは、くすくす笑いながら一度館の中に戻り、次に姿を見せたときはリードヴェルトの手を引いていた。

「ウィードルさん。」

「へい、おくさま。」

「ルークス様に、お礼を申していたと伝えてくれますか。」

「へい、おくさま。で、荷はどこにおけばよいでしょう。」

「後で村のものが取りに来ますので、ここにおろしてくださいな。」

エルシー、いつもどおり、分けられるものは村のものに、分けられないものは、あなたかハペルが良いように取り計らってください。

それから、ウィードルさんにお食事の用意を。」

エルシーは万事引き受けたと、一言「はい。」と言い残して奥へと下がっていった。使いの少年が、村の方へと走り去っていく。

ウィードルは、積み上げるときは手伝いが沢山居たが、下ろすときは手が足りない。馬は力はあるが、物がもてねえときたもんだ。これは一苦労だぞと思いながら、荷下ろしを始める。

空は気前よく風を運び、青空からは当分雨が降りそうにはなかった。

「こらっ、こっちおいで。こっち！」

離れたところから、子供の甲高い一生懸命な声が聞こえてきた。

「まあ何かしら」

「羊の子供です。奥様。」

エルシーがささやいた。

子供は、さかんに引き綱を引いていたが、子羊はなかなか言うことを聞いてくれない。

「あしの孫です。」

ビードルのウィードルは、目を細めていった。

「もうしょうがないなあ。よいしょ。」

子羊は、子供に抱きかかえられて、ようやくつれてこられた。

「おくさまあ。ことし生まれた、このこっこの、名まえつけてあげて。」

「まあ、わざわざつれて来たの。」

「うん。たいへんだったよお。でも、いいこになるように、なまえをつけてほしいの。」

そのたいへんだったよには、子羊をつれてくるために、その母羊も連れてこなければこなかったこととか、その母羊からいいお乳がでるように、よい草場を探したこととか、こんなに遠くだとは思っていなかったこととか、いろいろな思いが入っていた。

「そう。それでは・・・イーリアスにしましょう。お姫様のなまえよ。」

「へー、おまえお姫さまになるんだよ。」

えええ・・・と子羊がないた。

「おくさまありがとうって。」

「どういたしまして。その子のこっこのもイーリアス。そのこっこの子もイーリアスにするんですよ。」

「みいんなイーリアス？」

「そう。」

「ふーん。」

子供が子羊をはなすと、危なっかしい抱擁から開放された子羊はかけだした。

「イーリアス、イーリアス。こっちこっち。イーリアス」

子供の楽しげな声が、静かな午後に響き渡った。

イーリアスは、ようやく北の大地に行くことが出来た。

ハイダイダル。イズマイルの第二王子、の顔が赤く燃えている。
細い切れ長の目と薄い唇が、皮肉な笑いに歪んでいた。

「てこずらせてくれたものだ。が、もう二度と反乱を起こそうなどとは思わないだろう。」
赤く燃えているのは、夕日のせいではなかった。

「こんなことがイズマイル様に知れたら・・・。」
彼の母譲りの白い肌が、燃え上がる炎により、血の色よりも朱に染まっていた。

「どうってことはない。この国はいずれ私のものだ。」

ベシュイン族の町が燃えていた。街の東端に積み上げられた薪につけられた火は、東風にあおられて、市街の端から順々に家屋を炎に包み込み、町全体に延焼していった。

「何をおっしゃいます、第一王子や他のご兄弟も・・・。」

町を拠点に、ペルジア人に対する反抗を続けていたベシュイン族も、それを包み込む大火災からは逃げるしかなかった。

無事、逃れたものはまだ幸運だった。逃げ遅れて煙に巻かれた者、崩れ落ちる梁の下敷きになった者、激情のままに剣を抜き、返り討ちになった者。

男も、女も、老人も子供も、見境無く殺された。
ハイダイダルはこの町を根絶やしにするつもりだった。

「ほう。お前は、誰か他のものにつきたいのか。」

「いや、そのようなことを申しているわけではありません。ただ私は、ものの道理というものを・・・。」

「私は第二王子だぞ、道理なんぞで王になれるか。こんな辺境に遠征させられて、擦り切れるまで使われて一生を終わってたまるか。」

「・・・。」

昼過ぎから燃え上がった炎は、その辺り一帯の空を黒く焦がし、夕暮れには下火になり始めていた。

屋根も柱も床も黒くこげ、もう燃えるものが何もなかったからである。

煙くさいにおいが、いつまでも鼻をついた。

「不服そうな顔だな。皆殺しにしたわけでもなし。」

「町が一つ消えたのですぞ！」

「仕方ないだろう。自ら火を放って逃げたのだ。町ごとな。」

「なんと言われた・・・！」

ハイダイダルは、救いようの無い男だなというふうに見下しながら、決定的な一言を吐いた。

「お前はもう帰れ。私の機嫌が良いうちにとっとと消えろ。ただし、ベシュインは自ら火を放ってはずこかへ離散した、これは忘れるなよ。

なに、知らん顔をしていればよいのだ。お前の一族もろとも、同じ目に会いたくなければ、忘れるんだな。」

タラバスカニは、口惜しかった。

あの日、アストアシタ宮に単身乗り込んできた男。

生まれてこの方、覚えの無いような恥をわしに搔かせたが、敵ながら幾度思い出しても憎む気になれない。

己を捨て、国を救うための大芝居を演じきった男。イズマイル様もかつてはあのようであったかと思わせる、あの男、アレスミリアン。

それに引き換えこの男は、なんだ！

人を人と思わず、何百年と続いてきた歴史のあるこの町を、焼いてしまいおった。それも、たかだか二十年かそこら生きてきてただけの男のために。

町を焼かれた住民の恨みを考えぬのか。火に焼かれた記憶は生涯消えることはないだろう。住むところを失った住民が、この過酷な乾燥した大地の上で、一体どうして生きていけようか。

この男いづれ、第一王子も葬るつもりだろう、きっとそうに違いない。運良く第一王子がいなくなることになど期待するはずが無い。こんな男がペルジアの君主となるのか。

イズマイル様は私を目付としてつけられたのだ。ここで陣を引き払えば、お怒りを買うだろう。けれどももう、わしには我慢がならない。このような男と居れば、悪が伝染する。

タラバスカニは己の陣を引き払い、部隊を率いての出立に、その馬上から右手を上げ、万感の思いに咽びながら「さらば！」と告げた。さらば私のペルジアよ、と。

相変わらず役者じみた男だった。

ロンダルトの宮廷に異色の男がいた。名をアタリスのザヒル・シャハフ。自らを騎士の中の騎士と呼び、無類の酒好きでもある。

アタリスはいまなおペルジアの支配下にあったが、故国では、表向き彼は行方不明となっていた。

アタリスはこの季節、ペルジアの反乱には加わっていない。

もし、反乱を起こすのであれば、その指導者のひとりとなるべきザヒルが本国には居らず、そのザヒルを強く抑えていたのがアレスミリアンであった。

そのザヒルは今、珍しく悩んでいた。

ザヒルは騎士道の男である。全て騎士道に照らせば、つまり己の直情のままに行動すれば、悩むことなど解決するのである。それが正か否かはともかく、彼の剣と同じように、行動に一点の曇りも無かった。

しかし、彼は悩んでいた。

ペルジアに広がる反乱が、多くの難民を生んでいる。アタリスはそれを助けているが、ペルジアの一地域では救いきれない。そういう知らせが届いたのである。

彼の騎士道に照らせば、窮鳥を保護するのは当然の振る舞いである。ただ、保護するだけなら良いが、限度を超え、増え続ける難民はアタリスの経済と治安を危うくする。ザヒルの胸のうちだけでは、解決しがたかった。

「そんなこといわれても無理ですよ。」

「なんとかならんか。」

「酒をくすねてくるのとは、わけが違うんですから。とっとと、アレス様に相談しましょう。」

イテカレスは、いまさらどうしてザヒルがこんなにも躊躇するのか、理由が分からなかった。散々好き勝手いってたくせに。

「うーむ。やはりそうなるか。」

「はいはい。」

イテカレスはザヒルを伴って、アレスミリアンの部屋に向かう長い廊下を歩き出した。クラコワならそれなりに歩けば、アレスミリアンの元にたどり着く頃に、ここではまだ道中の半ばだ。

「広すぎるんですよ、この宮殿。」

「いきなり行って、良いのか。」

「変な客がいない限り大丈夫です。」

「そ、そういうものか。」

「ザヒル様、変ですよ。」

「何が変なものか！かりにも、へ、へ、陛下にお目通りいただくのであれば、それ相応の心構えと礼儀というものがあるう。」

そう、ザヒルの背は一步ごとに伸び上がり、一言ごとに顔は硬直した。顔が硬直しきると、それは髪の毛に及び、髪の手まで行くと、周りの空気に放射された。

「何言ってるんですか。アレス様ですよ、ア・レ・ス・ミ・リ・ア・ン様。さんざん好き勝手言ったり、やったりしたわりには、いざとなると度胸がないんだから。」

アレスミリアンの居室の扉は、開け放たれていた。

「その声は、イテカレスだな。」

「ザヒル様をご相談したいことがあるとかで。」

「こ、これは、陛下。」

ザヒルは極度に緊張している。緊張して表情が固かった。目はいつもより誇張気味に開かれ、頬は干からびた豚の皮のように突っ張り、顔の中でかろうじて動いているのは、口とあごだけだった。

「陛下はよしましょう。だれもそんな呼び方はしません。」

「で、では、国王様。」

それも、と言おうとしたが、次に何が出てくるかわからなかったので、「どうなされたのですか。」と聞いた。

アレスミリアンは少し困った顔をしたが、ザヒルにはそれに気づく心のゆとりはなかった。

しかたないなあ、とイテカレスが、代わりに話し始めた。

「ペルジアで、難民が大量にでて、ザヒル殿のアタリスに逃げ込んでいるらしいのです。」

「難民？」

「反乱の鎮圧に手を焼いた末に、町を焼いているらしいです。住むところがなくなった者たちが、難民となって、追っ手の網をかいくぐりながら、国の中をさまよっているとか。」

とこいつつ、ザヒルをみた。

「鎮圧軍を指揮しているイズマイルの第二王子が、反乱に手を焼いた末、町のことごとくに火を放ちましたです。そこに住んでいた者は住むところ、着るもの、食料を失い、哀れ流浪の身の上となっておりますです。」

わがアタリスは、反乱には立っていないので焼き討ちにはあっておりませんが、難民を救うにも限度があり、このままでは難民と住民の間で騒動が持ち上がりかねませんです。

なにとぞ国王陛下のお力添えを。」

アレスミリアンはしばらく、右手の指を唇に当てうつむき加減に考えていた。その間、ザヒルもイテカレスも黙って待っていた。

「その王子の名は？」

「確か、ハイダイダル、と。」

「イテカレス。いそいでシルを探してきてくれ。どうしても彼の手助けが必要だ。」

くそ、なんて広いんだこの宮殿は。それとも俺の足がなまったのかな。走っても走ってもなかなか出口につきやしない。

走れ走れ、あの目だ。アレス様のあの目が戻ってきたんだ。とろとろやってどうする。あの悲しそうな、怒っているような目が戻ってきたんだ。

抜け殻にやっとかさ魂が還ってきたんだ。これからもっと忙しくなる。

「ほらどいて、じゃまじゃま！」

何人もの侍従が、草原のバッタのように、イテカレスの前方から飛び退いた。

だけど、ちょっとまでよ、何か忘れてるぞ……。

よく考えてみれば、

「あのおやじ、どこにいるんだろ。」

アストアシタ宮の広大なファサードに立ち止まって、思わずシルヴェスタの名を叫びそうになった。

「さて、ハイダイダルとはどのような男ですか。」

ザヒルは、イテカレスが急に部屋を飛び出し、一人残されてようやく観念した。

「よくは知らぬのです。ただ第二王子ということぐらいでしか。」

「イズマイルの王子は、たしか四人だったか。」

「ペルジアは伝統的に、必ずしも長子が継ぐとは決まっていないのでございます。運が良ければ第四王子でも次の王となることが出来ます、です。」

おそらく民族の争いが長く続いたため、凡庸な男では乗り切れなかったためでしょうが、誰が後ろ盾になるかによってもそれは変わってきます、です。」

「第二王子は狙っている訳ですね。」

「そういうところでございましょう、です。」

「ザヒル殿、なぜそういう話し方をされる。」

ザヒルは再び、背中に汗が噴き出してきた。

「いや、わたくしは・・・その。あなた様が国王だとは知りませんで、失礼を度々いたしてまいりましたです。其れを思い出すたびに、冷や汗が。」

ザヒルは騎士の中の騎士である、と自負している。その騎士で有るが故に、王には無礼な振る舞いは出来ぬ、と思っている。

「あなたは私の客人です。これまで通りでいいのです。」

「そのようにいわれましても、かえってどうすればいいやら。」

イテカレスは、ファサードの段差に腰掛けて、随分と待った気がした。

シルヴェスタがこの都にいたのであれば、そろそろ見つかってもおいころだ。

なにせ、町中の人間につたわるように、情報を流している。いまま誰かが走っているだろう。

だが、都にいなければどうしようもない。なにせ旅好きのおやじだけに、ひと所に留まることが少ない。この青い空の下、どこかで馬の背にでも揺られているのかもしれない。

もし都にいなければ、陸路ならまだ追いかける手立てはあるが、もし海にでも出ていれば・・・。

俺は海は嫌いだ。船という奴にはどうも我慢がならないんだ。もしあの底が破れたら、もし下に落ちたら、深い深い水底に落ちていってしまうんだ。息も出来ないって言うし。

「おーい！」

ぴちゃぴちゃした身体の、半分人で半分魚のとんでもない怪物がすんでいるというし。

「おいっ！」

死んだら魚に食われちゃうし……。

「おい！。イテカレス。」

「ああ、シルヴェスタ様。足は、くわれてませんね。」

「何を呆けている！ 呼んだというから、来てやったのに。」

イテカレスは、バネにでも弾かれたように立ち上がった。

「そうだ！ アレス様がお待ちです。急いでください。」

シルヴェスタはアレスミアンをひとめ見て、以前と雰囲気が変わったことを察した。いや、前に戻りつつあるような気がした、というところか。その変わり様を見て、胸のつかえが下りた。

あれ以来、何度も顔を合わしているが、そのたびに痛々しくて見ていられないと思った。シルヴェスタは、一人の女にこれほど思いを寄せることはない。それは羨ましくもあり、悲しいことでもあると感じて居た。

「何事ですか。陛下。急なお呼び出しとは、近頃にしては珍しい。」
アレスミアンは苦笑した。

「あなたまで。」
「人がいい気分で飲んでいるときに呼び出すなんて。他の者なら無視してやったのに。」

「まだ、日は高いです。まじめな男は働く時間です。」
「まあいいさ。さて何か急用だそうだな。」
「ペルジアの状況を知っていますか。」

アレスミアンはあらためてザヒルから聞いた話を、自分の見方も加えて話しをした。シルヴェスタは眉の間にしわを寄せて、考え深げに耳をかたむけていた。

「反乱の話は以前から聞いている。イズマイルが掃討に手を焼いているということと、・・・。
第二王子はよく知らないな。それで、私の役割は。」

「救える者は救いたい。」
「・・・国境を越えさせるのか。」
「そう。山と海から。」
「くっくっく・・・」
それから天井を仰いで「はっはっは・・・！」と大きく笑い出した。

その様子を見ていたザヒルは、この男はなぜ王より偉そうなのかといぶかしんだ。おそらく彼のような真っ当な騎士には、理解できない関係だろう。

「あいかわらず。ころんでもただでは起きないお方だ。気前よくお茶を買ってくれると思ったら、代わりに船を差し出せと仰る。」
「そう、元は私のお金です。まだ、代金分の茶も頂いていません。」

アレスミリアンは、少し微笑んでいるように見えた。もとより、シルヴェスタのあきれた顔を見るのが好きだ。

「あの船で、私は宝の山を運んでくるつもりだったのに。」

「人も宝です。」

「それはそうさ、でも金にはならない……。いやまてよ、何か企んでるな。一つのことを一つのためにはやらない男だあなたは。」

シルヴェスタは、アレスミリアンを改めて見つめ返した。その目は、もとの輝きをとりもどしつつあった。

多分今頃は、誰も想像もつかない謀ごとを、頭の中で巡らしているのだろう。

これは、この男の業だなと思った。愛する女を失った痛手から立ち直るきっかけが謀ごと。それはおそらく、国と民衆の存続を賭けた謀に違いない。悲しい性(さが)だ。

「あなたが以前使っていた、狼のねぐらを横切る道があったでしょう。あれはまだ生きていますか。」

前の戦いのとき、シルヴェスタは、イズマイル発つの知らせを持って山越えをし、いち早くクラコワに到着した。

その後の戦況の移り変わりを見ると、その到着が一日たりとも遅れていれば、北の部族の騎兵の到着が遅れたかも知れない。

そうであれば、クラコワは破れていたかも知れなかった。

「うーん。眠ってはいるが、起こせば使えるだろう。目当てが無くなっているかもしれないから。一通り整備する必要がある。」

シルヴェスタは懐かしそうに思い出した。

「ザヒル殿。アタリスで溢れた人たちは、そこから、わが国に抜けさせてください。細かな手はずについてはシルヴェスタと……。」

「分かり申した。かたじけない。」

そう言うと、シルヴェスタの方を改めてみた。

「おいおい待った待った。私はまだ何も言ってないぞ。あんなところはもう行きたくないんだ。夜は狼がうるさいし、それに商売だってある。船も貸すとは言ってない。」

その言葉が合図であったかのように、セシリーが現れた。

銀色の盆の上には、粗末な杯が置かれていた。

「何です。そのチンケけな杯。」

イテカレスが、横から余計な口を出した。

シルヴェスタがむっとしていった。

「何を言いやがる。これこそ、この国がいまあることの始まりの杯だ。見てくれは粗末だが、どんな細工物よりも、王冠の宝石よりも輝いてみえる……。」

と言い、手に取った。

そして、

「このやろう、嵌めやがったな。」と、イテカレスを睨んだ。

睨んだけれどもその顔は、イテカレスと同じように笑っていた。

こんなものを、わざわざロンダルトまで持ってきたのか……。

いや待て待て。何故あの侍女は、これを運んできたんだ。

アレスミリアンが何か言ったわけではないし、合図を送ったこともない。

一体、此の宮殿はどうなっているんだ。

「海のほうはイテカにまかせよう。シルがあ国で表立って動き回ると事が大きくなる。」
「ええっ！私が船に乗るんですか！」

アレスミリアンは、まだ知らない。

「どうかしたのか。」

「いやわたしは海はちょっと。もし船が沈んだら、とか。」

「なんだと、俺の船が信用できないのか。」

今度はシルヴェスタがやり返した。

イテカレスは助けを求めるようにセシリーの方をみたが、セシリーはにっこりと微笑み返しただけだった。

「何かうまい口実をつくらなくてはな。この国へ連れて帰ると知れたら、一騒動起こるだろうし、邪魔も入るだろう。どこから乗せるかもだ。」

「それより私が船に乗ることのほうが難問ですよ。それに比べたらペルジア人を嵌めることぐらい。」

わけないことですかというかのように、肩をすくめて見せた。

「西から着く船があるでしょう。その荷を積み替えてペルジアのどこかの港に着けましょう。帰りには荷の代わりに移民を載せます。遠い西の国への移民をね。」

アレスミアンの周囲がまたあわただしくなった。

クラコワからはニールリングが飛んできて、一そうそれはまさに飛んできたとしか言えないような速さだった一、ロンダルトの娘たちの話題を独り占めにした。

「ニール。船ってどう？」

「さあ、クラコワに海は無いからな。」

俺には関係ないよ、というような素っ気ない返事。

「ああいやだいやだ、船になんか乗りたくないよ。」

「何言ってるんだ、どこまでも行くって、言ってたじゃないか。」

「あれはアレス様がいくところならって……。冗談じゃないぞ、おい。あの方はもう王様だぞ。」

「そう思うか？」

「%#\$+=¥>*…………。」

しばし、回答不能。

「どうした、壊れたのか。」

真顔で言うんじゃない！

「うるさい！もう決めた。絶対行ってやる。誰が引き止めてもおれが船長だ。海賊にだってなんだってなってやる。出て来い大ダコ、大海竜。」

「よしよし、分かった分かった。まあ何か有っても、セシリーちゃんのことには心配するな。」

「そんなあ。お前の十四歳の許婚はどうするんだ。」

「もう十五歳だよ。私も出来れば行っていただきたくは無い。あの方を失うと、連合王国は求心力を失う。そうなれば、この次ペルジアが攻めてきたら、防ぎようが無い。

柱にくくりつけてでもお止めしたいところだが、王の身となられた今となっては、そう言うわけにも行かない。」

「よし、見つけたら放り出してやる。」

「お前、さっき言ったことと矛盾してないか。」

「ニールが俺の頭をややこしくしくするからだよ。」

「まあ、留守の間のことは心配するな。難民の落ち着き先も準備しといてやるよ。」

このやりとりのあと、イテカレスがアレスミリアンに問いかけると、

「ん、私かい。わたしは行かないよ。」

と、あっさりと返されてしまった。

イテカレスは良かったのか良くなかったのか、まだ釈然としない気持ちだったが、少し気落ちしたのは確かだった。

アルシャーファでは、臣下を前にイズマイルが憂鬱な顔をしていた。
「これで何部族だ。何部族の町を焼いた。」
「およそ二十部族かと。」

答えた大臣も現場を押さえたわけではないので、あてずっぽうといっても良いような内容と思っ
ていい。とにかく、両手両足でも足りないぐらいの町を焼いたと言うことだ。

「あの阿呆め。」

阿呆とはハイダイダルのことだ。

「町を焼いて、反乱の芽は摘めても禍根は残ることが分らんのか。しかもわしの意向を無視
しおって。何度使いを差し向けたか。」

誰も何も答えない。

イズマイルが不機嫌なときに、不用意なことを言えばどんなことになるか恐ろしい。誰も応え
ないから、イズマイルは余計に機嫌が悪くなる。その悪循環の繰り返しである。

ここは、牛小屋か。牛小屋の中で一人でしゃべっているようだな。牛なら乳も出すし、肉も食
えるがこいつらは。

分厚い寝椅子によりかかったまま眺め回したが、この場に知恵の出そうなものはいない。代わ
って戦場に出られそうなものもない。

なにせ、クラコワーロンダルト遠征の失敗により、ペルジア本隊に使える将が不足していたの
である。

各地で勃発する反乱を抑えるためには、同時にいくつかの制圧隊を派遣しなければならなか
った。その司令官には、非常事態ゆえの強権と信任を与えなければ、兵はまとめられない。

不本意であっても、息子達を差し向けないでは、この混乱を收拾することは不可能に思われた
。

点在する町は、それ自体は小さくても隊商の休息地であり、市が開かれれば、近隣の部族が物
の売り買いに集まるところでもある。

そこには水があり、食料があり、寝床があり、酒があり時には女がいる。

隊商は町を頼りに旅を続け荷を運ぶ。その道はやがてアルシャーファに通じる。町を焼くということはその道が失われるということだ。

市が開かれなければ、農民は作物を交換する事が出来ず、ヤギや駱駝を買うことも出来ない。交易路を人に例えれば血管、町は臓器にあたる。

血管が切れ、臓器が壊れ、ペルジアの容態は坂道を下り始めた。アルシャーファの町は、都であるだけにすぐには衰えは見られなかったが、常ならば、隊商の宿にも事欠くほどの賑わいを見せる裏通りや、行き交う荷車が車輪をこすり合わせるようにして争う大通りも、今は野良犬がのどかに横切っていけるような有様だった。

焼けおちた町はいずれは再建すればいい。人も戻り隊商も訪れるようにはなるだろう。ハイダイダルは、そう、軽く考えていた。

「ぐずぐずと、こんな埃っぽい辺境めぐりをしているときではないのだ。とっとと、アルシャーファに帰還して、凱旋式でもやって後継者に名乗りをあげなくてはな。それに、だ。彼の国を攻めるのであれば、早い方がよい。のんびりと構えていては、また向こうの罠にはまることになりかねない。

今度は居残りなどはしないぞ。父が落としえなかったあの国を、私が落としてみせる。この国を継ぐのは私だということを、みなに知らしめるのだ。」

ハイダイダルは、もはや己の家臣たちには野心を隠さなかった。

ハイダイダルの野心と、目的のために選択を躊躇しない伶俐な性質は、イズマイルに原因がある。

イズマイルは、絶対君主であった。

もちろん、この東方地域の部族が昔からそういう形質を持っていた上でのことで、イズマイル一人がそういう人であったかわけではない。

絶対君主は、極端に言えば“一人”と“その他大勢”の関係である。例え、それが親兄弟であろうと、王とその他という関係には変わらない。

もしその関係の邪魔となるのであれば、消されることもあった。

ハイダイダルのあからさまな野心は、他の王子にとっては脅威であるし、例えば第一王子が王位につこうとするならば、当然順番から行けばそれが妥当だとみな考えるだろうが、ハイダイダルの野心は邪魔になる。

野心も持たず、ただ王の血だけを受け継ぐ身に甘んずるのであれば、どこかの辺境の地の代官をまかされて満足すればよかったのだ。食に困らず、住に困らず、ただ憂いを紛らわすだけの狩にでも楽しみを求めて暮らせれば。

が、ハイダイダルはそれでよしとはしなかった。

「この国は古いのだ。小さな部族を寄せ集め支配するだけの国。だからいつまでたっても反乱などが起こる。

町なんぞいくらでもまた作ってやる。

わたしの治世のもとでは私の法があり、仕組みがある。部族の慣習ではなく、一つの法と一つの

治が支配する国に作り変えるのだ。」

それを邪魔するものは、焼き払われても当然なのだ、と、ハイダイダルは考えていた。

その日も一つ町が消えた。後には水辺と、それを取り囲み大切に守るの灌木の林と、真っ黒な炭になった住居の残骸だけが残された。

難民たちは、目立たぬように、百人ほどの集団で山を越えた。

実際のところ、アルシャーファには、そんなものに注意を払うゆとりもなかったろうし、難民の行くへを心配するような、気の効いた人物もいなかった。

が、アレスミリアンは慎重に事を運びたかった。

山には、それを案内するものだけに伝えられる印と、水や食料を置いた中継所がひっそりと設けられた。いや、印というのは、実際には古代からそこにあるただの岩であったり、太いだけの木であったり、昔から変わらないケモノの通り道であったりするのので、一度山に入ってしまうと、それを追跡することは不可能だった。

ザヒルは今も行方不明となっていたので、彼自身が故郷のアタリスに帰らなかったのも、同じような理由である。

彼に付き添ってロンダルトに乗り込んだ若者たちが、代わりにその任に当たった。

彼ら若者は、若者特有の茶目っ気から、親の小言の届かない故郷を離れてのロンダルト暮らしを楽しんでいた。

そして、ロンダルトとアタリスを結ぶこの任務は、若者特有の虚栄心を満足させるに充分だった。

故郷に帰った彼らは、ロンダルトがいかに大きな都であり、アレスミリアンがどれほど優れた王であるかを語り、その指示で走る彼らに仕事の重要性和、ついでに都の女性たちの、洗練された美しさを誇張して話して聞かせた。

また、彼らは往還の速さを競い、時にはそのために新しい経路さえ開拓して見せた。

「年はとりたくないものだ。」

この事業の親玉、シルヴェスタはある時、岩の上に腰を下ろしながら彼らを見、そうやってぼやいた。

山越えを終えた難民たちは、旅がおわったことへの安堵感と、見知らぬ土地での生活への不安を抱えていた。

「彼らに住居と、仕事を与えねばなりません。名簿も必要でしょう。初めての土地が不安で仕方ないはずですよ。年などをぼやいている暇があるんだったら、歌でも歌ってなくさめてやればどうですか。」

「やれやれ、ニールまで私をいじめるのか。まったく年はとりたくない。」

「今度それを言ったら罰金ですよ。」

イテカレスはついに観念し、海上を走り始めていた。

セシリーとのつかの間の別れを惜しみ、惜しんでいたのはイテカレスだけだったが、積荷から乗船にいたる全ての手順を検査し、甲板から船倉の隅々まで調べた上で、アレスミリアンが乗船していないことを絶対の自信を持って確信した。

出向してから半島の南端を回るまでは、比較的穏やかな内海を走るようであったが、岬の突端を、暗礁を避けて大きく迂回するころから、波は外海の激しさになり船を翻弄し始めた。水の色は青と言うより黒に近くなった。

何もしなくても、甲板にいただけで髪の毛や肌がねっとりとしてくるようだ。

天候が悪いというのでもなかったが、船のゆれは陸の生き物、イテカレスの頭と胃を、あるいは胃が頭だったか、容赦なくゆすぶった。

「うえぶ。だからいやだっていったのに。」

「せんちょ。しっかりしてくだせー。まっだまっだ序の口でさあね。」

「おれはだいじょうぶだあ！みんなが俺たちを待ってるぞー。俺を気にするなー。うえぶ。」
イテカレスは、カラ元気を振り絞った。

「いい心がけだな。」

「そう、いいところがけて、おいあんた！ 何でこんなところに。」

「危うく乗り損ねるところだったが、何とか間に合った。」

その男は、イテカレスの側に腰を下ろした。

「ええー！ あんなに念入りに見回ったのに。」

「出港直前に乗ったのさ。」

「ぞんな、ひどいよ。ああもう駄目……。」

イテカレスはついに力尽きた。

船は西南の風を帆に受け、陸地沿いの航路から、磁針と天測をたよりにペルジアの沖を突っ切る航路をとった。

何羽かのかもめが、帆柱の上空に並んで飛んでいたが、陸地が遠くなる前に消えた。

カツオドリが幻の塔のまわりをくるくると旋回して、水面近くの魚の群れを狙ったり、と船乗りが教えてくれた、渡り鳥がマスト上でしばしの休息をとったりしているのを眺めた。

空は青く高く、海は青黒くその深さは底知れない。上を向いて寝転んでいると、気を許すと空に落ちていきそうな気がする。

ようやく落ち着きをとりもどしたイテカレスが、
「アレス様、いいのですかこんなところにいて。」
とたずねた。

「ロンダルトのことは、一切、ザルウィー伯にお任せしてきた。」

そのころザルウィーは、居心地悪そうに、王の椅子に座っていた。訪れるものは。アレスミアンがいないと知るとたいていは、そのまま愛想笑いだけを残して帰っていった。

「ニールには言ったんですか。」

「言ってはいないが。ん？なんでわたしがニールに言わないといけないんだ。」

「そうですね。はあ、なにいつてるんだろ。こんなので二日もつかな。」

「そうか、二日で着くのか、案外早いものだな。」

「順風なら、という条件付ですけどね。帰りはもう少し南に下がるらしいので、三日ぐらいかかるでしょう。それも風があればですが。」

「風がなかったらどうする。」

「手漕ぎです。」

「船というのは、とてつもなく効率がいいか、とんでもなく扱いづらいのか。」

そういうと、アレスミアンは、遠く水平線あたりに湧き出る白い雲に目をやった。あの向こうにも同じような国があるのだろうか。そこにも王様がいて、家臣がいて……。

「アレス様。」

「うん？」

「いい格好ですね。」

「ふふ。かなり汚いと思ったんだが、本当の船乗りにはかなわないな。」

「これじゃ、誰も王などとはおもわないでしょうね。」

「それは困ったな。アストアシタに入れてもらえないかもしれない。宿無しになってしまう。」

イテカレスは、陸にいた間には一度も聞かなかったことを、聞いてみたくなった。

ニールなら何も聞かず、それなりに察してしまうだろう。けれどもイテカレスは、それが例えどんな些細なことであろうと、人の口から聞くことを喜びにしている。

「イーリアス様のこと。」

「うん……。どうすればいいのか良く分からないんだ。

あまりにも一緒にいた時間が長くて、考えようとする前に思ってしまう、けれどももういないんだと気づく。そうすると他のことが考えられなくなる。

だけど、今度のようなことがあると、じっとしてられなくて、ね。」

「そうですよ。町を焼くなんて人のやることじゃない。」

それはちょっと、耳が痛いな。

「おーい、せんちょ。ちょこっときてくんなせい。」

「あいよー。いまいくぞ。」

まったく、適応力の強い奴だ。

さて、この船でどれだけの人を運べるか。一度に三百か四百といったところかな。他の船とあわせて、三、四千人ぐらいは運べるかもしれない。

それで難民のどれぐらいを救えるのか分からないが、希望を持って前へ進もう。イーリアスならきつとこういだろう。

「あなたのなすべきことを……。」

二日目の夕暮れ近くになり、ようやく船はペルジアの港に着いた。

港には、何艘もの同じような船が繋がれ、船乗りや荷役人夫や、荷の受取人やこまごまとしたものの売人や、客引きや、特に用も無くぶらぶらする者で賑わっていた。

「随分大きな港だな。」

「寂れた小さな港だと、かえってこんな船は目立ちますからね。ましてぞろぞろ人が乗り込むのを見たら、誰でも怪しいと思うでしょう。」

「木は森に隠せ、か。」

「これからわたしは下船して、送り出し役と話しをつけてきます。」

「わたしも。」

「いけません。ここは敵地ですし、もし何か起こればこの計画は駄目になります。人の命が懸かっているのですから。」

「そうか。わかった。お前の言うとおりにしよう。」

素直に引き下がったアレスミリアンを、イテカレスは疑い深そうに覗き込んで、声を低めて言った。

「本当ですよ。今度はこそこそしないで下さいね。」

日はすっかり水平線の向こうに沈み、今日一日の熱は海へと帰り始めた。港町の賑わいとは対照的に、海は静かだった。

船腹を叩く波の音は絶えることが無かったが、耳はすぐにそれを忘れた。最後の青い光の帯が、そこに海の果てがあることを示していた。

「あにさん、いのこりかい。」
後ろから声をかけられ振り返った。

「留守番だ。」
「あしも、今夜はとまりでさ。」
「あの沖合いで光っているものは、一体なんだろう。」
欄干に両腕を乗せ、もたれかかって尋ねた。

「あれはいさり火といって、あの灯りに魚を集めて網で取っちゃうんだ。うまいこと考えたもんだ。」
「魚は灯りに集まるのか。わたしは、海の無い国で育ったから、海の話は良く知らないんだ。」

「ははっ、誰も海の話なんか、分かっちゃいないですよ。この大きな水瓶の中が一体どうなっているのか。海の神さんの宮殿があるというものがいれば、人と魚の合わさったのがすんでるとか言う奴もいる。あしは信じませんがね。」

「どうして信じないんだ。」
「あしも海はそれなりには長いが、一度も見たことがねえからです。ところで、今度の荷はなんだか変わっているらしいが、知ってなさるかい。」

「物ではない。人だ。この国で住むところがなくなった人たちを運ぶんだ。」
「あしも生まれ故郷をなくしました。しょうがねえんで、西の国で船乗りになりやした。船に乗ってる間は住処の心配をしなくて済むんでね。その前にも別のでっかい船に乗っておりやしたが・・・。」

その船の主は、ロンダルトではたいそう羽振りのいいお方だったんですがね、どっかで道を違えたんでしょうなあ、今は零落れちまって、どこにいなさるかもわからねえ。」

まあ、そんなこともあったろうさ。

「あたしも、よくそのお方のために働いたもんです。危ない橋を渡ったのも一度や二度じゃねえ。それこそ命がけて奴です。

でもね、潮時って奴があるんですよ。ご立派な船にみえても、虫が食ってたり、木の芯のほうに腐ってたり。それに気がついたんですなあ。あっしはその船を下りました。」

アレスミアンの古傷が、うずいた、気がした。

「この船の話があったとき、ひょっとしたら、あにさんが乗ってくるんじゃないかとおもったんですよ。あにさんは、そんななりに身をやつしていなさるが、あしにはわかるんだ。ナンセあの暗がりですら兄さんを見分けられたんです。アレスミアンさま。」

アレスミアンは、思わず一歩飛びのいた。顔から血の気が引く音がした。

「誰だ。お前は。」

暗がりの中で、男の顔が笑った気がした。

「殺るつもりだったら、もうやっていますよ。其れに、あなたの方に遺恨はあっても、わたしにはなんにもない。

わたしは、命令のままに動いただけだ。あなたをやらねば、あの人は破滅だといった。わたしの人生は、あの人を支え、あの人を守ることだった。あなたにもそういう人が回りにいるでしょう。

でも、わたしはあの船から降りてしまった。なぜだか分かりますか。」

そう、この男ならわたしを素手でも確実に殺せていただろう。しかし、殺しに来たのでなければ、何をしに来たのだ。

「わたしは、この船に乗らなかったかもしれない。」

声が怯えていないことを祈った。

「わたしは誰かに命令されて、あなたを殺しに来たんじゃないんです。乗ってなければそれはそれでしょうがない。どうせ船乗りでやすから、そのままどこかの港へいくだけです。でも何かの縁というやつが引き合わせたんでしょう。いや、でもね、きっと乗ると思っていた。」

背中傷はなおもうずいた。

「イーリアス様のことは、お気の毒でしたとしかいいようがありません・・・。」

えっ。

「わたしは、あの家とは深く深く付き合っただけです。お子達も、お孫たちのこともみんなよく知っております。

わたしは、決して人を殺めたくて生きてきたわけではないんです。あの家を守ることが、若いころの全てだった。

ほかに何も見えていなかった。

あの方は若いころに、なぜ誰も国を救おうとしないのか、そうやって、あの方の出自では困難な上り階段を上っていかれたのです。

あのところは、あの家がロンダルトの王国の未来そのものに見えた。」

波が、舷側を洗っている。

「あなたを倒したときもそうだった、あなたを除かねばあの家が危ないと。けれどもあなたは死ななかった。あの毒矢で、確実に刺したのに。

そのときの、あの方の取り乱しようを見てわたしは思ったのです。これが私だ。何十年も生きてきて、結局、人殺しに一喜一憂しているだけのケダモノだと。」

なん百年もの間、波は船を洗い続けている。

「私はあの船をおりました。

もういてもたってもいられずに、一目散に、総てを捨てて逃げたんです。そうして、いくらか落ち着いた暮らしをしているときに、戦争があつて。その後、イーリアス様もご一族もなくなられたとききました。あなたが殺したのかと・・・思いました。あの一家には恨みがあるだろうと。」

「それは、違う。」

少し落ち着いてきたな。

「ええ。それも調べました。昔のつながりって奴です。あなたがどんなに、イーリアス様を救うために力を尽くされたのかも分かりました。そして、なぜイーリアス様が死なねばならなかったかも、おぼろげに知りました・・・。

もし、私が船をおりなければ、そのまま、血に染まった手のままあの家におれば、イーリアス様は死ななくてすんだのかもしれない。そう思うと、なんとも、もうやりきれなくて。」

なん百年もの昔にも、この波の音をきいていたような気がした。

「この船のことを聞いたときに、私は乗らなくてはならないと思ったのです。そしてあなたに会えたなら、何か一言伝えておきたいと。」

アレスミリアンはもう、彼が話すがままにしておいた。

「私の罪を許して欲しいとかそういうことではないのです。ただ知っておいていただきたい。かつてあなたの命を狙った男は、いま、人を助けるための船に乗っていると。それだけです。」

暗がりの中で、なおも男の顔は見えなかったが、見てやるのが何かかわいそうな気がして、再び海のほうを見た。

「名は何という。」

「名前は捨てました。いまは“名無し”とでも。」

「私は先の戦いで、大勢の人を死なせてしまった。その私が、人を許すとか許さないとかは言えないと思う。」

お前がこの船で働くことは自由だ。好きにするがいい。けれどもこの航海が危険だということは覚悟しておいたほうがいい。危険は海の気まぐれだけではない、いつ海賊やペルジアの兵がなだれ込んでくるかもしれないからな。」

いや、こんなことはとうに覚悟の上だろう。

「それと、ロンダルトに帰ることがあったら、イーリアスの墓に、なにか海のものを捧げてやってくれないか。」

アレスミリアンはしばし待ったが、返事はなかった。
気がつくやうに、男の気配はすでになく、見回しても辺りに人影はなかった。
古傷の痛みも消えていた。

それから一月も経ったろうか。
イーリアスの墓の前に、美しい貝殻が置かれているのを墓守が見つけた。
そんなことは珍しいからと、話がアレスミリアンに伝えられた。

手にしていた書の束から顔を上げ、
「そのままにしておくように」と言うと、再び視線を落とした。

それから後、暫らくするとイーリアスの墓を訪れる人たちは、貝殻を置くようになった。
時には、その中に願い事のようなものが記されていることもある。

ただ、どうして貝殻が置かれるようになったのか、その理由を知るものは無かった。

山を越えるものは、その峠で故郷を振り返り、海に出るものは、港が消えるまでそれを見続けた。

それが、今生の別れになるかも知れない、故郷の風景を記憶の中に刻み込もうとして。

山も海も、安全で快適とは言いがたい。

嵐の夜に、日照りの昼に、時に岩にしがみつき、時に櫂を漕ぎ、体力のない者、病んでいる者、傷ついている者にとっては命がけとも言える逃避行だ。

それを知っても人々はペルジアを離れた。励まし合い、手を引き、背におぶり、それでもロンダルトにたどり着けない者もいた。

難民の移住は、およそ二月の間続けられた。名簿に記された人の数はおよそ二万に上ったが、実際の数はそれより多かっただろう。

彼らは集団をつくり、言葉を覚え、手に職のあるものはロンダルトに働き先を見つけた。そうでないものは、住む家を作り、畑を開き、いつまで続くか分からない避難生活に備えた。

ザヒル配下の若者たちは、人々を慰撫し、調整し、組織した。

そこはロンダルトの中の小さな東方世界になった。アレスミリアンがかつて若者を誘ったことば、国づくりの勉強になる、は、まずこんな形で活かされることになった。

言葉が異なり、習慣や風俗の違う様々な部族が交じり合うことの困難はあったが、それを克服しなければ彼等の暮らしはなり立たなかった。

「驚いたな。」

そこはかつて何も無い草原だった。確かそのはずだ。

アレスミリアンはマクシミアに揺られながら、立ち並ぶ家々や塔を遠望してそう言った。まだ柱を立てただけの家もあり、この“町”がまだ、普請の途中であることを物語っている。

「木の家は、彼らには違和感があるかもしれませんが、ペルジアのように泥土をこねただけで日干し煉瓦が出来るほどには、乾燥していませんし日差しも強くない。

かといって、石を切り出していたのでは、何年かかるか分かりません。なので、近くの森を切り開きました。

住居以外にも、集会所や共同の作業場のようなものがあると思いますが、それはまだ計画中です。増え続ける難民を収容するのが精一杯で……。

イテカレルスももう少し加減して運んできてくれればいいのですが、あいつは勢いで何でもやっちゃうので。

それから今は井戸が無いので、小川まで水を汲みに行かないといけないのが大変ですが、もう少し上流から樋をつないで水道を引こうとしています。そうすれば女達も少しは楽になるでしょう。」

「よくここまでやってくれた。ニール、感謝するよ。」

といいながら、アレスミリアンが頭を下げた。ニールリングは顔が赤くなった。

男、女、年寄り、子供。

それらが総出で畑を開くために土を掘り起こし、木の根を切り、石を捨てに働いている。当面の食料には困らないが、二年三年と暮らすのであれば、自給する必要があった。

「今から畑を開いて、収穫できるのはいつごろだろうな。」

「うーん、そういうことはちょっと……。」

「そうだろうな。お前は根っからの貴族だから。」

アレスミリアンは馬を下りて、掘り起こされた土を掴んだ。

「手付かずの土地だから、少しは肥料もやらないと……。どこかで羊の群れを調達できないか、ニール。」

「それは出来ませんが、何に。」

ニールリングは不審顔で尋ねた。

「糞がいい肥料になる。放し飼いにしていれば、草を食べ勝手に肥料を落として行ってくれる。

それから、切り開いた森の土をここの土と混ぜれば、ふかふかのいい農地になるだろう。」

「それは、クルビンス村の知恵ですか。」

「農夫なら大抵は知っているさ。」

あなたは王様なのですが、とニールリングはおかしく思った。

少年が、まだ身体の成長しきらない少年が、細い腕で踏み鍬を地面に突き刺そうとしている。何度も何度も繰り返しているが、その度に表土を少し削るだけで跳ね返される。

アレスミリアンが、彼に近寄った。

「貸してみなさい。」

言葉は通じていないが、身振りで何となく判ったのだろう。少年は少し怒ったような顔でアレスミリアンに踏み鍬を渡した。

多分、アレスミリアンに不満があるのではなくて、意地の悪い大地に八つ当たりしているのだ。

ニールリングは、また始まった、というように苦笑して眺めている。本当にこういう事が好きなのだから。

アレスミリアンは踏み鍬を地面にたてると、幅の広い刃の上の部分に足を乗せ、勢いをつけて強く踏み下ろした。踏み鍬の先端がザクッ、ザクッと土の中に突き刺さっていく。

少年の目が丸くなり、不機嫌だった頬に輝きが戻ってきた。刃が入りきった所で踏み鍬を倒し、土を掘り起こした。

「どうだい、足を使って掘り起こすんだよ。」

とって少年に踏み鍬を返した。

少年は、今度は見よう見まねで足を使い、アレスミリアンが開けた穴を少しづつ大きくしていった。時折ふりむいては嬉しそうに笑う額に、玉のような汗が浮かんできた。

「上手い上手い。君はいい働き手だ。」と少年を褒めた。

聞き慣れない言葉に気が付いて、男が鍬を持つ手を止めた。

「誰だ。知らん顔だな。」

「いや、あれが此の国の王らしいぞ。」

「あの若いのがか。あんなのがイズマイルを此の国から追い出したんだって、信じられないな。」

「おれはてっきり、もっと大きな、その一何つつか、人間離れしたような男を想像してたんだが。あれだったら、俺でも勝てそうだな。」

「馬鹿ってんじゃないの。あのお方があたしにこの土地をくれなけりゃ、あたし達は今頃砂漠で干からびていたんだよ。失礼なこと云うんじゃないよ。」

女が腰の後ろに手を当て、背を伸ばしながら男の言葉をたしなめた。

「判ってるって、冗談だよ。・・・ちょっと見に行ってみねーか。子供と遊んでるぐらいだから、ちょこっと見に行っても怒られないだろう。」

「一寸とか、ちょこっととか、言ってないで、礼の一つでも言いに行けばいいんだよ。此処にいるみんな、あの人のお陰で、命拾いしたようなもんだからねえ。」

アレスミリアンと少年を半円形に囲むように、そこいらの子供や大人達が集まってきた。アレスミリアンは、よく民人に囲まれるとニールリングは思い出し笑いをした。

「何だ、何か願い事かな・・・。」

沢山の目がアレスミリアンを観ていた。中にはもううるうるとしている者もいる。普請中の町の方から馬が駆けてきた。ザヒルと供にロンダルトに残った騎士の一人タルヒムだった。

「何事ですか？」

とまずアレスミリアンに問いかけたが、彼は首をかしげるばかりだ。

タルヒムはもう一度、今度は民衆に向かって同じ事を問いかけた。

「そこなお方がもし王様でいらっしゃるなら、一言お礼が言いたいんだ。俺たちみんなの命を救って下さったお礼を言いたいのだ。」

タルヒムは、それをアレスミリアンに伝えた、

「それでは、私の言葉も伝えてもらおうか。」

「私はアレスミアだ。・・・私は今、夢を描いている。」
タルヒムはそれを訳して言った。民は次の言葉を待ち受けた。

「ついこのあいだまで、何もないただの野原だったこの土地に、野菜や麦や花が育ち、多くの実りが収穫されるだろう。町にはもっと沢山の家が建ち、塔が立ち、集会場や市も出来るだろう。」
タルヒムはまた伝えた。民の顔が希望に輝き顔になった。

「けれども私の夢はそれではない。」
皆は、一体何だろうといぶかった。

「私の夢は、皆を連れてペルジアに行き、皆の故郷を再建することだ。共に帰ろうペルジアへ！」

ある者は泣き顔になった。ある者は拳を突き上げた。ある者は王の名を呼んだ。

もう国へは帰れない。ここがこれからの、そして子供や孫達の生きる土地となるのだと思っていた。
海を渡り、山を越え、命がけの旅の果て、此処から先には行くところはないと、必死の思いで土を掘り返した。

でも、この王様は我々に言った。共に帰ろうと。それは、まさに、イズマイルを迎え撃つという宣言でもあった。

同胞を殺し、故郷を焼いたイズマイルを討つ、とすることだった。

熱狂の輪をといて、アレスミアンはニールリングに向かって言った。

「私は、本当に罪深い男だな。」

二人は並んで馬を進めながら、ロンダルト市街への帰途をたどっていた。ニールリングにはそのおおよその意味が分かった。

「もう随分以前のことになりますが……。私がまだ先程の少年のような頃のことですから、前なのは当たり前なのですが。父に連れられて、クラコワの城に来た事があります。本当に昔のことです。

その時、あなたはもうお城におられて、私はあなたのような田舎貴族がどうして、このお城に住んでいるのかと不思議に思いました。」

ニールリングは、隣のアレスミアンに顔を向けて続けた。

「いや、本当のところは、ふざけるんじゃない、と思っていたのです。」

なんでこんな奴が、カラバ公やハイアルト卿の側近くにいるんだ。僕の方が格上なのに、僕は子供扱いなのに、あいつはさも当然のように取り次ぎや使い走りをしている。

それはそんなに大事な仕事じゃないし、誰だって出来るけれど、カラバ公やハイアルト卿の近くにいるってのが気に入らない。

いったい誰なんだ、あいつは！

そうしたある日、誰かが言い争う、というより一方的に誰かに当たり散らしている声が耳に入った。いや別に聞こうと思った訳じゃない、ただ偶然聞こえたんだ。だってあんなに大きな声だったら、誰だって聞こえるよ。

「今度は連れて行って下さるって言っていたのに、嘘つき！私とっても楽しみにしていましたのに。」

「ですから、今日は急なお客様がお見えで、どうしてもいけないのです。明日は必ずお連れしますから、それにそんなに大きな声をお出しになると、兄上様に聞こえてしまいます。」

「声が大きいのは元からです！

聞こえても構いません！

どうせ行けないのですから、聞こえても一緒です！」

怒っているのはイーリアス様だ。で、怒られているのはあいつだ。いい気味だ……。えっと

、でも何であいつがあんなにイーリアス様と親しそうなんだ。

「本当に、明日はご一緒しますから。今日はもう行かねばなりません。」

「何処へなりと行けばいいのです。もうほおっておいて下さい。ふん！」

「では、明日必ず。」

とって、行ってしまいやがった。

「もう、いじわる、だいきらい！」

顔が真っ赤だ。相当お怒りのようだな。

「姫様。いかがなされましたか。」

イーリアスはニールリングのほうを見た。まだ興奮の収まらない顔で、誰だろうというような目つきだ。

「ニールリング・エストバルでございます。」

「・・・ああ、西の城の一族でいらっしゃる。」

もう表情は普段の顔に近かった。

お怒りでなければ本当に可愛いお姫様だ。何がお気に触ったのだろう、あの男どんな無礼を働いたんだ。

「何か、お怒りのようでしたが。」

「まあ、聞いてらしたのね。」

「いえ、聞いていたというのでは・・・。」

「そうですね、聞こえてしまいますわね、あんなに大きな声を出したら。は一すっきりした。」

「すっきり？」

「ロンダルトでこんな声を出したら、宮中のものが三十人も集まってきて、やれ医者だ、熱は無いのか、寝所の用意をしるとか・・・。でも、こちらでしたら、そんな余計な世話焼きもいませんし。」

「一体何が原因なのでしょう。」

イーリアスは、出て行けなくなったから退屈で、退屈しのぎにこの男と話すのもいいかと思った。

「今日は、町に連れて行っていただくお約束をしていたのです。兄上はカラバ様とお話ですから。

町の鍛冶屋とかに、ご存知？鍛冶屋さん。」

ニールリングは、名前ぐらいなら知っていると言った。

「鉄を溶かして、それを叩いて形にして、いろいろな道具を作るのですって。あんなに硬いものをどうやって曲げるのか。それをするのにいろいろな道具が合って、風を起こしたり燃える鉄を掴んだり。」

「どうして姫様がそんなところに行かれるのですか。そんな、下品な場所に。」

「だって、面白そうじゃありません？」

それに、お城の人たちよりも、そういう人たち、市のおじさんとか、家具の職人の方がよっぽど楽しい人たちですよ。」

市とか家具屋とかって、ということは、まさか

「ときどき、出かけられるのですか？これまでも？」

「ええ。」

イーリアスはけろっとしている。

「危険ではないですか、市中に出歩くなど。」

「いいえ、ちゃんと変装していきます。男の子の格好をするのですよ。これがおかしいの。それに、アレスが全部手配してくれるから。私が知らないと思っているでしょうけど、警護のもの達がこっそりついてきているのです。だから大丈夫。」

まあ、クラコワはカラバ様のお膝元でもあるから、めったなことは起こらないだろう。それにしても。

「今日は、お客様がお見えだから出かけられないのですって。がっかり。客なんかこなければ良かったのに。」

それ、ひよっとすると父上のことかもしれない。イーリアスと目が合った。

「お一人でいらしたの？」

「いえ、ち、父と参りました。」

「そう。」

イーリアスの声が不機嫌そうだった。

「いつも私のことは後回し……。でも、自分のことはもっと後回し。」

「後回し？ですか。」

「アレスは忙しいのです。お城のこと、クラコワの町のこと、東や西や北の領民のこと。いつもみんなのことを考えて、走り回っています。」

それに加えて、私の相手などしては、自分の体を休める暇がありません。でも私の我が儘を聞いてくれる。

わたくし、子供ですけどそれぐらいのことは分かるのです。自分が一番後回し。次が私。だから私は、アレスに一番近い人なの。」

そうやって少し照れたような笑顔を見せた。ニールリングは悔しかった。

「彼は、田舎貴族の出自ですよ。姫様のお相手などする身分では有りません。」

イーリアスの目が急に冷ややかになった。

「あなた様も、わたくしをお人形扱いされるのですね。」

冷たいというよりも、

「わたくしは一人の人で、王の血を引くものです。いずれ、この連合王国の母となることもあるかも知れません。

皆はそうでなくても、私はそう思っています。アレスはそれを理解してくれました。そう思うなら、この国の成り立ちを知っておかなければならないと。いろいろなところに連れて行ってくれます。聞くよりも、一度見る方が何倍も良く分かるというて。」

叱責に近いかも知れなかった。

「あなたは、アレスの出自が低いといいました。確かにエストバルは、この国でも古くからある由緒ある家柄です。では、あなた様は？あなた様は何をなさいますの？」

私？ 私はエストバルの世継ぎで、いずれ西の所領を治めるのだ。

治めるって、一体何をするのだろう。

「分からなければ、アレスに聞いてみなさい。」

くそ！

「失礼いたします、父を待たせてはいけませんので・・・。」

ニールリングは、怒りと羞恥で耳まで赤くしてその場から逃げ去った。

「ちょっと言い過ぎたかしら。」

イーリアスは、ほんの少しだけ反省して、侍女の同意を求めたが、彼女は困ったような顔をしたただけだった。

「それから一年ぐらいしてからでしょうか、あなた様からお便りを頂いたのは。」
アレスマリアンは思い出そうとして、顔をしかめた。

「始めは放っておいたんです。誰が読むものかって。人前で恥をかいたのは、あれが初めてでしたから。でもどうしても気になって、読んでしまったんです。捨てずにとって置くぐらいなら、最初から読めばいいのに……。

ユルノ川から運河を引くから、手伝いに来てくれって書いてありました。手伝えって言われても、何をすればいいのかわからないし、第一、運河なんて、昔からあるもので作るものだとは思っていなかったの。」

「ああ、思い出した。忙しくて猫の手も借りたいぐらいだっけっていったら、イーリアスが面白いやつがいるって言うから。エストバルじゃ、気位が高くって大変だろうと思ったんだけどね。まあ、あの時は沢山声をかけたから。」

「そうか、わたくしは猫の手だったんですね。なーんだ。ちょっと、舞い上がってたんですけど。」

「会ったことも無いのに、どうだか分かるわけ無いじゃないか。」

「ええ、その頃はそんなことすら気がつかなかったんです。そんな大事業なら、呼ばれて当たり前だろう、ぐらいの気持ちでしか無かったですから。あんなに大変なことだと思わなかった。

古書を調べたり、図面を引いたり。寝る暇も無くって。もう倒れるかなって思った頃には、いつもあなたがやってきて、元気かって。

元気なわけ無いだろうって思ったけれど、一番忙しそうあなたにしゃんとしてるのに、負けるもんかって思いましたよ。意地だけで立ってましたね。」

「あんなに大変なことだとは思わなかった。技術者はいないし、経験者もないし。自分でもとんでもないことを始めてしまったと思ったよ。」

「運河が開通して、みんなで浮かれてたら、あなたはもういなかった。なんだか北の方へと出かけて言ったとかいう噂を聞いて。人並みに、母親でも恋しくなったかって思って、まあそんなところだろうと。

それで領地に帰って、また一年ぐらいうだうだしてたら、あなたが北の部族と結んだっていう話を聞きました。もう戦いをしないって。気がついたら、何にも持たずに馬に乗ってた。馬に乗ってクラコワを目指していた。」

それ以来、

「何度も危ない目にあってきましたけれど。あなたは一度も私に強制なされたことは無い。頼み

ごとすらしない。あの時の手紙だけです。一緒にやってみないかといって書かれていたあの手紙。

誰にも強制しない。ただ一緒に行かないかって仰るだけです。みな自分の意思であなたについてこうとしている。いや、皆の意思があなたを動かしているのかもしれない。

もしも、彼らが同じ戦場に立ったとしても、それは彼らの意志です。あなたの罪などありませんよ。」

アレスミリアンは、寂しげに微笑んで無言だった。

イーリアス様のことを、思い出させてしまったろうか……。

ニールリングは、アレスミリアンが再び口を開くまで待っていた。マクシミアは、主人が駈けさせてくれないのが不満のようだ。その前を、白い蝶々が幾度も横切っていく。

儂い命。

「私がもし、イーリアスを愛さなかったら、彼女は死なずに済んだのかも知れない。私とウェルモンテの板挟みになど、ならずに済んだのかも知れない。」

そんなことまで考えておられたのか。

「あの方に、あなたを愛するなと言うことは、死になさいと言うことと、同じだったろうと思います。」

いつも自分が一番後回し。次が私。だから私は、アレスに一番近い人なの。そんな言葉を思い出した。

その年が終わろうとするころ、ハイダイダルはアルシャーファへ凱旋した。

百以上の町や集落を焼きつくし、数万人を殺戮したと噂されたが、実際にはそんなに多くの町に火をつけて回ったわけではない。

その冷酷なやりくちが、生まれながらのペルジア人にも好まれなかったのも、そのような過剰装飾がついて喧伝されたのだろう。

揮下の軍団を従えてのアルシャーファ入城も、その功績の割にはあまり歓迎された雰囲気とはいえなかった。この王子に軍団をもたせると、例え首都であろうと何をしでかすか分かったものではないと、人々は噂しあつた。

このころの第一王子はまだ制圧戦の継続中で、帰還など思いもよらない状態であった。それと引きかえ早々に反乱を鎮圧したハイダイダルは得意の絶頂にあつた。

ウイナイダル宮に到着したハイダルを、イズマイルは満面の笑みと抱擁で迎えて見せた。

周囲にいたものは凱旋した息子を称え迎える父親の姿に見えたらうが、その耳元でささやいた言葉は、「調子に乗るなよ。わしが指名しないかぎり、お前はただの人殺しの小僧だ。」といったような脅し文句だった。

ハイダイダルは笑顔だけは保っていたが、内心には夏の嵐が吹いていた。実力と功績は認められて当然と思っていたのに、それが認められなかったということと、きっとイズマイルに嫌われているのだという一方的な思い込みが、ハイダイダルをより次の王位に執着させていくことになる。

「何もしなければ、俺は殺されるかもしれない。」

王宮を辞し、久しぶりに自身の館に戻ったときの言葉としては、あまりに不穏な言葉だったが、家人たちはまさかそれが、ハイダイダルの父や兄にむけての言葉とは思わなかった。戦場から帰って間もないことなので気が立っているのだろうと。

月が、細めた目を再び開くころ、ハイダイダルは再びアルシャーファを後にした。自ら進んで、いまだ制圧の終わらない第一王子の支援に向かったのである。

首都から離れ、隙があれば第一王子を亡き者にしようと思っていたのかもしれない。その試みは、極力第二王子とは顔をあわせたくないという第一王子の逃げ腰によって実現しなかった。

二人の陣営は、お互いの目の届く範囲に近づくことは無かったのである。

二人の母は同じでは無かった。イズマイルの後宮に暮らす女たちの誰かと誰か、である。だから兄弟といっても市井の人が言うそれとは異なり、他人以上によそよそしい関係にあった。女たちの、狭い世界での諍いが、そのまま王位の継承へと投影した典型である。

なぜ町が焼かれねばならなかったのか、なぜ人が故郷を追われ、流浪しなければならないのか、その理由が首都の中の、宮殿の一隅で繰り返される、おろか者たちの悲喜劇に起因すると知ったら、人々はどうか考えよう。

ハイダイダルの冷酷なやり口は、そのころには広く知られるところであったため、程なく反乱は沈静化した。町を灰にされるより再び服従の道を選んだ、と一般には思われた。

反乱の首謀者たちは逃亡した。彼らはザヒルの故郷アタリスを目指し、さらにその先のクラコワを目指した。

冬季の山越えは大変危険であったが、かれらはそこに留まるわけには行かなかった。ハイダイダルは町を焼く代わりに、見せしめとして首謀者をつるしたからである。

「何もしなければ・・・」という彼の言葉が、果たして第一王子を助けるという意味ではなかったらしいことはさておき、彼は反乱を終息させることはした。

二度目の凱旋にあたっては、彼は表向き、第一王子を立てることを忘れなかった。

あくまでも自分は脇役であると言うように、第一王子を先頭に立て、自分はその他の将軍たちと同じ行列で帰還したのである。

首都でのあまりの不人気さに、それ以上の、これ見よがしな自己主張を続けることの愚を悟ったのであろうか。

これにはイズマイルもいやみを言うことは無く、「よくやった」と彼の功労を褒め称えた。なにせ、今回は町を焼く前にことは収まったのである。

首謀者をつるすことぐらいなら、イズマイルもやってきたことであるし、古今の征服者は、たいていそれぐらいの生け贄は必要としてきたのだ。

ペルジア各地の反乱は一年で終息した。それはアレスミリアンが予想していたよりも一年早かった。

が、火種は、折り重なった炭と灰の下に、町を焼かれた人々の心に残った。

ロンダルトはクラコワと違い、雪は降らない。

冬というものの、古王国でも特に北の育ちのアレスミリアンには春なりそめし頃のような気候のロンダルトだった。

難民の受け入れが一段落し、イテカレスも日に焼けた顔で帰還した。

このところの王国は、イテカレスが海から上がったままの恰好で久々に登城し、衛兵に追い返された事件以外は平穏だった。

アレスミリアンはこの機会に、心の片隅においてあった小箱を片付けようとした。

アストアシタ宮を再びザルウィー伯に預け、運動不足で不満気味のマクシミアを引き出し、供にはワーズウォードと小隊をつれて北を目指した。

一行は、クラコワとの境界辺りまでの北上に二日を費やし、そこから西に折れると、古くからの交易都市を目指した。

クラコワの都市は、その都と同じように、大なり小なりの城壁に囲まれている。それは、長年続いた北の諸部族との争いや、時たま起こる王国内での紛争への、市民たちの自衛手段であった。

春から秋にかけてのこの街道は、北と南を往還する荷車や、商人や、旅人や、牛や馬や、時にはそれを横切る鷺鳥や牛の群れでにぎわうものだが、まだ冬の開けきらないこのころは、ひっそりと静かな田舎の風景ばかりが続いた。

「なんとも退屈な風景ですね。」

都市に生まれ育ったワーズウォードは、どうもこういう旅の趣というものには、心がそそられないようだった。

「木、草、石、川、ときどき雪。これで花でも咲いていれば、もうちょっと楽しめるんですが。こんなに何もないと、馬の上で眠ってしまいますよ。あ、その先は左です。ずっと左ですけど。」

彼は本当にあくびをしてしまいそうだった。

そうした風景があと半日も続いた後で、一行はタブロニアの町が冬雲の切れ間からさす光に照らされているのが見える丘を越えた。

「は一。みえましたね。」

ワーズワードが、十年越しの旅路を終えたような、そして二十歳ぐらいは腰が曲がったような姿勢でため息をはき出した。

見張り小屋を帽子にしたような城門をくぐって町に入っても人影は無く、ワーズの憂鬱は一層募った。

「いったい、この町に人は住んでいるのでしょうか。」

一行のひづめが石畳を叩く音だけが響いていた。

雪はあったが、人や馬の通り道は、雪かきが行き届いていた。ワーズウォードが懸念したほど人が居ないようではなかった。

「家々から煙が上がっているのが見えるだろう。冬は外でやることもないから、みんな家の中にいるんだよ。」

アレスミアンが、この町とワーズウォードの間をとりなした。

一行は、町の中心の広場にいた。なんとなく時の止まった街中にまよいこんだような気がして、居心地が悪かった。

円形に近い広場を囲んで、周りの住居よりはひととき大きな市の庁舎のような建物と、それに類するような公会堂のようなものがいくつか立っている。

小さなこの町にも自治があることを、外来者に胸を張っているようでワーズウォードにはおかしかった。

「どこかの家を叩いて見ましょうか。」

とワーズウォードが言った。

それと呼応するかのように、広場が続く道の一つから、小太りの男が慌てた様子で駆け出してきた。おそらく衣服を改めでもしていたのだろう。なにせ騎士が十人ばかりもまとまって来るなど、めったに無いことだ。

男は、額の汗を綿布でぬぐいながら、慇懃な物腰で切り出した。

「これはこれは、タブロニアによろこそおいで下さいました。私は、この町の代表をいたしております、ニモノスキでございます。」

ワーズウォードが名乗るほども無いと思ったのか、

「カストラル家を探している。だれか案内できるものはいるか。」と馬上からたずねた。

「カストラルさまのお屋敷であれば・・・」とニモノスキが振り向こうとしたときに、アレスミアンが馬から下りた。

「私はアレスマリアンだ。名前ぐらいは聞いたことがあるだろう。」とニモノスキに近寄った。

「アレス・・・国王陛下！」

ニモノスキの丸い顔が、縦に二倍は伸びたろうか。

「カストラル家に大事な用がある。案内してくれるか。」

「はい、直ぐに。ええと、ええと、こちらでございます！」

ニモノスキの額と首筋と脇から、この季節には不似合いな汗が噴出した。どうにも舞い上がってしまって、普段歩きなれている町の様子がいつもと違って見える。

それからアレスマリアンは、ニモノスキと並んで歩き出した。

マクシミアは、行くのなら乗ればよいのにとでも言うように、不服そうに口を鳴らしたがおとなしく後を着いていった。

ワーズワードは主君が馬を下りたので、仕方なく自分も降りて馬を引いたが、内心はこんな田舎まで来て、馬まで下りる必要は無いのにと思っている。雪と水で足が汚れるではないか。

「そんなに緊張しなくてもいい。」

「はっ、いや、はは・・・。」

そうはいわれても、余程のこと緊張したのか、ニモノスキの何とはなしに硬直した歩き方が、ワーズワードには余計田舎くさく、腹立たしかった。

二人が何を話しているのかは聞こえない。ワーズワードが、相変わらず無愛想な町に、心の中でけなす言葉がつきよとするころ、周りの家屋よりは一回り大きな構えの屋敷の前にでた。

「こちらでございます。しばし、しばしのお待ちを。」

ニモノスキは、先導が終わって少しほっとしたような顔をしていた。

慣れた様子で、勝手に屋敷にもぐりこんでしまい、一行はまた人通りの無い通りで待たされた。

「待たされてばかりですね。」

ワーズワードが、今までの悪態も含めて言った。

「前触れもなしに来たのだから、こちらが悪いのだ。」

アレスマリアンは苦笑していった。いったい何が気に入らないのだろう。

再びニモノスキが出てきたとき、背後に、この館の主と思しき男とその妻を伴っていた。「それでは、わたくしはひとまず戻らせていただきます。」
「ああ、ご苦労だったな。」
ニモノスキは、そそくさともと来た道に戻っていった。

「国王陛下。当家の主でございます。」
と男がいった。女がそれにあわせてお辞儀をした。

「ご覧のように田舎ゆえ、何もおもてなしは出来ませんが、中にお入りください。」
といい、アレスミリアたちを招き入れた。

暖かな、といっても、すぐさま衣類を一枚脱ぎたくなるほどではない暖かさが、一行を迎えた。
ワーズワードは、「悪くない。」と思った。

彼の不機嫌は、外気の寒さによるところが大きかったのかもしれない。

質素ではあるが壁も床もよく手入れされ、破綻が無い。
ロンダルトには、華やかな彫刻や壁飾り、大理石を敷き詰めた床がいかに豪華な雰囲気装ってはいくが、よく見ると金泥がはげたり、敷物の綻びが放置されたままになっている屋敷がよくある。

それに比べると余程印象がいい。おそらく家主の気質を反映しているのだろう。

アレスミリアンとワーズワードは、接客の間に通された。

暖炉では薪が赤々と燃え、大振りな煙突は壁に密着し、壁を通して部屋全体を暖めている。勧められるままに腰を下ろすと、女が杯を二つ運んだ。

「まずはご一献。体が温まります。」

アレスミリアンが口をつけようとする、と、「しばしお待ちを。」とワーズワードが制し、口に含んで飲み下した。

「失礼かと存ずるが、職務ゆえお許しください・・・。」とこの屋の主に言い訳し、アレスミリアンに目配せをした。

アレスミリアンは止めた手を口に運んだ。暖かな、果実の香りのする酒だった。

「なるほど、これは温まる。ありがとう。」と静かに言った。

二口目を飲み終わるまで、誰も何も言わなかった。

空になった杯を女に返すと、「二人とも掛けられるが良い。」とすすめた。

「先の戦いでご子息を亡くされたこと、お悔やみ申し上げたい。もっと早くに来るべきだったが、多忙にされていて叶わなかった。」

男は、かつては屈強な騎士であったことを思わせるような頑丈な体躯に、頭や髭には白いものが多く、幾つかの困難を乗り越えてきたようなしわを顔に刻んでいた。

女は、男に寄り添うことを生涯と定めたような、静けさの中にあっただ。

「国王自らわざわざそのようなことのために。戦いでいのちを落としたものは大勢おりましたのに。」

男は意外そうに返した。

「カストラル殿は・・・、ご子息は、城壁に留まって戦うという私に、ここを守るのは自分たちの役目、私は私の戦場に戻れといわれた。その城壁は、後に一時敵の手に落ち大混乱となった、ご子息は命を捨てて民兵が退くのを守られた。おそらく私がそこにも何も出来なかつたろう。

同じようなことが城壁のそこここで起こったにちがいない。

けれども、私はそこにいて、ご子息の言に従って命拾いをした。もし私が生きていなければ、クラコワもロンダルトも敵の手に落ちていたかも知れない。」

それは、本心だった。

あの戦いの中、己でも意外なほどの高揚に、立場を忘れそうになった。

「この戦いは、ペルジアの侵略を防ぐだけの戦いであつたから、功勞のあつたものへの領地も恩賞も与えることが出来なかつた。

大事なご子息を亡くされたあなたたちにも、何も報いることが出来なかつた。私は王としての無力を感じている。」

多くの命が失われた。そして、何者にも代えがたい、人が逝ってしまった。

「これは、私の個人的な感傷からでた訪問だが、ひとことあなた方に伝えたかつた。ご子息のお陰でクラコワは救われたと。」

男はじっと耳をかたむけていたが、

「このような辺境の騎士でもお役に立つことが出来たことは、我が家の誇りにおもいます。戦いの中で命を落とすことは仕方が無いことです。それが無駄な死ではなかつたことを知り、うれし

く思います。」

隣で、女が声をたてず涙だけを流していた。

言葉とは裏腹に、その内面で悲しみに耐え葛藤する、古びた騎士の姿があった。ワーズワードは、この連合王国の王位に上り詰めた己の主が、なぜいつもある種の寂寥感を身にまとっているのか、その理由を今、知った。

彼は、彼の傍らで倒れた全ての魂の悲しみを自分のものとしている。比類なき権力と栄華を許された男が、悲しみの刃の上を渡っている。あたら王位についたがために、こんな時でも上辺の言葉を聞くことを強いられている。彼にとって、王位は方便の一つに過ぎないかもしれない。権力すら道具なのだろう。

「カストラル殿。陛下はそのような言葉を聴くために来られたのではありません。」

「いや、よいのだ。ワーズ。」

「よくはありません。」

カストラル殿、騎士の誇りなどよいのです。あなたが真に考えておいでのことをお話しなさい。はるばると国王がこんなところまで来られたのです。おざなりの言葉を申し上げてもしょうがありません。」

「よさないか。私が勝手に押しかけてきたのだ。」

ふいに女が口を開いた。

「子供に先立たれると言うことは、親にとってはつらいことです。死ぬと分かっていたら、戦いなどやらねば良かったと思うこともあります。」

もちろん、騎士の家に生まれた男ですから、いずれはこのような事もあると覚悟はして参りましたが、戦場で果てるために育てたのでは無いのに、と悔やまれてなりません。

あの子はよい子でした。家族想いで、他人思いで……。優しい子でした。せめて嫁でも娶り、子の顔を見てからでも遅くはなかったらうにと。」

「すまぬ、私がふがいないばかりに……。」

「いいえ。国王様の責任ではありません。それはよく存じております。それにわざわざこんな田舎までお越し頂いて……。」

(「だめだよ、大事なお話をしておられるのだから。」)

廊下の方で、小さな声がする。

(「だめだったら。」)

(「うーん。ちょっとだけだから。」)

小さな声が、だんだん興奮して大きくなってきた。

(「だって、いつおかえりになるのかわからないんだったら、みれなくなるじゃない。」)

女が立ち上がり、廊下に向かって行った。

「これ、騒がしい。下がっていなさいといったでしょ。」

アレスマリアンは、カストラルに幼い弟妹がいたことを思い出した。

「よい。おはいりなさい。」

「しかし、陛下。」と男が遮った。

「私が見たいのだ。入れてやってはくれないか。」

女が廊下に進み、二人を招き入れた。

「ご挨拶なさい。」

「セルディック・カストラルです。こちらは、妹の・・・。」

と言いかけたところで袖を引かれ、顔をしかめて引いた本人を見た。

「ソニア・カストラルでございます。」

といい、スカートの裾をあげつつ腰を落として礼をした。目のくりくりした、愛らしい少女が少し頬を赤らめながら立っていた。

「十二歳と八歳です。」と父親が笑顔で補った。

「あのう、・・・」とソニアが切り出した。

「いけません。」と母親がたしなめた。

「なにかな。」

「ほんとうに、ほんとうの王さま？」

「本当だよ。」

「ほんとうに？」

父と母は、何を言い出すかとあわてた。とってこの場を取り繕ういい知恵も浮かばない。

ワーズワードは、笑い玉が身体の中で暴れ回っているのを、なんとか抑えていた。たしかにこの人は王さまっぽいとはいえない。

「本当に、私はアレスマリアン。此の国の王さまだ。といってもまだ成ったばかりだけどね。」

「ああ、それで、おひげがないのね。まだしんまいの王さまだから。」

ソニアは、自分の思い付きが得意そうだった。

ワーズウォードはついにこらえきれずに吹き出した。

アレスミリアンは苦笑した。

「だって！」と、ソニアは一生懸命主張した。

「だって、ご本に出てくる王さまはみんなおひげをはやしているんですもの。」

セルディックは、やっぱり連れてくるんじゃ無かったと後悔した。

「ソニア殿はよくお勉強しておられる。」とアレスミリアンがいった。

ソニアは得意そうだった。

「私以外の髭の無い王さまはみんな偽物だ。でも私は本当の王さまだよ。」

「お目にかかれて、こうえいでございます。」

ソニアがかしこまった口調で付け足した。

ワーズウォードは涙腺まで故障してしまった。

隣で、あきれかえっていたセルディックが口をはさんだ。

「なんだい。」

「ペルジアはまた来るのでしょうか。」

ソニアを除いたその場の空気が変わった。

「おそらく来るだろう。」

「その時は、私が出陣いたします。」

「これ！なにを言い出すのだ。」

父が諫めた。

「私が出陣し、兄の仇をとります。」

セルディックは表情を硬くして、なおも宣言した。仇という言葉に、隣でソニアが不安そうな顔で兄を見上げた。

アレスミリアンは笑顔で話した。

「十二歳ではまだ出陣できない。それとカストラルの家からは次は出陣しない。トレアード殿よろしいな。」

「いえ、戦となれば、私が一門を率い戦場に。」

トレアードは落ち着いた声で返した。女の眼に不安の影がよぎり、唇が硬くなった。

「それは許さない。」

とアレスミリアンは言い切った。反論を許さないような強い調子だった。

「何故(なにゆえ)でございましょうか。ただお情けから言われるのであれば・・・。」

「そうではない。これはカストラルだけの問題ではなく、王国総てのことなのだ。」

世継ぎを亡くした家、家長を失った家は他にもある。それらを動員し、さらに男を失ったらその家はどうなるか・・・。

私は幼い頃に父を失った。今から思えば、その暮らしは、たやすく口に出すことも出来ないものだった。此の国の幼いもの達に同じ思いをさせたくはないのだ。そして、この国の綻びが大きくなる。」

セルディックはなおも食い下がった。

「しかし、兄の仇が。」

アレスミリアンはうなずき、諭すように語った。

「いいかいセルディック。君が仇をとったら、今度はその子供が君を仇と狙うだろう。」

「その子供を倒します。」

セルディックの決心は揺るがない。

「その子供の身内がまた君を狙ったら？ いつかは君も年老いて、倒れるときが来る。そうしたら君の子供がまた仇を取るのかい？ そうやって、何世代も何世代も、仇を討つために生きるのかいカストラルの一門は。」

「それは・・・、でもペルジアの奴は許せない！勝手に攻めてきて、兄上を殺して・・・。」

セルディックの目が潤んでいた。ソニアが心配そうにその腕を掴んでいた。

「君の言うことは分かるよ。私も従兄妹や叔父がこの戦いの中で死んだ。その仇を討とうと思うなら軍を動員して、ペルジアに攻め込まなくてははいけない。でも私は、彼らのためにこの国の者たちを危険に晒し、死に追いやることは出来ない。憎しみにかられ、恨みでこの国を焼いてしまっははいけないんだ。

君は今、ペルジアが兄上を殺したと言ったが、それは違う。」

セルディックはこの王の言おうとしていることが判らなかつた。ペルジアが殺したのでなければ、だれが兄の命を奪ったというのだ。

「私には分かりません。」

セルディックは不服を隠しはしなかつた。下を向きアレスミリアンを見なかつた。

「君の兄上は、目の前で危険にさらされた民兵達を助けるために、命を差し出されたのだ。彼らを見捨てて兄上が退かれたとしても、あの戦いの中だ、誰もそれを責めたりはしない。それで戦の大勢が変わるようなこともない。

けれども兄上は、民を守るためにご自分の命を引き替えにされたのだ。そのことは私も知っているし他の多くの騎士達も知っている。ナルドーク殿は、人としての誇りを守るために、戦われた。

戦うときはね、大事なものを守るために戦うんだよ。君や妹や家族を守るために、力なき人々を兇刃から救うために、この国に連なる人々を救うために自らの命を差し出された。」

「私は納得できません！」

「セルディックまでいなくなったらわたし・・・」

ソニアは自分の考えに怯えた。

妹の不安にセルディックは動揺した。

「君がいなくなったら、この家はどうなる・・・。」

十二歳には、どうにもしがたい問いかけだった。悔し涙が落ちた。

「十四になったら私のところに来なさい。もちろん父上、母上のお許しを得て・・・、君自身が望めばのことだけれど。

私がカラバ公のもとに行ったのが十四の時だった。ワーズワードが良いようにしてくれるだろう。」

「えっ私がですか！」

ワーズワードは、不意を突かれてうろたえた。

「私も一緒に行く！」

ソニアが兄の袖を引いた。

「まあ、よく考えておきなさい。」

最後にアレスミアが言った。

いずれにせよ、すぐには片のつかないことばかりだった。

「長旅でお疲れでしょう。何もございませんがお食事と寝所を整えました。今夜は当家にお泊まりください。」と男が言った。

「それはありがたい。ワーズの文句を聞くのにも飽きてきたところだ。休ませてもらうとしよう。」

「はいはい、私はどうせそうでございますとも……。セルディック。」

「あ、はい。」

先ほどのやり取りで、彼は少し元気を失ったようだった。君はまだ無力で考えの足りないな子供だ、という事実を言外に突きつけられたようだった。

「少し話しておいてやろう。ただロンダルトに来いといわれても、一体何をするのか分からないだろう。それから考えてみるんだな。」

セルディックは、それには従順に従った。

「ねえねえ、おかあさま。」

おさないソニアが、猫のように母の足に擦り寄っている。

「なんです。」

「おはなし、うかがってもいいでしょう。王さまに。」

「まあ、いけませんよ。お疲れなのですから。」

母はやんわりとたしなめた。

「かまわないよ。ソニア殿のお気に入りの所に連れて行ってあげれば、話してあげよう。」

「陛下。」

父親がどちらともつかない、話してやって欲しいのか、それとも遠慮しているのか、分からない表情でアレスミリアンを見たが、そのときはすでに時遅く、ソニアは、アレスミリアンの手を引いて部屋から出ようとしていた。

「こちらです！」

といつつ子供にしては力強く、全身で腕を引いた。

父と母は互いの目を合わせ、少しほっとしたように長い息を吐いた。

「いつの間に、あのようなお方の知己を得たのでしょうか。」

「しかも、わざわざこのようなところに足をお運びになるとは。」

「ナルドークは、よほど近しくしていただいていたのでしょうか。」

外は夕暮れに近かった。

「不思議なお方だ。とても十万もの大軍を破ったようには見えない。」

「大切な方をなくされたという、話を聞きましたが。」

「ああ、イーリアス様だな。それを考えると、我々の胸も痛む。何も無いが、心よりおもてなししよう。」

「ここです。ここ、ここ。ほらっ！」
そこは屋根裏部屋の、出窓だった。

夕暮れ間近の太陽が、赤い光を空に伸びやかにのぼし、青空を追いたてている。
朱の上に、濃い灰色を塗り重ねた雲が、沈んでいく太陽を見送っていた。

タブロニアの町並みが一望できる窓辺に座って、茶色がかったオレンジの瓦の連なりを見下ろすことが出来た。

「わたくし、ここが一番好き。小さかった頃は一人で上っちゃだめって言われたけど、いまはときどきこうして町をみているの。」

「ここは素敵だね。」

「お兄さまがなくなったときも、ここでないたの。」

「一人で？」

ソニアはこくりとした。

「お母さまも泣いていらしたし・・・、でもセルディはやさしくなったわ。」

「前はやさしくなかったの。」

ソニアはもう一度うなずいた。

「おはなし、してください。」

「はい、はい。そうだね、この空の下にはまだまだずっと道が続いていて、その先はどこに行くと思うかな。」

「えーと、ロンダルト？ですか。」

「そう、ソニアはかしこいな。じゃあその先は？」

「うーん。」

「海につづいているんだよ。」

「うみ？」

この狭い町から外に出たことのない少女には、思いもよらないことだった。

「そう、青くて大きな塩水がいっぱいひろがっているところだ。」

「絵本で・・・ご本でみたことがあります。船があって、大きな魚とか、波とか、人魚ひめとか。」

ソニアは少し背伸びをした。

「私は少し前に、船に乗って、よその国まで出かけてきたんだ。」

「ええっ、人魚ひめは。」

「ふふっ、人魚ひめはいなかったけど。羽のある魚が飛んでいるのは見たよ。」

「すごおい！すごいすごい。私も見てみたい。」

アレスミリアンは航海の話をしてきかせた。夜に観た漁り火のことや、船を洗う波の音楽のこととも話した。

こんな風に、旅の話をするのは久しぶりのことだ。イーリアスにも聞かせてあげたかった。

イーリアス、もし人が死んでも魂が残るとというのが本当なら、魂が時や空間を越えて繋がっているものなら、君にも聞こえるだろうか。

海は本当に大きかった。あの水のなかにも、草原と同じように生き物が住んでいるなんて信じられるかい。僕はまた旅に出たんだよ……。

「おおさま、泣いていらっしゃるの。」

「……うん。ある人のことを思い出してしまって。」

「お姫さまのこと？亡くなられた。」

「泣き虫のおおさまは、きらいかな。」

ソニアは、目に涙を一杯ためて、一生懸命首を横に振った。

日はすでに落ちた。屋根裏にも闇が忍び込もうとしている。

「こんなところに居られたのですか。」

トレアードが二人を発見した。

「おとうさま。いま海の話がうかがっていたの。」

トレアードの頬がゆるんだ。何物にも代え難い、愛しいものを見守る眼だった。

「ご用意が整いました。」

「そうか、かたじけない。」

「何もございませんが。」

「私が子供の頃は、本当になにもなかった。見かねて近くの農家のもの達が、何くれと無く世話をしてくれるのだが、スープすら作るのに困ったこともある。

それでも母と二人で惨めだと思ったことはない。おなかがすきすぎて、眠れなくて困ったことは有るけれどね。」

「あなた様は一体。」

「王さまは貧乏なのですか？貧乏な王さまなんているのかしら。」

ソニアは子供らしく、思ったことをそのまま聞く。

「昔の話だよ。いまはお城の人たちがちゃんとお飯を作ってくれる。」

「今日は沢山食べていってくださいね。」

「ありがとう、実はもうおなかがぺこぺこなんだよ。」

ソニアはうれしそうだった。

「供の者たちは、先ほどのニモノスキが引き取ってくれました。町のものたちが世話をしてくれるそうです。」

「やつら羽目を外さねばよいがな。」

「それはもう、十分に、きつく釘を刺しておきました。」

ワーズワードが応えた。

テーブルの上に燭台と花が飾られ、この地方の伝統的な料理が並べられていた。

アレスミリアンはいたずらっぽくワーズワードを斜めに見、「いただいてもよろしいか。」と聞いた。

ワーズは会釈して、大げさにうなずいて見せた。それを合図ににぎやかな夕食が始まった。ワーズワードは、この地味な食事がいかにも鄙びて見え、内心うんざりしていたが、見かけよりも豊かな味わいと、疲労感を感じない献立に感心した。

都育ちの彼が知らない食材もあった。いいかげん、偏見を捨てなければ、と感じざるを得なかった。

楽しみの時間も終わりの雰囲気は漂ってきたところに、アレスミアンが「子供のいる食事は楽しい。」ともらした。

「いつもは、お一人なのですか。」とトレアードがたずねた。

「大きな居間で、一人で食事をしている。」

その横顔が、本当にさびしそうだと言った。

「わたし、王さまのおきさきさまになってあげる。」

と、ソニアが言い出した。

「こどももいっぱい作るの。」

ソニアの目は十分に真剣で、頬は固い決心に紅潮していた。

父母は、この日一番の困った事態にもうどうにでもなれという気分だった。セルディックは、だから言ったのに、と目線で父母を非難した。

「お父様お母様と会えなくなるよ。ロンダルトは遠いからね。」

と、ワーズワードがいなした。これにはソニアも困ったようだった。

「だって王さまがかわいそうなんですもの。」

目がうるうるしている。

「時々遊びに来るといい。宮殿の中を案内してあげよう。」

ソニアは、後の座と世継ぎのことは、あきらめねばならないようだった。

子供たちがいやいやながら去って、大人たちは語り残したことを物語った。

ナルドークがよき若者であったこと、カストラルの家のこと、タブロニアのまちとカストラルの関係のこと。それは、古きよき古王国、クラコワの地方貴族の典型とでもいっていいような物語だった。

一言で言えば、「誠実な人々の物語」とでも言うのだろうか。

ワーズワードは寝床に入り、眠りが訪れるまでの月明かりの下で、そういうことを考えていた。

そして、明日の朝の出立をととても寂しく思った。

馬の吐く息の白さが、初冬の朝日に輝いて美しかった。こういうときの馬は本当に美しい。人の友人として、犬や猫とはまた違う美しさを持っている。

「お越しくださり、本当にありがとうございました。なんと申しあげればよいか、不調法ゆえうまく申せませんが、我が家が生まれ変わったような気がします。」
と、トレアードが礼を述べた。

「私も同じ気持ちだ。喜びを共有できて本当にうれしい。」
アレスミアンがかげりのない笑みで答えた。

「セルディック。」
とワーズワードが呼びかけた。そして、
「必ず来るんだぞ。この国を背負う人となるために。」といい彼を抱きしめた。
セルディックは、彼の精一杯の気持ちを込めて「はい！」と答えた。

母親の陰に隠れていたソニアはようやく最後に、
「王さま、これ。」
とって小さな花束を差し出した。

彼女が早朝から集めた、朝露にぬれた草花が小さな両手に握られている。
「ありがとう、わたしの小さな花嫁さん。」
とって頬にかかるく口付け、花束を受け取った。

ソニアは今にも泣き出しそうだったが、彼女の大事な“本物の”王さまの旅を祝福しようと頑張っていた。
セルディックの心の中では、亡き兄の姿を追いかける気持ちが、なんとはなく薄れてきた。
ワーズワードの後姿を見ながら、心が少し軽やかになった気がしていた。

タブロニアの広場で、従者たちは待っていた。
ただし、ワーズワードのきつい一言が聞かなかったのは明らかだった。

昨日のひと気のなさがうそのように、広場には人があふれかえっていた。これで店でも出ていれば祭りでも開かれているかと間違いそうなくらいだった。

「お越しと伺っておりましたら、総出で歓迎をいたしましたものを・・・。」
と、ニモノスキがマクシミアの手綱をつかみ、いかにも残念そうに言った。

「供の者たちが、ずいぶん世話になったようだな。」
「みなさまご陽気なお方ばかりで、たいへん楽しゅうございました。」

「カストラルの家のものをよろしく頼むぞ。」
「カストラル、ミラバル、ダルトンのご三家は、古くからこの町の守護として民をお守りくださいました。あだやおろそかには決していたしません。ましてナルドークの若様はご立派な戦いをなされ、この国をお守り下さったと伺っております。」

ニモノスキは、薄くなりかかった頭から、湯気でも上げそうなくらい強い口調で、最後の一文を強調した。

「頼んだぞ。」
というなり、アレスミアンはマクシミアにまたがった。

取り囲む人々に向かって、大きく右手を振った。民衆はそれに歓呼で答えた。マクシミアは得意げにたてがみを揺らしながら、並足で走り出した。

そのあとに、ワーズワードと十人の護衛の騎馬が続いた。騎士たちは馬に揺られて胃がひっくり返しそうだった。

民衆たちの歓呼は町の出口まで続いた。
ワーズワードは時折振り返って、小さくなっていくタブロニアの町を見た。

昨日見たのとは違う町に続く、一本の白い道が馬の足下から始まっていた。

一行はロンダルトには向かわず、そのままクラコワを目指した。

アレスミリアンが、クラコワから移ってからまだ一年ほどしかたっていないのに、ずいぶんと懐かしく感じられた。

一行が通りを行くと、道行く人たちは、彼らの若き王に気さくに声をかけた。彼らはアレスミリアンを、ひと時だけロンダルトに貸し出しているぐらいの感覚だった。

通いなれた内城への道の、とある角を過ぎようとするとき、不意に背中に痛みを感じた。ここ・・・、だったか。そして、あの船上の夜の出来事を思い出した。

「ああ、そうだあの男に、なぜ私が助かったかを教えてやるのを忘れたな。」

「何かおっしゃいましたか。」

ワーズワードが近づいて声をかけた。

「いや、独り言だ。・・・どうした。うれしそうだな。」

「人が多いと、ほっとするんです。」

といいつつ回りを見回した。

「しかも、大人気じゃないですか。」

この子供っぽいしゃぎようをセルディックがみたら、幻滅したかもしれない。

程なく城から出迎いの馬が来た。次第に隊列が整えられ、迎いの旗手が先頭になり、紅いクラコワの旗を掲げた。そんなこともあったなあと、アレスミリアンは思った。何かの記憶をたどる行進のような気がしてきた。

内城門の内側には、クラコワにいる騎士たちが整列し、若き王を迎えた。アレスミリアンは馬を下り彼らの前を通り過ぎた。

その先に、イーリアスの姿はなかったが。

「長旅、ご苦労様でした。」

いまやアレスミリアンに代わり、古王国を切り盛りするニールリングが声を掛けた。

イーリアスのことに気を取られていたアレスミリアンは、少し遅れて、不機嫌な声で

「まだ、旅は終わっていないよ。」と応えた。

ニールリングは気にする様子もなく、カラバ公とハイアルト卿が今や遅しと待っていることを告げた。

アレスミアンは、「うん。」とだけ言って、城の中へと進んでいった。

彼がこんな感情を表すのは、ニールリングとイテカレスぐらいのものだった。

この城の廊下を曲がるたび、部屋を通り過ぎるたびに、イーリアスが顔を出しそうな気がする。まだここへ戻るには早かったのかもしれない。

弱虫、情けない。

「おひさしぶりです。」

「ああ、よく来た。」

カラバ公が迎えた。

「お二人とも、」老けたとからかいそうになって、「お元気そうです。」と言い換えた。

カラバ公もハイアルト卿も、しばらく見なかったが変わりなかった。

以前のアレスミリアンであればそう言っていたかもしれない。

「ハイアルト様。カストラル家を訪ねて参りました。」

「そうか。」

「父母弟妹、みなよい人でした。」

ハイアルトは、無言でうなずいた。

「さてと、難民の受け入れとは随分思い切ったことをしたものだな。お前のことだろうから、単に善意からしたこととも思えん。」

と、カラバ公が話題を決めた。

「それでは私になにか悪どい事でもして、儲けているようではありませんか。」

ハイアルトは、その通りだろうというようにニヤニヤ笑っていた。

「ペルジアが次に来たとき、籠城は出来ません。イズマイルは懲りているでしょうから、慎重に進めてくるでしょう。」

ロンダルトは、相変わらず籠城できるような都ではありません。しかも、イズマイルの第二王子が短気極まりない火付け男ですから、長期化する前に城ごと焼かれるでしょう。」

「とは言うものの、徹底的に会戦を避け、なんとか追い返したという状況に、さほど変わりあるまい……。いや、わしは難民の話聞いたのだが……。それと関係があるのか。」

「彼らをこちら側に組み込んで、兵の水増しをしようともいうのか。」

とハイアルトが割って入った。

「もちろん協力はしてもらいますが、兵としては期待しません。数万とはいえ老人や女子供も含めてですから。戦える男は、数千かその程度でしょう。」

カラバ公が考え込むときの癖がある。髭を右手の指でいじくるのだ。今も左手で頬杖をつき、空いた右手で髭を複雑な形状にいじくりまわしていた。

「うまくいくか、いかぬか。確信がもてんな。」

「それ以外にどんな手があるといわれても、難しそうでもありますな。」

ハイアルトは腕組みをした。

「まあとどのつまり、アレスの言う通りせざるをえんということでしょう。」

カラバ公は、眼を細くしてどこか遠くを見ているのか、何かを思い出しているのかしているような表情で言った。

「まさか、あの子供がこうなるとは思っても見なかったな。」

ハイアルト卿は笑っていた。

「なんだその顔は。」

カラバ公が不審気に問いただすと、

「いや、もう何度もそのことをおっしゃっているので、少し。」

おかしかっただけだと。

「年寄り扱いしおって。」

カラバ公は、お前もそう変わらんだらうといおうとしたが、ここ数年、とくにイーリアスを失ってから、急に気力と体力が昔のようには満ちてこないように感じることを思い出した。

「わしも老いたか。」

「人はみな、やむにやまれぬ老いの道を歩んでいます。」

「お前もな。」

「ええ、私めも例外ではございません。」

「あれも老いるのだな、いつかは。あんな子供がいつか、われらのような老人になるのか。」

「また、でございますか。」

カラバ公は横目でにらむと、

「わしらは、よい拾い物をしたのだ。それは自慢してもよかろうよ。」

といいながら、軽く目を閉じた。

「ひどい雨だな。雨など降らぬとっていたではないか。」

「出掛けには晴れておりましたので、こんなことになるうとは。このあたりは山がちですからな、天候が変わりやすいのかもしれませんが。」

といいわけがましく言った。

「それに、急に冷えてきた。」

「いずこか、雨をしのげるところを探しませんと。」

カラバ公、ハイアルト卿、そして従者たちは、急に降り出した雨のなかをさ迷っていた。夏の盛りが過ぎて、然程もたつてはいないというのに、この北部の湖沼地方は、ちょっとした天気の変わりようによって晩秋の冷たさを思わせるような気温の低下に見舞われた。

「カラバ様、あちらの方向に明かりらしきものが見えるといっております。」
雨をすかしてみると、何か住居の屋根のようなものがかすかに見えているようだ。

「よし、いってみるか。」

膝丈もありそうな夏草を踏み敷きながら、一行は明かりを目指して行軍した。

雨に湿った草は、時には罨のように人の足に絡みつき引っ掛けた。転んだ者もそうでない者も、頭から髪のを伝って水滴がぽたぽたと落ちることには変わりなかった。

「どこからが敷地でえ、どこまでが野原なのか、よくわかりませんなあ！」
ハイアルトが、雨音に負けぬように声を出した。

従者の誰かが、「雷が来たらどうしよう。」と弱音をはいた。

彼は槍を持たされていたのだ。それを聞いた何人かが、そっとその傍から身を避けた。確かに山手のほうにはひととき黒い雲が広がり始めていた。

「ほう・・・。」

とカラバ公がつぶやいた。

遠くで明かりを認めた館は、みな苦勞の甲斐あって、もうしばらくの所までやってきた。

およそ田舎の小領主の館であるが、遠めにもあまり家勢は盛んとは見えず、どちらかといえばその屋根同様、長きにわたって傾いているように見えた。

屋根に雑草が生え、軒先は雨の重さに落ちそうになっていたが、そのぼろ家がなぜかカラバ達を誘っているように見えたのである。

「これは、お伽噺の魔女の館かもしれんな。」とつぶやいた。

さらに一行が近づくと、館の扉から一人の子鬼、いや少年が雨の中に飛び出してきた。

「お待ちしておりました。どうぞ、カラバ様、ご一同様、中へお入りください。」
一行は大きな暖炉のある広間に通された。

暖炉は赤々と燃え上がり、館の外の空気とは対照的にからりと乾いていた。館の中では数人の男や女が忙しげに立ち働き、各々には水滴を拭くための綿布と体を温める毛布が手渡された。

「お口に合いますかどうか。」
との前触れの後に出されたのはスープで、それは館に入ったときから、彼らの鼻を刺激したものの正体らしかった。

一さじのスープは舌を程よく暖め、体の内側に温もりをながしこんだ。

「よろしければもう一杯。」という言葉に誘われて、差し出した椀には先ほどのよりも少し熱い目のスープが注ぎ足された。

ハイアルトは無言でカラバ公に視線を送った。カラバ公もそれと同じように、お互いが同じことを感じているらしいことを確認した。

ハイアルトは、男たちを差配している少年に、
「この家の主人はどこにおられる。いやしくもカラバ公がご滞在になるのだ。挨拶に出られるべきではないか。」と言った。

「申し後れました。私がこの家の主、アレスミリア・スークリアでございます。父を早くになくしましたので、私がこの家を継ぎました。」
と少年は応えた。

「母御はいかがなされた。」
「すこし、不自由な身をしておりますゆえ、今は奥におります。こちらが落ちつけば、出てご挨拶したいと申しておりました。」
「いや、無理をする必要は無い。突然押しかけて、何かと世話をかけておる。」
「なにとぞ、不行き届きの段はお許してください。このようなあばら家ゆえ、十分なおもてなしも出来ませんが。」

それはそうだろう、早くに父をなくしたのであれば、家が傾くのも無理は無い。母御もさぞや

苦労されたことだろう。と、ハイアルトは思った。

それにしてもこの小僧……。小憎らしいような対応振りだな。しかも、カラバ公と聞いて臆する様子も無いとは……。

従者たちの家と比べても、どうかと思われるようなぼろ家に、当初は居心地が悪そうにしていた彼らも、かいがいしく動く男と女のもてなしに、人心地ついたような安堵の顔を浮かべた。

「この土地の酒でございます。いかがですか。」

「どれ、酒と聞いては断るわけにはいくまい。」

ハイアルトは一口含んで顔をしかめた。

「少し、薬くさいな。」

酒のことには遠慮が無かった。

「薬酒でございますゆえ、少し匂います。この酒が体を温めてくれます。風邪をひきません。」

「なるほど、心遣い痛み入る。」

それにしても、だ。どうにも腑に落ちるのは、手際がよすぎるということだ。

こんなぼろ家で、突然の来客に振舞うほどのスープを普段から作るはずはあるまい。薬酒にしてもそうだ。ハイアルトは不満を言ったわりには、すでに杯を空けていた。

やはり、魔女の館か？

いや、まで。

あまりの寒さに聞き流したが、この小僧、『お待ちしておりました。どうぞ、カラバ様・・・』とぬかしておった。

「アレスミリアとやら、先ほどは、われわれの到来を知っていたかのような口ぶりだったが。」

アレスミリアは、代えの綿布を腕に抱えたまま、声のしたほうを振り返って応えた。

「はい、そろそろお見えになるかと。」

「カラバ様はお忍びで来ておられる。なぜそなたはカラバ様がこられるだろうと、知っているのだ。」

ハイアルトがたずねたのは、何かを警戒してのことではなく、この辺境のぼろ家での思いもよらぬ歓待に興味を持ったからである。

まして、それを準備したのは、このアレスとか言う小僧らしい。

「カラバ様が、お忍びでこの地方にこられることは、近在のものはみな知っております。また本

日はこのクルビスの村付近で狩をなさるので、失礼の無いようにとのお達しがありました。ただ、今朝からの雲の様子を見ておりますと雨に変わると思われましたので、それへの備えをしておいたまでのことです。」

「われわれがここに来るとは限ったものではないだろう。」

「はい。おいでにならなければ、それは其れだけのことです。スープは手伝いのもに振舞えばよろしいし、薪はまた補充するだけのことです。

それに、これだけのかたがたが一度には入れる屋敷は、この近くではここぐらいのものです。」

「公が狩に来るといふ触れで、こんな準備をしたといふのか。」

カラバ公は二人のやり取りを、髭を右手でもてあそびながら聞いている。瞳には燃え上がる薪の炎がちらちらと写っていた。

それは其れだけのこと、か。人知れず、何かをなす。それは並の人間ならやらぬ事だ。誰も褒めてくれない、誰も認めてくれぬ。だがこの小童はそれは其れだけのことと言いおった。

「もし旅人が、突然の雨に打たれてひさしを貸してくれと言ってくれば、同じように招き入れて体を温めてやります。それと同じことです。何も特別なことではありません。

ただこのたびは、公がこのあたりにおいでで、朝方の好天が昼には崩れるだろうと思った。それだけでございます。」

それだけでございます、か。憎らしいやつだな。憎たらしいとおもいつつ、この少年をみるハイアルトの顔はほころんでいた。

この北の地方には、古くから王家の狩場がある。その狩場には、民は入り込むことが出来ない。

自然と、小さな獣やそれを捕食する大きな獣、木や草をもとめる大型の草食動物、それを狙うオオカミなどが、その人手が入らぬ楽園で繁殖する。

とは言え、自然に境界は無い。狩場の周辺にもそういった動物たちは縄張りを広げ、クルビスのような村にもやってくる。

村人は、時にはウサギや何かを捕まえたり、オオカミにはわなを仕掛けたり、時にはわなに毒を仕掛け、自分たちの家畜を守ったりもした。

あるとき、若い王子が狩をした。

王子は夢中で獲物を追っていたが、突然の雨が道を見失わせた。

あたりは次第に暗くなる。

王子は、雨をしのぐ家を探した。

雨の中の明かりに導かれ、たどり着いた館には清らかな娘がおり、

王子と娘は恋に落ちた。

そんなことが、かつて・・・あったかもしれない。

「雨があがりはじめたようです。」

従者の一人が告げた。下からも降るようだった雨脚は落ち着き、先ほどまで空を覆っていた黒雲は、速い風に追い立てられてまた別の山の向こうへと去っていった。

くもは、灰色から白へと次第に明るさを増し、切れ間からは青空が覗き、天からの光の階段が地上へと続いている。

鳥たちは雨宿りの木をはなれ、冷んやりとした水のような空中を、餌を求めて飛び交っている。

「どうやら、出立せねばならんようだな。」

カラバ公が戸口に立ち、刻一刻と変わっていく風景をめでながら言った。

「使いをやっておきましたので、しばらくすればお迎えのものが来るでしょう。」

その脇の、下の方から声がした。

カラバ公は、傍らの少年を見下ろした。

「アレスと言ったか。」

「はい。」

「何歳になる。」

「十二です。」

「世話をかけたな。」

「いえ、ろくなおもてなしも出来ず。」

「いや、十分だ。何か望みはあるか。」

少年はためらったが、

「いずれ、都に出たいとおもっています。」と、静かに胸の内を告白した。

「ハイアルトを訪ねるがいい。良きように取り計らってくれるだろう。」

といい、少年の頭に大きな手をかぶせた。

奥からアレスミリアを呼ぶ声がした。

「母上、ここに！」

カラバたちと話すときとは違う声だった。少年は声の主の方に歩んだ。

女は、少女の肩に手を載せ、まだ薪の火の暖かな広間に現れた。ハイアルトはその様子から目が見えていないことを悟った。

「ご息子に大変お世話になり申した。」

と声を出し、女に自分のいる場所を知らせた。

「十分におもてなしが出来ず、申し訳ありません。このような身の上ゆえ、お許してください。」

「いや、思いもかけぬ僥倖と、みな感服しておりました。よいご息子をお持ちだ。」

女は笑みを浮かべた。それは、若いが母らしい落ち着きと、無汚で幸福に満ちた笑みだった。

少女はこの部屋が女には少し暑すぎはしないかと心配そうに見ていたが、笑みを見て少し安心したように、顔を緊張からといた。

ハイアルトとカラバ公は、このような鄙にかくのごとき女性がいることに驚いた。アレスミリアの一件でも相当に面食らった上に、このように稀なる女性が現れることを想像していなかった。

「お目が、不自由でいられるのか。」

「はい、まったく見えぬというわけではないのですが、患いにより、わずかしか見えなくなりました。このエルシーが、いつも傍で助けてくれます。」

名が出て恥ずかしいと思ったのか、まだあどけなさの残る農夫の娘は女性の影に少し身を隠した。

「迎えが参りました。」と従者が告げた。

一同は心残りだったが、これ以上の長居をすると宿に帰り着くのが夜になるかも知れず、迎えを待たせるこれといった理由も無かったので、これを潮時に館を辞することにした。

ハイアルトが馬上から振り返ると、館の前ではまだ母と子が見送っていたが、辿り着いたときと同じように夏草の群れの中に次第に埋もれていくように見えた。

一行の歩みに合わせて、雨の中では聞こえなかった虫たちの鳴き声が、湧き上がったたり、消えたりを繰り返したりしている。

あの館の存在も、つい今しがた起こったことも、本当にこの身に起こったことなのか。

雨が上がったとはいえ大気は十分に乾ききらず、木や草の葉裏から放出される取り込みすぎた水分により見通しは次第に悪くなり、館を捕らえることも時には難しくなってきた。

「随分と、執心のようにすだな。」

と、カラバ公がからかった。

「はは。そうではありませんが、どうも今起こったことが腑に落ちかねることばかりで、心穏やかになりません。小僧といい、女主人といい、この世のものではないような気がいたします。この世でない、どこかに迷い込んだのではないかと。」

「あの子供。いずれクラコワに出たいとっておった。」

「ほう。そうですか……。この地に埋もれていても、傾く家勢をとめられぬ。あの才気があれば、都で一旗あげようと思うのも分からなくは無いですな。」

「面倒を見てやるがよい。」

「やや、私がでございますか。これはなんとも……。」

ハイアルトは目をむいた。

「恩義があるだろう。」

「それを言われると、辛うございますが。仕方がありませんなあ。」

と、あまり気乗りのしないような言葉で語尾を濁した。

ハイアルトは、どちらかと言えば子供あしらいが苦手な方である。戦場の敵であればいかようにもあしらってやるのだが。

そこへ迎えの男が、遠慮がちに話しに割り込んだ。

「スークリアの若様のことでございましょうか。」

「そうだ。何か。」

「へえ。このあたりのものは、スークリアのお家に並々ならぬご恩がございます。なにとぞ良しなをお願いいたします。わっしのようなものが言うのは大変に、大変に失礼でございますが。」

男にしては、一生懸命礼を尽くしたつもりだった。

「恩とはな。領主であれば、多少の恩義はあるだろうが、並々ならぬとはどういうことだ。」
道中の、退屈しのぎに聴くのもよからう。

「へえ。ずいぶん前のことでありますが、来る年、来る年、凶作が続いたことがあります。わっしらは、春に種籾を借り、秋の収穫で返すということをしておりますんで、凶作が続くとそれを返せず、商人から金を借りなければなりません。けれども、わっしどもは返せませなんだ。」

「凶作が続いたのだな。」

「へえ、それもございましたが、どうにもあの三分だか五分だかいうものが、よく分かりませなんだ。借金がいつの間にやら大きく膨らんでおったのです。とても返せるものではございません。」

「そうか。」

「へえ。わっしらはもう、子供を売るか、夜逃げするか、首をくくるか、もう、行くところまで行ってしまっておりあしたので……。」

「うむ。」

「そのとき、リードヴェルト様が。」

「誰だと。」

「スークリアの奥様でございます。リードヴェルト様をご領地を売って、借金を全部消して下さいあした。わっしらはもう……。」

といつつ、ぼさぼさの頭を震わして男は泣き出した。

「おまけに、借金は返さなくてもいいとおっしゃってましたのお。私には若様がいれば十分。領地などよりわっしらのほうが大事と、借金を背負ったままでは暮らしが大変だろうと……。」
男はしばらく泣き続けた。

「そのときの苦労がもとで、お目が見えんようになってしまいました。わしらのせいでお目が……。このきれいな里の風景ももうよくは見えんのです。けれどもそれでいいと。」
男はまた泣きだした。

「けれどもエルシーは偉かった。まだ小さな子供であったのに、大人が働かなあいかんのであれば自分が奥様のお世話をするいうて、親元を離れてお世話をさせていただいております。わっしらも、あの子に負けんように、なんとかいただいた恩は、お返ししたいとけんめいに働いております。」

男は鼻をすすって、ようやく息をついた。

「ですんで、若様のことはなにとぞ、なにとぞよろしうにお願い申し上げます。」

男はまた泣き出した。涙と鼻水を流しながら、よろよろと歩き続けた。

馬上で、ハイアルトがまっすぐ前を向いたまま応えた。

「しかと、引き受けたぞ。」

言葉が短かったのは、カラバ公に声の震えを悟られたくなかったからである。

エルシーは、親や兄弟姉妹が嫌いなわけではない。

口うるさいがしっかり者で面倒見のいい姉のロシーや、それとは対照的に無口だけれども、エルシーが物心付いたときには畑に出ていた働き者の兄クロフ、いたずら好きだが明るい次の兄のキャル、そして小さな妹に弟たち。

近くには、祖父や祖母の暮らす小さな水車のある家もあり、しばしば彼らと夕食を共にした。エルシーはその大家族が好きだった。

けれども、彼女はリードヴェルトの介助人となることを天啓のように想い、幼い身ながらも家を出たのであった。

父や母はエルシーを心配に想い、仕事の合間に何度も館の近くまで足をはこんだが、エルシーはそのたびに心配はいらないというように、無言で笑って手を振り応えた。

そのエルシーも、一年に何度かは家に帰り、家族と過ごした。

エルシーはその日が近づくと、それが本当に楽しみで待ち遠しかった。そして、ようやくその日がやって来ると、なかば駆けるようにして家路を急ぐのだった。

家に帰ると、父や母は久しぶりに見る娘を抱きしめ、本当にかわいがったし、自分達とは違い、いつの間にか、読み書きまでできるようになっていることに驚いた。

久しぶりに、家族全員で囲む夕食は、いつもより品数が多く豪華だった。

父は、スークリアの奥様が、それはもう何度も何度も聞いたことだけれど、優しくして下さるか尋ね、エルシーは、リードヴェルト様より優しい奥様はいないと返すのだった。

時折たずねてくる北の住人のことや、クラコワや、近頃はロンダルトの話などもエルシーは語った。

こういう話のときは、いつも控えめなエルシーにしては珍しく自慢げだったが、それは、出来れば家に帰ってきて欲しいと思っている父や母に対して、自分がスークリアの奥様に使えることを、誇りに思っていることを言外に伝えるためであった。

姉や兄との話も楽しかったし、妹や弟とも夜遅くまでベッドの周りで遊び続けた。この日だけは、妹や弟は早く寝なさいと叱られなかった。

館の静かな一日とは違う、エルシーが子供らしい子供に還れる素晴らしい一日だった。

やがて夜も更け、弟妹がどうしても睡魔に勝てずにその場で寝息を立て、そのままの格好で寝床へと運んで行かれ、兄や姉そして家中が眠りの底に落ちている頃、エルシーの頭は夏の早朝の空気のように、すーっと、かえって冴え冴えとするのだった。

「今日一日、奥様はどうしていらしただろう。」

もちろん、代わりの方が世話をしに来ているし、そもそもアレスが家にいるのだから、エルシーは気にしなくていい。

けれども、私がいなくて奥様は不自由していられるのではないか。私なら、奥様が何をしようとされても、その気配でわかるのに。そう思うと、寝てなどいられなくなるのだ。

一度は寝間着に着替えてベッドに入ったが、少しうつらうつらしただけで、やがて朝を待ちきれずに着替えを初め、朝日が山の裏側から空へと白い放射を放ち始め、灯りが無くても部屋の隅々が見渡せる頃には、荷物を袋に詰めなおし、すっかり支度を調べてしまう。

畑仕事のある父や母も、そのころには野良着に着替え、朝のひと仕事に出かける頃である。父や母は家の前を出て、野良仕事でごつごつとした手で、再び代わる代わるにエルシーを抱きしめ、髪をなで、頬をすり寄せて別れを惜しんだ。

夏には朝露が、冬には朝霜が、家の前からのびて街道につながる一本の道をきらきらと輝かせている。

この道をたどって、館に帰り、朝の支度をしていると奥様はきっこうおっしゃるだろう。

「まあエルシー、もう帰ってきてしまったの。こんな日ぐらいもっとお寝坊すればいいのに。でもうれしいわ。あなたにお願いしたいことがたくさんあるの。」

私の足音を、奥様は聞き分けくださる。

この「朝日に輝く道」を歩いていけば、奥様は私の足音に気づいてくださるだろう。

だから私は、この家に帰ってくるのだ。

この「朝日に輝く道」を、再び私の館に戻るために。

ペルジア国内の反乱を鎮圧すると、イズマイルは二度目の遠征の準備に取り掛かった。

「まず、この細い街道を整備し、荷車が不自由なく通れるようにする。街道の要所には砦を築き、兵を駐屯させる。敵に襲撃されぬようにな。これはお前の仕事だ、イフラダル。よいな。」

イズマイルが、机に広げられた大ざっぱな地図を指さして言った。そこにはペルジアの西の出口と、そこから続く旧王国へのヘビのようにくねった黒い線が描かれていた。

「承知しました。」

と第一王子が応えた。

「道が出来れば、次は荷車が必要だ。それも大量にな。人が引くのではなく、牛に引かせる荷車を用意する。併せて補給部隊の編成もだ。それはハイダイダルがせよ。よいな。」

「承知しました。」

同じようにその地図を眺めていたハイダイダルは、辺境で街道の整備をするよりは、都に残って荷車を作るほうがよさそうだ、と算盤をはじいた。

イズマイルとしては、この第二王子を誰の手も届かないところにおいておくのが不安だった。下手をすると、面倒だからと山そのものを焼いてしまうかもしれない。そんなものを兵士に見せみろ。彼らはハイダイダルが町を焼いたことを思い出し、行軍の途中で叛乱に走るかもしれない。

「次の遠征では、お前たちがそれぞれ第一軍と第二軍を率いるのだ。街道も荷車も、そのときに必要になる。分かっているな。」

まだ戦場に出る年には満たない第三、第四王子は遠征には加わらなかった。

加わらないどころか、彼らはこのアルシャーファに呼び集められてすらいなかった。

彼らはそれぞれいずこかの地方都市に送られ、形ばかりの治世を行っていた。王位の継承権を持つ男子が一つところに集まると、決まって争いごとが持ち上がる。それがこの東方世界であった。

「それに出兵する兵士は、それぞれが鎮圧した地域から徴兵するように。これもお前たちが計らえ。おまえ達の能力が、我が軍の力となる。どのような働きをするか楽しみにしているからな。そしてわしの本営は、ペルジア生え抜きの部隊で固める。」

イズマイルは、二人の王子に競わせるつもりだった。兵、兵糧、戦費の調達、そして実際の戦闘についても二人の対抗心をあおることで、前よりも強力な軍団を編成する心積もりだった。

第一王子が四万集めれば、第二王子は五万。それを聞いた第一王子は六万というように、結局双方が七万ずつを集め、本体とあわせて十五万の大軍団となった。補給部隊への動員をあわせると、ペルジアからは、根こそぎ男たちが連れ去られたようになる。

時を同じくして、ペルジアから旧王国への街道の入り口では、斧と槌の音が深い森に響き渡り始めた。

細々とした長い管のようだった街道は、二台の荷車が悠々とすれ違い、昼なお暗かった樹木の天井のかわりに青空さえ見えるようになった。倒された木は、街道の拡幅の土止めになり、橋となり、砦の柵や櫓や住居となった。この辺りでこんなに大々的な土木工事が行われたことはかつて無かった。

その知らせは、森の住民からキリアンデルを介して、クラコワやロンダルトのアレスミリアンの元に届けられた。

新たな戦いの年の幕開けがやってきた。

街道の工事は三ヶ月におよび、その先端からブルターク城まではわずかの距離しか残されていない。イズマイルは再び軍を発した。

第一軍は第一王子のイフラダル、第二軍は第二王子のハイダイダル、第三軍はイズマイル自らが率いて、アルシャーファを後にした。

第一軍、第二軍は被征服民達から成る混成部隊である。その後ろのペルジア人軍団と併せて十五万の大軍となった。それは一昨年 of 遠征の1.5倍の規模であった。

前回の遠征でペルジア軍の障害となった森林地帯は、街道の整備により、並みの交通路となっていた。およそ七日間かかった行軍も、三日で消化する事が出来た。

兵士と違い、運搬に難渋する兵糧や資材も、今回は整備された街道をさほどの遅れもなく運ばれていった。イズマイルは己の描いた計画が、順調に踊り始めていることを知り満足した。

「あのアレスミリアンという男・・・。ふふ、今度ばかりはおまえの思うようにはさせんぞ。

兵力は十五万、補給も今回は申し分ない。この二年、あの屈辱を思い出しては、わしの腑は煮えくり返ったのだ。だがわしは、怒りに身もだえしていただけない。前よりも強力な軍団。それを支える補給路、荷駄隊。先の戦いにはわしの油断もあった。だが此度はそうは行かん。アズールの末裔よ、待っておれ。」

馬上にゆれるイズマイルの前には、幾千、幾万の槍の穂がきらめき、同じ数の弓が風に鳴っていた。その先には二番目の王子がいた。そして、ハイダイダルは、自分の前を行く腹違いの兄のことを考えていた。

「これが、俺とあいつの距離ということか。この差を埋めぬ限り俺は王位にはつけない、とっているのか、親父は。」

象徴的に捉えればそう言えなくも無いが、イズマイルに其処までの意図は無かったろう。

彼はこの時点で、王位を譲ることは露ほどにも考えてはいなかったし、継承者の順位を入れ替える必要性も認めていなかった。

この時点で、何か事を起こさねばと思っていたのは、ハイダイダルのみである。

僻みっぽい人物は、往々にしてこの手の想像を多くし、自らの周りに悪い虚像を描きがちである。こういうとき、周りの人間が見とめているよりも、本人の心はあらぬ想像に惑わされ、異常な臭気を放ちだす。

ときとして、それは異常な行動となって現れ、周囲はそれによりようやく気づく。けれどもその時は、すでに事はなされた後なのだ。

「戦闘中の死、それが一番望ましい。さすがに、私自身に疑いがかかるようなことは出来ないからな。下にも王子はいることでもあるし。そう、激戦であればあるほどよいだろう。その時見捨てればよいのだ。そのためには、あちらにもせいぜい頑張ってもらわなければな。」

アルシャーファから三日目。

ペルジアの先鋒は、ブルターク城の前の平原に到着した。前の戦いで同胞をなくした者たちは、それが埋葬されたと思しき石の下に向かって頭をたれた。

ブルタークの城門は固く閉ざされているが、二年のうちに伸びた草や木の苗は、何の手入れもされないままに、まだ青々として城壁までの斜面を覆っている。

斥候が接近し、さらに近づき、坂を上がり城門に取り付いた。城内からは何の反応も無い。続いて立てかけたはしごを、盾を上にして城壁へと上り始めた。

それは、十万を超える将兵の前で行われる、軽業の興行のようなものだった。塀を乗り越え、兵士が姿を消すと、その代わりに数百の鳥が一斉に飛び立った。

その羽音に、十万の観衆は驚きどよめいたが、その原因が鳥だと知ると、姿を消した兵士が再び城壁に姿をあらわすのを、固唾を呑んで待った。

すると思ってもよらなかったことだが、これまでペルジア軍の前では一度も開かなかった城門の扉が、一枚、また一枚と押し開けられ、城壁に消えた兵士たちが再び姿を現した。無事な姿に観客は拍子抜けしたが、それが意味するものを即座にみなが理解したわけではない。

「もぬけのカラか。」と、イズマイルはつぶやいた。

この城の攻略戦に興味はなかったが、先の戦では足底に刺さったとげのごとくに、ペルジア軍をいじめた城である。この城の攻略にけちがついたことが、すべての躓きの始まりだった。だからこの城を落としてこそその報復戦と言えなくもない。そう思うと、イズマイルは残念だった。

しかし、なぜあの男はこの城を放棄したのだろうか。それが分からなかった。

何かの罠か。が罠とすれば少し小さすぎるだろう。この大軍を収容するには少し小さい。ただ放棄しただけか。

イズマイルから第一王子イフラダルに、明日の出発を即す伝令が走った。

ここはもう旧王国の領域である。したがって、この先の街道は整備されていない。軍団が通過した後、同じ様に街道工事が行われることになっていた。

かつてここでは数多くの待ち伏せにあい、ペルジアの兵士は肉体と精神の消耗の度合いを深めていったことを、イズマイルの耳は聞いていなかった。もちろんイフラダルもそれは知らない。

第一軍はその深い森の中に吸い込まれていった。

“今日で六日目、いや七日目か。また森の中に入った。今度は道が悪くて歩きづらい。今日は前みたいな待ち伏せは無かった。あしたも無ければいい。あの城も空っぽだったというしいったいどうしたのだろう。待ち伏せが無いのはありがたいが、それはそれで気味が悪い。森の中は湿気が多く、皮を敷いてその上に毛布を乗せても冷たく気持ちが悪い。こんなところで眠れるものかと思っていても、いつの間にか眠ってしまう。体は正直だ。早く故郷に帰りたい。帰ってリンリーや子供たちに会いたい。生きて帰りたい。”

「おっそろしいほど、なあんにもねえな。」
肩越しに声をかけられて振り返ると、見慣れぬ赤ら顔の男がいた。

「へえ、あんた字がかけるのかえ。てえしたもんだね。」
少し酒臭い息のにおいがした。

「あんたは？」
「おれかえ、おれはカルスペルのジュチというもんだ。仲間とはぐれちまったもんでね。」
「カルスペルなら行ったことがある。市が開かれてにぎやかだった。」
「俺の家はそんな町中じゃあねえがな。畑を耕すのが俺の仕事だ。時々市に持って行くこともあったさ。ところで、何を書いてんだ。」
「記録だ。毎日のことを書いている。」
「へえ、誰がよむんだね。」
「さあな、運良く家に帰ったら、そのときは自分で読むかもな。」
「じゃあ俺のことも書いといてくれねえか。おれあ字が書けねえ。なに、名前だけでいいんだ。」

“ジュチという男と出会った。カルスペルの陽気な男だ。”

「これでいいか。」
うんうんと、満足そうに男はうなずいた。

「だったら俺にも頼みがある。」
「なんだね。」
「俺が死んだら、これを家族にとどけてくれないか。」
ジュチ、と名乗った男は、にやりと口の端を上げた。

「くっくっく。学があるやつは、どうしてそんな暗えことばかり考えるかな。

死なないように、逃げまわってればいいじゃねえか。勝っても負けても俺たちには関係ねえ。死なねえ程度に隅っこの方を走ってればいいんだよ、戦が終わるまで。

が、まあいいさ。約束してやるよ。あんたどこの誰だい。」

「テーベレのキノツラ。」

「生き延びること考えようぜ。俺たちに、ペルジアへの義理はねえ。」

“アルシャーファを出て八日目。

今日も一日歩き詰めだ。足が痛い。

豆がつぶれてまた違うところにまめが出来て。

しばらく携帯食しか食べていないので、腹が減ってどうしようもない。豆と豚の煮込みが懐かしい。

ペルジアの連中はきつとこんなときでも温かい敷物の上に寝そべって、うまい料理を食べているんだろう。そろそろこの森も終わりのはずだ。

ひょっとすると森の出口で待ち伏せているかもしれない。

いよいよ敵の領地だ。

ジュチは相変わらず気楽にみんなと話している。

時々知らない顔を見かけるのは、ジュチのようにいろんなところのものが混ざってきたからだろうか。

こんなしまりの無い軍隊で戦争が出来るのか。

早く故郷に帰りたい。故郷に帰って、小川の水で顔を洗って、リンリーや子供たちと話したい。”

「よう兄弟、今日も“記録”かい。」

「ご機嫌だな。」

「あんたもちょっと飲んだら、少しは気分が晴れるだろう。」

そういいながら、右手に持った皮袋を振って見せた。

「いや、俺はいいんだ。いつ敵が襲ってくるかと思うと、怖くて飲んでられないんだ。」

「そいつはいい心がけだ。敵を倒そうなんて考えちゃいけない。危なくなったら逃げるんだぜ。」

「ああ・・・そうだな。早く故郷に帰りたいよ。」

隣に腰掛けたジュチの方から、酒のにおいがした。

「おれは、前の戦で一回死にかけた。」

オレも酒が嫌いってわけじゃあないんだがな。ちょっとそんな気にはなれないな。

「あんたもいたのか。」

「せっかく拾った命なのにこのざまとは、お互い運が無いな。あの城壁に囲まれたとき、もうこれで死ぬのかと思ったよ。ペルジアの本隊が総崩れになって、俺たちは城壁の間に取り残された。何万という弓が上から狙っていやがった。」

「そう、ペルジアだったらあのまま皆殺しだったろう。」

「今度の戦でも、あんな奇跡が起こらないとも限らない。それに上手くのらねえとな。命は一個しかねえからな。」

“今日で九日目。森は終わりが見えない。まさか迷ったのでは無いだろうな。こんなに大勢がいちどにまよってしまったら。どうなるのだろう？”

聞いたことの無い鳴き声が時折聞こえる。
誰かが「ふくろう」だとか言っていたが、ふくろうっていったいなんだ。
鳥か獣か。襲ってきたりはしないのだろうか。

みなが寝静まってから一人おきていると、木の影が恐ろしい。
オオカミが襲ってきたりしないのだろうか。

地面から湿り気がじわじわと上がってくる。体のぬくもりが、地面に奪われる。
今日は、小便で隊列を抜けたものが帰ってこないといううわさを聞いた。
一人で脱走したのだろうか。それともさらわれたのか。
今日は酒でも飲まないで眠れそうに無い。

今日はジュチとあっていない。
おかしなやつだが顔を合わさないと不安になる。

早く家に帰りたい。
家に帰って小川の水で顔を洗って、服を着替えたい。
寝台の上に寝転びたい。
リンリーや子供たちと話したい。”

“十日目。明日はいよいよ森を抜け出るらしい。
みんな緊張しているようだ。おれもどきどきする。
でも森の外側にも敵兵はいないらしい。斥候がいま探りに言っているといっていた。
これでまた故郷に帰れる日が遠くなった・・・。
でも戦闘が先に延びたのは正直うれしい。
みな疲れている。こんな状態で戦って、勝てるとは思えない。
森の外にいなければいったいどこにいるのだろう。
敵はどこに行ってしまったんだ。”

「よっ。また“記録”かい。」
真っ暗な空に向かって、火の粉を舞い上げている焚き火に、男の顔が赤く照らされた。

「あっ、ジュチ。昨日は見かけなかったが。」
「ああ、俺の本隊を探しにいったんだが、やっぱり分からなかった。こんなに人が多いとな、なんだかそんな奴がっぱいうろろしているぞ。」

「おれたち、いったいどこまで行くんだらうなあ。」
「さあな。」

「変だと思わないか、敵が何も仕掛けてこないのは。前の戦いでは、この辺りに来るまでに待ち伏せや何かで大勢やられたのに、今度は人っ子一人見かけない。なんか変だ。」
「どうだかな。」

「また罠でもしかけてくるんじゃあ・・・。」
「そうだろうな。」
「そうなのか！」

ジュチはにやりと笑った。こんな時に、よく笑えるものだと思っただけは感心した。俺なんかよりよっぽど度胸が据わっているらしい。

「おれには、あんたみたいな学はねえが、その代わりに世間の事情ってやつにはちょいとしたもんだ。
相手が鳴りを潜めているときは、たいていトンでもねえ罠が仕掛けられているって相場が決まってる。
そんなことは俺たちの大将にはわかるまいよ。
やつらあ生まれが上品だからな。胡散臭いとは思っているだろうがな。」

罨というのは進めば進むほど深みにはまっていくもんだ。こんなふうにな。」

といいながら両の手のひらを上にして、肩をすぼめてみせた。

キノツラは目の前が真っ暗になりそうだった。

「おいおい、落ち込むんじゃねえよ、兄弟。前の戦を思い出してみなよ。敵の罨にはまり込んでどうしようもなくなったとき、俺たちはどうなったよ。」

「罨に？あの城のことか？」

「そうさ。」

「俺たちは、みんな・・・命を拾った。」

ジュチは、ぽんぽんと肩をたたいて立ち去っていった。

キノツラは、得心がいかないままに、その背中が遠ざかるのを見ていた。

“十一日目。今日は久しぶりに日の光の下に出た。
丘と丘の間を行軍するうちに、前の戦のことを思い出した。
あの時もこの辺りを進んだはずだ。

誰かが、三日ほど前に敵の軍勢がこの先の平地に集結していたらしい、と言っていた。
人や馬の足跡を追って、斥候はもっと先の方まで行っているそうだ。
我々もそれを追わないといけない。

森の中より歩くのは楽になったが、その分速度が上がった。
今夜は久しぶりに煮炊きが出来たので、携行食よりはまともなものが食べられた。

水辺がなかったので髭も剃れない。
ペルジアの奴らと違って、俺たちには髭を伸ばす習慣はない。
無精髭が伸び放題になって、みな見苦しい顔だ。それもだいぶ見慣れたが。

どこまで敵を追っていくのだろう。どこまで深く進入するのだろう。
一体、この広い国のどこをどうすれば、こちらの勝ちになるのだろう。
都を落とせばそれで終わりなのか。

少なくとも都は二つあって、そのほかにも大きな城が十や二十は有るという話だ。
それを全部落とすのに一体何年かかるのだろうか。
ひょっとするともう生きては国には帰れないかも知れない。
そんなことを、たき火を囲みながらさっきまで話していた。

早く故郷に帰りたい、早く家に帰って小川で顔を洗い、柔らかな寝台に身を投げ出したい。
ろうそくの光の下で食台を囲み、リンリーや子供たちと話すのだ。
ジャイルはパンをもう一つ取ってとリンリーにねだるのだ。
バターも忘れずにねと付け加えながら。

トクルは相変わらずポロポロとこぼしながら食べているのだろうか。
一度落としたものを拾って食べてはいけないよ。
どうせ、それはデントンの餌になるのだからね。

父さんはいつもお前達のことを想っているよ。
だからお前達も父さんの無事を祈っておくれ。“

ペルジアの軍団は第一軍を先頭にクラコフ領内に進入していた。

ペルジアの本営は、すぐさま都を包囲するべきか、周辺の町から攻略して敵軍を誘い出し、一気に決戦に持って行くかをまだ決めかねていた。

「都を包囲するのはいいが、背後を襲われるとまた前のようなことに成りかねない。外城壁は攻略できたが、あれも罠であったことを考えると、今度も同じように行くとは限らないからな。」

しんがりに近いイズマイルは、森をぬけると一旦自軍の兵を止め、天幕を張ったその下で休息を取っていた。

下っ端の兵とは雲泥の差とはいえ、大木が生い茂る森の中の、さして道幅も無く湿った街道で幾日かを過ごすことの不快感は、後宮の甘い香りと柔らかな毛織物の上で暮らすイズマイルには耐え難い思いだった。

「できれば平原での会戦に持ち込みたいものだ。それが我々の戦い方だ。都は遮蔽物が多い上に、守る側に有利に作られているからな。会戦に持ち込めば、この兵力であれば間違いなくあの男の息の根を止められるだろう。」

「敵の軍団が移動を続けているという知らせが、斥候から入っております。」

長いすに身体を預けたイズマイルは、声の方を振り向きもせず中空に眼をこらしながら、思考を続けた。

「うむ。尻尾をつかんだのは上出来だ。とはいえ下手に手を出しては、どんな罠が待ち受けているかわからん。しばらくは距離を縮めつつ追いかけるのが良かろう。餌だと想ってあわてて喰らうと、毒入りだったなどと言うことも或やも知れん。」

イズマイルは、鉢に盛られたみずみずしい黄緑色の葡萄に手をのぼしなら、おのれがした例え話に顔をしかめた。

こうした後方での会話を果たして知っていたのだろうか。

第二軍の指揮官ハイダイダルは、半分はおのれの退屈しのぎから、近在の村を探しだしそれを襲わせた。

形ばかりの土塁が周囲をめぐり、たかだか千人に満たない住民がいるに過ぎない村を、一万近くの兵士に囲ませ、じりじりと包囲を縮めて最後には兵士達を突入させた。

突入した兵士達が眼にしたものは、使い古されて放置された農具や、少しでも値打ちの有りそ

うなものはあらかじめ取られた後の住居と、埃ばかりが仰々しい人通りの絶えた街角だった。

ハイダイダルとしては、いきなり敵軍と激突して剣を交えるよりも、自軍の兵士達に肩慣らしをさせたかったのだ。

けれども兵士達は、つい数ヶ月前に自分たちの村が同じように包囲されたことを思い出し、ハイダイダルへのひそかな恨みを思い出させることになった。

ハイダイダルは去り際に、白い顔をより青白く、切れ長の目をより細め、腹いせに一言いった。
。「燃やしてしまえ。」

“十五日目。昨日第二軍の一部が村を襲ったと聞いた。
よくわからないがその村には人っ子一人、鳥の一羽もいなかったそうだ。
それを聴いてほっとした。

まともな人間のやることとは思えない。
村の一つ落としたところで、この戦の行く末に関係するわけでもなく、まして火を放つなど何の益にもならないことだ。
もしあの男が、王にでも成るようなことが有れば、さしたる理由もなく人が刺され、村が焼かれるようなことに成るのでは。

いろいろなうわさが飛び交っている。
どうやら開戦の日が近づいているらしい。
敵軍はこちらの半分にも満たないとか。そんなに数の差があるのに向こうは勝てるとも思っているのだろうか。
もちろんこちらが勝つに越したことは無いのだ。もし負けたら私の命が危なくなる。そのときは一目散に逃げることだ。
ここがいったいどこかは分からないが、来た道に戻っていけば。何としても故郷にかえるのだ。

けれど、なにやら敵の王は魔法のようなものを使うらしい。前の戦もそれで負けたのだとか。ただの噂話だから怪しいものだが、魔法をかけられたらどうやって戦えばいいのだろうか。

今夜も草の上だ。リンリーにジャイルにトクル。お前たちの夢を見て眠りたい。“

次の朝、これまで第一軍を先頭に、第二軍のあとにイズマイルの本隊という順に並んで行軍していたのが、第一軍と第二軍が平行に並び、その後ろの中間に本隊が続くというように陣形が変わった。

第一軍と第二軍は同時に野営地を出発した。久々に陰気な調子の太鼓が鳴らされた。陰気とは思いながらも次第に歩調はその調子に合ってくる。

その太鼓の音に操られるように、兵士たちが少し離れた前の丘を登りきると、その眼下に広がる平原の先のほうに既に陣形を整えた敵軍が見えた。

その陣には色とりどりの旗が揺らめき、日に照らされて光る甲冑が、人の動きにあわせてきらきらと輝いていた。敵陣は大きく二つに分かれ、ペルジアにはわからないが、左翼をハイアルト卿、右翼をザルウィー伯が受け持った。

総数はおよそ四万。クラコワ-ロンダルトでは前の戦と同様、総力を動員した布陣であった。

キノツラは第二軍の中ほどにあって、敵軍の様子をわずかながらも始めて目にした。

数では自軍が敵を遥かに上回っている。けれども四万もの軍隊を目にするのは初めてだったし、このような平原での戦闘も初めてだった。

いままでろくに考えたことは無かったが、一旦戦いが始まったら何を頼りに動けばよいのか分からなかった。

ペルジアは反乱を警戒し、同族同郷のものを分散する部隊編成をした。出身部族、出身地の年長者が彼ら同族を指揮する、ということは出来なくなっていた。

力づくで制圧したとはいえ、反乱のうわさは絶えなかったし、同族を固めることへの懸念も何度と無くこの遠征の前に主張されたことである。

キノツラも、同郷のものたちが今どうしているか良くは分からなかった。彼に万一のことがあったときのために、ジュチにこの記録を持ち帰るように頼んだのには、こうした背景が合った。

彼の持つ武器は、誰が打ったとも知れない鍔の浮いた長剣が一本と、何の飾りも無い盾がひとつきりである。弓など引いたことも無ければ槍を担いだことも無い。

そうしたキノツラの不安はもっともだったが、両軍の間隔はまだ広く、戦端を開くにはどちらかがかなりの距離を前進し、間合いを詰めねばならなかった。

その日は日没近くまで、お互いの様子を遠望することが続いた後、それぞれの野営地へ引き上げて終わった。

その日のキノツラの記録には、ただひとつ、**「生きて帰りたい。」**と、しかも力のこもらない字だけが記されていた。

翌日も、同じように両軍が平原で対峙した。
そして、夕刻に双方が引き上げたのも同じだった。

その夜、本営では、イズマイルと二人の王子、そしてそれを取り巻く重臣たちの軍議が開かれていた。

「イフラダル。どう思う。」
「兵数は多めに見ても三分の一。一気に押せば勝利は間違いないでしょう。」
イフラダルの臣下たちもそれに合わせて大きくうなずいた。

「ハイダイダル。お前の意見は。」
「朝から始めて、昼までもかかりますまい。」
彼の家臣たちも、自信ありげに大きくうなずいた。

「敵の罠ということは無いか。」
数では圧倒的に勝りながらも、イズマイルが会戦を躊躇したのはその懸念からであった。

イフラダルは、
「日暮れてから斥候に調べさせましたが、特に仕掛けもなく、多少草深い平原が広がっているばかり。
この地形では伏兵を潜ませる森もなく、例え背後を突かれたとしても、この兵力の差であれば、十分に反撃は可能かと。」と応えた。

ハイダイダルはそれを聞き、やられたと思った。周到さではこの兄の方が上のようだ。
それでも、イズマイルには納得がいきかねるようだった。
長いすに体を横たえたまま、
「誰か、何か思いつかないか。三倍の兵を相手に戦うのだぞ。お前たちならどう戦う。どうすれば勝てる。」

「敵わぬまでも一戦交えようというのでは。破れかぶれで。」
しかしそれには、
「あの男がそんなことをするとわけがない。」
と一言で否定した。

「やはり、いまだ影すら見せぬ兵でも、遠くに隠しているのか。」

「無いではない。が、これほどの兵数の差があって、その様な兵を置くことに何の意味があるのか。応援が来るまでに、陣は壊乱するぞ。」

「分かりませんが、もしそうであるならわが第一軍だけで敵を攻撃し、敵の出方を待って第二軍を投入するようにすれば。」

とイフラダルが進言した。

しかしハイダイダルは手柄を兄に独り占めされることをよしとせず、

「いや、戦力の小出しは愚策。ここは第二軍も一気に攻め立てることが肝要。」

と主張して譲らなかった。

イズマイルは、敵軍の意図を推し量るための軍議が、二人の息子の、まだ手にしたことも無い手柄の争いになってしまったことに失望した。

「もうよい。明日だ。第一軍、第二軍とも攻撃を開始する。

よいか、先の戦の恥をすすぐのは明日だ。両名とも昼までといった今の言葉を、努々忘れるでないぞ。」

イズマイルの疑いが晴れた訳ではなかったが、若い二人の王子がはやるように、イズマイルもこれ以上決着を先送り出来ないほどに、いらいらが募り始めていたのだ。

そして、明日の開戦を決めたことで、この二年にわたって彼の自尊心を傷つけ続けた逃走の決着が、ようやくつくかと思うと上機嫌で寝床に着いたのではあった。

それから月が少し西へと傾いた頃、アレスミリアンの下に知らせが届いた。

「ペルジアは、明日に総攻撃を決めたようです。」

「そうか、案外早かったな。ハイアルト様、ザルウィー伯への知らせは。」

「すでに。」

「後は、手はず通りに動いて頂くしかないな。」

「うまくいけばいいのですが。」

「第一の矢が失敗しても、第二の矢がある。第二の矢が失敗しても、第三の矢を放つ。もっとも第三の矢の成果は、我々には知りようがないがな。だが、イズマイルは必ず討つ。討たねば民に平穩は訪れない。」

「考え始めるととても眠れそうにありません。」

「だからロンダルトに残れと言ったのに。」

と、アレスミリアンは苦笑しながら冷やかした。

「あなた様が戦場に行かれるのに、残るわけには行きません。そんなことをしたらセルディックに嘲笑されます。」

「やれやれ、お前も大変な子分を持ったものだ。」

アレスミリアンは手でもてあそんでいた枯れ枝を火に放り込んだ。薪が崩れ火の粉が舞い上がった。

「明日の早朝には、我々も距離を詰めよう。いざという時ここからでは遠すぎる。」

「本当に行かれるのですね。」

「行くさ。アズールの血とでもいうのかな、それがささやくんだよ。行ってお前のなすべき事をせよ、とね。」

イズマイルの本営とは、人の足であれば半日は離れた森の中に、およそ千五百の人、と同じ数の馬が潜んでいた。ペルジアの斥候はよく敵影を追い求め、クラコワーロンダルトの本隊を突き止めたが、この深い森の中までは探ることが出来なかった。

森は、一旦迷えば方向を失い出口を見失う。枯れ枝や下草は、接近するものを容易に知らしめるような音を出す。我が祖国、我が大地、守る側だからこそ取り得る地の利だった。

「明日は早いし、厳しいぞ。無理にでも眠っておけ。」

そうってアレスミアンは毛布にくるまった。

ワーズワードは、よくこんなところで眠れるなといつもながらに思った後、
「はぁ・・・」

と長いため息をついて横たわった。

その夜の森は、交代で立つ歩哨達の足音以外は、フクロウの声さえ遠慮がちに響くほど、張りつめた冷気の中にあった。

天幕がひらかれ、赤い、日に輝く絹のマントと、白く巻き上げた帽子を被ったイズマイルが姿を現し、黒馬にまたがった。

ペルジア人軍団は、それとは対照的な白い服と赤い帽子に統一され、遠くから見るそれは一つ目を持つ生き物のようにも見えた。

イズマイルの登場からしばらく遅れ、進軍の太鼓が打ち鳴らされた。イフラダルの第一軍とハイダイダルの第二軍は、並んで兵を進めた。

ここ数日がそうであったように両軍は目の前の丘を越え、なだらかな斜面を下り始めた。その先には、クラコワーロンダルトの軍団が、左右に分かれて布陣を終えていた。色とりどりの旗が風になびき、槍の穂先がきらきらと輝いて見えた。

ペルジア軍は、昨日までの停止位置では止まらず、さらに前進を続けた。キノツラはついに来るべからざる時が来たことを知り、胸の鼓動は耳に聞こえそうなほど早く、激しくなった。

足と腕にしびれるような冷たさを感じた。歩きながら膝が震だすのが分かった。敵と遭遇する恐ろしさに、早々に剣を抜き、食いしばった歯をむき出して恐怖と戦った。

「よう、兄弟！」
聞き慣れた声にそちらを向くと、いつからかジュチが並んでいた。

「俺の側からはなれるんじゃないぜ、いいな。絶対俺から離れるな。おれは無学だが、生き抜く知恵はお前さんより一枚上手だ。俺の言うとおりにするんだぜ。」

ジュチもいつもより緊張しているようだった。ジュチですらそうなのか。キノツラは引きつった顔のまま、泣き出しそうになるのをこらえて無言で頷いた。

ペルジア軍の先鋒と、クラコワーロンダルト軍の間はさらにせばまり、今や十四万の大軍が、この地上まれに見る大軍が、クラコワーロンダルトに襲いかかろうとしていた。

太鼓の音はいつそう早く強くなってきた。イフラダルとハイダイダルは、重臣達と共にまだ動かず丘の上にあったが、象がアリの群れを踏みつぶすような兵力の差に勝ちを確信した。

全軍の動きを見、前線との距離がかなり開き始めたのと、ペルジア本隊が前に押し出したのを見て、彼らは馬を一気に中盤へと乗り込ませた。

時を同じくして「走れ！」という叫びが聞こえた。

それをきっかけに、全軍の彼方此方で「走れ！」という声が上がった。

気が付くとキノツラの側でジュチも「走れ！」と叫んでいた。

「走れ！振り向くな！一目散に走り抜け！」

全軍は次第に速度を上げ、その叫び通り進軍の速度を早めた。

十万を越える兵士が走り始めた。津波が浜に押し寄せるように、ペルジアの前線はクラコワー
ロンダルトの防衛戦に襲来した。

キノツラはジュチに遅れまいと駆け続けた。その間もジュチは「走れ！」と号令をかけつづけた。

走っても走っても軍団は止まらなかった。

キノツラはいよいよ息が苦しくなってきた。足も重くなり思うように動かない。しかし、遅れると一人はぐれて敵に襲われるかも知れない。

一体どこまで走るのだ、敵はどこだ……。苦しい、もうだめだ、こんなに苦しいならもう敵に囲まれた方がましだ……。

キノツラは徐々に足をとめ、膝からくずれおち、手をついた。地面には踏みつけられ、土にまみれてくちゃくちゃになった色とりどりの旗や、鎧兜が散乱していた。敵は逃げたのか？それとも前衛が蹴散らしたのか。なんにしろ、今私はまだ生きている。これで戦いが終わったのだとしたらあっけない。

「ようし、もういいだろう。」
息荒く、あえぐようなジュチの声が聞こえた。

キノツラはジュチに何が起こったのかを聞きたかったが、息が切れて声が出せなかった。両肩を大きく上下させて、あえいでいるキノツラに向かってジュチが言った。

「終わったよ、兄弟。」

キノツラは、日の影になったジュチの顔を仰ぎ見た。ジュチは何が終わったと言ったのだろうか。戦争が終わったって事だろうか。故郷に帰れるって事だろうか

「俺たちの勝ちだ。俺たちの仕事は終わった。」
ジュチは、もう一度言った。

ハイダイダルは突如暴走を始めた自軍の中で絶叫していた。

「走るな！止まれ、止まれ！だれか止めろ！」

一体何が起こったのだ。勝ちは見えているのだから、普通に進軍すればよいのだ。闇雲に突進しても疲労するだけだぞ。こんな統制のとれない軍団は、・・・狂った象とおなじだ。

「止まれ！だれか、奴らを止めるんだ！」

「来たな。」

「ではそろそろ。」

「いいだろう。」

ペルジア軍が猛然と迫ってくるのを見て、ハイアルトは自軍に後退を命じた、クラコワーロンダルトの軍団は“手はず通り”後退を始めた。

途中で、邪魔になる旗や鎧兜はその場に捨てられた。身軽になったクラコワーロンダルトの軍団は大きく左右に分かれ、小さな丘を目隠しにして、突進するペルジア軍団を迂回して反転した。

狂った象、となったペルジア軍は、「走れ！」の命令のままに、分離したクラコワーロンダルトの間を通過し、なおもしばらくは後ろから押し出されるように無人の平原をかけつづけ、息を切らして止まった。

「あせるなよ。足並みを乱すな。隊列を乱すな。」

ハイアルトは馬上から声をかけつづけた。

「ニールリング！」

「大丈夫です！火縄の燃え加減は予定通りです。この速度でかまいません。」

前方から騎兵が一騎駆け戻ってきた。

「イズマイルは丘上に滞陣。周りをペルジア本隊が固めています。」

「騎兵を前に出すぞ！歩兵は速度をゆるめろ。」

クラコワ軍団の側面を併走していた騎兵隊が、最前列に集結を始めた。まもなくペルジア本隊が眼にはいるところだった。

「ロンダルト軍は！」

「左方向に砂塵！」

「よし！合図をあげろ！ 火矢と共に騎兵隊突入！」

「敵兵の中に、避難民の中から協力者を選んで潜り込ませます。」

「すぐに悟られたりしないか、かれらの命が危ない。」

ハイアルトは懸念した。

「確かに危険ですが、どのみち我々全員の命はもう稗に乗せられたようなものです。

すでにアルシャーファでは、部族の反乱はまたすぐに起きる。集団化して武器を持ったら何をしでかすか分からないという、噂を流してあります。

こういう気持は伝染しますからね。寝返りを避けるために、ペルジア軍は部隊編成に当たって同郷同族のものを一緒にすることは避けるでしょう。そこに避難民が紛れ込んでも、誰がどうだかは分からないはずです。ほんの少し前までは、あちらの人間だったのですから。」

「わかった、それで。」

「我々は四万と五千辺りが精一杯。ペルジアは噂では十四、五万とか・・・これでは圧倒的に不利なので、敵を一万五千に減らします。」

「一万五千とはなあ、およそ本隊がその程度か。そんなことが出来るのか。」

「軍団を動かすのは？」

「将だな。なんだ、私に諮問をするのか。」

アレスミアンは、にやにやしながら次の質問を投げた。

「実際の戦闘で指揮をするのは？」

「部隊長だな。将に出来るのは、軍団単位の投入時期を見極めることぐらいだろう。目まぐるしく変化する戦局に、戦場で対応するのは部隊長だ。」

「ペルジア軍には部隊長がいません。同郷・同族集団が解体されてしまうので、その役割をするものがいないのです。その代わりに、我々が部隊長を送ってやります。」

「それが先ほどから言っている、避難民部隊か。」

「およそ百人に一人ぐらいの数になるでしょう。開戦の時、進軍を始めてしばらく経つと、彼らは一斉に“走れ”と叫びます。

軍団の彼方此方で“走れ”という声上がるのです。彼らは訓練された兵士ではありませんから、命令されれば是非を考える余裕もなく、全軍走り出すでしょう。」

ハイアルトはしばらく想像してみた。

「それで。」

「我々は逃げます。逃げて左右に分かれ、大回りに反転します。ペルジア軍はその中間を走り抜けていきます。

我が軍がどういう運動をしているか、実際に分かるのは最前線の兵士だけです。

走り出せば足の速さには差がありますから、自然と軍団は縦に長くなるでしょう。

最前列の兵士には、我々が方向を変えたのを悟られるかも知れませんが、それより後ろの兵士は、ただ前のものの背中に向かって走ることしかしません。

前が立ち止まろうとしても、後ろから押される圧力で、さらに前に行くしかないので。それを確実にするために、この地を戦場にします。」

アレスミリアンは、絵地図の一点を指さした。

「一見すると平坦な場所ですが、小さな丘陵が入り組んで左右のの見通しがあまり良くないところです。我々は、彼等が森を抜けた時点で、彼らに後ろ姿を見せながら、ゆっくりと移動し、足跡を彼等に後を追わせませす。

そして、この地に誘い込みます。

ペルジア軍は恐らくこの丘を本陣にするでしょう。その前で向き合った後、我々は彼らを平原に残し、反転して本隊を左右から挟み撃ちにします。

この時点で我々の四万五千に対して敵は一万五千となります。」

「三対一か。勝てそうだな。そう、うまくいけばだが……。敵軍を引き離すところまではうまくいきそうな気がする。だがそいつらが反転してきたら、こちらが挟み撃ちになるぞ。」

「第二王子は。」

といて、アレスミリアンはため息をついた。

「第二王子は王位を狙っていますが、それには二つの障害があります。

彼には腹違いの兄がいます。これが一つ目。そして彼は父親の覚えがあまり良くありません。もし、兄がいなくなっても、ひょっとすると自分をとばして、下の王子を選ぶのではないかと疑っています。これが二つ目。

もし彼が冷静なら、父が討たれるのを見過ごすばかりか、この機に兄を葬むることを考えたとしても不思議ではありません。」

「なんとも、醜い親子関係だな。」

「それも、その時まで彼らが生きていればのことです。兵士はみな彼らに血縁の誰かを殺されていますからね。ペルジア本隊の恐れが無くなれば・・・。」

「我々が手を下すまでもなく、誰かがやるだろうということだな。」

「そのためにも、もう一つ手をうちました。」

一体いくつ、罫を仕掛けたんだこの男は。

「一応、聞いておこうか。」

「彼らは開戦の前に、兵を慣れさせるための戦闘をするでしょう。」

「ふむ。よくあることだな。」

「彼らの進路に近い村を一つ空にしました。ペルジアには、約千名の守備軍が立てこもっているという、偽の情報を流してあります。」

「食いついてくるだろうな。」

「けれども、現場に行ってみれば誰もいない、空き家ばかりです・・・あのハイダイダルという第二王子は放火の癖があるらしく、機嫌を損ねると火をつけるのです。」

「無人とはいえ、村が燃えてしまうではないか。」

「あの男の配下の者は、多少なりとも故郷に火を放たれた経験を持っています。その憎しみを思い出すでしょう。」

「アレスミリアン・・・」

「はい。」

「私は頭が痛くなってきた。」

「はあ？」

「イズマイルが、戦わないで逃げようとしたらどうする。」

「イズマイルと、ペルジアの間には遊撃隊を配置します。イズマイルがもし囲みを破って逃げようとしたら、その遊撃隊が迎え撃ちます。これが第二の矢です。」

「それでもその遊撃隊の手をすり抜けたら！」

「きっとイズマイルはほっとするでしょう。その遊撃隊を指揮するのは私ですから。

私を出し抜けば、我々の手札は総て切られた思うはずです。そのとき、あの男は油断します。そこをねらって、第三の矢で狙い打ちます。その男は王国一の凄腕ですから、間違ってもはずすことはないでしょう。

なにせあの夜、馬で走る私を射抜いた男ですからね。」

「なんだと・・・、あれほど探して見つからなかった男を見つけたのか、一体どこにいて、何をしていた。」

「見つけたのではありません。見つけさせられたのです。それに・・・、もう良いではありませんか。私の母ならきっとそういいます。」

「ますます、気分が悪くなってきた。お前がここまで悪い奴とは思わなかったぞ。もしイズマイルに会うことがあったら、言ってやりたいぐらいだ。相手が悪すぎるとな。」

「貧乏が長くなると、頭を働かさねば食べていけなくなるんですよ。」

「何を言ってる。王国一の宮殿の主が。」

「あんな、何代か前のバカ王が建てた無駄な宮殿。ただ大きいばかりで何の役にも立ちません。あんなところに私一人で住んでいるのですよ。」

「少なくとも、あのウェルモンテは宮殿の使い方を知っていたという訳か。」

アレスミリアンは苦笑するしかなかった。

「それと、以前から、お前に聞きたいと思っていることがある。心残りにならぬよう聞いておきたい。」

「ご冗談を、心残りなどとは。」

「まあ、良いではないか。たとえの話だ。

あの時お前は、何故イズマイルを殺さなかったのだ。もしやつの息の根を止めていれば、二度目の襲来は無かったかもしれない。お前は何故イズマイルを生かしたのだ。」

「あの時の、ロンダルトを攻撃したペルジア軍を、あくまでもイズマイルの軍で有らせるためでした。」

「イズマイルの軍か？」

「ペルジアでは、全ての人、物、土地は全てイズマイルのものです。彼の赦し無くては、何も手にすることが出来ません。

ロンダルト攻防の激しさにもかかわらず、戦闘が終わったあとに略奪や暴行が無かったのは、それが徹底されていたからです。でもイズマイルがいなくなれば、次の王が決まるまではそれは誰のものでもありません。」

「それは分かる。でもロンダルトにいたペルジア人に、イズマイルの生死など分からなかったろう。殺したあとで、まだ彼は生きてるといっても、それを確かめ手段は無い。」

「私は母によく言われました。嘘をついてはいけないと。嘘つきはいけません、と。」

「まさか、それで、嘘をつかないために殺さなかったというのではないだろうな。」

アレスミリアンは暫く答えず、その間を楽しんだ。

「子供の頃、スークリアの家は貧乏で、・・・ハイアルト様も良くご存知と思いますが、私はよくお腹をすかせていました。

そのあたりの農夫の家のほうが、余程裕福だったろうと思います。見るに見かねて、早い夕食をご馳走してくれ、私は大喜びで館に戻りました。

でも館には、母の夕食が待っていました。少し我慢すればよかったのものを、私は我慢し切れなかったんです。判っていたのに。」

「母上、今日は夕食はいいです・・・。」

十歳のアレスミリアンは、戸口に立って、母の姿からなんとなく目をそらしながら言った。

「どうしたの。いつもは帰るなり、手も洗わないで食べ始めようとするのに。」

「ええと、少しお腹が、・・・痛くて。」

「まあ、それは大変。お医者様に診ていただかなくては。」

リードヴェルトは、アレスミリアンの額に手をあてたが、少し冷たく感じるぐらいで熱は無いようだった。

「いやそれほど痛くも無いのです。少し横になっていれば、良くなると思います。」

「いけません、せめてお薬を飲みなさい。少し苦いけれど、我慢できるでしょう。」

その薬草を煎じた薬は、苦いというよりはまず、こんな匂いのものを体の中に入れて大丈夫か、というような赤みがかかった茶色の飲み物だった。

「いえ、母上、もう痛みませんから。大丈夫です。」

「そうなの？では夕食は食べるのですね。」

「いえ、それが・・・。」

リードヴェルトはアレスミリアンの方をじっと見つめた。

「そろそろ、本当のことを言いなさい。あなたのおでこにさわったら、嘘つきって聞こえてきましたよ。もう一度、今度はおでこで話しましょうか。」

母に嘘をつき通すことなど不可能だということは、初めからわかっていたのだ。

でも、なけなしの、せっかくの夕食を他所で食べてきたから食べられない、と言うことがどうしても出来なかった。そして、ひもじかったから我慢が出来なかったと、母にはどうしても言いたくなかった。

「ごめんなさい。」

アレスミリアンは涙目になっていた。

「一体どうしたというの。」

「コザークの小母さんが、夕食を食べていきなさいって。子供がいないからいつも寂しくってしょうがない。たんと食べてお帰りって。」

母上の夕食があるのは分かったけど、お腹がすいていて・・・、子供がいなくて寂しいんだから、僕と一緒に食事をするのはイイコトだって理由をつけて、・・・我慢できなかったんです。」

「そうだったの。・・・そう。コザークの料理はおいしかった？」

アレスミリアンはこっくりした。

「母さんの料理よりも？」

今度は、思いっきり左右に振った。

「まあ、おばかさんね。他所でお呼ばれしてもいいのよ。隠すことはありません。あなたがそうやって、みんなに好かれていると思うと母さんはうれしいわ。でもね、今度からはちゃんと御呼ばれするって言いに戻ってらっしゃい。その間ぐらい、我慢できるでしょ。」

アレスミリアンは鼻をすすった。母の手が、綿布を押し付けた。

「それと、嘘をついてはいけないわ。一度嘘をつくと、どんどん次の嘘を考えないといけなくなるの。そうするうちに、嘘と嘘が喧嘩して何がなんだか分からなくなってしまうのよ。」

「あの時、私は賭に出ました。クラコワの兵力では奪還できない。何か別の手を考えないといけ
ない。そこで思いついたのがペルジアとは何だ、ということです。

結局のところ、ペルジアとは、イズマイルそのものなのです。彼無くしてペルジアは国の形を
保てはしない。イズマイルが居る限り彼の家臣は勝手な振る舞いを許されない。彼が危機に陥っ
たときは、何を置いても救いに行かなければならない。イズマイルとペルジアが危機にあること
を告げれば、彼等は引かざるを得ないだろうと思ったのです。

それは忠誠心からではないかも知れません。単にそれが後々イズマイルの耳に入ったときに、
彼等がどういう処断を受けるか、という恐怖心をあおることで良かったのです。

そのためには、イズマイルが活着ていることを、瞬時も彼等に疑われてはいけない。もし嘘で
固めれば、何かの拍子に矛盾が現れて、彼等に疑念を抱かせるかも知れない。

あの、国を賭けた交渉の中で、私自身が一瞬たりともイズマイルの生存を疑ってはいけない。
それが、彼を生かした理由です。」

イズマイルは、丘の上から遙か先の平原で舞い上がる土埃をみていた。

「ここからでは、戦況がわからん。前線がかなり進んでいるところを見ると、すでに敗走を始めているのかも知れん。本営を進めるか。」

「イフラダル様、ハイダイダル様より、ご使者が参られるでしょう。陛下がお出ましにならなくともよろしいのでは。」

近従がそう引き留めたが、イズマイルの心は逸り、彼の視線は、おそらく敗走を始めたであろう敵軍の残骸を求めた。

先の敗戦以来、寝ては夢の中、醒めても事あるごとに屈辱を思いだし、用意を重ね、前回をも上回る兵数を整え、待ちに待ったのが今日のこの日であった。

あの男、アレスミリアン。

今生の別れに、聞いてみたかったな。あのとき何故わしを討たなかったのか、討っていれば今、お前は命を落とさずに済んだのだと、嘲笑ってやりたかった。今頃はあの混乱の中で、必死に剣を振り回しているだろう。さすがに今度ばかりは、一人で来たりはしなかったか。

フフ、心残りじゃないか。そう心の中でつぶやいた。しかし、

しかし、

「なんだ、あれは。」

イズマイルが眼にしたのは、左右に分かれて反転し、迂回路を戻ってきたクラコワとロンダルトの両軍だった。

「丘陵の影から！ あれは敵軍です。」

「なんだと！」

クラコワとロンダルトの先鋒から、相次いで火矢がいられた。

「弓隊前へ。いそげ！」

「騎兵がくるぞ。だめだ間に合わん。」

「だめでもともかく守りを固めよ。第一軍、第二軍が戻るまで持ちこたえるのだ。」

「騎兵だ！騎兵が！」

「矢を討て、矢を！騎兵を寄せるな。」

クラコワの騎兵五百がすれ違いざまに騎射すると、ペルジア本隊の一角が崩れた。続いてロンダルトの騎兵七百がその裏側を打ち崩した。

続いてクラコワの騎兵の第二波がペルジア軍を襲い、兵士の白い衣服を赤く染めた。その間、長駆してきた歩兵達は息をととのえ、本格的な包囲殲滅戦に向けて体勢を整えた。

ロンダルトの第二波が、最前列の弓兵を血祭りに上げると、歩兵は半円状に広がりペルジア軍を包囲した。

激戦が始まった。

数に勝るクラコワーロンダルト軍は、徐々にその包囲を小さくしながらペルジア兵を三人掛かりで一人、また一人と倒していったが、東方最強を誇る追いつめられたペルジア軍の抵抗もすさまじかった。

個別での戦闘が不利と悟ると、集団をくみ、何度も何度も包囲網の壁を突破し、血路を開くための突撃が繰り返され、クラコワーロンダルト側も無傷ではいられなかった。

遙か後方での騒ぎを聞きつけ、ハイダイダルは目の前から消滅したクラコワーロンダルト軍が、本隊を襲ったことを悟った。

「やられた……。しかしなぜ、我が軍は暴走したのだ。それがなければ敵軍が本隊を襲うことも出来なかったはず……。しかもあの様子では、そうながくは持つまいな。」

第一軍はまだ動きを見せなかった。

「イフラダルめ、何をぐずぐずしている。それともまだ気づかないのか。よし！全軍反転するぞ。

反転だ！

つたえよ。反転して、本体と挟み撃ちにするぞ！」

ハイダイダルが振り返り見た護衛の身体が、支えを失った人形のように、ゆっくりと馬から落ちた。

「おい、お前。どうした。」

眼を、その先にやったハイダイダルの、眉間を狙う鎌が光った。

「お前達なにを！」

おののくハイダイダルの肩に、一の矢が刺さった。

ハイダイダルはその矢を右手で掴み、引き抜きながらその場を抜け出そうとしたが、その馬上の的に向かって、さらに何本かの矢が突き刺さった。

「そうか……。そうだったのか……。罫は内部に仕掛けられたのだ……。」

失血で意識が薄れるなか、

「こんな……こんな所で……。こんなことのために……。」

ハイダイダルの白い顔が、馬のたてがみにうずもれた。馬は、まだ激戦の続いている丘に向かって、ぬくもりを失いつつある荷物を運んで歩いていった。

ジュチが弓から手をはなし、キノツラの肩に置いた。

「兄弟、お前のふるさとってどこだっけなあ……。」

といった。

「俺の故郷は炭と灰になっちまったんでなあ。」

その、ほおが濡れていた。

「クラコワ軍、ロンダルト軍が、本隊への攻撃を開始しました。」

「わかった。我々も、突入の準備をして待機だ。」

アレスミリアンを中心として、キリアンデルを左翼に、ルークスを右翼に配した千五百の騎兵が、ペルジア本隊と、ペルジア本国との壁として立ちはだかった。

アレスミリアンの隣には、赤い翼のある獅子が吠えるクラコワーロンダルトの旗をもつ、ワーズウォードがいる。

「名無しいるか！」

呼ばれた男が、影からふっと姿を現した。

「うわっ！」

とワーズが驚いた声を上げた。

「あんたあ、旗に笑われるぜ。」

とからかいながら、「およびで。」とアレスミリアンに顔を向けた。

「いずれ我々も突入する。が、敵も死にものぐるいだからな、こちらの賭け金も高くつくだろう。それでもこの包囲網を突破して来たときは……。」

「あなたの太さにはまいりやした。一度は命を狙った男を背にしよって、いくさ場に出るなんざ普通の肝っ玉では出来るもんじゃあねえでし、ひよっひよっひよ。」

「すまないね、こんな仕事ばかりで。」

「あしには、お似合いで。」

そういうと男はまた気配を消した。

「なっ、何者ですか、あいつは。」

ワーズウォードはおそるおそる聞いた。

「さあな、私もよくは知らないんだが、潜り込めないところは無いようだな。」

ペルジア本隊はすでに三分の二が討たれたていた。

クラコワーロンドルト軍が挟撃してから、すでに一時間ほどが過ぎていた。ペルジア兵の白い衣は赤く血に染まり、陣は丘上に向かって密集していた。

「援軍はもうもどらん！あきらめろ！」

イズマイルは叫んだ。

その顔は英雄の顔ではなく、追いつめられた手負いの獣の、憤怒の形相であった。

「包囲を突破して、もう一度ペルジアに戻るぞ！」

イズマイルは、まだ脱出に望みを持っていた。

だが、先の戦で彼が逃げおおせたのが、アレスミリアンの謀のひとつであったことを彼は知らなかった。五千の集団が、騎馬のイズマイルとその護衛を中心に一度に動き出した。

大波に逆らい、血しぶきを蹴立てて進む船のように、あるいは堤を襲う激流のように、敵兵の囲みを相打ちで碎きながら、ペルジア本隊は徐々に進み始めた。

剣が剣を喰らう。

一人刺されては一人を倒す。

その圧力に、包囲側の円陣が不自然に膨らみ始めた。

そして中心に、赤い衣と白い帽子のイズマイルの姿を見たと、アレスミリアンは思った。

アレスミリアンは剣を抜き、その手を高々と挙げた。

キリアンデルは、アレスミリアンの手が振り下ろされるのを待ちながら、
「リディアのきつい目の方が、幾分かましだな。もう少し気を配ってやれば良かった。」
と思った。

ザルウィーの下から駆けつけたイテカレスは、
「セシリーどの、生きてもう一度そなたに会えますように……。アディール、次の航海では約束
の毛皮を持っていくよ。タリアちゃん……………」
と、ぶつぶつ唱えていた。

ルークスは
「とっとと行こうぜ。前回預けた命はもらっていくからな。」
と不敵な笑みを浮かべている。

ワーズワードはそろそろ旗が重くなってきた。
「これ持ったままでどう戦うんだ。」
と旗を見上げ、続けてアレスミリアンの右手に目を移した。

しかしその右手は、いまや遅しと待ち受けるみなへの期待を裏切った。

振り下ろされることも無く、ゆらりと揺れたとみると、白い馬が飛び出す。
と同時に、アレスミリアンが雄たけびを上げ、たった一騎でイズマイルめがけて駆け出した。

「いかん！」
とキリアンデルはあわてた。
いや、あわてたのは横一線に並んでいた全軍だった。

「あの方は、馬はともかく剣はからっきしだ。死には行くようなものだぞ。」
「誰か止めろ！」
「王を死なせるな！」
「突っ込め！ 遅れをとるな！」

さまざまな叫び声が飛び交う中、網が破れそうになった包囲網に、アレスミリアンの雄たけび
に火をつけられた千五百の新手が、鯨を襲う銛のように先を争って突入した。

ワーズワードはマクシミアの俊足に追いつきながら、すんでのところ旗竿を槍のごとく投げつけ、それに驚いたマクシミアが足を緩めたところをイテカレスが手綱を捉えた。

千五百の騎士が、三人の両側を走りぬけ、獲物の内臓に喰らいつく飢えたオオカミのように殺到した。

「味方に当てるな！」

と叫びざま、ルークスが矢を放った。それを合図に、五百ばかりの敵兵が一瞬で倒された。

さらに至近距離から「はずすな！」という声を合図に、キリアンデル配下の騎兵が、槍を突き立てた。

そこに開いた穴に向かって騎兵千五百が突進し、ペルジア兵と激突した。

ペルジアの船は、回転しながらへさきからめくりあげられるように沈み始め、イズマイルの赤い衣は濁流の渦の中に巻き込まれていった。

アレスミリアンはその様子を、観客のように眺めていた。

朝から続いた激闘の幕が下りたのは、誰かが予見したように、昼を少し過ぎたころだった。

アレスミリアンは馬をおり、当代の英雄の姿を探しに行った。

辺りは息絶えたペルジア兵が、嵐の後の畑の麦のように倒れていた。

足の踏み場も無いような、白と、濁った赤のまだら模様の中を進むと、まだ死にきれぬもののうめき声が聞こえた。

これは私の負うべき罪かもしれない・・・。

アレスミリアンは、初めてペルジア兵に憐れみを覚えた。最後まで抵抗を止めなかったペルジア兵は、ことごとく屍となっていた。

お前達は、死んだら何処に行くのだ。

だれか応えないか。

誰も応えてくれないか・・・皆、殺してしまったからな。

これは私の罪だ。

丘を下りきった辺りに、いまは動かぬ姿となった、英雄の亡骸が横たわっている。

見下ろすと、その手には宝石をちりばめた、三日月のようなそりのある短剣が握られ、まだ乾ききらぬ血糊が付いていた。首筋にかき切った後が残っている。

その横顔に、クラコワ城外で言葉を交わしたときのことを思い出した。

「お互い、あのときが一番良かったのかも知れない・・・。

あの戦いは、多くのものたちの人生を狂わせた。私はあなたを倒したが、何の喜びも沸いてこないぞ。

この戦いに何か意味があったのなら、おしえてくれないか。」

と、語りかけた。

アレスミリアンは腰をかがめ、膝をついて、開いたままだった目を閉じた。

ようやく、イズマイルは、この世のよしなしことから解き放たれたように見えた。

イーリアス、終わったよ。

アレスミリアンは、戻ることの無い人の魂に、心の中で語りかけた。君のところには行きそびれてしまったけどね・・・。

まだ、こちらの世界に用があるみたいだ。

かがめた腰を上げようとしたとき、“名無し”の姿が目に入った。
アレスミリアンに向かって、矢を番えた弓を向けている。

「何をする！」
と叫びざま、若い兵士が剣で切りかかろうとした。

「切るなっ！」
とアレスミリアンがそれを制止した。

そのやりとりなど何もないかのように、“名無し”は指の先だけをそっと動かして矢を放った。矢はアレスミリアンのほほを掠めて、後方に飛び去った。

その後ろで、ひざ立ちのペルジア兵が後ろ向きに倒れた。

空に向かって、力ない矢があがった。

アレスミリアンは、眉一つ動かさず“名無しに”歩み寄った。

「助けてもらったな。」
「なぜ、お逃げなさらなかった。」
「お前の目は私を見ていなかった。であれば、獲物は私ではない。」
「感服、いたしやした。」
と“名無し”は珍しく頭を下げた。

口元がほころんでいる。彼なりに、何か充足するようなことがあったのだろう。
「それでは、あしはこれにて。」
と、“名無し”はその場から去ろうとした。

「褒美はいらないのか、いまなら思いの通りだぞ。パリッシュ。」
おや、というような顔、そして、
「お調べなさいましたね。」ふふっ・・・。
「シルヴェスタは、事情通だ。」
という声に、パリッシュと呼ばれた男は頷いた。
存じておりますとも、随分前から。

「褒美はもういただきました。あなた様はこの国を救ってくださいました。」
と応えたその時だけは、かつて貴族に仕えた男の顔、にもどったように見えた。

二人は、暫时无言で見ている。

“名無し”の顔は兜に隠れ、相変わらず良くは見えない。

「では、あしはまた海の上に戻りますんで。ご用があれば、シルヴェスタの旦那にでもゆってください。」

闇に生きた男は、そうたやすく日の当たる表の暮らしが出来ないことを知っていた。それに、東へ西へと、毎日が旅の空暮らしが、気に入ってもいたのだ。過去を忘れるの丁度いいと。

“名無し”に切りかかろうとした兵士は、その神がかった技に、まだ呆然としていた。

「あああ、やっちゃった。」

「これはひどいな。」

「俺でも、ここまでの事はしたことがないな。」

「あきれて、ものが言えん。」

「どうするんだ、ワーズウォード。」

ルークスと、キリアンデルと、イテカレスに囲まれて、ワーズウォードは途方に暮れていた。クラコワーロンダルトの旗は、腹を立てたマクシミアに踏まれてどろどろになっていた。

「軍旗は、軍の象徴だぞ。それをこんなにするとは・・・。」

「だって、仕方がなかったんですよ。あーでもしないとあの馬止まらなくて。」

「それにしても旗を投げるとは。」

「あーどうしよう、アレス様にばれたら・・・。」

「私がどうかしたか。」

後ろから声がした。

「えっ、いつからそちらに。」

「なんだ、どうした、うん？旗がどうかしたのか。」

ワーズウォードは、一瞬、旗を後ろに隠すのを見られた。

仕方なしに、

「先ほどの一件で、破れてしまいました。」と白状した。

「そうか、代えが有るから、イテカに言って取り替えておけ。」

アレスミリアンは、早くもその話題からは興味を無くした。

「代えって、いったい。」

と、ワーズウォードはあっけにとられた。

「なに、これからペルジアに乗り込むときに、賑やかしにいいだろうと百枚ほど作っておいたんだ。」と、イテカレスが事も無げに答えた。

「じゃあこれって！」

と汚れた旗を掲げてワーズウォードは憤慨した。

「まあまあ、記念に持って帰るんだな。」

とイテカレス。

「そうそう、アレス様の命を、まだわれわれの世界につなぎとめたんだからな。自慢していいぞ。」

と、キリアンデルが言いながら、ワーズウォードの頭を軽くたたいた。

「まったく！子ども扱いして！」

と憤りながらも、ワーズウォードは満更でもない様子だった。

アレス様の命をこちらにつなぎとめる・・・みんな、そんなことを思って戦っていたのか。イーリアス様を亡くされて以来、いや、無くされたのはそれだけではない。

オルクサン様、同じ王家の血を引くものとして、アレス様の苦しみを分かち合えるのは、あの方だけかもしれなかった。

両親と、幼い弟妹を残して行ってしまった若いカストラル。戦場に倒れた名もない兵士たち。一人倒れるたびに、あの人には悲しみを背負い込む。これまでに倒れた何百、何千の悲しみをあの方は一人でまとっている。

戦場の平原に戻って行ったアレスミリアンの背中に向かって、ワーズウォードは心の中で叫んでいた。

誰か、あの人を救ってくれ、と。

「あっちのほうも、どうやら終わったようだな。」
と、ジュチがキノツラに話しかけた。

随分前から、二人は小春を思わせる暖かな日差しの中で座り込んでいた。風に乗って戦いの音が聞こえてきたが、もう取って返せと命令するものは無く、そうとわかるとひどい疲労感で腰を上げるのも億劫だった。

見渡せば、寝転んでいるものや、ぶらぶらと歩きながら同朋を探すものなど、つい先ほどまでの、戦さのざらざらした空気は、風に飛ばされてどこかに消えてしまっていた。白い蝶々が、二人の前をふらふらと横切って行った。

「これから、どうなるんだろう。」
とキノツラが不安をもらした。

「どうって、故郷に帰るのさ。」
「帰れるのか！本当に！」

「そういう計画だ。最初からな。もっとも俺の故郷は灰になっちまったし、こっちに住処もあるからな、すぐには帰れねえが、あんたはこのまま帰ればいい。」
キノツラは、いまだに狐につままれたような顔をしていた。

「いま俺たちが帰っても、何年後かにはまた攻め込んでくるようなことになれば、同じことの繰り返しにしか成らない。」
状況を知らないキノツラは、悲観的な考えを語った。

「そうはならないようにだな、今度はこっちの王様が、あっちに乗り込むんだ。」
「また戦争になるのか。」

「いや、いまペルジアには、戦争を起こせるほども男たちはいない。というよりは、イズマイルと二人の王子が居なくなって、放置すればペルジアは、各部族の決起で大混乱に陥るだろうと思っている。それを止めるためにいくんだと。」
キノツラは、分からないというように頭を振った。

「前といい、今度のことといい。ここの王様はよっぽどの変わり者のようだ。」
手近な草を抜き、それをぶらぶらさせながら、ジュチは昔を振り返った。

「俺が、ハイダイダルの野郎に村を焼かれたとき、此の国はペルジアから此の国までの逃げ道を

切り開き、俺たちのために村や家を用意してくれた。

もし、そのとき受け入れてくれなかったら、俺は今頃、荒れ野をさ迷っていたろう。ペルジアに追われ、殺され掛けたところを必死で逃れてきたのもいる。俺だけじゃない、俺みたいなのが何千、何万と暮らしているんだ。」

「そうなのか・・・、知らなかった。」

つい先程まで、戦いの声や馬の嘶きのしていた丘の方向を、細い目をして眺めながら、わからない事だらけだと思った。

何も知らないまま兵士に仕立て上げられ、何も知らない間に、何処かで戦いが起こり、誰かが勝って全てが終わった。

「まああんた達は、先に帰るんだな。あの“記録”はちゃんと持っているかい。」

「うん、野営地に置いてある。・・・ジュチ。」

「あん？」

「あなたがいてくれて心強かったよ。いつか向こうへ戻ったら、訪ねてきてくれ。」

「ああ、そうさせてもらうさ。」

そうこう話しているうちにも、青い空を白い雲が様々に形を変えながら通り過ぎた。雲の影、日の光が交互に照らす中を、騎兵が緩い調子で“元”兵士達の間をぬって近づいてきた。

「私はアタリスのザヒル。ペルジアの軍にあったもの達よ。お前達はもう兵士ではない。いまからは野営地に戻り、出発の支度をするのだ。家へ帰れるぞ。」
という大きな声が草原に広がると、彼方此方で歓声があがった。

「いったいどうなったのだ。」

「アタリスのあんたが、どうしてそっち側にいるんだ。」

“元”兵士たちは口々に疑問を投げかけたが、ザヒルは右手でそれを制し、
「イズマイルは命を絶った。ペルジア本隊はそれに殉じた。」
と、騎士らしい応え方をした。

彼らはもう一度歓声を上げた。

アタリスのザヒルがどうしてこちら側に居るかは、もう応えなくても良いだろうと思った。長い話になるし、はっきりした理由もいまだに無かったからだ。

ただ、アレスミリアンという男に釣られたことは確かだったが、それを言っても彼らには何のことか理解できないだろう。

元兵士達は、重いながらも希望の羽が芽を出し始めた足を動かし、勝っ手勝手な早さで、しかし同じ方向にむかって歩き出した。

その途中で、一万五千のペルジア兵が壮烈な最期を遂げた丘の側を通った。

誰かが、手に持った剣を丘の方向に投げて捨てた。後から来るもの達も皆それにならい、剣や弓を投げ捨てた。

生き残ったものは武器を投げ捨て、死んだものは身体を投げ出した。
後には、動かぬ二つの小山が残された。

アレスミリアンは彼らが戻ってくる様子を眺めていた。
顔かたち、服装、時には言葉さえまちまちな、十万を越える人々を見ていると、これから行こうとしている国への期待が膨らんできた。

彼らはその人が誰かを知らない。

其処に立っていることすら気づかないものも居る。自分のことを誰も知らないところ。それは、彼が少年時代から身をおいて来た世界そのものであった。

その様子を、少しはなれたところから二人の司令官、ハイアルト卿とザルウィー伯が見ていた。

「まさに、奇跡だな。」

「そうですね。二年前にお会いしてから、驚かされることばかりです。今もこの決着が信じられぬ想いです。」

「ペルジアも、よもや負けるとは思って居なかったから攻め込んできたのだろうが、この結果をみれば相当に無謀な戦いを仕掛けてきたものよ。」

これが、私の最後の戦いになるのであろうか。まだ、その感傷は浮かんではこぬがな、と、ハイアルトは考えていた。

「先の戦ではクラコワでは敗退したが、首都ロンダルトの戦いは勝っていますからな。」
ザルウィーは、自らいやなことを思い出して、顔をしかめた。

「それがあだとなったのでしょうか。人は悪いことより都合のいい思いに走りがちです。
城攻めで無ければ、数で押せば勝てるのだという思い込みを、捨て去ることが出来なかったのでしょうか。恥をすすぐことに躍起になるあまり、冷静にことを判ずることを怠ったのでしょうか。」
ハイアルトは、ザルウィーの言うことが、おそらくその通りだったのだろうと思った。

「アレスミリアンは三年後といていた。」
「それが正しければ、まだ二年しかたっておりませんから。十分に国内が固まらぬ間に動かしてしまっただけでしょう。」
「もし、ペルジアからの難民を受け入れなければ、こう事は運ばなかったかもしれないが。それを決断した時にはもう、この謀があつた男には浮かんでいたのだろうな。」

ザルウィーは、ため息をついた。あの戦い以来、ため息をつく癖が付いたようだ。

「こんなことを言うのは不謹慎かもしれませんが、オルクサン殿の性格は理解しやすかった。だから、われわれのような諸侯にも、御しやすい王になられたらと思うのです。
だが、あの方は底が知れない。少し恐ろしくなることがあります。」

「なに、根はいいやつだ。何も怖がることは無い、私利私欲に走らなければ、な。」
ハイアルトは皮肉っぽく、にやりと口の端を曲げた。

「何をお話ですか。」

アレスミリアンが二人に近づいて声をかけた。

「悪口だ。ザルウィー殿が、そなたの悪事を看破された。」

「それは不本意な。それでは不本意ついでにザルウィー殿、ロンダルトの留守をよろしく願います。」

「また、でございますか。」

ザルウィーは思ひだし、顔をしかめた。

「しばらく留守にします。およそ三月か、半年ぐらい。」

「あまり留守にすると、王位をのっとられるぞ。」

「何をおっしゃるハイアルト殿！ 私は、けしてそのようなことは。」

根がまじめなたちで、冗談はあまり通じない。

「いやいや、もしそうなら早めに使いをください。そのときは、わたしはペルジアに居座ることにします。シルヴェスタは、なかなか楽しい国だと言っておりましたので。」

「ご冗談が過ぎます。お早いお帰りを。」

やはりこの方には敵いそうも無い、とザルウィーは思った。

しばらくは、ロンダルトの諸侯の力は弱められるだろう。ウェルモンテの五十年とは違って。

三ヶ月では短すぎるが、半年あれば何事かたくらむことも出来る。そういう輩も出てくるだろう。ウェルモンテの時代に、いい思いをしたものたちは、まだ息を潜めて辺りをうかがっている筈だ。

おそらく、わたしはそのごみ掃除だな。

「いえ、あとはお引受いたしました。ご存分に楽しんで参られますように。」

「はは、それはありがたい。ほどほどで結構です。ほどほどでね。」

といて、いたずらっぽく片目を閉じた。

王の愛嬌のある仕草が、貴族意識の強いザルウィーの自尊心をくすぐった。

その間にも、三人を中心とした大きな人の輪が出来ていた。激戦を戦い抜いた兵士たち。立てるものは雄々しく胸をはり、傷ついたものはその肩に寄りかかり、動けぬものは顔だけをむけ、動かぬものはその魂の旅立ちをしばし遅らせて。

イテカレスがワーズワードを肘でつついた。

「ほら、はやくやれよ。」

「え、いやわたしはとてもそのような、“王様万歳”なんていえませんよ、は、恥ずかしくて・・・」

「しょうがないなお前は、よくそれでお側に仕えていられるものだ。しかたがない。」

イテカレスは、一度収めた剣を抜き目の高さに掲げた。

他の兵士たちもそれに倣った。

「此度の戦勝に際し、おそれながらイテカレス・サクスベリより国王陛下に寿ぎを申し上げる。国王陛下に栄光あれ！」

「国王陛下に栄光あれ！」

兵士たちは、それに唱和した。

イテカレスはアレスミアンと目を合わせ、にやりと笑った。

その隣でワーズワードは渋い顔をしていた。

—また、だまされた。

歓声がこだます間、一人、ザルウィーは冷めた目をしていて。

この絆は大きいだろう。

ただ、都にいて、兵士だけを戦わせたのではないのだ。同じ戦場に行き、同じ水を飲み、剣を抜いて戦って、味方の三倍の敵に勝ったのだ。王と兵士という身分を越えた、親近感で結ばれているはず。

王にとって、この力の背景は大きい。もし、この軍がわが領地に向けられたら、抵抗しきれまい。我々は、この力を誤らぬさぬように気をつけなければならない。

それぐらいだ、当分は。我々諸侯に出来ることは。

と、ザルウィー伯はあらためて思った。

そして、兵士の輪の中で、同じようにはじけているキリアンデル・レム・プラントに、軽い羨望

を覚えた。

最終更新日：[2012-04-01 00:04:25](#)

[コメントする](#)

[この](#)

[12](#)

次の日、アレスミリアンは騎兵を中心とした兵の三分の一と、ペルジアの元兵士たちを率い、彼にとっては初めてのペルジアを目指した。

幸いなことに、ペルジアの補給は状況を知らないままに西進を続けていたため、食料の補給を受けることは容易だった。

一行は、ペルジアの元兵士たちを間にはさみ、両側にアレスミリアン配下の兵が護衛に付いた。彼らの手には、イテカレスが“賑やかし”と呼んだクラコワーロンダルトの旗が掲げられていた。

二つの深い森に到達し、その拡張され整備された街道を目にして、アレスミリアはイズマイルの執念を思い知った。

この森がうまれてから始めての陽光をうけ、街道の両側の土は乾いた色になり、下草が茂り始めている。人の往来が増えれば、人や鳥が、それと知らぬ間に運ぶ植物の種子により、その植相はどんどん変わっていくだろう。

かつて北の部族との関係がそうであったように、東方諸国との関係もそうであればいいと思った。

「ワーズ。」

ワーズウォードは、彼の前で馬に揺られている。

「この街道の名前を知っているか？」

彼は馬を少し遅らせ、アレスミリアンの横に並んで答えた。

「さあ、わたしは聞いたことがありませんが。」

「では、此れを造ったものに敬意を表して、“イズマイルの街道”と名前を付けよう。」

「えっ、敵の親玉の名前ですよ。」

ワーズの大声に、マクシミアがうるさいというように首を曲げた。

「動機は何であれ、この街道は、クラコワと東方世界を結びつけるという大切な役割を果たすだろう。その功労者はあのイズマイルだ。」

「こんなところに、名を残してやることも無い様に思いますが。」

「我々は、これから敵地に行くのだ。ほかの部族はともかく、ペルジア人たちはわたしたちを快くは迎えてくれないだろう。」

でも、我々は武力で彼らを制圧しに来たのではない。最初の出会いがどうであれ、友誼を結び

に来たのだ。その手土産にするんだよ。

ペルジアを地上から消しに来たのではないということが、イズマイルの名をあえて残すことによって分かってもらえるだろう。無用の戦いをする必要はないさ。」

ワーズワードは改めて後ろを振り返り、その列の長さのため息をついた。

「理由と手段はどうであれ、東方世界を統一し、この十万以上の兵士を動員するまでになった王ですから、おっしゃる通り、名前ぐらい残してやってもいいかもしれませんね。」

その“イズマイルの街道”を、元兵士たちは歩き続けた。

彼らは戦に破れたのだが、その顔は晴れやかだった。

アタリスのザヒル・シャハフもその中にいた。彼にとってはおよそ二年ぶりの東方への帰還である。

故郷への道が、以前彼がそこを歩いてクラコワに侵攻したときとは、大きく様変わりしていることに驚いたが、彼をもっと驚かすことが故郷で待っていた。

彼はこのあと、己の墓と対面することになる。

その墓石にはこう書かれていた。

「ザヒル・シャハフ 騎士として生まれ、酒に生き、騎士道に殉じた男。」

なにせ彼は、先の戦以来、成り行きと運命に翻弄されてアレスミリアンの客人としてロンダルトに居残っていたのである。

その微妙な立場ゆえ、アタリスの彼の一族には、彼は行方知らずとなって、もう生きては帰らないだろうと伝えられていたのだ。

その葬送の儀式には、彼の生存を知るもの達も参列したのだが、その墓碑銘を考えたのは、その内の一人の男だった。

故郷に帰還した彼を見たものは、みなあの世から舞い戻ったかと腰を抜かしたが、おのれの墓を目の当たりにしたザヒルの気持よりは、幾分かましだったかも知れない。

彼は、憂鬱な顔でその墓石をながめていたが、その数奇な運命を考えると、

「まあ仕方有るまい。生きているのが不思議なぐらいだ。」

と、つぶやいてその場を後にした。

アタリスのザヒルばかりでなく、兵士達はおのれの故郷に続く分かれ道に来るたびに、同郷のものや一族のものと集団となり、街道を行く長い列から離れていった。

彼らは離別に当たって、アレスミリアンに拝謁し、改めてペルジアを破ったこの年若い王に、不思議な思いを抱いた。そして、命を救ってくれたことの礼を述べたあと、故郷への道をたどっていった。

噂に聞いたところでは、アレスミリアンの身の丈は常人の倍ほどもあり、赤い髪を逆立て、首にはおのれが叩き殺した人の骨で作った、白い飾りを下げているということであった。

今し方、いとまを告げたその王と呼ばれる人は、キノツラとさほど身長は変わらず、穏やかな話しぶりや気さくな笑顔は、聖職者を思わせるようだった。

王にも色々あるものだ。

あのペルジア人の王はいかにも豪奢で、彼が常に引き連れる廷臣もその王の飾りとして、あるいは背景の衝立として、侵しがたい雰囲気をもり立てていたものだった。その一団が動くところは、遠くにいても緑の宝石の輝きが見えるようだった。

ところが、アレスミアンの側にはワーズと呼ばれる若者が一人いる他は、王よりも偉そうな白い馬が一頭いるきりで、取り立てて威厳があるわけでもなく、何かの目印でもなければ気づかずにその前を通り過ぎてしまうかも知れない。

“見ているとその周りにはいつも風が吹いているような気がした。

木の葉が揺れるでもなく、草がそよぐのでもない。

王の前に出で、立ち去っていく絶え間のない人の動きが、風を思わせたのだろうか。

そうした彼の地や、アタリスの若者達の顔を見ていると、この数日間の望郷の思いが薄れてしまいそうになる。いつまでもこの人を見ていたくなる。

リンリーにジャイルにトクル。お父さんは村を出てからずっとこの身の不運を呪っていたのだけれど、この王さまにあったのは良かったと思うよ。

敵兵の命を取らず、奴隷に売り飛ばすこともしなかった。こうしてお前達の待つ家に帰れるのは、この王さまのおかげだ。

もう二度と戦争はごめんだ。この王さまは戦争をしないと約束してくれた。

これからはずっとお前達と一緒にいられるだろう。畑を耕し、牛を育て、時には市へも出かけよう。

早ければ、次の次の日にはお前達と会えるだろう。”

彼は最後の「記録」を、そう締めくくった。

赤みをおび、乾燥した土が目の届く限りの大地に広がっている。

誰かが気まぐれにおいたような小さな草むらや、膝丈ぐらいの低木の茂みが、ただ不毛と呼ばれるような土地ではないことを、控えめに主張していた。

クラコワから続く、深い森を抜けてしばらくは、水と緑に恵まれた豊かな地味が続いていたが、東へ東へと進むうちに、裸の大地を日にさらし、時折降ってくる雨をひたすら待ち続けるうちに、根を張る土さえ風に吹き飛ばされてしまったような岩肌と砂礫の続く、地の果ての風景へと変わって行った。

「この先に、緑と水の豊かな土地が広がっていると知れば、我が物としようと考えても不思議ではないような気がしてきた。」

と、アレスミリアンは来し方を振り返って言った。

「わたしが今まで見た中で最悪です。なんだか、顔も口も鼻も髪もざらざらしているような気がする。よくこんなところで暮らしてられるなあ。」

この土地も、ワーズウォードのお気には召さなかったらしい。彼には自分が生まれ育ったロンダルトの華やかさが一番だった。

「小さな部族であったころは、その部族が命をつなぐのに十分な食べ物があれば満足出来たろう。

けれどもその部族が大きくなり、国が大きくなれば、ただ生きていくためだけの食事では満足できなくなる。人の欲は、隣人の欲望と背丈を競い合うからね。

そして勢いのあるところに人は流れこんでくる。流れ込む人たちは、自分で食べ物を生み出す手段を持たない人だから、食い扶持はどんどん増えていくんだ。イズマイルはいわば、食いしん坊の子供をたくさん抱えた親のようなものだったのだろう。」

「だから我々の国へ攻めてきたと。」

「西に来たのは、彼の趣味の問題かもしれないが、手っ取り早く食料を集めようとするなら、歳月をかけて畑を開くよりも既にあるものをもってしまった方が早い。

それに、こんな土地では開墾して耕地を増やすのは無理だろうし、元々農耕の民ではない彼らには無理だっただろう。」

「なんだか、貧乏くさい話になってきましたね。子沢山の英雄か・・・。」

ワーズウォードは、泣く子を抱えてあやしている、鷲鼻の男を想像していた。

「イズマイルはきっと、その現実をあまり認めたく無かったのだろうな。」

死んでしまった男の気持ちはわからない。それを知りたければ、その男をよく知る者に聞くしか無い。

その者すらいなければ、後は想像するしかない。

想像に任せるしか無いのだが、ただの誇大妄想者だから征服したのだとか、野蛮人だから戦争を起こしたのだとか、そんな風に考えてはいけない。

そこにはきっと、人々が生きていくための根源的な理由が潜んでいるはずなのだ。個人の欲望だけで動くほど、世界は単純に、できてはいないのだから。

アルシャーファは、その赤い大地の果ての、ゆれる地平線の上にようやく姿を現した。

クラコワーロンダルトの兵士一万五千人は、都を前にして、ひとまず城外で野営をすることになった。言葉の通じない、異国の都市で無用の騒乱を避けるための配慮だった。まずは、この都の主の代理人と、今後のことについてを交渉する必要があるがあった。

ところが、思っても見ないイズマイルの敗死と、アレスミリアン、伝説の大男にして野獣のごとき猛々しい、の接近を聞き、都の主だった貴族たちはみな逃亡していた。

どこかの都で起こったことが、この都でも同じように起きていた。

だからこの都には、主はおろか、其の代理人の代理人すら居なくなっていた。都市の治安も市民の不安と疑心暗鬼の上の、微妙な緊張感によって保たれているに過ぎない。

誰かが暴走すれば、たる底を割ったように人の醜い本性がほとぼしり、市中を水浸しにしてしまうかもしれなかった。

海路を使って、アルシャーファに先乗りしていたシルヴェスタは、かつての自分の屋敷や使用人の安否を確かめ、昔を懐かしむ間もなく、ペルジアの代表者をなんとか仕立て上げることに奔走していた。

シルヴェスタの昔のツテと、これは強いものになびけば、身の保障と何かのおこぼれにあずかれるかもしれないという下心のおかげで、協力者には事欠かなかったのだが、いくばくかの袖の下が功を奏して、ようやく一人の男にたどり着いたのが、アレスミリアンが城外に野営地を構え、腰を下ろしたころだった。

「俺にも意地があるからな。あいつが来る前にお膳立てはしておきたかったんだよ。」
「よく生きていてくれたものです。あの戦で死んだとばかり思っていたのですが。」
とイテカレスは、本人が聞いたら相当気を悪くするようなことを言った。

「どうやら第二王子との折り合いが悪く、機嫌を損ねて追い出されたらしい。」
「それで命拾いか。前の戦のときも、クラコワでなくロンダルトにいたから無事だったし。脇役、引き立て役が宿命なのに、そのせいで永らえるとは、人の運命って分からないものですね。」

シルヴェスタは、何を言ってやがる、俺だってこんなことをする羽目になるとは思っても見ずにこの世に生まれておちて来たさ、と思い、イテカレスを横目でにらんだ。

「何ですか、気持ち悪い。」
イテカレスは顔をしかめた。

「馬鹿なことやってないで、早く行きましょう。きっとお待ちかねですよ。」

都という名を隠したくなるほど恥ずかしいのか、乾いた赤い土の街路を行く人通りは少なく、とてもアレスミリアンとそのご一行様を快く迎えてくれているとは言い難かった。

「それは、まあ仕方のないことだろう。」
「あなた様はいつもそうおっしゃるのですね、“まあ仕方ない”。」
「我々は招かれざる客だからな。少なくとも、このペルジア人の本拠の人々は、私ではなくイズマイルの帰還を待ち受けていただろうから・・・。」

「赤土に、それと同じような色の土の壁・・・。ロンダルトとは随分違いますね。で、どこを、どう進めばよいのでしょうか。」
「それはシルが教えてくれるだろう。」

その、いまは陰気くさい通りを、シルヴェスタとイテカレスが、馬と土ぼこりと、供をつれてやってきた。

「あっ、来ちゃった。」
とワーズワードが小さく言った。

「何だ、どうかしたのか。」
「いえ。何でもありません。」
「ふうん。」

ワーズワードは、今度こそイテカレスに担がれないようにしようと身構えた。

シルヴェスタは、すっかり、土地のなりになじんだ服装をしていた。

「さすがですね、わたしにも一つあつらえてください。」

「あなたに似合うかなあ。これは此れで着こなしが難しくてね。そんなことより・・・だ。」
とイテカレスを振り返った。

「あの男が見つかりました。タラバスカニ大臣です。」

と得意げに言った。

アレスミアンは、きょとんとし、

「そんなのしか居なかったのか。」

と意外そうに応えた。

「おいおい、此れでも大変だったんだぞ。都の主だったものはみんな逃げてしまうし、イズマイルの子供で残ったものは、地方の都市に預けられたままで、亀のように甲羅の下に首も手足も隠したままだ。

われながら、よくぞ探し当てたもんだ。」

シルヴェスタは、先ほどその格好をほめられた分を帳消しにした。

「大体、この国でのお前の評判はよくない。ほとんど人間とは思われていないぞ。」

アレスミアンは、以前耳にした自分のうわさを思い出し、おかしくなった。

「ワーズ、この気楽な王様のお守りをちゃんとしないといけないじゃないか。」

シルヴェスタは、今度はワーズワードに八つ当たりし始めた。

「分かりました。で、いつ会えばよろしい。」

「明日にでも。ここへつれてくるさ。」

「それはそれは、お手数をおかけいたします。」

アレスミアンの馬鹿丁寧な言い方に、さすがのシルヴェスタも、ちょっと度が過ぎたかなと思った。

「あの親父にそんな度胸はあるかな。」

イテカレスは、かつてロンダルトの宮殿で出会ったときのことを思い出し、そう言った。
そして、その懸念は、翌日正しかったことが証明された。

「わしはもう引退した身だ。呼び出しておいて、またどこかへ出かけるというのなら、最初からそちらに行かせればよいではないか。

それにだ、あんな埃っぽいところでは、話も何にもならんぞ。暑くて倒れるのが関の山だ。わしはもう動かん。」

というと、アルシャーファの宮殿に居座ってしまった。

特に戦略があってそうしたというのではなく、可能な限り直接面会するのを先送りする気だった。

それを聞いたアレスミリアンは、

「それもよかろう。」

というと、全軍の隊列を整え宮殿に乗り込むことにした。

彼は、そこに待つ運命を、いまはまだ知らない。

数日の間をおいたせいか、彼らを迎えるアルシャーファの通りには、恐る恐るながらもひと目獣人アレスミリアンを見ようという物見高い人々で埋まっていた。

彼らは、きょろきょろと珍しそうに異国の軍隊を見回したが、お目当ての怪物を見つけるのには苦勞しているようだった。

征服者が前の王を追い出し、その末裔もまたその都からいつか追い出される。主の入れ替わりは、都という舞台装置の持つ宿命である。

そこに住む人たちは、都の主は王ではなく、その都に根を下ろし、代々暮らし続ける自分たちであることを知っている。

ことが落ち着いて、己に直接の災厄が降りかかりはしないことが判ってくれば、イズマイルが去って、アレスミリアンという遠い国からの客人がやって来たに過ぎないことを、そういうことが幾度も繰り返されたことを思い出したのだ。

宮殿の入り口は、周囲の家々とは違い、日の光を反射して深い青に輝くタイルに覆われ、動物や植物を様式化した装飾で飾られた人の五倍の高さはあるような巨大な門柱が守っている。

ワーズウォードは、その壮麗さに「あっ！」と声を上げたまま、あとはみずみずしい緑に溢れ、色とりどりの幾何学的なタイルと、モザイク模様彩られた宮殿の壁や舗道に見とれたまま、しばらく恍惚とした表情をしていた。

宮殿の内部ならともかく、屋根の無い足元の舗装まで装飾の施された道はロンダルトにも無い。何よりも、この乾燥した土地に突如現れた緑の氾濫と、水路に流された水を見て、この国では緑の宝石が何よりも好まれるという話を思い出した。

アレスミアンは馬を下りると、シルヴェスタに伴なわれて宮殿の中へとすすんだ。

直接には日が差し込まないように作られた屋内は、外の明るさと中の薄暗さとの差が激しく、目が慣れるまでに少しの間を要した。

日が高くなるにつれて上がる一方だった気温も、宮殿の中では壁にさえぎられてさほどには感じられない。

よく気をつけると、微風が感じられる。大きくとられた明るい中庭に起こる上昇気流が、周囲を取り囲む建物の中に外からの空気の流れを作っているようだった。

外の空気は、建物に入る前に周りの緑の葉によって、すこし熱を奪われる。わずかな風と、少しの気温の差だったが、この宮殿の居心地を快適に変えていた。

謁見の間らしきところに、一人の小太りな男が一塊の岩となってひれ伏していた。

「面を上げられよ。この国ではそれが普通かもしれないが、わたしの国ではたとえ敗軍の将であってもそこまでのことはしない。」

と、アレスミアンは声をかけた。

自分でも思いがけないほど、低い声だった。

おとこは、其の姿勢を続けた。

「イズマイル様にはまだ二人の王子がおられる。」

岩がしゃべった。不思議な光景だった。

「お二人りの命だけは、何卒お助け願いたい！」

その表情は見えなかったが、おそらく一途に懇請しているものと思われた。

「例え親がどうであれ、罪の亡い者の命まで取ろうとは思っていない。」

岩の塊が、少しやわらかくなった。

「立たれよ。話は此れだけで終わりではないのだから。」

シルヴェスタが男にいうと、ようやく男は重い腰を挙げ、手を杖にして立ち上がった。

「久しぶりだな、タラバスカニどの。」

アレスミアンは、本当に懐かしく思っていた。彼は、“あのこと”以前の出来事の一つだった。

男の顔から、小粒の涙がぽろぽろとこぼれ落ちた。

「もしあのとき、あなたを殺しておけば、イズマイル様は死なずにすんだかと思うと……。しかし、それはそれである第二王子が後を継いだときのことを想像すると、これでよかったかのかもと思え……。悔しいやら情けないやらでもう。」

男は肩を震わせむせび泣いた。

そう、あの時私が死んでいたら、イーリアスは死なずにすんだかもしれない。

だが今は、

「王子たち身の振り方を含めて、この国の未来について話し合いたいのだ。ペルジアが統一する前にまで戻そうとは思っていないが、放置すれば早晩この国はまた戦乱に包まれる。」

男は、袖口で涙を拭いて、

「判っております。であるからこそ、恥を承知で出てきたのです。」といった。

「まあ、明日からにしよう。今日は帰っていいぞ。」

この調子ではまともな話は出来まい、と、思った。

タラバスカニは勝手知ったるわが家とばかりに、一人で帰っていった。

シルヴェスタは用があるからといって、市中へと飛び出した。

おそらくこの街で、彼しか知らない人を探しにでも行ったのだろう。

アレスミリアンは、一人静かな宮殿の奥へと進んでいった。

謁見の間から三つほど、さらに部屋を通り抜けると、屈強で大柄な門番がやりを構えて警備している、さらに奥へと続く扉があった。

「ここは王しか通れぬ。立ち去れ。」

アレスミリアンは、かろうじてそういう意味の言葉を言っていることを聞き取った。けれども、通れぬといわれれば通りたくなるのは、彼の性である。

「わたしはお前たちの王を倒した王だ。いわば王の中の王。わたしが通れぬ道理は無い。」
門番にもかろうじて意図は通じたようだが、

「我々が王と呼ぶのはイズマイル様だけだ。」とって譲ろうとはしない。

アレスミリアンは遊び半分なのか、何か意固地になり、

「イズマイルはもういない。通さねば兵を突入させるぞ。」と彼らを脅迫した。

其処に至って彼らも、居なくなった主のために、自分たちの命までかけることはないと思ったのか、扉の両側へと退いた。

「わたしが通ってからは、誰も入れてはいけない、わかったか。」

彼らは頷いた。

彼らの新たな主人が決まった。アレスミリアンがペルジアに着いて、初めての条約が結ばれたのである。

”兵を突入させる。”

そこまでして通らねばならない扉ではなかった。そこがどこなのか、どんなところなのか、何をすところなのか、彼は知っている。

政治的にも、軍事的にも、何の意味もない場所だ。旧い王の、ただの私的な空間にすぎない。そこに居る女たちに、彼が興味を抱くはずもない。

けれども、アレスミリアンは運命の扉を開いた。

扉の奥には両側に小部屋の続く廊下が長々と続いていた。

これがイズマイルの後宮か・・・。

どこからか漂ってくる、濃厚な乳香のにおいと雰囲気におされ、アレスミリアンはしばしそこにたたずんだ後、奥へと歩みだした。

ことりという物音もしなかったが、その部屋の一つ一つの前を通りすぎるたびに、息を潜めて表の様子に聞き耳を立てている人がいる気配がした。

気がつくやうに廊下は突き当たり、それは、左に折れると中庭の一番奥を巡る回廊に続いている。結局、長い長い廊下の、いくつもあるどの部屋にも入り込む度胸がなく、突き当たりまで歩いてきてしまった。

これではただの散歩だと、われながら情けなく思いながら回廊に出、暫くぶりの明るい日差しにまぶしく目をしばたいた。

豊かな流水をたたえ、小花をつけた珍しい水草を浮かべる長方形の水槽の美しさは、ロンダルトの宮園とは趣の異なる、いかにも異国的な情感に満たされていた。

その静けさを破って、一羽の小鳥が飛び立った。どうやら、一番手前の部屋から飛び出したようだった。アレスミリアンは廊下を戻り、其の部屋の前に立った。

こういうとき、声をかけるべきだろうか、と少し逡巡したが、言ったところで通じないだろうと思い直し、目隠しの壁を回って中に入った。

少女が一人。座っていた。

彼が入ってくることを、足音で気づいていたようだ。二人はしばらくの間見詰め合っていた。

緑がかった瞳から、目をそらすことが惜しいような気がした。頭からくるぶしまでを覆う長く赤い衣には、金糸の細かい刺繍がほどこされている。その隙間からのぞく、額にかかる黒いなめらかな前髪、黒く細い眉。細い鼻梁、小さな口とあご。

その部屋は、さほど広くはないが、息苦しいほどの狭さでもない。
少女が一人座り、男が立って話すには、十分に距離を置いて対面できるぐらいの広さはあった。

中庭に向かっては大きな開口部があり、出入りは自由だった。先ほどの鳥はここから飛び立ったに違いない。食べ残したくずがそのままになっていた。

また戻ってきて、中断した食事を再開しでもするのだろうか。
驚かせて悪かったなあと、胸の内で思った。

外光の照り返しを受けて、明るい側の頬が少し褐色がかって見えた。

「わたしはアレスミリアンという。あなたは……。言葉はわかりますか。」

「勝手に入って申し訳ないのだが、鳥が飛び立つのをみたので……。」
わたしは、いったい何を話しているのだろう。

「お前がアレスミリアンというなら、わたしが聞いた話とは随分と違うものだな。
頭に角はないし、体毛も薄い。どんな男が入ってくるかと恐ろしかったが、ちょっと見てみたかった気もするぞ。」
少女らしい抑揚には欠ける、落ち着いた調子の声だったことが意外だった。

「言葉は、わかるのか。」
「わたしの教師は、お前の国の言葉も話した。お前の国の書物も随分とよんだぞ。」
判るから応えているのだ、とでも言っているようだった。

「この国ではわたしは、何か人ではないもののように言われているようだが、わたしは今までそんな生き物は見たことが無い。」

「わたしの父は負けを知らなかった。その父を二度も破ったのだから、人の話が誇張されるのは当然だ。」

私の父と呼ぶのはイズマイルのことか。

「あなたはイズマイルのご息女か。」
「そうだ。」

「であれば、あなたには済まないことをした。」
「父を討ったことか。」

「そう、だ……。」
「父とはもう何年も会っていない。わたしの母が弟を産んで以来、父とは会っていないのだ。弟は世継ぎの一人として早くにこの宮殿を出たが、わたしはここにずっと放っておかれた。
あの男には、忘れられた子に過ぎない。私も顔を忘れてしまった。お前がそんなにするほどには、わたしは恨みに思ったりはしていないぞ。」

「あなたの母上はどうして居られる。」

「弟を生んで、まもなくに身罷った。だから私にはなんの後ろ盾もない。ただの王女だったが、それももう終わりだな。」

少女は外を見た。

「なぜ？」

「王が死んだら、その後宮も終わりだ。お前の国にはこのような制度はないのだろう。であれば、こういうもの自体が終わりになるということではないか。

そんなに遠くないいつか、私はここを出ていかねばならないだろう。その頃には、私のことを王女として扱う人も居なくなるに違いない、」

アレスミリアンは、この少女の不思議さに興味を持った。

おそらく、この後宮に住まう他の女達は、自分たちの身の振り方をあれやこれやと思案して頭を悩ましていることだろう。

けれどもそれは結局、ある日誰かが外からやってきて、彼女達を追い出すまで何の結論も出ない詮索なのだ。

彼女たちは、側に仕える女達と根拠のない推測を、あれやこれやと都合の良いように話しているに過ぎない。けれどもこの少女はこれから起きるであろう事を、ただ事実に従って淡々と受け入れている。

子供らしくない娘だな。

「後宮が無くなったらどうなされる。」

「他の女達は、みな他の部族の有力者から人質代わりにつれてこられた女達だ。故郷に帰れるものなら返してやって欲しい。

けれども受け入れ先がないなら、このアルシャーファで暮らせるように、世話をしてやってくれ。身よりはあっても、一度は父の元に入った女だからな。一族の中にはあまりいい顔をしないものもいるかも知れない。

そういう女はかわいそうだから。」

「あなたはどうするのかと、聞いているのだけれど。」

「お前はさっき、私に済まないといったな。」

たしかに。というように、頷いた。

「・・・お前がここを離れるまでに、考えておくでしょう。」

少女は、もう用が済んだというように、膝の上の書物に眼を落とした。アレスミリアンの頬に、しばらく感じなかった微風が戻ってきた。

去り際に、「また、話にきてもいいか。」と尋ねた。

特に答がないということは、好きにしろと言うことなのだろうと受け取った。

アレスミリアンが部屋から去ると、どこかで様子をうかがっていた鳥が戻ってきた。それを見ると少女は、満足げに微笑んだ。

「どこに隠れておいででした。」
とイテカレスが不服そうに問いただした。

「後宮の方にね。」
「なんですって！ どうして私を連れて行ってくれなかったんですか！」

「怖い門番がいて、王しか通さないといって威張っている。それでも行くか。」
「命は惜しいが、男だったら一度は見てみたい！」

「では、明日一緒に行くか。」
「はい！」

「セシリーにもそう伝えよう。」
「それだけのご勘弁を！」
あぁ悩ましきこの人生。行くべきか、行かざるべきか、それが大問題だ。」

「いい加減になさった方が良いのでは。」
と、ワーズワードがここぞとばかりにたしなめた。

それを見るアレスミリアンが笑っていた。
アレスミリアンは気づかなかったが、みな、おやという顔をしていた。

其の夜、宮殿の一部屋を、とりあえずの執務室と決め込んだアレスミリアンのもとを、シルヴェスタが訪れた。

「やれやれ、だ。」

「何がですか。」

アレスミリアンはペルジア流のきわめて気楽な姿勢で、大振りな背もたれに体を持たせかけて其の話を聞いた。

「わたしの屋敷も、わたしの店もそのまま残っていたよ。もっともかなり手が加えられて、わたしの趣味とは余りあわなくなっていたがね。」

「というと、誰かが商売を引き継いだということですか。」

シルヴェスタは頷いて、

「元の使用人たちが、そのまま商売を続けていた。たいしたもんだ。てっきり、イズマイルにつぶされたと思ったんだが。」

「わたしもそう思っていました。」

「役人にたっぷり賄賂を握らせたそうだよ。それと、わたしは主ではなく共同経営者に過ぎない。商人は生まれにこだわらないから、彼がどこの生まれで、何をしてきたかは知らないでやっていたのだ、ということにしたそうだ。」

「それで通ったのですか。」

「あの店で扱っていたのは高価な商品だから、客も貴族が大半だった。もし、わたしが情報を集めるためにあの店を作ったという理由であの店を潰すような事になれば、貴族たちにも其の累が及ぶ可能性も無くは無かったのだ。だから、みなこの件は有耶無耶にしたかったらしい。」

「どうするつもりです。」

「いいさ。彼らにくれてやる。・・・というより、無事で居てくれて本当に良かったよ。金は山分けにして、どこかへトンずらしろとっておいたのだけど、気がかりで仕方が無かった。でも、彼らのほうが一枚上手だったな。」

ワーズワードが、今夜はもう下がりたいのだが用はないかと顔を出した。

アレスミリアンは気楽な姿勢のまま、ただ手を振ってそれに応えた。

しばらくすると、召使が酒と干し肉を運び入れた。そういう人の出入りがあった。

「名無しのおかげで命拾いしました。」

アレスミリアンは、あの戦闘の時に”名無し”が見せた、鮮やかな手並みを思い出した。もしあの研ぎ澄まされた感覚の下でなければ、無様な姿であたふたと逃げ出していたところだろうと思った。

シルヴェスタは、杯に残った酒を一息に飲み干して、くるくると弄びながら、

「あの男が自分で言い出したことだ。わたしの差し金じゃあない。

あなたは、自分の命を撒き餌か何かぐらいにしか思っていないようだが、それならそれで誰かがそれを救い上げてやらねば、命がいくつあっても足りはしない、といていた。

其の役目はイテカレスでは重かろうと。本当に殺そうと思ったことが無ければ出来ない、とね。」

「とんでもない男を相手にやっていたものです。われながら、知らないというのは恐ろしいことだなと。」

「若かった、のさ。」

シルヴェスタは、横目でいたずらな視線を送った。

「ええ・・・。」

「で、どうするつもりだ。」

「第三王子か、第四王子を後釜にすえようかと。」

シルヴェスタは意外そうだった。

「ペルジアの支配を続けるのか。それでは、ほかの部族のものは納得しないだろう。」

アレスミリアンはかぶりを振った。

「ペルジアの領地は、この都と元のペルジアの領域に限定します。が、この東方地域の国家の枠組みは残します。

戦乱が続いたせいで、どこの部族も人材不足です。とてもひとり立ちできる状態ではありません。けれども、各部族の人材を集めれば、治世は成り立っていくでしょう。」

だがなあ。

「第三王子、第四王子はまだ年端も行かぬ子供だぞ、それでどうにかなるのか。」

「わたしが後ろ盾になりましょう。」

これまでの枠組みが崩れていく中では、必ず部族の利害が対立します。誰かが仲裁に入らなければまた内乱になるでしょう。ペルジアはその調停役で、わたしがその権威を保証します。」

「つまりそれは、この先この厄介な地域とのつながりを、ずるずると続けていくということだな。」

いつかそれが命取りにならなければいいが、と思ったがそれは言わないことにした。

アルシャーファに店を出し、使用人を持ち、その店で小さいなどとは謙遜できない商いをやった。この土地にも、人にも、服装にも愛着が湧いた。

ずっと先、良くないことが起こるかもしれない。でも、アレスミリアンの着想に従わねば、この国の明日は無いのだろう。

であれば、

「どっちを取るかだが・・・。」

「わたしには判断のしようもありません。あのタラバスカニに任せようかと思っています。」

「ほう、えらく買っているのだな。」

自分が探し出したのだが、それは他に誰も居なかった、という消極的な理由に過ぎない

「それでもありませんが、わたしが選ぶというのは悪しき前例となります。まるでペルジアを乗っ取り、属国にしてしまったかのようにみえます。

自分たちの国の王は、自分たちで選ぶべきでしょう。まあ、あの男は、第二王子を早々に見限

ったのですから、見る目はあるのでしょうか。

芝居がかった大げさな振る舞いは相変わらずですが、イズマイルが一軍を任せただけの器量はあるのだろうと思っています。」

どこかの草むらで、虫が鳴いているようだった。

その虫に、別の虫がこだました。

「それにしても、こんなところであなたと酒を飲むことになるとは、思わなかったよ。」

「わたしも村を出て、クラコワを出て・・・、けれどもこんなところまで来るとは思わなかった。ずいぶん遠くまで来てしまいました。」

「ずいぶん、うれしそうじゃないか。」

「えっ。何をいまさら。」

「そんなに、浮ついた顔を見るのは久しぶりだってことさ。」

「そうでしょうか・・・。」

何かあったな。とシルヴェスタは思い、これを言うとまたへそを曲げるので、しばらくこの話題は寝かせておくことにした。

「さてと、俺たちも休むとするか。」

月が、荒れ野に浮かぶ土色の都を照らしていた。

その一隅で、宮殿を覆う青いタイルはいま群青に輝いている。
さらにその奥の、鳥の窓辺にもたれて少女は水の音を聞いていた。

父以外の男と、話したことがなかった。
弟は幼いうちにどこかに連れて行かれた。
水の音に混ざって、昼間の男の声が聞こえるように思う。

あのおとこ、あしたも来ると言っていたっけ。
わたしの名前を教えなかった。

名前に興味がないのだろうか。
わたしをどういうふうに呼ぶつもりだろう。
わたしはあのおとこをどう呼ぼうか。

「おまえ・・・」のままでいいのだろうか。

わたしはこの先、どうやって生きていくのだろうか。

翌日、タラバスカニは、何度目かの
「人生最大の決断！」
を強いられることになる。

さすがにこの日は、広間の床に額をこすりつけることはしなかったが、回りで見ているアレスマリアンやイテカレスが、この男は窒息して死んでしまうのではないかと思うぐらい、顔が真っ赤になるほど両目両眉をよせ、唇を硬く結び、両手のこぶしを握り締めて一心に考えている、ようには見えた。

本当のところは、頭の中で木の棒をどちらかにぱたりと倒しただけかもしれない。
それは余人には分からない。

「・・・第四王子を、推挙いたします。」
ほお・・・。

「それはどういう理由だ。」
とアレスマリアンは確かめた。

「第四王子は、イズマイル様亡き後は親と呼べるものはなく、いまは後見人の下で暮らしておいでです。

あの方が王位につかれても、それで利益をうるものは後見人ぐらい。

ただこの後見人と申しますのが色気のない男で、第四王子がその者に炊きつけられて王位を争い、惨めな末路をたどることがないように、というイズマイル様のご配慮だったのですが。

これから貴国や他の部族との関係を修復するに当たり、閥閥や臣下の私欲に政が左右されることは避けたほうが良いかと。」

一応は考えたのだなと思った。

「分かった。あなたの言うとおりにしよう。

第四王子を呼び寄せなさい。けれどもそうすると、第三王子の処遇を何とかせねばなるまい。あなたの言いようの裏を返せば、第三王子の後見人は野心家で、生母の一族は、王子を足がかりに勢力を広げたいと思っているように聞こえる。」

タラバスカニはそれに応える代わりに、うつむき加減の暑苦しい顔に、汗を流した。

「火種だな。ほおって置くと大火事になる。わたしにとっては其のほうが好都合だが。」
タラバスカニは、抗議するように顔を上げアレスミリアンを見た。

「ペルジアは滅びるな。イズマイルは激しく燃えすぎたのだ。後に何も残さないほどに・・・。」
アレスミリアンは意地悪く、言葉が続けた。

「私が・・・、なんとしても・・・、わが一族をかけて、第四王子をお守りいたします。」
タラバスカニは、体から搾り出すように言い返した。

アレスミリアンはタラバスカニに微笑んだ。

「その覚悟を聞いて安心した。第三王子はわたしがロンダルトにつれて帰ろう。」
その迷子でも連れて帰るような気軽さに、タラバスカニはあっけにとられた。

「ロンダルトに連れて帰る。」

ペルジアは、もうこの地方の一國に過ぎない。この小さな器の中で王位を争うことがどんなに無益なことか、ロンダルトという外の世界から眺めてみれば分かるだろう。世界はもっと広いのだ、この東にも多くの国があり、ロンダルトの西にもたくさんの国がある。」

そして、この国での補佐官を振り向いた。

「このシルヴェスタの商圈はわたしの国をはるかに越えて広がっている。

この男の店で品物を売れば、別の出先で金を受け取ることができる。この男が麦の値を吊り上げれば、多くの国で暴動が起こるかもしれない。

それは、国の王などよりもっと恐ろしい力を持っているという見方も出来る。そういう世界に我々は生きている。

それを学びに来るのだ。」

タラバスカニは、アレスミリアンの言葉を通訳するシルヴェスタに、そんな力があるとは、にわかには理解できなかったが、ペルジアに二人の王子を置いておくのは、彼の保障にかかわらず、出来れば避けたいことだった。

なぜなら、その代償は、いずれ血であがなわれることになるだろうからだだった。

「承知いたしました。第三王子はお預けいたしましょう。」

タラバスカニはその小太りの体を、背もたれに持たせかけ、たまった蒸気を噴き出すように天を仰いで息をした。

「タラバスカニ殿。」

「はい。」

「あなたにとっては屈辱かもしれないが、この国の民衆のことを思って耐えてほしい。民にとってはまず食べること、そして住むとことが大事なのだ。

戦を続けていては、それは適わない。この地に平安をもたらすこと。それを第一に考えてほしい。」

「わたしは一度、表舞台からは降りたのです。そのまま降りていればよかったと思います。」
応えるタラバスカニの言葉には、あまり力は無かった。

「すまないな、代役はいないのだ。演じ終わるまで、まだ幕は下ろせない。」
しかし、タラバスカニの表情は固く、重苦しかった。

アレスミリアンはまた、奥へと続く廊下を歩いている。

昨日よりは、人の動く気配がした。彼女たちは、いまも行く先を案じているだろう。だがそれは、後回しだ。

アレスミリアンが来た気配に、少女は顔を上げた。

膝の上には、また書物が開かれていた。

鳥と、たった一人で生きてきた少女の、たった一つの慰みだった。

部屋の片側に、昨日までは無かった長いすがひとつ用意されていた。アレスミリアンはそこに腰を下ろした。

水の音に耳を傾けているうちに、奇妙な光景をみた。

そこは緑色に濁った水の中だった。

水は日に温められて生ぬるく、心地よいような悪いような……。

ながいす緑色の柱のようなものが、何本も何本も下から上に向かってすっとのびている。その間を自分が泳いでいた。水の中でどうやって息をしているのか分からなかったが、苦しくはなかった。そういえば、どうしてこんなに泳げるのだろう。

長い柱の先には、丸い日覆いのようなものが広がっており、その隙間に空の色が見え隠れしている。

時折差し込む日の光が、複雑に捻じ曲がった模様にきらきらとしていた。

水底にはふわふわとしたものが沈殿し、其処には行きたくなかった。それに絡まると動けなくなりそうな気がしたからだ。水面に向かって上がっていかうとするのだが、思うように進まない。

さっきまでのように体が自由に前に進まない。小さな魚が盛んに尾を振って通り過ぎていく。

突然、何かの日覆いの隙間から飛込み、体を反転させてまた飛び出していった。あとには白い気泡と、ひどい波と光の揺らぎが残り、そのせいで自分の体がゆらゆらと揺すられた。

揺すっていたのは少女の手だった。

少し体を起こそうとすると、身体にかかっていたらしい薄布が滑り落ちた。

「いつまで寝ている。いいのか、こんなところで昼寝をされていて。」

アレスミリアンは、まだ眠気の去らない頭とかすんだ目で、まじかで覗き込んでいる少女の陰を見ていた。

こちらに来てから、いや、あの日以来、ずっと浅い眠りの日々が続いていた。今しがたは何故か、理解しがたい夢のようなものを見た気がするが、久方に深い眠りに落ちた気がする。

「おい、何を呆けている。勤めはどうしたのだ。」

「うん？、今日はもういい……。今日の分は終わったから。」

といて、大きなあくびをした。

「今日は、次の王を決めてきたからもういいんだ。」

「次の王は、お前がするのではないのか。」

「わたしはこの国を征服しにやってきたのではないし、ペルジアのことはペルジアにまかせたい。わたしが王になっても、この国を去ればたちまち反乱が起こるだろう。それでは意味がない。」

「そうだったのか……。では次の王は誰なのだ。」

「ええっと、何といったか。名前は、……。第四王子？」

「ばか！それは名前ではない。イスタルダだ。」

「そうか、イスタルダというのか。」

「わたしの弟だ。」

「なんだ、そうか……。なんだと……。そうだすっかり忘れていた。昨日弟がいるとか言っていたな。」

「よくそれで、王が務まる。」

少女は呆れ顔で言った。

「お前のようなものに、ペルジアが敗れたかと思うと情けない。もっとしっかりしてくれ。」
やはり、不思議な少女だ、と、一層そう思った。

「イスタルダは何歳になる。」

「十二のはずだが。」

「・・・では、あなたはいくつになられる。」

「十八だ。」

そんなはずはないだろう。

「・・・・十五ではないのか。」

「十八だ。どうかしたのか。」

「いや、もっと子供だと思っていたので。驚いた・・・・。」

少女どころか、娘じゃないか。

急に、今まで気づかなかった甘い香りが、眠っていた感覚をくすぐった。

アレスミリアンの顔が赤くなった。

「うたた寝などするからだ。」

と言った娘の手が額に触れた。ひんやりとした細い指だった。額に手をあてられるなど、子供の頃以来だな、と思った。

アレスミリアンは娘のほおに右手をそえ、引き寄せた。

窓辺に鳥の舞い降りるのが、聞こえた。

「明日も来る」

と言い残して、部屋を後にした。

後宮の門から外の世界へ抜けようとして、
「名前を聞くのを忘れた。」と独り言を言った。

「フェダーイン」と門番の男が応えた。

「そうか、フェダーインか。」と応えた男に向かって笑いかけた。
男は満足そうに頷いた。

次の日、アレスミリアンは、早朝から様々な部族の首長たちの訪問をうけていた。

彼らは、新しい支配者に対して、まずは戦勝を寿ぎ、部族の者たちを無事返してくれたことの礼を言った。次に、自分たちはもうペルジアの支配は受けたくない。

かといって、アレスミリアンの支配下に入るでもなく、昔のように部族のことは部族で決めていきたいと、まるで示し合わせでもしたかのように同じことをいった。

アレスミリアンは、そのことは分かったので、あなた方のしたいようにすればいい。それとペルジアについては第四王子が継ぐことになった、後見人はタラバスカニだということを伝えた。

首長たちは、自分たちの主張が思いのほかあっさり認められたことにほっとした。

宮城の周囲は、一万五千のクラコワーロンダルトの兵士で固められ、来訪者はその無言の圧力を感じながら会見に臨んだ。

これが十五万のペルジア軍を破った精鋭かとおもうと、この宮殿から生きて帰れるかどうかとまで思いつめた者もいたが、案じていたようなことは何もおこらず、新しい支配者の物分りのよさに感謝した。

アタリスのザヒル・シャハフもその中にいた。

アレスミリアンは、格別の証として席を立ち、ザヒルを迎えた。

「よろしいのですか。あのよう、彼らの思うままにしてしまつて。」

アレスミリアンは、いつものいたずらっぽい顔になった。

「わたしはいずれ、ロンダルトに帰ります。ロンダルトに帰れば、この地のことには手を出せなくなる。わたしがあれこれするのはなく、この地のことは、この地の者がしなければなりません。」

とはいえ、今日来たような首長たちは、イズマイルが現れる前とは、世界がもう変わってしまっていることを理解しようとしていません。この地は、小さな部族が、自分たちの食ひ扶持だけを食んでいるだけではいられない世の中になっているというのに。」

それはザヒル・シャハフも認めるところだった。

「私も自分の国に帰って驚いてしまいました。何事につけ、こんなことをしては、アタリスは立ち行かなくなると思う自分に驚いたのです。」

アレスミリアンは頷いた。

「イズマイルは、力づくでこの地を一続きの大地に均してしまいました。人の動き、物の動き、すべてがこの一続きの大地に連動して動いているのです。そして、それはわたしの国にまで広がろうとしている。」

首長たちの目論見は上手くいかないでしょう。」

「では、どうなさる。」

どこまで考えておいでなのだ、と、問うような顔だった。

「彼らは、だれかに・・・、ペルジアに泣きつくしかないでしょう。」

「その背後にあなたがおられると言うことですか。」

「そう、なります。」

クラコワーロンダルト、そしてペルジア、か。ザヒルは、アレスミリアンの両腕の中にその三国が抱え込まれている姿を想像した。可能かもしれないし、そうではないかもしれない。

クラコワで出会って以来、驚かされることばかりだ。でも、彼の若さはどうなのだろう。それに変事の腕力と、平時の能力とは異なるものだ。それを巧みに使い分ける力が、この王にあるのだろうか。

少なくとも、アタリス一つですら、己の手には余るだろう。そして、
「みな、ペルジアにはよい感情を持っていないでしょう。」

「いほど簡単なことではないでしょうね。それは分かっています。けれども、この地でペルジアだけが君主国の統治を学んだのです。」

もし、それが成し遂げられれば、この方は古代の偉大な王と肩を並べることになるだろう。

「ザヒル殿は、お暇そうですね。」

「何をおっしゃいます。私は、ええと・・・」

「ロンダルトに帰るとき、ご一緒していただけますよね。」

「・・・それは、ご命令でしょうか。」

「そう、受け取ってもらって結構。」

ザヒルの騎士道がうずいた。一度は、命を預かった間柄だ。

そして、今はもう遠慮のないアレスマリアンのいいようが嬉しかった。

俺は人を支配する側の人間ではない。人を支える側の人間なのだ。どうせなら、

「いたしかたありますまい。」

「ロンダルトの酒は、お気に召しませんか。」

もちろん酒は恋しかった。

「はっはっは、いたし方、ありますまい。」

命をかけるに足る事業の元で、己の使命を全うしたいものだ。

「やあ、フェダーイン。」

「おいでなさいませ。」

門番は道をあけた。

そのまま通り過ぎようとして、

「きみ、退屈じゃないかい。タ・イ・ク・ツ。」と声をかけた。

門番は“にっ”と笑った。

分かったのかな？と思いながら、よい気分のまま廊下を進み、奥の部屋に入ってドキッとした。

敷物や衣、布が乱れ、書物も開かれたまま放り出されている。

部屋の隅に座りこんで壁にもたれたまま、アレスミリアンを見る娘の顔には、明らかな涙の後と、おびえたような表情が浮かんでいた。

アレスミリアンは大またに近づき、そのそばにひざまずいた。

「どうした。何かあったのか。」

娘は鼻をすすって、アレスミリアンの腕にすがって話し始めた。

「わたしは人を待つことに慣れていないのだ。

母を亡くして以来、父は来なくなった。弟も連れ去られてから会っていない。わたしの部屋に来るのは、身の回りを世話する召使と鳥だけだ。

昨日お前が、明日もまた来ると言ったから、何か物音がするたびにお前が来たのかと、遠くで話し声がすると、お前が別の部屋に行ってしまったのではないかと・・・。

そんなふうに考えていると、もうどうしていいか分からなくて・・・。

わけが分からなくなって・・・。」

アレスミリアンは震えている、冷たいむき出しの肩を抱き、落ち着かせようとした。つめの跡が、ところどころに赤く残っていた。

中庭の水槽に注ぎ込む、絶え間のない水の音と、魚が跳ねる音。

鳥の鳴き声。

どこかの扉が閉じたり開いたりする音。

誰かの笑い声。

単調なこの繰り返しの中で、私を待っていたのか。

「今日は朝からお客様がたくさん来られたんだよ。キニル、カルシア、ストーク、パルミール、ムジャールにベシュインそれから」

「アタリス、テパイも・・・？」

「そう、全部は覚えられないけれど。」

「何をしに？」

「みな、この国がどうなるのか不安なんだ。だから私によしみを通じておこうということさ。」
娘はまた鼻をすすり、口で一呼吸した。

「お前を見ていると、とてもそんなことが出来るとは思えない。」

「それはそうさ。一人では何も出来ないよ。いつも誰かに支えられてなんとかやっている。シルヴェスタ、ニールリング、イテカレス、ワーズワード、キリアンデル、ハイアルト卿、ザルウィー伯・・・（イーリアス）。」

娘は指を折りながら、今聞いた言葉を小声で繰り返した。

「よいな、いろんな家来がいて。」

「はは、家来じゃないよ。みな友人だ。」

「家来ではないのか、王なのに。でも・・・、そのようなものが沢山いてよかったな。」

「あなたには・・・」

娘はこっくりした。また泣き出しそうだった。

「私がいるではないか。あなたの、情けない友人だ。」

娘が顔を上げ、アレスミリアンを見上げた。

「名前は？」

「アリシア。」

「アリシア？」

娘はこくっとし、アレスミリアンに体を預けた。

この世界で一番孤独だった魂と、違う世界で一番傷だらけの魂が会って、ひとつによりそった。

「今夜はここにいる。」

アリシアは、安心したようにほほえんで、頷いた。

「おーい見つかったか。」

「いいえ、どこにもおられないようです。」

これまでも、時々ふっと姿を消すことがあった。とはいえ、夜になっても何処にもいないというようなことは、今日が初めてだ。午後は午後で、何かと政務があったので、仮ぎめの執務室に出向けば、そこに座っているはず、というのが共通認識になっていた。

それが見当たらない。見当がつかない。

「この広い宮殿の中を、あまりおおっぴらには出来ないし。

まいったな、子供じゃあるまいし、迷子になるとは。おい、イテカ、アレスを見なかったか。」

イテカレスは、宮殿より町中に出ていることが多かった。それが自分の持分だとでもいうように。

「えっ、おられないのですか。」

「見つからないのだ。」

「ひよっとすると、あそこかな。」

「どこだ。白状しろ！」

「・・・後宮。」

シルヴェスタとワーズワードは、驚いて顔を見合わせた。

「もう、夜だぞ。」

「呼びにいきましょうか。」

イテカレスはうれしそうだった。

「ばか、そんなこと出来るか。首を切られるぞ。」

「だれがお目当てなのでしょう。」

廊下の交差するホールの真ん中で、三人が頭を寄せても、まあ、見当がつくわけもない。

「イーリアス様・・・。」とイテカレスがつぶやいた。

「もう、いいんじゃないか。あれから随分たったことだし。それよりも、このままだと、あいつが参ってしまう。」

「そうですね、王国はどんどん広がっていくのに、そのたびにあの人は傷だらけになられて。我々ではない誰かが、あの方には必要でしょう。」

「おまえ、いい役回りだな、今回は。」

そこへ重い体を左右に揺すって駆け足で、少なくとも本人はそう思っている、汗をかきかきタラバスカニがやってきた。

「ふう、ふう。見つかりましたか。あの方、ハアハア・・・。」

「後宮に誰かいるか。」

肩で息をしながら、

「誰か？誰かとは、沢山居るでしょうが、いや、そういう意味であれば、私はそこまでは・・・ハアハア。いえ、そういえば一人おられますな。

でも、まさか、あなたそんなことがあろうはずがない。

はっはっは、ご冗談を。」

といつつ、丸い腹を突き出して笑った。

「いるのだな。」

「え、いや、妙齢の方がおられますが、そんなことはありえませんが、普通は、ふっふっふ。」
何にも知らないのだな、というように得意げだった。

「誰だ。」

しつこいな。

「イズマイル様の姫がおられますが、まさか。仇敵の王女ですぞ。そんなことがあろうはずが・・・ええ。ええっ？」

シル、イテカ、ワーズの三人は顔を見合わせた。

「十分すぎるくらいありえるさ。」

「イーリアス様は、父親の敵で自分を殺そうとした男の孫でられました。」

「それに比べれば、イズマイルの王女など罪がないもんだ。」

そんな騒動が起こっている頃、後宮ではアリシアの声が、
「ダメ、まだそんなことをしてはいけない。ものには順序と言うものがあるだろう。
それもダメ。

何度いったらわかるの、もう。」

アレスミリアンは、さいころを転がしていた。

「ほら、ここからこういったほうが早いだろう。」

「だから、この道の通りにコマを進めるのだ。道を勝手に作ってはいけない。」

「うーん。やっかいだな。」

「そうそう……。いつも一人でやっていたから、相手がいると楽しいぞ。次は私の番だ。」

ペルジアの一夜は更けていく……。

鳥が、起きろ朝だと騒ぎたて始めた。

「外が明るくなってきた。」

「私は、この、夜が終わって外が白々としてくる明け方が好きだ。」

「どうして。」

「孤独りの夜が終わって、鳥が来てくれるから。」

アレスミアンは言い出しにくそうに切り出した。

「今日も、沢山の人と会わなければならない。」

アリシアの目は少し充血して赤かった。

「うん、わかった。行っていいぞ。」

「いいのかい。」

「昨日のようなことは・・・、初めてでどうしていいか分からなかったのだ。私のことを思っていると約束してくれ。そうすれば寂しくない。そして、今日も来てくれるなら。」

「分かった、約束する。」

アリシアは、男の指に自分の指を絡め、その大きさに戸惑った。

男は、昔日を思い出し、軽い心の痛みを覚えた。

それでも、二人は約束を交わした。

「ふう。」

日は、どんどん明るさを増していった。

先ほどまでひんやりとして落ちていた空気も、どんどんふくらみを増している。

「お帰りなさいませ。」

と、ワーズウォードが円柱の影から身を起こして声をかけた。

「なんだ、こんな時間にどうした。」

「昨日の夜は、大騒ぎでした。」

シルヴェスタ様、イテカレス様、タラバスカニ様、で結局私が居残りです。お待ちしております。」

ワーズウォードは寝不足で不機嫌そうだった。

アレスミリアンの顔が赤くなった。

「タラバスカニ殿にも・・・。」

「だって、ここのことはあの人に聞かないと分からないじゃないですか。」
ふわぁーと大あくびをして背伸びをした。

「出迎えてご苦労。」

「はい、はい。私は、今日は寝ます。」

「私も少し寝むりたいなあ。」

「そんな時間はありませんよ。お召し物も変えませんか。」

というところでワーズウォードは身を寄せ、声を潜めて

「ところでどなたですか、お相手は。」

と尋ねた。

「・・・アリシア殿。イズマイルの姫だ。」

「よしっ！やったぞ。」

衝立の陰から声が上がった。

イテカレスとシルヴェスタが姿を現した。

「なんの騒ぎだ。」

アレスミリアンは少し不機嫌になってきた。

「おこるなよ。」

とシルヴェスタがなだめるような口調で、

「タラバスカニと賭けをしたのさ。やつはそんなこたぁないと、言い張るのでね。
これでひとり金十枚の儲けだ。」

と、からくりをばらした。

「あまり、あの親父をいじめるのはどうかと・・・」

「まあまあいいじゃないか。これからは一蓮托生。同じ船に乗ったのだからな。船乗りは賭け事が好きなんだよ。」

タラバスカニは、賭けに負けたことを聞いて慚然としたが、金払いはよかった。
彼にとっては、金三十枚など何ほどのことでもなかったのだ。

それよりも、彼にはもっと気にかかることがあったのである。

第四王子を後継者に決めたまではよかったが、それをどう維持していくかを、彼は腐心していた。
わずか十二歳の王では、イズマイルのように、その名ひとつで周囲を圧することなどありえない。

ペルジアは、二度の敗戦で兵力を著しく損なった。
いまはアレスミアンの軍隊が駐屯しているからよいものの、それが引き上げた後、周囲の国から攻められたときに果たして対抗できるかどうか、はなはだ心もとなかった。

それに第三王子のこともある。だまって従ってくればよいが、彼はともかく、その重臣たちが果たして素直に従うかどうか。

賭けに負けたことは腹立たしいが、第四王子とアレスミアンが縁戚関係になれば、それは好都合かもしれなかった。

第四王子、イスタルダがアルシャーファに到着したのは、その二日後のことだった。

彼はアレスミリアンの前に進むと居住まいを直し、
「イスタルダでございます。よろしくお引き立てください。」
と、後見人に教えられたとおりの挨拶をした。

「あなたは、いずれ即位してペルジアの王となられる。
が、その年齢で国の政をみるのは荷が重過ぎるだろう。
ここにおられるタラバスカ二殿を敬い、何事もタラバスカ二殿と相談なされるがよい。

私はあなたのお父上や兄を、やむなく討ってしまった。あなたにとっては仇となるが、私の国も国王と王子を喪った。

互いをうらみに思っているのは、恩讐は果てしなく続く。無益な争いの末に、双方が滅びの道を歩むことになるだろう。」

「今日よりはあなた様を兄と思い、両国の友好に尽くします。」

「うん、いい答えだ。」

アレスミリアンは満足そうに微笑んだ。

「さて、あなたの姉上に、お目通りされるが良い。」

イスタルダは、一人アレスミリアンに付き従い、後宮の門をくぐった。
フェダーインは、相変わらずここを通れるのは王だけだと言い張ったが、アレスミリアンを通すことで曖昧になってしまった決まりを、なし崩しにすることは造作もないことだった。

アレスミリアンは、イスタルダをアリシアの下に届けると、その足で後宮を後にした。彼には片付けねばならないことがあった。

「さて、タラバスカ二殿。もう一人の王子のことですが・・・。」

「困ったことになってしまいました。」

「というと。」

「いまだ、在地を離れる気配がありません。それどころか、兵を集めているとか言ううわさも。

」

年下の王子が、自分を差し置いて王位を継承するとなると、自分の身を不安に思うのは無理からぬことだ。根拠地を離れ、都に出てこいと言われても、はいさようですか、と出てくる気にはならないだろう。

しかし、それは自分の身の安全を恐れて、という受身の姿勢に同情するという意味においてだ。

「うわさですか。それは好都合・・・、いや厄介なことになりそうですね。」

「内乱になれば、国が二つに割れます。まあそんなことは珍しくもないのですが、こうして国が傾いているときにそういうことがありますと、他国の介入を招くことになります。

そうなれば、死肉を食いちぎる禿げたかのように、いいように食べ物にされるだけです。」

「それは第三王子の意思でしょうか。それとも、誰かが裏でよからぬ事を考えているのか・・・。」

「たかだか十五やそらの王子では、担ぎ上げられることはあっても、拳兵など出来ますまい。

」

第三王子、イズファファンは父と兄の敗死により、おもわぬ王位が転がり込んでくるものと思っていた。

特に、第三王子の母方の縁戚につらなる一族は、第一、第二王子の一族の栄華の陰で冷や飯を食わされていただけに、その訃報を聞いてほくそえんだ。

それがどうにも思惑通りに行きそうにない、雲行きが怪しいと感じ始めたのは、アレスミリアンがアルシャーファに入城し、ペルジア王国が解体されたころからである。

地方都市の小さな世界の中で、都のきらびやかな生活に目を奪われているだけの彼らは、自分たちに都合の良い未来を夢見しようとした。たとえ国が小さくなくても、順序からいけばイスファファンが小ペルジアの王位に着くものと疑わなかったのである。

そこへ、イスタルダが後継者に指名され、イズファファンが他国へ連れ去られることになったと言うことを知ると、小都市の小さな世界は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

こうした小さな社会では、声が大きく威勢の良いものが、その場の雰囲気を押すものである。
イズファファンを擁立する一族は、これで一気に主戦論に走り出した。

近隣の諸都市に呼びかけ、同盟を結び、アルシャーファを制圧した暁には相応の報酬と地位、往々にしてそれは絵に描いたもちに終わるのだが、、、を約束したのである。

タラバスカニの口から、アレスミリアンの耳にその情報が伝えられたのは、まさにそのころだった。

「見物がてら、少し出かけるとしよう。」

と言い、アレスミリアンは休息なった一万五千の兵を連れて、南下した。

イズファファンの本拠まで、通常の行軍で七日の距離である。

その距離を、アレスミリアンは文字通り物見遊山に出かけたように、あちらの都市から別の都市へとゆらゆらと渡り歩き、すべての都市でその代表の歓待を受け、二三日過ごしては次の都市へ向かうと言うことを繰り返し、二週間過ぎてもまだその半ばにすら到達しなかった。

アレスミリアンの兵は、各都市での歓待の礼として騎馬と歩兵による模擬戦を演じた。それは、古来よりクラコワに伝わるアズールの英雄譚の一部を脚色したもので、一万五千の兵を実際に動員して行くと、その兵力を誇示することと、兵の緊張感を保ちかつ鍛錬にもなるという効果があった。

その軍団がゆっくりと近づいてくるにつれ、イズファファン派の人々は徐々に思い出したのだ。

アレスミリアンの軍団は、東方世界最強のイズマイルのペルジアを破ったということ。

一度は同盟を結んだ近隣諸都市は、日が経つにつれ当初の勢いを失いはじめた。

冷静になればどちらが優勢かは明らかだった。

ただ振り上げたこぶしを下ろすするには、体面と、時宜が必要だったのだ。

アレスミリアンが遊山を続けている間に、諸都市へは大っぴらに使いが派遣され、彼らは一様にこうだったのである。

「ペルジアの行方について、明らかにしてこなかったのはこちらの落ち度である。ゆえにいま兵を収め、新王に従うのであれば、此度のことは不問に付す。」

降伏しろ、では面子が立たない。けれども、先に謝るからそちらも鉾を収めよ、であれば体面が立つ。小さな部族の、狭い社会の首領であれば、その程度で十分だろう。

こうしてイズファファン派を裸にしていった、そのあとのことである。

「なんだ、今日は朝からやけにさわがしいな。」

「あんだ。おもてを兵隊が走り回っているのよ。」

「あん？兵隊なんぞ、この間から人相の悪いのがうようよしてるだろう。まったく物騒でしかたねえ。」

「そうじゃなくて、ペルジアの兵隊じゃないの。見たこともない格好をしているのよ。」

「どーれ。」

というと、かかあがとめるのも聞かず戸口から顔をのぞかせた。

「うへっ！なんだこりゃ！」

夜を徹して残りの行程を駆け抜けたアレスミリアンの軍団は、散々待った挙句にまだ来ないだろうと高をくくっていたイズファファン派の裏をかき、忽然と都市に侵入して中心部の宮殿以外を制圧した。

宮殿と言っても、地方都市にあるそれらしき建物と言うぐらいの規模である。そのまま突入しても制圧にそれほどの手間は取らなかつただろう。が、乱戦になり、兵士たちが興奮すれば皆殺しになりかねなかつた。

そうなれば、まかり間違えば、恐怖政治ととられても仕方がない。

「おいそこの親父。」

「へい。」

「危ないから顔を出すんじゃない。ちゃんと窓と戸を閉めて、家にいろ！」

「へい。」

通りすがりの兵士にいわれ、男はあわてて頭を引っ込め、戸に門をかけて奥へと逃げ込んだ。

「おい、かかあよう。」

「何です、情けない顔をして。」

「えらいことよ。」

「だからなんです。」

「よその兵隊が、ペルジアの言葉をしゃべりやがった。それとも俺の耳がどうにかしちまったのか。」

住民との無用な衝突をさけるため、通訳が配されていただけのことであるが、あらかじめこういう事態が想定されていたということでもある。

アレスミリアンがロンダルトに帰還してから反乱が起こったのでは、アレスミリアンが乗り出した頃には全てが終わっている可能性がある。

親クラコワーロンダルトの政権を立てても、覆されては元も子もない。反乱を起こすのであれば、アレスミリアンがこの地にいるときが望ましかった。

なおかつ、アレスミリアンがそれを鎮めることにより、現政権は親アレスミリアンの度を強めるだろう。二度とペルジアとの戦火を起こさないためには、親密な関係を維持することが必要だった。

イズファファンをロンダルトにつれて帰るといったのは、反乱の期限を切るためである。担ぐ神輿がなければ祭りも出来ない。

イズファファン派は、知らぬ内に不利な状況での決起を促されていた。

「流血は望まない。無条件に投降すること。抵抗しなければ命は助ける。」
これがアレスマリアンの降伏勧請だった。

宮殿内は主戦派と講和派が対立した。

万に一つの勝ち目もない主戦論は、滑稽なだけである。けれども、死に行く己に陶醉している者にはその滑稽さが分からない。

それは過激なほどに先鋭化し、その生贄を求める。無為な時間が、流砂のように流れ過ぎていく。

「突入しますか。」

と隊長が尋ねた。

「このまま戦闘が始まれば、王子の命が道連れにされかねない。」

宮殿は南に門があり、今は堅い樫の扉で封鎖されている。

おそらくその後ろには、多くの守備兵が剣を構えて配置されていることだろう。

それ以外には、人が自由に入れるような開口部はなく、採光用の窓が壁面に開けられているだけだ。

正門を破りに行けば、抵抗は激しく双方に相当数の死者が出るに違いない。

目の前で殺戮を見て冷静でいられる人間は、さほどもいない。逃げ場のない宮殿内で、乱闘になればどのような惨劇がおこるか、を想像するのはたやすかった。

「壁を破れるか？」

「日干し煉瓦ですから、それほど困難ではないと。」

「王子の居場所は特定できるか。」

「逃げ出したものの話によると、この宮殿の北辺の部屋が居室となっているそうです。」

「よし、ではまず南の壁を壊して突入する。敵兵をひきつけておいて、次に北の壁を破り、侵入して王子の身柄を確保する。扉は使うな、敵兵が待ち構えているだろうからな。屋根が崩れない程度に、せいぜい派手にやることだ。」

最初に、南端の東西の壁に丸太が打ち込まれ壁が壊された。

城内は崩れた日干し煉瓦の土埃が舞い上がり、思わぬ方向からの敵の侵入に守備兵は浮き足だ

った。

そこへ城内各所からの援兵が到着し、進入した兵士を城外へ押し戻した。勢いを得た守備軍が逆に攻勢に出ようとする頃、北壁に丸太が打ち込まれ、手薄になった城内へと包囲側がなだれ込んだ。

有利と見せかけ、敵兵を誘い込み、数の優位を作って制圧する。いつもながらの、アレスミアンの手法だった。

「王子を探せ。身柄を確保しろ。」

「命が惜しければ武器を捨てろ。命はとらない。」

包囲側は口々に叫びながら、屋内へと飛び込んでいった。

アレスミアンが宮殿内に入ると、ところどころに傷を負った兵が倒れたりうずくまったりしていた。

この程度で済んだのであれば、致し方ないですむだろう。状況の読めない、強欲な首領についた不運を嘆いてくれ。私だって、これぐらいの傷は負ったことがある。

王子はおびえた様子で従者に囲まれて座っていたが、外傷はないようだった。

「イズファファン王子か？」

王子は頷いた。

「あなた自身の将来のことだから、あなた自身で決めるがいい。けれども選択肢は三つだ。

ひとつは、王族の身分を捨てて市井の人間としていきること。二つ目は反乱の責任を取って、牢獄に入ること。三つ目は、ロンダルトに来て治世を学ぶこと。」

「マレーアは私こそ次の王にふさわしい。順序からいっても私が王だといった。」

「マレーアとはあなたの後見人か。」

王子はまた頷いた。

「その男は、おそらくあなたが王になれば自分の地位も上がり、甘い汁が吸えると思ったのだろう。

つまり、あなたが王になればマレーアの一族が重臣となり、ペルジアの富を我が物にし、専横を極め、やがて王をないがしろにして、己の血縁のものを王位に着けようとするだろうということだ。

いまここで死ぬか、この先のいつか、惨めな死を迎えるかのどちらかだ。」

選ぶ道はひとつしか残っていなかった。

「ロンダルトとやらへいく。」

「この騒動の首謀者はどこだ。」

土ぼこりで、髪の毛まで砂色に白くなった隊長が応えた。

「混乱にまぎれて逃げたようです。誰も知らないといっています。」

「ただ欲の皮の突っ張った馬鹿なのか、それともそれなりの策士なのか、それぐらい分かればいいのだが。」

「どうするのですか。」

「馬鹿ならほうっておいてもたいした害はない。もう担ぐ神輿はなくなったから、何も出来ないだろう。」

策士ならまた何かをしでかすかもしれない。其処が気がかりなのだが、とりあえずこの騒動の責任は誰かに取らせなくてはならない。」

「おいかけて首をはねますか。」

アレスミリアンはおいおいというように見て、

「というような物騒なことはしないで、所領と身分を返上させよう。なに、誰かが食わせてくれるさ。貴族にとっては、首を刎ねられたほうが本望かもしれないがな。」

この騒動がひと段落すると、イズファファンはいち早くロンダルトに送り出された。

かつて彼の父や兄が行って戻らなかった街道を、彼もたどったのである。

森を抜ける道は、大きく拡張されたとはいえ人里から離れ、都住まいしか知らぬものにとっては寂しいことこの上ない。

何度引き返したいと思ったか分からないが、一人で生きていく勇気も知恵も彼にはなかった。

旅の途中、どこかで殺されるのではないかと彼は恐れた。東方では新しい王が即位すると、ライバルの王子が消されるということが、度々起こったからだ。昼も夜も、武装した数十人の警護の兵士がたてる、鎧と剣の触れ合う音にびくびくとして過ごした。

ようやく二つの森を抜け、クラコワに到着すると、其処は彼の暮らした故郷とは違う、緑の芝草と水の豊かな湖沼や川が流れる桃源郷の風景だった。

彼にも、イズマイルが一度ならず二度も遠征し、この地にこだわった訳が理解できるような気がした。

殺されることが無いのだと知ると、そういうことに考えを及ぼす余裕も出来た。

死を身近に感じて、生の喜びを知って、彼の中で何かが変わったのかもしれない。

アレスミリアンがアルシャーファに帰還するまで一月が経過していた。

その間にも、アルシャーファの街は、随分変わったような感じがした。おそらく、新しい王が決まり、国の形も定まったことで民心が安定したからだろう。当分のあいだは、内戦や外征がなさそうなことも人々の気分好感を与えていた。

随分前に、シルヴェスタが、この国は戦いに疲れ、内実はぼろぼろだと言ったことを思い出していた。秋の収穫は兵士たちの食糧となり、男たちは戦場に駆り出されていた。

この日農民は、自分たちの収穫を持ち寄り、市を立てた。アレスミリアンはその市の中をわずかな供だけを連れて歩いた。

クラコワやロンダルトでは見かけない、大きな瓜や緑色の大粒の葡萄、彼には何に使うかわからない香料や辛料。かごに入れられた鶏、魚、元の姿の分からぬ肉。小麦粉を焼いたらしい丸くて扁平なパン。

さまざまなにおいと、けむりと、売り言葉と、正体の分からぬただならぬ音が入り混じり、この国に来てからはじめて感じる、平和な時の人々の熱気を浴びた。

市に立つ人と、それを買う人であふれかえる広場を抜け、狭い路地に入り込んだ。その両側は銅を打ち出した盆、ランプ、絨毯、綿布、衣服、それから様々な日用品を並べた店が、どこにその果てがあるかも解らないように続いている。

通り道は石畳で舗装され、砂埃も立たない。この世の中で必要とされるもので、ここで揃わぬものは無いだろう。一つ、また一つというように店が増えこうした商店街が出来たのではなく、誰かが意図的にここに様々な店や工房を集めたのだ。

そういう偉大な事業をした人に、心のなかで敬意を表した。

「オニイサンコレカッテイキナ。」

小さな顔の親父が、片手に載せた何かを見せようとしている。
顔を近づけるとそれは腕輪のようだった。

「きれいな細工だ。これは金かい？」

そうだというように親父が頷いた。手に取った重さから言っても、それは間違いないようだった。

「いくらだ。」

親父の黒い目を覗き込んだ。

「ジュウロクダーヨ。」

「それは高い。ハチでどうだ。」

親父は顔をしかめ、両手を前に出してダメダメというように振った。

「此レキン。キンは大事。戦争デモ持ッテ逃ゲル。ウル。飯クエルネ。イノチノツギニダイジ。デモオニイサンハジメテ、ジュウゴ、イイヨ。」

なんだ、結局下げるんじゃないか、どこでも同じようなものだと思いながら、

「ジュウだ。」

親父は後ろの従者に向かって、なんでこんなに値切るのだ。金はあるだろうというように腕を広げてみせた。

「わかった、じゃあその指輪もつけてニジュウにしてくれないか。」

おやじは口をへの字に曲げたが、

「イイヨ、オニイサン。アナタ買物ジョズ。ニツデニジュウネ。」

といって腕輪と指輪を差し出し、にっこり笑った。

「トコロデオニイサン。コノ首飾リモカッテイキナ。」

といって、指を三本立てた。

「ははっ、また来るよ。その時にな。」

といって手を振り、

「さて、とっとと宮殿に戻らないと、身ぐるみはがれるな。」と従者を見やった。

ひと月ぶりの再会だった。

「変わらないようだな。」とアリシアがいう。

「この部屋はかわったな。何か物が増えたようだな。」

といいながら、アレスミリアンはぐるりと見渡した。

簡素で気持ちのよかった部屋が、何か風通しでも悪くなったような気がする。敷物やら壁掛けやら、一度もあけられたことの無いような包みが、片側に積み上げられていたり。

「弟が王位に就くことになったからな。女たちが、みな私を通じてよしみを結ぼうとする。」

「そうか、それは面倒だな。」

そうだ、というようにアリシアが苦笑した。

「はじめの内は物珍しかったのだが、そのうち煩わしくなってきた。何もしていないのに、何となく騒々しく疎ましい感じがする。こんなに物があると。」

といい、ため息をついた。

「でもそれは仕方がないことだ。あの女たちは、自分だけでなく、侍女たちの行方も定かではないからな。私とて、同じ立場ならそうせねばならないだろう。ここの女たちには、自分の身を処する自由がない。」

「そのことは考えている。以前、あなたに言われたとおりにね。それより、これ・・・なんだけど。」

といって、腕輪と指輪を差し出した。

「市で買ってきたのだ。あまり法外な値付けをするので少し安くさせた。」

「値切ったのか。」

アレスミリアンは涼しい顔でうん、と頷いた。

「なんてやつだ。女への贈り物を値切ったのか・・・。」

「いけなかったか？」

「いけないとかじゃなくて・・・」

アリシアはため息をついた。

「わたしは、男から贈り物をもらったのは初めてだ。でも、それを市で値切ったなどと言われるとは思わなかった。」

といいながら、差し出されたそれを手に取り、

「しかも、これは姫が身につけるような物ではないな。町の娘なら十分だろうが。宝石の三つ四つははまっていないと・・・。」

と目の前で見回していった。

アレスミリアンは困った。

「いや、戦の帰りで持ち合わせがなくて・・・。」

「お前は本当に、王なのか？王が金を払って買い物するとは、お前の国は、どういう国なのだ。」

「それは、・・・私が特別なのだ。子供の頃は貧乏だったので・・・つい、言い値でものを買わない癖が・・・。」

アレスミリアンはいよいよ困ったことになったと思い、それが表情に出た。

アリシアはとうとう吹き出した。

立ち上がり、歩み寄ってアレスミリアンの肩に頭を持たせてささやいた。

「うれしいぞ。本当にうれしい。私の身分にではなく、私という女にくれた贈り物だからな。」

そしてアレスミリアンの顔を見上げて、

「おかえりなさい。無事にかえってきてくれて、ありがとう。」

そう言って、涙をぽろぽろとこぼした。

この東の国では、季節が変わらない。けれども月日は早足で過ぎていく。

アレスミリアンがザルウィー伯に本国を押し付けた、三ヶ月の期限が過ぎようとしていた。その間、アレスミリアン不在のロンダルトは、枯葉の下で冬を過ごした虫たちが陽気に誘われて現れるように、一度は春を奪われた都会の貴族達がアストアシタ宮に姿を見せ始めた。

彼らは三年近く、ずっと息を潜めて成り行きをうかがっていて、いよいよ窒息しそうになっていた。

彼らはペルジアの二度目の来襲よりも、それによるアレスミリアンの動向に関心があった。

ペルジアには、彼らが千人束になってかかろうと、どういう知恵もなかった。それはアレスミリアンに頼るしかなかった。そのことでアレスミリアンが敗死すれば、そのときは新たな主の下でなんとか生き抜く方法を考えねばならない。そういう世渡りは何とかできそうだった。

アレスミリアンが首尾よくペルジアを討ち果たし、ロンダルトに帰還せず、ペルジアに向かったと聞いたとき、彼らの誰もが春の気配を感じた。

硬い地面がわれて草が芽を出すように、木々のこずえから葉が芽吹くように、春だ春だと野を走り回る野鼠のように、彼らはアストアシタ宮のかつて黒の宰相の開いたサロンに集まるような、そうでもないような、偶然立ち寄ったような、何か旧知の人にでもあったような目配せをし、小さな囲みを作ったり、離れたり、ひそひそ話したり、大声で笑いあったり、ウェルモンテのいた頃を懐かしがったりするのであった。

そうした西宮の騒ぎがザルウィー伯の耳に入らないはずはない。けれども、こういうときに手足となって動けるアレスミリアン一家は、ペルジアに出払ってしまっていた。

いや、一人を除いて、ね。

ザルウィー伯は、ロンダルトの中に広大な領地を持つ地方貴族である。かつてはその地方の王として続いた家柄であったが、古い昔のいわく因縁により、一貴族としての地位に甘んじている。

ザルウィー伯ヨクアルはそのことについて、何のわだかまりを持ってはいなかったが、彼の持ち合わせる貴族趣味が、黒の宰相ウェルモンテの放つ異臭を拒み、そのサロンとは常に距離を置いていた。

アレスミアンはロンダルト入りの直後から、この貴族を当てにした。それはウェルモンテの黒い色がついていないことが、はっきりと分かっている貴族が彼だけだったからである。そして、領民を守るためにロンダルトを半ば捨ててかかった彼の判断に、通じるものを感じた。それはヨクアルにも同じだった。

「なにやら、西の方が騒がしいようだな。とっとと、潰しておけばよかった。」
と、少し面長な顔の先についているあごをなでて言った。

「ご冗談を。宮殿はおもちゃではございません。でもまあ、以前もそうでしたが、あそこの空気はいささか汚れております。」

「いまのところ、それをきれいにするのは難しいのだ。彼らは昇殿の資格を持っておるから、出入を禁ずることは出来ない。口と耳をふさいで、話をしてはいかぬともいえない。問題は誰と誰が、何を話しているかだが……。

何か良からぬたくらみがあっても、その首謀者が分かればそれを潰せば事は収まる。が、それもわからん。何人かに探りを入れさせたが、本当にたわいもないことを話しているらしい。」

肘掛に腕をのせ、両指を絡ませ、足を組み、

「いまは静観するしかない。」

と、その貴族的な容貌を曇らせ、残念そうにいった。

「忘れた頃に……、忘れたことを後悔するようなことが持ち上がるのだ。こういうことは。」
すこし、声に苛立ちが出た。

しばしの沈黙の後、

「ようございます。」と聞こえた。

うん？というように見た。

「壁に耳あり、でございます。この宮殿には表の世界とは別に、裏の世界があります。この宮殿

で起こることを聞こうと思えば、聞けないことはありません。もちろん聞こうと思えば、ですけど。

私どもはそれに通じておりますし、この宮殿が、久方ぶりに真の主を得たことを良く知っているつもりです。柱に巢食うシロアリなぞを放っておくわけには参りません。」

ヨクアルは、貴族的に驚いた顔を試してみた。

「どうかなさいましたか。」

「世間話のつもりだったのだが・・・、いや、少し驚いた。そなた侍女ではなかったか。」

「はい。イーリアス様にお使えしておりました。いまは、アレスミリアン様のお世話をさせていただいております。」

「名は？」

「セシリーでございます。」

「そうか。王ともなると、侍女まで世を憂うのか。」

ヨクアルは、貴族的に思案した。

「いえ、アレスミリアン様をご心配申し上げるのです。」

「そういうものか。」

「はい。」

おそらく、我が家にもこういうものがいるのだろう。私の知らぬところで、よき様に取り計らっているものがいて、それで我が家は動いているはずなのだ。

そうでなければ、我が家はどこかで途絶えていただろう。当主がみな英邁であったはずはない。馬鹿や阿呆も踊っていたに違いない。

しかし、だ、それは侍女の身のものではあるまい。

「セシリーとやら。」

ザルウイー伯は、貴族的な笑みを浮かべて言った。

「私は王がうらやましいぞ。」

「はい。」

セシリーも満面の笑みを浮かべて応えた。

ところで「この茶と言うものは、どうにかならぬか。すこし私には水っぽいのだが。」

「いいえ、それは無理でございます。茶はそういうものです。」

「珍しい高価なものと言うのは、よく分かるのだがどうにも。」

「あら。ヨクアル様にお出ししないと、私どもはお相伴に与れません。何卒ここは我慢いただき

ませんと。」と、語尾を強めた。

うむ、逆らうと、今度は何を出されるかわからん。

「あいわかった。よきに計らえ。」

と貴族らしく、優雅に応えた。

王もあれでなかなか大変なのかも知れんな、と、片方の肘をついて、頭を支えた。

アルシャーファのアレスミリアンの周囲では、帰還に向けた動きがあわただしくなってきた。兵士たちもすでに三ヶ月故郷を離れている。

放置すれば不満が大きくなり、アルシャーファで一騒動起こるかもしれない。アレスミリアンは予定通りに帰還することを公にした。

イスファファンの騒ぎを最後に、ペルジアは安定の方向に向いていた。焼かれたオアシスの町は徐々に復興し、交易の隊商もアルシャーファに集まりだした。

アルシャーファの市は賑わいを取り戻し、誰よりも民衆が平和と安定を望んでいた。そろそろタラバスカニにとイスタルダに譲り渡しても良かろうと思った。

後宮の女たちは身寄りのあるものは故郷に帰り、そうでないものは後宮に住み続けるも、市中に移り住むのも自由となった。アルシャーファの市中に移ったものは、婚姻を結ぶまでは国が年金で養うことになる。後宮は空き部屋だらけになり、宮殿の中でも随分風通しの良い一角となった。

フェダーインは相変わらず門番として立っていたが、後宮がさびしくなったのと同じように、彼もさびしそうだった。

けれども、この後宮の門をくぐるのは相変わらずアレスミリアンだけだった。

「やあ、フェダーイン元気かい。」

「はい。ご主人様。おいでなさいませ。」

いつものように通り過ぎようとする、

「あの、ご主人様・・・。」と呼び止めた。

「うん。何だろう。」

半ば体をいれたまま、立ち止まった。

「ここも随分寂しくなってきました。私も身の振り方を考えました。」
アレスミリアンも、それはもったもな事だと思った。

「考えましたが、特に思い当たりません。困っております。」
この大男が、こうして立ち続けながら頭を悩ましているところを想像すると、おかしかった。

「わかった、よいように考えておくよ。」

「はい、ありがとうございます。」

フェダーインはその大柄な胸を二つに折り、深々と頭を下げた。

「アリシア。」

と、入りがけに声を掛けたがいなかった。

中庭で水音がする。

「アリシア？」

アリシアは長い衣のすそを上げ、水槽の水に足を浸していた。

アレスミリアンの顔を見、子供のように笑った。こうしているとやはり少女に見える。

「冷たくて気持ちいい。夏が近くなると、いつまでも水辺にいたくなる。私は王女だから気ままに遊んでいたが、女たちはそうもいかない。お互いの距離や関係は微妙だからな。けれども随分人が減って、涼しくはなった。」

「あと二月もすれば、みなここから去ってしまうだろう。アルシャーファに残る者も保護される。もちろん身分を明かさない限り、人に知れることはない。暮らしに不自由はしないはずだ。」

「そうか。世話を掛けたな。」

アリシアは横を向いたまま答えた。

今日は何となく顔を合わせ辛い、そんな風情だ。

「ひとつ聞こうと思っていたのだけれど、なぜあなたが、彼女たちの行く末をそんなに気に掛けるのだ。」

「彼女らは父の女だ。けれども私は王女だ。だから立場が違う。わたしの母は王妃だった。父は母の死を悼んで、それ以降王妃を設けなかった。だから父と兄が死んで、王家のものでは私が一番の年長となった。

私が気に掛けてやらねばならない。弟たちでは、そこまでの気は回らないだろう。」

「そういうことか。」

私は王女だから……。

そう、だからそうだったのだ。きっと。

「あとひとつ、まだ応えてくれないことがある。」

だから、惹かれたのだ。

「そう。」

と言い、水面を向いたきり足をぶらぶらとさせていた。

鳥の影が通り過ぎたと思うと、それを追いかけて突風が吹きぬけて、アリシアの髪を隠していたうす布を奪い去っていった。

「あっ・・・。」

その行方を、目で追った。

長かつややかな黒い髪が日の下で輝いていた。

「ああ・・・。」

とため息をついて、そのまま仰向けに倒れ、細い指で強い日差しをさえぎった。

「衣ぐらいいつでも・・・。」

と言いかけたのは、さえぎられた。

「違う、そんなことじゃない・・・違うのだ。」と。

すこし、切羽詰ったような声だった。

「この地では、夫となる男以外に髪を見せてはいけないことになっている。」

「えっ。」

「私は、しばらくしたらこの後宮から出て、書物ではない世界を見てみようと思っていた。遠くまで旅をして、そしていつか出会ったら、よい男と添うのも悪くないと思っていた。」

アリシアはまだ、空に向かって話している。

「けれども、見られてしまった。王とはいうものの、こんな情けない男に。お前しか知らないのだ、わたしは。」

そういいながら、片手をアレスマリアンに伸ばした。

アレスマリアンはその手をしゃがんで取った。

「お前は、以前済まないと思っているといったな。」

アレスマリアンはこっくりとした。

「では責任を取ってくれ。」

アレスマリアンは、噴出しそうになるのをこらえていた。

「こら、笑うな。」

とアリシアがたしなめた。

「そうだ。そんなことがあっても面白いだろうと、どこか遠くへ出掛けてみるのも面白いだろうと、ちょっと思っただけだ。」

と白状した。

「私は、この国や宮殿の宝物や宝石には一切手をつけなかった。

それは私の兵たちも同じだ。何も奪わないし、何も持ち出さない。国と国としてつきあうなら、相手の誇りを傷つけるような略奪をしてはいけない。だから、そう決めてきたのだ。」

とった手を引き、体を抱き起こして告げた。

「けれどもその誓いを破ることにする。一番の宝物を、私の国にさらって行く。」

「もう・・・、バカ。」

「フェダーイン。」

「はい、ご主人様。」

帰り際に、先ほどの約束を思い出した。

「君の仕事を決めた。」

「ありがとうございます。で、どのような。」

「この後宮は、このあとしばらくは住人がいなくなる。」

「はい。」

存知ておりますとも。

「この方が、鳥の世話をされていたが、この方も間もなくいなくなる。君はその代わりに鳥の世話をしてくれないか。もちろん庭も、部屋も、今のまま、また住人を迎えられるように維持するのだ。」

「私が、でございますか。」

と、フェダーインは自分の大きな体を見回して、何か不釣り合いな仕事のように思った。力には自身がある。

が、鳥にえさをやったり、庭を管理したり、そういう庭師のようなことはしたことがない。

「大丈夫、君は見かけによらず優しい男だ。私が保証する。」

アレスミリアンにそういわれ、いい気持ちになったのか、

「では、そういたします。」と承諾した。

それから、

「ところで、そのお方は。」

と、アレスミリアンの傍らの人物を聞いた。

「先王の姫君だ。私と一緒にここを出ることになった。」

フェダーインはあっけにとられて、二人が出ていくのを見送った。

廊下の先の、扉の向こうは、初めての世界だった。アリシアは、運命の扉を逆の方向に開いた。足を踏み出そうとして、とまどった。

「なんだかどきどきする。」

「それはそうだろう。外に出るのが初めてなら、そんなものだ。気になさらぬがよい。」

踏み出す、一足一足の下に感じる床に、何か違う感触がした。ただの微妙な凹凸なのだが、地面とはこういうものなのかというふうに、過敏に感じられた。

「お前は時々、訳の分からないことを言う。気になるからどきどきするのに、気にするなどはどういう事だ。」

「どいういうことも、そういうことも、あ、ほら、いたいた。」

知らない人が聞けば、ネコでもいたのかと思ったかも知れない。けれども、アリシアは思わず後ろに隠れた。

「アレス様、また雲隠れですか・・・この忙しいときに。」

と、ワーズワードが、歩み寄りながら声を掛けた。

「えと、その、後ろに居られるのはもしかして。」

「そう、アリシア殿だ。一緒に帰ることにした。」

「あ、そうですか。はいはい。」

ワーズワードはあっさり向こうを向き、立ち去ろうとした。

「驚かないのか。もう少し、わー、とか、えー、とかあるだろう。」

「わーとか、えーとか。」

「むっ。つまらない奴だなあ。」

そんなことはどうでもいいのだ、というように無視をして、

「アリシア様。初めてお目通り願います。ワーズワードでございます。以後、何事によらず遠慮無くお申し付けくださいませ。」

と、片膝立ちで礼をした。

アリシアは背後から進みい出て、

「ワーズワードとやら。何事も不慣れ故、迷惑を掛けると思います。よろしく頼みます。」と応えた。

ワーズウォードは、この国に来て初めて異国の人々を間近に見て、髪の色や肌の色の違い、顔立ちの違いを珍しく思った。

彼の都会びいきは相変わらずだったが、しかもそれはロンダルト限定だが、この姫のような高貴さと美しさを兼ね備えた人は、そうはいないと思った。

「ザヒルの親父には、当分隠しておく方がいいんじゃないか、きっと卒倒するぞ。」と、イテカレスが後から言ったのも分かる気がする。

「イスタルダ殿は、どこにおられる。」

ワーズウォードは少し考えて、

「居室でお勉強中ですよ。でも先生がイテカさんですから、どうだか。」
と、肩をすぼめた。

アレスミリアンはありがとうと言うように片手を挙げ、右手のほうへと向きを変えた。

「見るもの、見るもの、初めてで、何かめまいがしてきそうだ。」

「まだ宮殿内だから人も少ないが、市はこんなものではないよ。人だけでなく、馬や駱駝が行きかいたすることもあるからね。」

「ああ例の、お前が値切ったところか。」
よく覚えているな。まだ当分言われそうだ。

「・・・行ってみたいな。」

「うーん・・・。」

姫を連れて行ったら、それこそ大混乱に陥りそう。正体を隠してお忍びでいくとしても、いったいどれぐらいの兵を警備にもぐりこませれば良いか見当がつかない。

「ねえ、行きたい、行きたい。」

いっそ封鎖してしまうか。でも、それでは市に出かけることにならないし。

「お・ね・が・い。連れて行って。ね、いいでしょ。」

「何か、言葉遣いがいつもと違わないか？」

「殿方は、こういうふうにならされると、断れないのだろう。」
まったく、誰だこんなことを教えたのは。

「後宮とはそういうところでもある。侍女が教えてくれたのだ。私には必要なかったがな。殿方はかわいい女に弱いものだ。だから、ねっ、お・ね・が・い。」
いや、アレスミリアンはそれ以上に身近な女性に弱い。

「ああもう、分かったから。」
こういう面倒くさいことは、イテカにまかせよう、と、さじを投げた。

のちに彼は、

「そんなもの、市のものに言っとけば、完璧にやってくれるでしょう。どこですか・・・ああ・
・じゃ、ベジャーに言えば問題ありません。市の安全は彼らには信用問題ですから。

表も裏も知り尽くしていますからね、きっと何事もうまくやってくれますよ。」
とこともなげに言ったのけ、アレスミリアンをがっくりさせた。

間口はそれほど大きくはなく、扉も衝立もない。入り口の壁は顔料で青く、入り口にはめられた木枠は少しくすんだ紅色に塗られている。

「入りますよ。」

と声をかけると、若いイスタルダの笑顔が向けられた。その顔を見るたびにアレスミリアンは、自分も同じ年の頃に、こんな笑顔だったら良かったろうと思うのだった。

イスタルダは後ろの女性の姿をみとめ、立ち上がった。が、それがかすむような勢いで椅子を吹き飛ばし、イテカレスが立ち上がった。

「姉上。」

と、イスタルダ。

「お勉強はすすんでいますか。」

とかけた声は、肉親だけに使われる、幼きものを産着で包み込むような響きだった。イスタルダは見たことのない母が、若い頃はこうだったのだろうかとその面影を感じた。

アレスミリアンは、その姿を連れ去ってしまうことの、心の痛みを感じた。

「知らねばならないことが沢山あり大変です。でも、とても勉強になります」と若き王は、まだ生え揃わぬ風きり羽を見せ、誇らしそうにはばたきをした。

「こちらの慣例を、無理に曲げる必要はないのです。でも違う考え方もあるのだということを知っていれば、より良い道が見つかることもあるでしょう。

人は成長し、変わります。世も国もその人の集まりです。王の治世も成長し、変わらねば取り残されます。けれども因習をないがしろにしては、孤立します。

全てを変える必要はない。けれども変わって行かねばならない。分かりますか。」

見習いの王は、未来の王に敬意を表して

「はい。」と言った。

アリシアは、この“情けない男”を、選んだ？ことを誇らしく思った。

「今日はどのような御用ですか。」

「あなたには言いづらいのですが、わたくしは、この方の国へと行くことにしました。」

イスタルダは、すこし気落ちした表情で、

「そうですか。やはり行ってしまわれるのですね。そうですか・・・。」

と、いった。

「やはり、とは？」

「イテカレス先生がそう言っておられたのです。いつかそうなるから心の準備をしておきなさいと。」

そういわれて、二人はさっきから棒くいのように直立しているイテカレスを見た。

イテカレスの首のほうから頭のほうへ、赤いものがみるみると溢れていった。

「どういうことだ。」

「いや、わたくし、その、いろいろ考えてみなますに、いずれの、こずれの、そういうことになるのではなからうかと思いたったわけでした、それを急に殿下にお伝えするのも穀というか、粟というか、稗というか、要するに・・・、ふう。」

と、ようやく一息ついた後、

「申し訳ありません。先走りました。」と、開き直った。

「よい・・・。それは、いやな役回りをさせてしまいましたね。私もどう伝えたものかと、迷いながらここまで来ました。イスタルダ、たった二人の姉弟なのに、許してね。」

「わたくしは、二つの国と、お姉さまにとって、それは良いことだと思うのです。わたくしは、もちろん行って頂きたくはありませんが、それを言うと姉上はおば様になってしまわれる。これからは二つの国の交流も増えるでしょうから、もう会えないというわけではありませんし。」少年は、自分が思い描いていたよりも早く大人にならなければならなかった。

「どうした、何を突っ立ってる。」

「はっ。いや、そのベールはお取りになられないのですか。」

と、先ほどから気にかかっていることをいった。

「この地ではそういうしきたりらしい。」

「それは残念です。わたくしはこの国に参りまして以来、世にも稀なる美しい花々を見てまいりましたが、その花でさえ、姫の前ではつぼみとなり、しおれてしまうような気がいたします。」アリシアは、目と肩で笑っていた。

「こ、こんなことは覚えなくていい。」

と、アレスミリアンは王子に釘をさした。

イテカレスは言いたいことを言って、すっきりとした顔をしていた。

翌日、それを聞いたタラバスカニは、
「みなまで申されるな。」
と、手のひらで制し、
「お輿入れの準備については、このタラバスカニにお任せを。なに、荷車は掃いて捨てるほどあります。」
と、先の戦いで不要となった荷車を、ちゃっかりと朱に塗りなおし始めた。

「いやいや、かしこくも姫のお輿入れともなれば、十両や二十両の荷車では利きません。百や二百いや、いっそ船にて乗り込みますかな、ふおっふおっ。」
そしてそれは、
「荷車か船か」
という選択ではなく、
「荷車も船も」
という意味だと気づいたのは、支度があらかた整ったころだった。

どうもこの国の人の数と量の感覚が自分とは合わない、話を聞いてるとめまいがしそうになるとアレスマリアンは思った。

「わが国で、婚礼の儀が出来ぬのがいかにも残念。そうであれば、このアルシャーファの通りを花びらで埋め尽くしましたものを・・・。

せめて出立の行列ぐらいは目出度く仕立てませんと。このタラバスカニの名折れ、いや末代までの恥となります・・・。

いやもう、目に浮かぶようです。天に羽衣がなびき、行列の先導では楽師が音を競い、女たちが歌い、舞い、花を散らす。そのあとを五十人が担ぐ輿が進んでいくのです。小さなものではないけません。人が十人はのれるものでなければ。」

それは恥ずかしいからやめてくれと言おうとしたが、

「だめです。これはゆずれません。あなた様がよかろうと、姫はよくありません。いやしくもペルジアの姫の婚礼が、そこらあたりの貴族の娘と同じでよいなどあろうはずがありません。どうしてもとおっしゃるのであれば、このタラバスカニの甲羅、いや屍を乗り越えてお行きなされ。」

アレスマリアは、折れた。

「やれやれ、ロンダルトの仇をアルシャーファで討たれたな・・・。とりあえずアルシャーファを出る辺りまでは仕方あるまい。」

それをいうと、アリシアは、
「何を言っている、父が生きていたら、飾り立てた象の五、六頭は付けただろう。」
とって、ふふんと笑った。

こうしてアルシャーファの人々が浮かれている頃、ロンダルトでは都会の貴族たちによる陰謀が深く静かに、そして着実に進んでいた。

彼らは毎夜アストアシタ宮ののサロンにつどい、飲み、歌い、謀の成就の前祝をした。

「木は森に、とやら申しますからな。」

「よもや、このような乱痴気騒ぎの裏で、しかも膝下にて謀がめぐらされているとは思うまいて。」

彼らはこうした話を、目立たぬよう、人に聞かれぬように部屋の隅で行った。

誰かが酒杯を手にして壁際にいくと、目立たぬようにその側にたつものが現れた。

二人の間でよからぬ企てが語られると、それがまた違う参加者に告げられるという、傍目には、暇をもてあました貴族の交わりとしか見えなかった。

「これまでのように、我々の手に治世をとりもどしませんとな。」

「われわれの泉は、枯れるばかり。」

「田舎に所領を持つザルウィー伯などとはちがい、国の事業がわれらの収入とつながっております。」

「それを、先王の兄の忘れ形見だとか、その取り巻きの若い連中によいようにされてい
ては・・・。」

「いつまでも、そういうわけには参らん。」

「で、いったいどういたしますかな。」

「そこよそこ。」

「そうそう。」

「それぞれ。」

「いや、だれか良い知恵はないのか。」

「知恵では勝てぬな。」

「ふむう。」

「力でも・・・。」

「ふむう・・・。」

「いやそこが付け目かも。」

「といたしますと。」

「我々はまとまった所領を持たぬがゆえ、兵を集められない。」

「そのとおり。」

「とあちらもそう思っているだろう。そこに付け込むのだ。何も農夫を動員するだけが兵ではな

いし、われらが、なれない甲冑を付けることが騎士ではない。」

「というと。」

「世の中には傭兵というものがいる。」

「傭兵・・・。」

「金で雇われる、本職の剣士だ。わたしは裏で商いなどもやっておるゆえ、荷を運ぶときに傭兵をやとうことがある。」

「おっと、しいー・・・・・・・・。給仕が通り過ぎるまで・・・おお、行った行った。しまった、酒杯をかえればよかったの。」

「この傭兵を集める。みなで資金を出しての。」

「金が要りますか。」

「なに、事が成就した暁には、金などつかみ放題じゃ。」

「一時の投資と思えば。」

「そうそう。倒せぬまでも、一泡吹かせてくれよう。さすれば王も我々には一目置くだらう。」

宴も、たけなわとなってまいりました。

ただし、このアストアシタ宮の壁の裏は、隠し通路となっている。
この通路は使用人たちが、表を通らずと各部屋の奉仕を行うための通路であり、この宮殿の使用人と限られた王族しか知らない事実であった。

この通路を使って、王と王妃は隠し部屋に眠り、アレスミアンとイテカレスは身を隠した。
時にはそのような用途に使われることもあったのだ。

貴族らが、人目を避けてもたれかかった壁の裏には、この宮殿の裏の主たちがうごめいているのである。

そうしてもれ伝わった情報はセシリーに集められ、セシリーはそれをザルウィーに時折報告した。

「傭兵か。」
気に食わんな、とザルウィー伯は顔をしかめた。

彼らは腕は立つが、がさつで礼儀というものを知らない。なにより流血を厭わない。品というものが無い。剣は最後に抜くものだ。

「そのようなものをロンダルトに入れるとは。」
愚者も、ここに極まったな。

「一度頼れば、彼らは蛭のように吸い付いて、吸う血がなくなるまで離れないだろう。」
がしかし、彼らは戦闘の専門家だ。

「我々が数万の兵を動員したとしても、相当の損害を蒙るだろう。」
さてどうしたものか、「セシリー」と臨時情報長官の顔を見た。

「西の傭兵。数千。これだけお伝えすればよいのでは。」
「陛下にか。」
「はい。事がすみ次第、このたびの謀の、加担者の名簿をお渡しいたします。」
「どのくらいの」
「およそ五十人。」
ザルウィーは思案し、気分が滅入った。

「五十人は多い。わたしは、出来れば直接かわりになりたくはないのだ。誰か、中立のものが居ないと。ことがややこしくなったとき、誰かが仲裁に立たねば血みどろの争いになる。」
このときも、ザルウィーは領民のことを考えねばならなかった。

その立場が、ひどく鬱陶しかった。

「わたしが、陛下の側に立てば、いますぐ西宮に行き、あやつ等を捕らえた上で首を刎ねねばならない。なぜなら国王への反逆を、恩赦できるのは陛下しか居ないからだ。」

しかし、

「五十人も首を刎ねたのであれば、この国の歴史に血の汚点を残すことになるだろう。」

それは「あの方の本意ではあるまい。」

別れ際に、アレスミリアンが

「ほどほどに。」

と言い残したことを思い出した。

セシリーもその言葉に同意をしめした。

「お伝えする方法は、」

「お任せを。船につなげばあとはひとりでに。」

この、虫も殺せぬような可憐な娘にしてこの手際であれば、あのニールリングやイテカレス、そしてシルヴェスタというものの技量たるやいかばかりのものか。

「わたしとて。」

厄介な地位などなければやってみせるものを、と、その貴族的な顔をしかめセシリーをみた。

セシリーは再びもちろんですともと、同意をしめした。

「どうだ、」

代わらぬか、この椅子の主を。

滅相もないと辞儀をしながら後ずさり、

「茶を・・・」

お持ちしましょうといいかけ、

「お酒にいたしましょう。」

といって、部屋の壁にあいた穴へと消えていった。

ザルウィーは、くっくっく・・・、どうにも、

「勝てんな。」

と、うれしさびしそうに微笑んだ。

「さてと、揃っているか。」

といて、アレスミリアンは見回した。

テーブルを囲んで、シルヴェスタ、イテカレス、ワーズウォード、ザヒル・シャハフ、数人の隊長達、そしてアリシアが後から入ってきた。

「ザルウィー伯から、あまり良くない便りが来た。今から話す内容は、ペルジアには絶対もらしてはいけない。」

よいな、とはいわず、再び皆の顔を見回した。

「ロンダルトで、私に謀反を企むものが出た。その数五十人。」

「五十ですか、それはまた。」

「どのようなもの達でしょう。」

「かつて、ウェルモンテの下で良い思いをしていたもの達だそう。まあそんな所だろうとは思っていたが、これほど嫌われているとも思わなかった。

よその王子を預かっている場合ではないな。」

「誰と誰かは想像が付く。で、どうする気だやつらは。力ではこちらに勝てないだろう。」

「傭兵を雇ったらしい。」

「傭兵か。どれぐらいの規模だ。」

「数千と書いてある。西の傭兵を数千だ。これは予想していなかった。」

「我々の兵とは違い、彼らは戦が本職ですから。たとえこちらが倍の兵力で向かったとしても、必ずしも有利とは言えないでしょう。」

「もう四ヶ月近く、彼らを引きずり回している。その間一度も家へは帰っていない。そのうえに、数千の傭兵を相手に戦えなどとはとても言えない。無傷で済むわけがないからな。」

「いえ、私たちはご命令さえ下れば、どのような敵でも相手にいたします。」

「隊長。その言葉は、本当にうれしい。けれど、皆で生きて帰らねば、私にとっては意味がないのだ。」

「傭兵とはな。あのロンダルトの地にそのような集団を入れるなど、愚かにもほどがある。」

「それも数千とは、張り込んだものだ。」

暫しの間、それぞれが思い思いの思考をめぐらした。

その数千という数の、傭兵の戦力。装備。雇い料。開戦するとすれば、どのあたりになるのか。装備のこと。見た目のこと。

「悪いことに、出立の日取りが近づいている。ロンダルト内のごたごたを、ペルジアに知られるのはあまり気が進まないのだ。

まだお互いに、十分に信頼し合っているわけではないから。だから、出立を遅らせたり早めたりすることはしたくない。

何か準備しようにもあまり余裕はないのだよ。アリシアの前でこんな事を言っておいて、ペルジアに知られたくはないとは少し矛盾するのだけれど。

でもあなたに隠し事をするのは、気が咎めたのだ。まだ思い直せるからね。」

思いがけない人物が、思いがけないことを語り始めると、人は虚をつかれて無言になる。この後、それが起こった。

「西の傭兵で有名なのは、ベールーガ、セントルーガ、タキトス、テキストス、モーサム辺りだな。

ロンダルトへの距離から言えば、ベールーガが一番近い。

とはいえ、手持ちで編成できるのは千ぐらいだから、地続きのセントルーガや、付き合いのある小さな傭兵隊もかき集めてやってくるのだろう。」

「彼らの戦法は・・・と、西の国々は伝統的に長槍と盾で武装した歩兵集団が中心で、騎兵が支援的な役割でその両側を固める。けれども彼らの面白いところは、確かに戦闘の職業集団だが、そればかりとは言えないところだ。」

「彼らも雇い主に自分たちを売り込まなければならないから、自分たちがどれほど有能かを売り込む文書を作っている。それには輝かしい戦績やら、動員兵力など細かなことまで書いているのだが、良く読んでみると、書き手の意図しない、意外なことがわかったりするものだ。おそらく、自分たちではない誰かに書かせたのだろうが、、、」

思い起こすように、少し顎を上げ宙を見た。

「ある傭兵隊は、戦いに明け暮れた割には十年近くも動員兵力がほとんど変わらない。戦死者も出ていない。けれども普通に考えれば、そんなことがあるはずがない。十年も戦えばそれ相応の死者も出れば、兵の増員も行うだろう。では彼らは何をしていたのか、おそらく・・・。」

「ちょ、ちょっと待って頂けますか。」

と、隊長のひとりが口を挟んだ。

「あなたは、何故そんなことをご存じなのです。」

「私は、十八年間、あの狭い敷地で暮らしてきたのだ。出来ることといえば書物を読むことぐらいだ。

並の物語や説話などは、小さなころに総て読んでしまった。他国の物語も読んだし、数字の話や星の話も読んだ。

それでも足りないから、文字が書いてあるものは何でも読んだのだ。ここ数年宮廷の関心は、西の国々にあったからな。傭兵の事もその中にあった。それを覚えていただけのことだ。」

「はあ、何となくわかりましたがそれにしても・・・。」

「で、彼らは何をしていたのだ。」

と、アレスミリアンが話しの腰を元に継ぎなおした。

「おそらく、雇い主の敵からも、金をもらって解決していたのだ。武力をちらつかせておいて、実際の戦闘は形だけにして解決したのだ。」

「そんなこと！」

信義にもとるのではないかと、誰かが言おうとしたが。アレスミリアンがそれを制した。

「彼らは戦争が生業だ。仕事であればそれで稼がねばならないし、家族を養わなければならない。命を失う危険を安易に犯すだろうか。そんなことをしている傭兵も居るだろうが、そういう者はけして長らえることは出来ないだろう。」

雇い主は厄介ごとが解決すればいいのだから、その手段はなんでもいいはずだ。」

「まいったな。たいしたお姫様だ。」

シルヴェスタが舌を巻いた。

イテカレスは、初対面のときに言った、

「花も云々……」

というせりふが、急に恥ずかしくなってきた。

ワーズワードは、アレスミリアンが、ただ女に逢いたさだけで、後宮通いをしていたのではないことに気がついた。

三者三様ではあったけれど、みんなアリシアに参ってしまったのだ。

そして、ザヒルはあの得意の極め台詞、

「騎士道にかけて」、を言いたくてうずうずしていた。

「では、こうしよう。」

アレスミリアンの思考が走り出した。

「ザヒル殿には、手勢を率いてロンダルトを急襲していただきたい。といっても陸路はふさがれている可能性がある。海からだな。あの婚礼船は・・・。」

といいかけ、シルヴェスタに視線を移す。

「もちろん私の船だ。」

「ではその船に乗っていただく。」

「海か。よろしい。アタリスの気心の知れたものを、二百もいればよいでしょう。このザヒル・シャハフの騎士道にかけて、アリシア様の身にかかる災厄の楯となり、剣となってお守り申す。」

「殺さないでください。」

「分かっております。」

ええ、ええ。でもいわれなければやっていたかも。

「傭兵は？」

「穏便に、手を引いてもらいましょう。」

「金を積むのか。」

「いえ。」

「金が取れぬとなれば、はらいせに村を襲うかもしれません。」

イテカレスが憂慮した。

「いまの手勢、一万五千では、少し心もとない。これは勇気の問題ではないのだ。」

といって、今度は隊長たちを見た。

「みなで生きて帰る。ずっとその旗を掲げてここまでやってきたのだから。

彼らも、一万五千なら一戦交えようという気になるだろう。けれどもそれが十五万ならどうだろうか。」

「十五万、クラコワ、ロンダルトそれにペルジアと東方諸国を加えて、ということですか。」

「そう、おあつらえむきにペルジアの姫もおられることだし。」

「つまり、“はったりをかます”というわけですね。」

「イテカ、そんな言葉を王子に教えているのではないだろうな。」

「いや・・・ええまだこれは・・・、いえいえ教えませんよ。」

「支度金として半分は取っているだろう。それで満足して帰れ、ということだ。雇い主が捕らえられたと知れば、それ以上長居をしても、金はもらえないのだからな。」

傭兵のことは、それで対処が決まった。

大雑把な話で、本当にそれで上手く行くのかどうかは分からない。が、それを計画し、実現させていくのがイテカレスであり、ワーズワードの仕事だった。

「ただ、彼らを処罰するには証拠が必要だ。」

「ここまでやっておいて証拠も何もないでしょう。」

ワーズワードが、この場の雰囲気を変えた。

「私は悪しき前例を作りたくない。」

彼らが白を切りとおせば、明白な証拠もなく処罰せねばならなくなる。痛めつけられれば白状するものもいるだろうが、その者がもしザルウィー伯の名前でも出してみろ。

そんなことはありえないが、ありえないことを証明することと、犯した罪を証明することは行為としては等価なのだ。彼らを処罰できなくなってしまう。」

「証拠とは、連判状のようなものでしょうか。」

いや、とシルヴェスタが口を挟んだ。

「そんな、明々白白なものを用意するほど、阿呆なやつらでもない。」

だが、だ。見方を変えればこれは取引なのだ。数千もの傭兵を雇うための莫大な費用をひとりで負担できるはずはない。それぞれの負担分を細かに記載した協定書があるはずだ。

もちろんお題目は変えてあるだろうが、おそらくそれにはサインがされているだろう。それを何か別の名簿とでもつき合わせて一致すれば……。」

「このたくらみはアストアシタのサロンで行われた。貴族が集まるのに不自然でなく、同時に多くの人が集まれるからだ。その出入りを記録した名簿があると書いてある。」

「決まりだ。」

「そう。けれども、そこまで当たりがついていても、実際に誰がそれを持っているかを特定して、どうやって押さえるか。しかもザヒル殿が彼らを捕らえるのと同時に……。そんなことが出来るものがあるだろうか。」

「いるさ。彼らの誰がそういう役回りで、そいつが、危ないものをどこに隠すのかを、熟知している男がいる。」

「……“名無し”のことですか。」

シルヴェスタは肯定した。

「ああ、確かにあの男なら出来るかもしれませんが。けれども、やってくれるでしょうか。彼にとってはかつての……。」

「だからこそ、なのさ。」

あの男は追い出されたわけじゃない。あの世界に自分から見切りをつけて出てきたのだ。もう彼らと同じ空気は吸えないとね。なので、いつまでたってもあの時代に戻ろうとする貴族たちを

軽蔑するばかりか、かつての己の姿を見せ付けられるようで嫌悪するだろう。

この前あなたを助けたのは、彼なりの使命感というか、波に身を預けていても自分の存在意義は別のところにあるという、やつの自負心から出たものだろうが、今度のことは少し違う。もし此れを許せば、彼が選んだ生き方に意味がなかったということになる。きっと、やってくれるよ。」

「よく見ているのですね。」

「まかり間違えば、私はあいつになっていた。もしあなたが道を踏み外していれば、私の手は汚れていただろう。洗っても洗っても染み付いて取れない、松脂のような汚れにね。取れないと分かっているのに洗い続けなければならなかったに違いないんだ。だから、あいつの気持ちが分かるんだよ。」

そしてあいつも、あいつなりに、あなたのことが好きなのさ。

「その、証拠の件はお任せします。」

「ザヒル殿より、一日早い船を用意しよう。それで十分だろう。」

「そうと決まれば、あとは、ワーズ」

「はい。」

「このことをもう一度整理するんだ。何か考えがもれていることはないか、不可能なことを前提にしていないか、手配すべきことは何か……。時はないぞ、ニールリングを越えて見せろ。」

「はいっ！」

それからの数日は、タラバスカニは輿入れの準備で忙しく、ワーズワードは際限の無い裏仕事に忙殺された。

その合間を縫うように、アレスミアンはアリシアとの約束を果たしに街へ出た。

「人が多くてめまいがしそうだ。どうしてあちらからもこちらからも人が歩いてくるのだ。」
アリシアは眉をひそめた。

「そんなこと私を知るわけが無い。みんな行く先が違うのだから、しょうがないだろう。」
といいながら、人の波からアリシアをかばい、得体の知れないものを買っていけと押し付ける男を振り払い、とても姫が口をつけるべきではないような水を持つ手を押しつけた。

「お前の国もこんなのか。」

「いや、こんなのはここだけだよ。」

「そうか。ふうん。なかなか、いいものだな。」

といて、少し自慢そうにした。

市までの道々に溢れかえった人たちは、この奇妙な道行に好奇の目を向けることに遠慮が無かった。

アリシアの格好は控えめとはいえ、並の娘がまとえるような衣装ではなかったからだ。

やがてどこからとも無く、それが前王の姫君だということが伝わると、人々は敬意を払って道を空けた。いや、頼みもしないのに、人ごみを整理するものまで現れたおかげで、アレスミアンは一息つくことが出来た。

イズマイルの所業は人々を苦しめたが、為政者のすることは多少なりともそんなものだということを知った人々はあきらめもし、良く知っていた。

そして死んでしまった英雄は、人々の心にある種のノスタルジーを残した。

隣を歩くのが、アレスミアンということに気づいた人もいれば知らない人もいる。

彼は英雄を葬ったが、その遺児を王位につけ、後ろ盾となることで他部族とペルジアの関係を守った。

彼は何かを奪おうとはしなかったし、誰かを殺そうともしなかった。

彼はペルジア人の誇りを踏みつけにはしないし、ノスタルジーを街道の名前に残した。
彼のいく手に立ちふさがる者もまた、無かった。

「そう。多分この辺りから中に入ったんだ。」

長い壁が続く建物の側面に、上部をアーチ形に削られた入り口が或る。

遠慮という言葉を知らないような日射しに慣れた目には、その中の通路の暗さに身を引いてしまいそうだ。

左からも右からも人は絶え間なく歩いてくる。

水に飛び込むような気持で、その流れに足を踏み入れた。肩が触れあうような狭い空間では、行き交う時だけの隣人には、かえって無関心になる。

アリシアは、アレスミリアンの腕を両手で掴み、身体を寄せて透明な繭に入ったつもりになった。そうでもしないと、離ればなれになって、どこかに流されていきそうだった。

人ごみは相変わらずだったが、身の危険や不安は感じなかった。イテカレスの言ったとおりだった。そして、何を見れるか、何に出会うかとわくわくした。

この間から、胸がドキドキすることが続いている。書物を読んで、胸を踊らせるのとはぜんぜん違う。生きていることの楽しさというのは、こういうものかと思った。

間口の狭い、込み合った店の前を通り過ぎると、鼻に覚えのある匂いに混じって、アレスミリアンの耳に聞き覚えのある声が飛び込んだ。

「オニイサンコレカッテイキナ。」

眼に覚えのある、小さな顔が笑みをたたえて見えた。

アリシアが、ここかというように振り向くので、そうだと応えた。

「オオ、コノヒトアニサンノイイ人カ。ソレハイイコト。サービススルヨ。」

といて、後ろを向いて一度奥にはいると、店の男から何かを受け取った。

「ホラコレ、コノ界限デモメッタニミラレナイ、超才値打ち品ネ。」

というと、大小様々な、赤や緑の宝石が百個は連なっていそうな金の首飾りを、両手の間にかけるつり橋のように広げて見せた。

アリシアは、「ほうこれはいいな。」といいそれを両手にとって胸に当て、アレスミリアンに向かってにっこりとした。

「これなら私がつけるのに申し分ない。」

アレスミリアンは引きつった。まさかこんな雑多で小さな店から、これほどのものが出てくるとは思いもしなかったのだ。

アリシアは向き直り、「此れをもらって帰る。」と店主に言った。

「といたいところだが、私の同行人は、此れを買うほどの持ち合わせが無いようだ。この品は、王宮でもなかなか見られないような名品で惜しいのだが、もっと手ごろなのを見せてくれな
いか。」

といて、返そうとした。

「待った。」

とアレスミリアンが言った。目つきが変わっていた。

ここで逃げればクラコワーロンダルトがなめられる。

たかだか市の、両腕を伸ばしたぐらいの間口の店で売られているような飾りを、持ち合わせがないと言って買わなかったら！

「確かに今は持ち合わせが無いが、すぐに用立てる。いくらだ！」

店主の顔は、喜びで目と口と鼻と髭がばらばらに落ちていきそうだった。

「金一万！ ダケド、キレイナオジョサンニサービススル、私イッタ。金百デイイヨ。」

「えっ！ 本当にそれでいいのか。」

店主は、あごと胸がぶつかるぐらい、勢いよく頷いた。

「ソウ。ワタシ金百。オジョーサンオオヨロコビ。ワタシ幸セ。」

アレスミアンは、供の者から受け取った袋を店主に渡しながらか、何かおかしいと拍子抜けし、疑い始めた。

宝石などとは無縁だったので、ものを見ても真偽は分からない。

けれども、ここまで手の込んだ細工の偽物を用意するだろうか。何か不自然なところはないかと、店の中を覗き込んだが、その首飾りとは値打ちの比較もしようが無い、そこそこの金の細工が並べられ、奥では先ほどの店の男がもぞもぞしているだけだった。

振り返ると、アリシアは、もうそれを身に着けようとしていた。

アレスミアンは、女はしようがないなと言うようなため息混じりに、

「そんなものをつけてうろうろしていると、泥棒に襲われるぞ。」

とあきれて言った。

「それは逆だ。此れをつけている私を襲う、勇気のある泥棒がいれば見てみたいものだ。従者などにもたせるよりよほど安全だ。」

ああ、たしかにそうだろう。白昼に王女を襲う盗賊など御伽噺にも居はしない。

でも何かおかしいんだ。こんなことがあるはずが無い、と首をひねりながら店を後にした。

そのあと、例の店では、店主と奥の男が話していた。

「その袋はそのまま取っておくがいい。」

店主は、ずしりと重い金の袋を手のひらに置いて、その重みを楽しんでいたが、

「私、何の元手もかけずに、金百ももらうのはちょっと気が引ける。」

と奥の男に渡そうとした。

「いや、いい役者だぶりだったよ。あの男を引っ掛けるなら、店一軒借り上げるぐらいの仕掛けはしないと。まあ、一万のうちの百なんぞ、誤差のうちだ。取っといてくれ。」

「旦那がそうおっしゃるなら、頂いておきましょう。」

旦那といわれた男は、改めて店を見回した。壁の上から下まで、いろいろな細工物が所狭しと並べられている。そして、それはひとつとして埃をかぶっていなかった。

「いい店だ。あんたはいい店で商売ができて幸せだ。」

店主は、店を褒められてまた相好を崩した。

「こんな人生も、楽しかったろうな・・・。」

「旦那みたいな人がそれをいうのは、贅沢というもの。」

店主のほうが、はるかに年季のいった体をしている。

「そうだな、苦労もあるだろうさ。」

そうだそうだというように、店主は笑い飛ばした。

「ところで、こういう意匠の金の細工物は、あの国にはまだ出回っていないんだ。姫が輿入れしたら貴族の奥方たちに大評判となるだろう。それにあわせて、大量に売りさばきたいんだが。」

「わかった。私いい職人をいっぱい知っている。御礼に紹介してあげよう。」

いやいや、

「そういうことは、あんたに任せるから。あんたが仕入れて、私におろしてくれればいい。そういうことは、あんたが目利きだろう。」

店主は大感激の面持ちで、男の手を握った。

「これ、商人の信頼の挨拶。あなたを決して裏切らない。」

「私もだ。」

じゃあな、細かい取り決めは店のものを寄越すよ、と言い残して、旦那と呼ばれた男は店を後

にして、雑踏の中を心地よさそうに歩き出した。

「なあに、一万ぐらい三日で取り返して見せるさ。アレスミリアン。」

白い衣に風をはらみながら、当たり前のように雑踏の中へと、姿を消していった。

中庭の水辺で、風に吹かれながら、アリシアはもうベールをとっていた。胸には飾りが、一日の残り日を吸い込んで複雑な反射をくかえし、輝きを放つ宝石に彩られて、輝いている。

それ以外には、肌が透けるようなごく薄い布を体に巻いているだけの姿で、半ば身を起こして横臥していた。

「どうだ、美しいだろう。」

アレスミリアンは、不承不承ながらも認めるしかなかった。確かにこんなに妖しく美しい女は見たことがなかった。

「なにか、仕方なしに言ってそうだな。」

「いや、そんなことはない。けれど、それは本当に本物なのか？」

アリシアは、飾りの一粒にふれて

「私は子供の頃から本物しか見たことがない。偽物なら、あの明かりの下でも十分見分けられたと思う。」と応えた。

「けれども金一万が、百だなんて……。ありえない。」

と、どうにも納得がいかないという顔をした。

「私の美しさの力だな。」

と誇らしげに言うので、

「何を……」

いう、あの時は頭からすっぽりと衣で隠していたではないか、と言い返しかけて、むきになって応えるほうが阿呆らしいと思い、そこから先は言わなかった。

「ぷっ。くっくっくっく……。あーっはっはっは……。もう笑わせないでくれ。

お前というおところは本当に、くっくっくっく……。とても同じ人とは思えないな。

あーっはっはっは……。はあ。」

アレスミリアンは、あまりのおかしがりように狐につままれたような顔をした。

「私はペルジア人で、ペルジア人しか知らない。だから、その男がペルジア人かどうかはあの明かりの下でも何となく分かるぞ。あの奥にいた男はペルジア人ではない。」

と、いうとまたくくっつと笑い出した。

「こんな仕掛けを用意出来るのは、あの男しかいないだろう。」

あっ、

「シルヴェスタ。」

「やられたな。今の顔を見せてやりたかった。」

笑いは少しは納まってきたようだが、いつ再発してもおかしくない様子だった。

「おまえというおとこは、油断しているときは本当にこども以下だな。これがあの時と同じ男とはとても思えない。」

「やられた。」

とアリシアと顔を見合わせ、今度は二人して笑い出した。

「私への贈り物かな。良かった歓迎してもらえて。」

アリシアはうれしそうだった。

その騒ぎが収まるまでの、ひとときが流れた後に。

「わたしは、おまえに・・・あなたに感謝している。

私の国を壊さないでくれたし、弟を王位につけ、命を守って戦ってもくれた。女達の世話をし、私の扉を開け、わがままを聞いて市にまで連れて行ってくれた。それがどんなに大変なことかも、分かっているつもりだし、本当に感謝しているのだ。」
アリシアの緑の瞳が、胸のエメラルドよりもきらきらと輝いている。

「けれども、私はなにも持っていない。あるのはくだらない書物の山ぐらいだ。感謝の印をあげようと思っても・・・、私以外に、何も持っていないのだ。」

「そんなもの、必要ない。」
というのに首を振って、
「おまえはそういうだろうと思ったが、私はなにかしてあげたかった。」

「だから、私の“いけない”侍女に相談したのだ。どうすれば、殿方はよろこんでくれるだろうかと。」

「それでそのすがたを？」
アリシアはこくんとした。

「本当は、恥ずかしくてしょうがないのだ。だからもう、そろそろいいか。日もかげって少し寒くなってきたし。」

アレスミリアンは、少し前かがみに立った姿勢で、しげしげとその姿態を眺めて見せた。

「もう、バカ。」
アリシアは、ルビーのように赤くなった。

冗談だよと言うように手を振り、衣服を取りに行くと言って、きびすを返した。途中でふと振り返り、

「もう一度、きちんとおこう。あなたは美しい。」
とゆっくり、それだけを言うと彼の役目に戻っていった。

でも、ひいさまは、少し女の魅力が足りませんわねえ、おほほ・・・と先ほど言った侍女の言葉を思い出した。

「もう・・・。ばか。」

そういいながら、幸福な気持ちは抑えようもなく胸の奥から広がって、手のひらで覆った顔か

らあふれ出た。

「でも、まさか本当に、白馬に乗った王子様が救いに来てくれるとは思わなかった。いや、もう王さまだから少し違うのか。わたしの、“情けない”、とびっきりの王さま。」
というと、膝の上にあごをのせて、アレスミリアンの消えた方角を、じっと見ていた。

「待つというのは、楽しいことだったのだな。」

晴れ上がった空の下、この地では、雨が降るほうが珍しいことだが、陽光を全身に浴びて気持ちよさ気に、タラバスカニが伸びをしていた。

その間、彼のたる型の体型は極めて円筒に近く変形したが、そのタラバスカニが背後に人の気配を感じて両手を元に戻すと、元のタラバスカニに戻ってしまった。

「お疲れのようですね。」

「おっと、これはこれは。」

「はは、うれしそうだ。いいですよ。この国をお返ししましょう。」

「ぐっふっふ。そうですね。あなたは随分この国の言葉がうまくなりました。わたくしはひとりの人として言うなら、あなたのことを気に入りました。いや、敬意を抱いていると思っていただいていい。

けれども、あなたがわが国の前に立ちふさがり、先王の大望をくじいたという過去を忘れることは出来ない。

あなた様が国を思うように、私もペルジアのことが大事でございます。土に戻るしかなかったかもしれない、この国と都を救ってくれたことには感謝しています。が、あなたの都を一度は手中にしながら、それを手放さざるを得なかったときのことも、私には忘れられない。」

タラバスカニは、一度目の戦いにおいて正面からロンダルトの防壁を破り、三日間とはいえアストアシタ宮を占領していた。

この一連の戦いにおいて、ペルジアが唯一勝利したといえる戦いの司令官だった。

「タラバスカニ殿は、あのとき、腹いせにロンダルトを灰にすることも出来た。だがそうはしなかった。

私がこの国と、王子をあなたに預けてもよいと思ったのは、あなたが人とその世界が歩むべき道の分かった方だと思ったからだ。決して成り行きでそうしたわけではない。

それと、ひと段落すれば、ゆるりと遊びに来られれば良いではないか。

あなたが残した宮殿は、いまでもそのときの輝きを放っている。輿入れのことでは随分世話になったから、姫も喜ぶだろう。

なに、陸路だと遠いが船を使えばたいしたことは無い、私も一度海から来たことがあるが、なかなかいいものだ。」

そこまでは、まるで世間話でもするような口調だったが、

「私に子が出来れば、それが私の後を継ぐだろう。その子はイズマイルの孫だ。

あなたは大望がくじかれたといったが、一度倒れた木から生まれ、成長する芽もある。その芽は別の花をさかせるかもしれないが、そうやって命は引きつがれるということだ。

イズマイルのやり方を私は認めない。けれどもそれをきっかけとして世界がつながったのなら、それを利用して、人々がより豊かで安寧に暮らしていけるようにするのは、我々の使命だ。

クラコワーロンドルト、あなたの知らない北の国々、そしてペルジアがつながれば、どこかの国で不幸なことが起こってもそれを助け合える。そういうふうには世界を形作っていくのは、生き残ったものの義務だ。

あなたにもそれを手伝ってほしい。」

タラバスカニは、大きなおなかを持ち上げるようにしながら、

「あなたは“世界”とおっしゃる。世界とはどんなものか、私も見てみたくなりました。」

「もう隠退した身などとは、・・・。」

「はっはっは、あれは生きる目的を失った、どこかの駄馬の世迷言でございますよ。私は二家にお仕えするつもりは毛頭ございませんでした、が、あなた様とでしたら、・・・。」

アレスマリアンは、掌で、続きの言葉を制した。

「あなたと私は同志だ。仕える必要など無い。」

二人は別れを意識して、言葉を選んで語り合った。

次の世代が育つまでは、この二人が両国の関係を形作っていく。

そして別れから、次の歴史は始まる。

この一時は、何にもまして重要な一時だった。

「アレス様、――アレス様。王子がぜひご挨拶をと。」

「ああ、長居をしてしまいました、いよいよ出立です。」

「道中ご無事で。兄上。」

「あにうえ！」

アレスミリアンは不意をつかれた。

「ほら、言った通りでしょう。」

と、二人は顔を見合わせて、いたずらっぽく笑った。

「そうか、そういうことになるな。せっかく再会されたのに、あなたの姉上を連れ去ってしまうことになって、申し訳ない。」

「私が都から連れ出されるまで、幼い頃に見た姉上は、いつも悲しく。思いつめたような顔をしておいででした。母という後ろ盾をなくし、幼い弟を守らねばならないと、必死だったのでしよう。」

でも再びお会いしたときのお顔は、生涯忘れられません。あんなに幸せそうな泣き顔を見たのは生まれて初めてです。

きっと私の知らない母も、あのような美しい人であったのだろうと、そう思うのです。それもこれもみな、兄上がいらしたからです。」

イテカレスは後ろを向いて鼻をすすった。

「よい王になられよ。」

「はい、・・・そのことですが、お願いがあります。」

「なんでしょう。」

「私の兄が。イスファファンがもし王にふさわしい人になられたら、私は王位を譲ってロンダルトに学びたいと思います。十年かもっと近くでもよいのです。もっとちゃんとした教育を受けてみたいのです。」

「なんだと、このやろう、せっかくいい気持ちで泣いてたのに。」

「いえっ、いえっ、決してそのようなつもりでは。」

「じゃあどうなんだ。」

「実践も良いのですが、やはり教育というものは、理というものが必要だと思うのです。姉上を見ていてそう思ったのです。・・・だって私はまだ子供なのに、いきなり色街になど連れて行かれても・・・。」

「ああいうものは早いほうがいいんだ……。えっ、それは内緒だといっただろう。」

「イテカレス。」

「はいっ！」

「今日は夕食抜きで働いてもらおうか……。いや、帰ったらセシリーに伝えよう。」

「……。破滅だ。もうだめだあ。王子様、もうしばらくこちらにはダメでしょうか。せめてほとぼりの冷めるまで。」

王子は、しっしつと犬をはらうように手を振って見せた。

「王位の件はイスファファンともよく話してみよう。それが無くても彼とは良く話さねばと、おもっていたからね。」

こうして彼らが別れを惜しんでいたように、おなじころ兵たちも離れがたい気持ちを分かち合っていた。

この三ヶ月の間に知り合った飲み屋の親父、下宿先のおかみ、めし屋のおばちゃん、水売りの子供、ばくち打ち、すり、ゆすりにたかり、ただの飲み仲間、鍛冶屋の小僧、酌婦に情婦、もう戻ることは無いかもしれないし、必ず帰ってくるからと約束したものもいれば、この地に根を下ろすことにしたものもいた。

そうした人々の成す人生の一場面は、アルシャーファをひとつのタペストリーのように美しく織り上げた。

最後に、アリシアがウイナイダル宮殿からあらわれ出て、全ての役者が揃った。

頭から肩先までを、柘榴の葉の緑を燃えるような紅に重ねた絹のベールが覆い、同じ重ねの衣がゆったりと体を包んで、足元に広がって長い裾を引いた。

ベールにつけられた薄い金の歩揺がゆれ、ベールと衣を飾り立てる金糸と銀糸の細かな模様が、いまは昼の日差しを受けて、歩むたびにきらきらと輝いている。

真新しい敷物が、主人を待つ輿までを導いている。

アリシアは一度だけウイナイダルを振り返り、それをペルジアへの永遠の惜別とした。

タラバスカニの企みどおり、婚礼の行列は楽師と女たちに先導され、アルシャーファ全市民の見送る中をゆっくりと進んでいった。

ただし五十人もの担ぎ手の輿は、その先の街道を通れないという現実的な事情から、十人が担ぐものに変更された。

それでもタラバスカニは、せめて都を出るまではとの粘りを見せたのだが、都を出たところで乗り換えるのはみっともないという理由でこれも却下された。

昼は輿、夜は天幕の下という初めての旅に、アリシアは毎日が夢を見ているようだった。

アレスミリアンの帰国は、東方の諸地域にも伝えられていた。

彼らは街道まで律儀な使者をおくり、その別れを惜しんだ。

彼の白い馬、マクシミアは、土埃にまみれていよいよ砂色になりかけていた。彼はイスファファ

ンの事件にも同行し、白い馬と見ればアレスミリアンという印象を、この世界の人に強く印象づけた。

この旅の途中、アリシアはどうしてもマクシミアに乗りたいとせがんだが、アレスミリアン以外のものを乗せると途中で振り落とすクセのあるこの馬は、危険だとみなが止めた。

「この馬は賢いのだ。だから、主より偉いものでなければ乗せない。」

というアリシアの言葉に、

「では、試してみよう。」というと、

マクシミアは、アレスミリアンの監視の下で、アリシアを背に見事な並足から早駆けまでをやってみせ、勝手に主を待つ輿に横付け、アリシアが乗り移るまでを不動の姿勢で待ち続けて、やんやの喝采をあびた。

あと二日もすればクラコワ領内という昼、クラコワからの使者が到着した。

夜になり、

「ワーズ、報告してくれるか。」

とアレスミリアンが若き参謀を呼び出した。

呼び出されたワーズウォードは、これがあの都会派の貴公子かと目を疑うようなやつれぶりだった。

出来るだけ戦いを避けようとはしているが、対応を誤れば開戦となりかねない。開戦となればかなりの犠牲が出るだろう。

その成否が、一万五千の命が、ワーズウォードにかかっていた。

「クラコワのニールさんに伝令を送りました。今日の返信によると、傭兵隊は少なくともクラコワへの進入は出来ないよう足止めしておくので、ごゆっくりご帰還をとのことです。防衛線の指揮はキリアンデル様が執られます。

それから、ザヒル様が立たれたのは我々とほぼ同時ですから、今頃はすでにロンダルト内に潜入しておられるでしょう。事が済み次第、早馬がクラコワに向けて走る手はずになっています。とらえた貴族達は、そのまま宮廷内に幽閉されます。クラコワに到着すれば、・・・」

「うん、いいだろう。これ以上はクラコワに着いてからだな。ご苦労だったな、少し休め。」

「はい、では、下がらせて頂きます。」

ワーズウォードは大きく息をついた。

その後ろ姿が夜に消えていくのを見送ってから、

「どうだ、イテカレス。」とアレスミリアンが言うと、

「まあ、合格でしょう。でも、ニールに比べれば。」

まだまだ、というように首を振った。

森の中の街道をぬけると、そこはいつもながらの緑の丘、小川と草原が広がっていた。兵士たちは、故郷への帰還を肌で触れるように感じた。

輿の上、麻の簾の内側から、アリシアは賛嘆の言葉をもらした。

「緑と水があふれかえるようだ・・・。」

旅の終わりは近づいていた。

クラコワの城市が、はるかな草原のかなたに小さく見えていた。

外城門はすでに人があふれ出ていた。
人々は、久しぶりのアレスミリアンを心待ちに待っていた。

「珍しいな、お前が出迎えとは。」
「ご冗談を。あなた様を迎えに来たのではありません。ひと目、異国の姫様にお目通り願おうと……。」
「こいつ。」
という言葉は笑顔で受け流して、アレスミリアンに少し後れて馬を歩ませた。

人々は沿道に人垣をつくり、盛んにわれらが王の名を呼んだ。
「あんなちいちゃかった子供が、立派になったもんだ。」
「俺んちの工房によくきたもんだがよう。ロンダルトになんぞ行っちゃったもんだから、近頃はさっぱりだ。」
「あにいったるだ、王様がいちいちお前みてえなきたない鍛冶屋に顔をだすわけねえだろう。」
「いや、だから小せえ時のことだって。」
「ああ立派になられたもんだ。」
「おおさまー！またあそびにきてくだせー！」
アレスミリアンは、声の方に向かって顔をくしゃくしゃにして手を振った。

「だからくるわけねえって。」
そうした光景を、ニールリングは久々に楽しんでいた。ニールリングは、わざわざこの光景に合いに来たのだ。人ごみをかき分けて。

「おおー。あれか、異国の姫様は。」
「垂れがあってよくみえんがなあ。」
「嫁いできなさったのかのう。」
「そうかあ、そうだろうなあ、すごい荷物だのお。どこまで続いているんじゃこれは。」
「王様も嫁はとらんといけんからのう。でものお。」
「そうじゃなあ、イーリアス様がおかわいそうじゃなあ。」
「わしらのイーリアス様がなあ。」

そういう声までは、アリシアには届かなかったに違いない。けれども、この孤独に生きた姫は、人々の気分を輿の上から敏感に感じ取っていた。

随伴する侍女に、
「どうやら私はあまり歓迎されていないようだ。なぜだか分かるだろうか。」

と問いかけた。

侍女は、この旅の途中で親密になった、アレスミアンの側近の事情通をひけらかす男に尋ねた。

アリシアは、

「そういうことか。」

とひとこと言って、顔を曇らせた。

しばらくは、そのまま輿に揺られた後、

「私は宮城には入らないほうがいいと思う。あの男にそう伝えてくれ。」

と決意した。

アレスミアンはそれをきくと、

「そうか。」

とだけ行って、ニールリングに代わりの屋敷を用意させた。

城内の長い廊下をたどる二人の姿は、まだアレスミリアンが、アレスミリアだった頃の風景を思い出させた。

が、もう戻らないものもある。

「おやさしい方なのですね。」

「なにがだ。」

「この街のものたちは、まだ、若く美しかった女王を誇りに思っています。その誇りを踏みにじるようなことはすまいと、そうお考えになったのでしょうか。」

「そういう、ことか。」

「異国の姫とは、あなた様にしては思い切ったことと思いましたが。これで納得がいきました。」

「イーリアスを忘れたことはないよ。忘れようとも思わない。

私はイーリアスとともに生き、彼女から多くのものを学んだ。

イーリアスを忘れることは、私の半身を捨てることだ。その半身を失えば、目的のために手段を選ばず、多くの人を戦場に追いたて、ペルジアを地上から消しさり、三国を合わせた力で西の国々を攻め滅ぼすかもしれない。

そんな男を、お前は王と呼んでくれるだろうか。」

ニールリングはその問いには答えず、応えるまでも無いと思った。

廊下の奥から、急ぐような足音と、男たちの話し声が石壁に反響しながら次第に大きくなってきた。

ハイアルトとカラバ公は、まるで待ち焦がれた夕食が運ばれるのを待つ子供のように、入り口に視線をやっていた。

「カラバ様。ただいま戻りました。」

それは牢獄に持ち込まれた燭台の光のような声だった。

アレスミリアンは、ニールリングを振り返って言葉を続けた。

「話の続きは、また改めてしよう。わたくしはカラバ様にご報告しなければならない。」

「どうぞ、ごゆるりと。」

といい、ニールリングはその場を離れた。

「おかわりありませんね。」

とアレスミリアンは切り出した。

「おまえがそういう優しいことをいうところを見ると、わしは相当くたびれて見えるということだな。」とカラバ公が応えた。

「いえ、そのような、私はそんなにへそ曲がりでしたか。」

—老いられた。

たしかに、アレスミリアンはカラバ公の変わりように驚いたのだ。しばらく逢わぬうちに、随分老いられた。衝撃のように、そう感じた。

「よいよい、みないつかはこうなる。」

そういつて総てをさらけ出すように、両腕を拡げて見せた。

「お前もいつかはこうなるのだ、よく見ておくが良い。私がお前に教え残したことは、もうこれぐらいだからな。」

—そんなことは言わないでください。

「誰もがみな、たどる道だ。黄昏の中から黄泉の国へとな。だがこの国の黄昏はまだまだ来ない。お前がそうしたのだ。」

—そんなことを、言わないで。

「わしは、わが人生を誇りに思っている。おまえという男をこの国に残すことが出来た。わしは子を持つことがなかったが、全てはこのためであったかもしれない。」

明るい窓際に寄せられた寝台に、半身をおこして、カラバ公は満足そうに笑っていた。わずか半年ほど前に、この城を訪れたときはこうではなかったのに。

ひとあし、ひとあし踏みしめるように足を出しながら、カラバ公の傍らに立った。この城に来て十数年、その中でも一番遠い遠い歩みだった。

カラバ公の肩に手を置いて、

「あなた様は、私の親父様です。そんな心細いことを言われては困ります。」

といった。

その手にカラバ公の手が重なった。枯れ木のように軽い手だなど、悲しくなった。

「キリアンデル殿は大丈夫だろうか。」

その問いを、ニールリングが引き受けた。いまクラコワのことは、ニールリングが動かしている。

「クラコワの、八つの支城には総動員をかけました。三万の精兵を編成中です。キリアンデル様は三千で対陣中。これをペルジアから帰還した一万五千とあわせて四万八千。傭兵隊はおよそ七千。

獅子が猫を襲うようなものでしょう。」

ほう一、と一同からため息が漏れた。

「という、噂を流しておきました。」

「なんだ、はったりか。」

とイテカレスがくさした。

「まずは交渉（おどし）です。それが利かなかったら本当に動員をかけます。この季節にこんなことをやっているほど、みな暇ではないですからね。」

「では実質は、一万八千か。」

「毎日三千ずつ追加しましょう。いかにも増援中に見えるじゃないですか。」

「つまり、賭け金を吊り上げるって訳だ。」

「イテカ。その例えはやめてくれないか。」

「うん？だってそういう手を張ってるってことだろう。」

「だから博打にたとえるのはやめてくれって。なんとなく、その一、自分が賭場にでもいるような気がして来るんだ。」

「ふーん。でも船の上なんて毎日そんなもんだぞ。ちなみに、最近の俺は負け知らずだよー。」

「船が着いたぞ、荷揚げだ。」

ロンダルトの南、ニオノスの港は、西と南から来る船と、南と西へと出て行く船の航跡が交わったり重なり合ったり、荷主が船主がわめきあったり抱き合ったり、人足が重い荷物の下で汗を流したり、荷の山の陰でサボって昼寝をしたり、犬が猫を追いかけ、猫がねずみが追いかけ、ねずみが人をびっくりさせて、人が昼寝の犬の尻尾を踏んでその犬が猫を追っかけたりの大騒ぎだった。

「やれやれ、まだ体が揺れてるようだな。」

慣れない甲板を下り、足の裏に地面の固さを確かめながらぼやいた。内陸育ちの彼は、海も船も初めてだったのだ。

「だんな、荷を降ろして良うございますか。」

船長は、どうにもこういう運送に関わるような生業とは、全く関わりのなさそうなこの男に対して、この三日間の間の扱い方に頭を悩ましていた。

やれ暑いだの、気分が悪いだの、船を揺らすのだのと、とにかく注文が多いのである。

この船は、どちらかといえば大船に属する方だから、船長としてはこれ以上の乗り心地を望まれても、いかにもしよがなかつた。が、とにかく船は無事に着き、厄介事もここまでと思うと、つつい心が弾んでくる。

「婚礼の荷物だからな。慎重に頼むぞ。それと、これは特別な荷だから役人を通す必要が無い。すぐにロンダルトの宮殿に運び込む。」

ぼやいてはいるが、役目を忘れないところは褒めてやっても良い。

シルヴェスタの船が、ペルジアの姫君の輿入れの荷を運んでくると言うことは、港はもちろんロンダルトの宮廷にもあらかじめ知らせてある。

この荷に限っては、荷下ろしも、運搬も、そしてそれに随行する男達についても、総てが特別扱いであった。

この荷に紛れて何を持ち込もうとも、それを他人に知られることも咎められることもない。たとえ其れがどんなに豪華で華やかであって、港中から見物人を集めてしまったとしても。

「へい、では倉庫ではなく荷車を用意いたします。」

「急げよ、花嫁よりおくれてはことだからな。」

「へい、お任せください。」

「それとだ、・・・酒はあるかなあ。」

「へっへっへ、別料金になりますが。」

「ふんっ。船に酔うより、酒に酔えときたもんだ。」

なんだ、折角褒めてやったのに。

こうした騒ぎの中で、婚礼の荷物の到着がアストアシタ宮に早馬で伝えられた。

“こと”はすでに動き出していた。西の国からは傭兵達が来ていたし、“それ”が公になったときに、王や他の貴族や、民衆達に対する示威も必要になる。

貴族が五十人、という大人数はそのためでもあった。

「婚礼の準備とはのんきなものですな。」

「まだ我々の企ては、気づかれてはいないと言うことで。」

「ついでに、それも頂きますかな。」

「なにせ、異国からの婚礼の荷ですからな、相当な宝物が、詰まってっているとみて間違いないでしょう。宝石に、宝剣、宝冠、宝珠。」

「まったく、まったく、後は傭兵軍団が首尾よく働いてくれれば。」

「王の首を取るも良し、それが叶わぬとしても我々の勢力を、決して無視は出来ぬと言うことを分からせれば。」

「我々は、はるかに遠いこの宮殿で宝物を肴に、酒盛りでもしておればよろしい。」

とかなんとか、下らぬ想像をしている内に、港からの荷が運び込まれ始めた。

「衛兵には、西宮に運ばせるよう命じておきました故。もうまもなく・・・。」

宮廷の床には、大理石の床を覆い尽くすかのように厚い絨毯がひろげられる。

筒型にまとめられた絨毯は、異国ふうの装束の男達が、慣れた手つきで転がしては平面へと戻していく。

途中で数えることもあきらめてしまった荷の数々が、若い男達の手で運び込まれては、絨毯の上に小山をいくつも築き始めた。

「おお、これは！ただの外箱ですらこの塗り、飾り、そしてこのなんという数。」

「もそっと傍で見せてもらおう、いやふたを開けて中を見ようぞ、手にとって愛でるのじゃ。」

ハヤリモノ、珍しいものには眼のない都の貴族達である。しかもここしばらくの締め付けにより、そういうものには飢えている。

甘い香りの木の汁に引き寄せられる虫のように、いそいそと近付いて見ようとする男達に向かって、その荷はこびの首領らしき男が、それは、その男だけが小箱一つ運ばなかったということによる想像なのだが、悠揚と振り返った。

「それはならんな。」

その言葉に併せるように、荷運びの男達は、荷のいくつかの紐を解き、中から婚礼とはそぐわぬ実用的な剣を取り出した。

「何じゃお前は。」

その叫び声に、広間は静まりかえった。

百の眼が、男をじっと見つめている。

「わたしか。お前らなぞに聞かすも惜しいが、知らぬというなら聞かせよう。」

少し酒の入った男は、口上なめらかに啖呵を切った。

「われはザヒル・シャハフ。アレスミリアン王の名代だ。」

「ぬわにい。王の名代だと。」

「たわけたことを、王の名代がなぜここにいる。」

「ふっ。アレスミリアン王とは、先の戦で、このアストアシタで一暴れして以来の、堅い契りよ。」

「おっ、思い出した。アタリスのザヒル。飲んだくれの！おっ、おまえが何故ここに！」

「だから、何度も言っているだろう。王の名代として、おまえ達を拘束しに来たのだ。」

この男、ご存じのように口より腕が立つ。それでもまだ我慢していたのは、王への遠慮によるものだった。

「なっ、何を理由に。」

「王への謀反だ。」

先に吞んでいたのが、機嫌も良かったかも知れない。

「むっ、むっ、謀反などとは穏やかではないな。何を証拠にその様なことをいっている。」

「証拠か。おまえ達がここで話していた密談の内容から、出入りの記録まで、総て揃っているぞ。」

「そ、そ、そ、そ、そ、。」

・・・しっかりしろよ。

「そんなものはでっち上げだ。記録など作ろうと思えば幾らでもつくれるわ。五十人もの貴族を無実の罪に陥れようなどと、王といえども、ただでは許されんぞ。」

よく言った。

しかし、ザヒルは、この猿芝居につきあうのが少々飽きてきた。うまい酒が台無しだ。

「やいやいやい、いいかげんにしやがれ。お天道様は見逃しても、このザヒル様はお見通しだ。何から何まで予想通りの反応をしおって。まったくつまらぬ奴らだな・・・。

王よりは、とらえるだけで手は出すなど言われているが、あまりうるさいとその口に剣を突っ込むぞ。」

貴族達は、思わず九十九の手で口を隠した。一人は片手が酒杯で塞がっていたのだ。

「念のために言うておくが、動かぬ証拠とやらを、いま抑えにかかって居る。おまえ達の古い知り合いだとか言う男の手によってな。」

貴族達は、怪訝な顔でお互いを見合った。ウェルモンテを通して知っていたものもいたろうが、それだけでは誰の事やら分かりはしなかった。

一 握られてまずいものはあの紙だけだ。しかし、あれはそれとは分からぬように隠してある。私ですらどこにあるかは知らないし、隠した男はそれが何かを知らない。

例え、屋敷中の壁をはがしたとしても、家中の男を締め上げたとしても、あれは見つかりはしない。

と、心の中で、その男は思った。

“名無し”は、数名の男を従えて、と有る貴族の屋敷の中にいた。そこに至るまでの間には、貴族達がアストアシタ宮に入る時を狙い、屋敷にはいるまでの家人達との押し問答や、目的の部屋を見つけるというような面倒な手続きがあった。

「傭兵とのつながりがあるのはこの男だ。裏の家業の密貿易で、用心棒として使っているときいたことがある。」

その部屋には、昔からの取引の記録が、整理されて積み上げられていた。その時、どこで、どのようなものを、誰に、どんな値段で取引をしたか。それは、商人にとっては才覚の次に大事なものである。

長らく動かされた形跡が無く、うっすらと埃が積もっているものもある。紙が呼吸して吐き出した、独特の少しかび臭いようなにおいがした。

「で、どこから探せばいいんで、あにき。」

と、あまり貴族の屋敷にいるには、品の足りない口をきく男が聞いた。家人は戸口の付近に腕組みをして立ち、この調査団を見下げた顔で見守っている。

この男の装束は、それなりに優雅なお仕着せであったが、主の裏家業を考えると、決して上品な面相をしているとは言えない。なんだか少しでも気に入らぬことでもあれば、この調査団を放り出すことに決めていた。

「捜し物は、だ。ここの男達は、このところ普通の取引しか扱っていないと、口を揃えて言いおったからな。おそらく、それとは知らされずにやっているのだろう。そうしておけば、口を割られる心配がない。

普通の帳簿と同じ所に有るはずだ。

賢いやり方だが、残念ながら俺がむかーしに使った古い手口なんだよ。隠し扉や、中を切り抜いた本や、引き出しの裏の小物入れなどを探す必要はない。取引の新しいものから帳簿をめくるのだ。」

「では・・・と、この束からあたりやしょうか。」

帳簿の山の新しそうな所を指さした。

「その中に、人の名前と署名が沢山書かれている紙があるはずだ。羊皮紙ではないぞ。急いで処分するときのために、紙が使われているはずだ。」

男達はめいめいの前に積み上げた、取引台帳をめくり始めた。少々人品には欠けているが、生きていく都合上、読み書きやそろばんには多少の心得のある男達だった。

もちろん危ない橋を渡ることにかけては、それ以上の心得がある。

絹や香料、時には人の売り買いの記録がある。多少の知識と興味のあるものなら、それらがどこから持ち込まれたもので、この商いのお得意がどういった客であるかについて、想像するにさほど難しくは無いだろう。

そういうものの売り買いとは毛色の違う、一目では何の取引とは判じかねる一枚の紙が、あった。

「こんなものがありやした。」

といわれて差し出された協定書には、見覚えのある貴族達の名前と、署名がはっきりと記されている。

「あたりだな。あの男はよく言っていたものだ。木は森の中、人は人の中。さしずめ今回は、阿呆は阿呆の中とでもいうところか。」

さてこれを宮殿に届けねばならないが、さてどうしたものか。
人に預けるには重要すぎるし、かといって私はあの宮殿に入れる身分ではない。

「ここはひとつ、正々堂々と忍び込むとするか。」
“名無し”は、男達に手間賃をはずむと、街へと駆けだしていった。

「ザルウィー様」と壁の一つが開いて、セシリーが現れた。

ザルウィーは、分かっているのだがどうにもこれには慣れなかった。セシリーがそこから入ってくるたびにびくっとしてしまう。それを感じられないために、様子を取り繕うのがまた一苦労だった。

「出来れば扉から出入りしてくれないか。」
「失礼いたしました。何しろ急ぎのことが有りました故。」
ということは、「謀反の件か。」

はい。

「ついでしたが、西宮で貴族達が拘束されました。それと男がこれを届けて参りました。貴族達の署名の入った協定書です。題目は分からなくしていますが、傭兵への支払いの分担が記され

ています。」

ザルウィーは手にもとらずにそれを眺め、大きく肩で息をした。

「あの方に謀反を起こすには、ちょっとおつむが足りなかったようだな……。」
と、感想を言った。

「クラコワへは早馬が走りました。アタリスのザヒル様がそうせよと。」

「ほう、あの騎士殿が来られたのか。」

「ええ、もう相当に聞こし召しておられます。」

「ちょうどよい、私も飲まずにいられない気分だ。全く阿呆な事をしたものだよ。あの阿呆どもは。」

その苛立たしさの理由までは、セシリーには分からなかった。

それからだな、

「それはおまえが預かっていてくれ。私には、どこに保管すれば安全かが分からないし、かといって始終それを持ち歩くわけにもいかん。」

「キリアンデル殿！」

かなり遠くから聞こえる呼び声に、聞き覚えがあった。

「おっ！陛下だ。」

その声に、周りのもの達も色めき立った。

「おい陛下だぞ。」

「そうか、へいか？」

「王さまのことだよ、相変わらず無学なやつだな。」

「どーすんだ、跪くのか、やっぱり。」

キリアンデルは笑いながら

「あの方にはそんなことをしなくていい。」と、昔からの遊び仲間に行った。

「まあ寝そべるのはやめた方がいいだろうな。」

マクシミアはまだ走り足りないというように、頭を激しく上下させたが、アレスミリアンが構わず乗り捨てると、勝手にどこかへ行ってしまった。

「おいおい、あの白いヤツ。ドッカへ行っちゃったぞ。」

「ああ、マクシミアだな。ほおっておけばいいさ。いやまてよ。一人で傭兵隊を追っ払ってしまったら、我らの面目丸つぶれだな。」

真昼の日差しの下を、丘の上まで上がってきたアレスミリアンは、

「ああー疲れた。」

といて、どっかりと草の上に座り込んだ。

「いやー、わざわざお越しとは。」

といてキリアンデルが手を差し出した。

その手に引かれて、よいしょと立ち上がった。

「敵の様子はどうです。」

「やる気満々、という感じではないですな。様子見というところでしょうか。こちらがどう出るか、探っているようです。」

「ということは、まだ交渉は持っていないということですね。」

「ええ、ロンダルトの状況やら、こっちの兵力やら。」

「いまの手持ちは。」

「約九千。けちのニールが小出しにするので。」

アレスミリアンは、イテカレスの賭の話の思い出して笑った。

「あの奇妙なものは何です？」

上がってきた丘の反対側、には臨時の堀とその後ろには土塁が築かれ、その後ろになにやら機械が置いてあった。

「あれは“火竜”と“地竜”。」

「レム・プラントではいつからドラゴンなど飼い始めたのですか？」

はっはっは・・・と周りから笑い声が上がった。

若者が一人丘を走り下り、一人の老兵を連れてまた上ってくる。

老兵は途中で息が切れたようで、若者はその前にしゃがんで老人を背負おうとしたが、その背中をはたかれて前につんのめった。

はあはあはあ、「こんな年寄りを・・・」

ひいひいひい「丘の上まで・・・」

ふうふうふう「呼び出すとはよほどのご用でしょう・・・」

・・・「な。」

「あなたが“じいさん”か。」

へえ？

「アレスミリアンだ、会えてうれしいぞ。」

ほわっ！

親だと思って抱きついた足が、よその親だときづいたときの幼児のような顔で、“じいさん”は驚いた。

「陛下が“火竜”と“地竜”をよく見たいとおっしゃるのだ。」

へえ—————この方があの、あのときの、あの事件の、そしてあれもこれもそれものアレスミリア、いやアレスミリアン陛下かえ。

「あなたに会いに来た。」

いや、なんともそれは、ご大層なことで。

「では、ご覧に入れますので、下へ・・・」

までよ、

「だれじゃ、わしを上まで呼びつけたのは！」
丘の上の男達は転げ回って笑った。

「あれえ、何か変わったものが来っぞ。」

先ほどアレスミリアンがたどってきた道筋を、一台の輿とその前後に数十の騎兵が一団となつてやってきた。

「あああれは、なんというか、我が妻となる人だ。」

そのぶっきらぼうな言い方が、かえってアレスミリアンの恥じらいを感じさせた。

「なんでまたこんなところに。」

「クラコワはどうも居心地が良くないらしい。

それに、見るもの聞くものが、楽しくて仕方ないとかいうのでね、子供のようなのだ。」

「あの騎兵は？」

「頼みもしないのに皆付いて来るのだ。」

ニール、イテカ、ワーズ、アレスミリアン一家の面々と、クラコワの早耳達。

「誰にもいわぬのに、待ちかまえているのだ。しかも、私の方は放ったらかしでね。」

野を渡る風が、輿の簾を何度も何度もゆらしている。

輿を担ぐ男達は、丘の登りを苦にはせず、ただ黙々と輿の水平を保ったまま登り切ってきた。

その静かなる行進を、キリアンデルの郎等達はものも言わずに見ていた。

頂上に近く輿の中から声がかかると、男達はそれをゆっくりとおろした。

侍女が履き物を揃え、簾をはねあげる。

アリシアはベールのない姿で丘の上に立った。

風がしきりに黒い髪をなびかせた。

遮るもののない風景の、限りない遠景を見回して小さく息をついた。

「あの向こうがロンダルトか？」とアレスミリアンに尋ねた。

「うーん。私には分からない。」

「ロンダルトはあちらの方角でございます。ちなみに私はキリアンデルでございます。

ええ・・・。」

「アリシアです。」

「はいアリシア様。」

うん、というようににっこりとした。

「たまげたー。」

「おおお・・・、」

「女神様だ、女神様。」

「ううう・・・・・・・・。」

「おお、とか、ううとか本とにしようがねえなあ。学のないヤツはこれだからいかん。」
とかいう小さな騒動はあったが。

「下りよう。じいさんが面白いものを見せてくれるそうさ。」

「だから、その“じいさん”はやめてくだされ。」

空堀の前をマクシミアが何度も疾走し、そのたびに兵達の喝采を受けていた。

「これが火竜、そしてこちらが地竜。といっても元は投石機と弩でございます。

この枯れ草玉に油とタールをしみ込ませております。火をつけて、鋤でこの腕の先に載せまして、いくぞほら。」

と、煤煙を上げて燃え上がる玉を移した。

「はなてっ！」

の合図とともに、ぶおんと音を立ててその腕を振ると、火の玉は黒煙と炎を引いて飛び上がった。

「すごいっ！」

アリシアはその迫力に驚いた。

それがブルターク城の攻防で、ペルジア軍の頭上から降ってきたことまでは知らない。

「これが三十両でございます。

地竜の方は、弩をさらに大きくした物で、矢というよりはほとんど丸太に近い棒を、敵兵に向かって発射いたします。

集団で突進してくる敵兵の足を止めるのが目的ですな。敵兵に先端が当たれば、勢いの残る後端が回転してその周囲を道連れにする。

と、まあそんなようになっております。」

「これをじいさんが考えたのか。」

「まあそうでございます。」

と自慢げであったが、

「じいさんはおやめください」と付け加えることは忘れなかった。

「マクシミア！」とアレスミリアンが呼ぶと、走りが足りて草を食んでいたマクシミアが駆け寄ってきた。アリシアをその上に乗せると、白馬はとことこと丘をあがり始めた。

一同は、ダルマールじいさんを残して再び頂上を目指した。

「やるのですか。」と、キリアンデルから問いかけた。

「いや。」

とニールリングの方をちらっとみてから、

「ニールが、戦争なんぞやっている暇はない、と言う物だから。」

と付け足した。

ニールリングは苦笑した。

「では、どなたかが交渉に・・・あなたはだめですよ。もう、そんなお立場ではないでしょう。」

キリアンデルは釘をさすのを忘れなかった。

「だめなのか、がっかりだな。」

「では、この役は負け知らずのイテカレス殿に頼もうか。」

「えー、私ですか！」

「おや、賭け事には自身が有るんじゃないかったのか。」

と、ニールリングがいつぞやの仕返しをする。

「うーん、金銀を賭けるのとはわけが違うからね。」

「しょうがないな。」

じゃあ、わたくしがとニールリングが言いかけた。

「私が行って参ります。」

ワーズワードが一步踏み出した。

「おい、どうした。」

「熱でもあるんじゃないのか。」とイテカレス、キリアンデルが冷やかす。

「出来るか。」とアレスミリアン。

「やります。」

「殺されるぞ。」

ふたたびアレスミリアン。

「・・・一万八千の兵の、・・・いえ民の命がかかっています。決して死にはいたしません。」

「そうか・・・よく、分かったな。」

私の気持が、よくわかった。

「いいか、勝負事はな、相手をいい気持ちにさせて終わってやるのが大事だ。そうすれば、相手の恨みを買うことはない。

ただ叩き潰すだけが目的ならそんな心遣いも不要だが、ずるい駆け引きをやるときは、相手には勝ったような気持だけをやっていて、こっちは中身を頂くんだ。」

「・・・ありがとうございます。」

「なに、しくじったってかまいわしない。こっちには火竜やら地竜やら、私もまだ見ていない、まだまだすごいのがあらしいからな。」

「ワーズ。」

「はい。」

「私のところに来なさい。我々の持ち札を確認しておこう。」

「うん。それでは解散。」

アレスミアンの最後の一言で、ワーズウォードはアレスミアンに一礼すると、ニールリングの後について丘を下っていった。

「気分がいいな。」

丘の草の上に敷かれた絨毯に座りながら、アリシアが言った。

西風が、丘の下から上へと吹き上がり、東の空へと消えていく。
名前を知らない野の草が、枝先の白い小さな花ごと揺れている。

遠くの森が、風で鳴る音がした。

ひととき強い風が、綿毛を吹き散らした。

幾百幾千の傘が舞い上がり、アリシアの髪に絡んだ。
アレスミリアンはそれを指でつまんで、息で吹き飛ばした。

「この辺りは高地だからね。夏でも風が有ればかなり過ごしやすい。」
アリシアがにこにこしている。

「なにか、変なことをいっただろうか。」

それには応えず、抜いた草の短い茎を槍のように投げつけた。

「おっと。」

というアレスミリアンの顔は、もう、子供はしようがないなというかのような顔だった。

「子供で悪かったな、ふん！」

といて、また投げつける。

おいおい、

「気分がいいのではなかったのか。」

「気分はいいぞ。」といてまた投げつけた。

「ただ、退屈なだけだ。」

おやおや。

「おまえ達が皆戦っているのを、ただ横から眺めているだけなのはつまらない。」
投げてるのをやめて、顔の前でくるくる回している。

「でも、若者達がみな、信頼し合い助け合い、成長しようとする年若いものに、気を遣ってやる
のを見るのは気分がいい。」

ああ、それでそう言ったのか。なのに気候の話などしたから、へそを曲げたのだな。自分の方

が年下のくせに。

若者なんて。

「でも、私にはしてやれることがないから、せめて無事にことをなすことが出来るように、祈ってやろう。」

と、今度は風に乗せて、莖の槍を投げた。

「クラコワは、居心地が悪いのかい。」

あごを膝に乗せこっくりする。

「イーリアスのことは、いつか話そうと思っていたのだけど。」

「いや、そんなことはいいのだ。私の国では力のあるものが、何人かの女の面倒を見るのは当たり前のことだから、おまえの傍らに誰がいようと構わないし、聞きたくもない。だって、死んだ女の思い出に勝てるわけなど無いのだから。」

顔を膝に埋めて、

「私はずっと心の世界に生きてきた。だから何かを聞くと、心の中でいろいろなことを思ってしまう。

イーリアス様のことを聞いたとき・・・、可哀想に思ったのだ。

こんなにいい人達に囲まれて、幸せだったろうに。まだ若いのに逝ってしまうなんて。その後に私が居座ってしまったようで、つらいのだ。」

そしてキリアンデルが、先ほど指し示した遠くのほうを見た。

「おまえの国では、・・・妻は一人しかいられないから。」

それは、アレスミリアンも考えを避けてきたことだった。

クラコワの人々がどう受け取るか、と自分自身がどう整理をすべきなのか。

若い二人には、それは分からなかった。

「おまえの都に・・・」

と、濡れた眼が願っていた。

「すまないが、今はまだ無理だ。」

と、アレスミリアンは応えるしかなかった。

アリシアは、寂しそうな笑顔で、

「うん。」と言った。

アレスミリアンはその夜、クラコワのキリアンデルの館に向かった。
そこには、キリアンデルの妻で、もとエスクロル家のリディアが待っていた。
その館は、レセクル家とエスクロル家を復縁させるためにキリアンデルとリディアを縁づけたとき、両家の諍いから二人を守るためにアレスミリアンが用意した館だった。

いまはそれが、クラコワの宮城入りをためらったアリシアの宿ともなっている。
よほど、こういう縁の上に立てられた屋敷らしい。

「ええ。リディア様。」
レム・プラントの家僕が、アリシアを招いて談笑している居間を訪れた。

「なにかしら、このような夜中に珍しい。」
とアリシアに言い、
「何か。」
と家僕に問うた。

「えー。クラコワの住民の代表がお願いに上がっております。」
「こんな夜に？しかも当家にですか。」

「はい、出直すようにと申したのですが、失礼は十分承知で、その罰は受けるが、少しでも早くお聞きあげ願いたいと。でなければ町中のものが眠れないと、大げさにもうしますので。」
「通してあるのですね。」
「はい。」
家僕は仕方なく、という顔をして見せた。

「眠れないとはまた奇妙な。しかし、そこまで言うのであれば逢いましょう。」
と席を立とうと腰を浮かしかけたとき。

「いえ、それが。」
「なんですか、要領を得ない。はっきりと言いなさい。」
「アリシア様にお目通りを願いでております。」
リディアとアリシアは、お互いの顔を見合わせた。
その、不安というよりは、見当の付かないとまどいの顔を。

「わかった。会おう。」

リディアは、今のアリシアの気持を考えると、とても会わせるべきでは無いのではと気をもんだし、せめて自分が付き添っていく必要があるだろうと、その場で判断した。

この都のもの達が、アリシアに持ったある種の抵抗感は、彼女にも理解できたからである。

夫キリアンデルとの巡り合いに、イーリアスは重要な役回りを果たした。

それ以降も、キリアンデルとアレスミリアンが特別の関わりを保ったのと同じ様に、クラコワの貴族社会の中でイーリアスとリディアは深い関わりを持った。

イーリアスの死についても、彼女は何か自分に出来たことは無かったかと、深い悲しみの中で悩み続けた。だから、この会見は、アリシアにとって決して、快い結果には終わらないだろうと思ったのだ。

アリシアは廊下を歩く短い間に、何があっても、たとえそれがこの都を追い出されるようなことであっても、狼狽えはするまい、という決意を固めた。

“外”とは、一枚の分厚い扉を隔てただけの部屋で、膝をついた男達が待っていた。

「おまえ達か、願い事があるというのは。」

リディアは、まず自分が何かを言うべきではと思っていたので、アリシアのはっきりした言葉に驚いた。

「はい。私どもは、クラコワの住民の世話役を、仰せつかっております。」

「そうか……。濟まないな。しばらくの間この都に居させてもらっている。おまえ達には、申し訳ないと思っている。」

リディアは驚いて、

「アリシア様そのようなこと。」という言葉も終わらぬうちに、

「申し訳ございません！」

との世話役達の言葉が、高い天井に響いた。

今度はアリシアが驚いた。

リディアはもう何がどうなっているのか分からなくなってきた。

「アリシア様が、自ら宮城にお入りにならなかったと伺いまして、街中のものがびっくりいたしました。」

その丸顔の両側の眼が、まん丸にむかれる様子に、少し心がゆるんだ。

「みながいろいろに噂して、これがまあ箸にも棒にもかからないくだらない話が、はあ……。」
そのため息に、状況が推測された。

「それであれやこれや言うております内に、ひょっとすると、あのうー、大変もうしわけにくいことなのですが、あー。」

といいながら額の汗を拭いている。

「イーリアス様のことは、知らなかったのだ。」

アリシアがそれと察して言った。

「そう！それ！。やはりそうでしたか。いやー。いやいやいや。」

といって仲間内で顔を見合わせた。そして一つ頷きあうと。

「アレスミリアン様が、一言我々に言うておいてくだされば、こんなことには成りませんでした

のに。」

「そう、そう。」

隣の少し細面の男が、相づちを打つ。

「あの方は昔からそうでございます、人ごとやら、よそのことやら、戦のことやらはそれこそ神か悪魔かというぐらいのご活躍ですのに。」

「ご自分のこととなると、背中に矢をぶら下げて帰ってきたり。」

「飲み屋で、からまれたこともありましたな。」

「かなづちで指を叩いたことなど数知れず。」

「そんだ、そんだ。」

「まあとにかく、一言言ってくださって居れば、アリシア様をどうお迎えするか、相談しておきましたのに。」

といかにも残念そうに。

「突然のお目見えで、我々もどうしていいか分からなくなりまして。」

といかにも困った表情で。

「おっしゃるように、この街のものはまだイーリアス様を敬愛しております。」

とところもち胸をそらして誇らしげにいった。

「なんせ、美人でございましたし、子供の頃からよう知っておりましたもので、おてんばさんで、へへ。」

「けれどもそれとこれとは別！」

「そう！別！ でございます。」

「イーリアス様は、イーリアス様。」

「おれんちの嬢あがこいつの嬢あより器量がいいからといって、こいつがどうにもしようがないのと同じで。」

「そのたとえじゃ解らんだろ。だいいちお前んちの鍋蓋がどうして、俺んちよりいいんだ。」

「まあまあ、お前たち。場所をわきまえろ。」

おまえが一番、わきまえろ。

「このようにお優しい心根の方と知っておりましたらば。」

「アレスミリアン様などそっちのけで、大歓迎いたしましたものを。」

「そう。自分のことはからっきしだが、人を見る目はお持ちじゃな。」

「それこそ城門に櫓を立て。その櫓からは花を散らし。鐘を鳴らし、行列を仕立て、町の角には竿と旗を立て・・・。」

「夜は夜で大宴会。」

「おまえは、そっちが本音だろう！」

「あっ！・・・いけません！・・・その様にお泣きに成られてはわしらの面目が。いや困りましたな。」

アリシアは、両手の指を交差させ、口に当てて泣き、しばらく笑っていた。

「お願いと申しますのは。」

アリシアはやっとの事で、うんと言った。

「いまさら歓迎式をしますのも恥ずかしくございますので、クラコワの市民はみな姫様のことを歓迎して居ると言うことをおわかり頂きますして。」

「出来うることでしたら、あれから一度も市中にお姿をお見せにならぬとか。そうではなく、一度といわず何度でも。」

「お姿をお見せ頂ければありがたいと存じます。」

という言葉に合わせて、一斉に頭を下げた。

そして「いや、決してご無理はなされずに。」

と、ひとりがぴょこりと頭を上げると。

「そうそう、わしらはわしらで祝杯をあげておりますんで、勝手に。」

と、みながニコニコと笑顔を見せた。

リディアはアリシアが落ち着くまで、母鳥が小鳥を羽の下にかくまうように、やわらかく肩を抱いていた。

リディアにとって、イーリアスは特別な人だったが、ここに生きているアリシアも、特別な人となった。

「皆の心遣い、痛み入る。王が皆のことを大切に思うのもよくわかる。私も皆のことを大切に思う。私はこの国に来られて、幸せだ。」

世話役たちはうんうんとうなづくと、がっはっはと笑って館を下がっていった。

「ああ、やれやれ・・・。」

と肩をとんとん叩きながら、疲れた表情のアレスミリアンが、アリシアの居る客間を訪れた。それを潮にリディアは目礼し、下がっていった。

「なんだか、お客様だったらしいね。」

アリシアはゆっくりと、頬を膨らませてうなづいた。

これは、やばい雰囲気だなとアレスミリアンは心の中で身構えた。

「ひとつ言っていていいか。」

「はい、なんでしょうお姫様。」

アリシアは一息吸って、

「ばか。」といった。

—あいたっ。これで何度目かなあ。誰が教えたんだこんな言葉。

「お前が気が利かないから、街のものが右往左往したではないか。」

—なんのことか、わからん。

「あんなにいい人ばかりなのに。迷惑かけて。」

—そうかあ、子供の頃は良く怒られたぞ。

「でも、それだからみんな気に掛けてくれるんだろうな。わざわざこんな夜中に来てくれて。」

「いったい何の話だ。」

「ばかには教えない。・・・でも、ひとつだけ教えてあげる。この都が好きだぞ。いつまでも居たいぐらいだ。」

そう言って、胸に飛び込んだ。

—やれやれ、よくわからないが、ひとつは解決したということだ。でも、あとふたつがなあ。ひとつはワーズがやるとしても、後もうひとつは目処が立たない。うーん。

「こらっ。聞いているの！この耳は飾りか。」とって耳をひっぱった。

「いたいよ。アリシア、痛い。」

「あっごめんなさい。・・・そんなつもりじゃなかった。ただちょっと、今夜はうきうきした気持ちを抑えられなくて。」

「うそさっ。」

とってぺろっと舌を出すと。

「もう！ほんとのばか！」

とって足を踏みつけた。

「痛い！こんどはほんとに痛い！」

まあ、痴話げんかというのは、こういうもの。

アリシアは、先ほど起こったことの顛末を話した。

街の世話役に対する自分の感想も交えて、その話は遠く南海の孤島に寄り道し、砂漠の山を月の光の下で越え、人知れず獣たちがうごめく深い森の中で焚き火を燃やし・・・、というような寄り道を繰り返しながら、饒舌に語りつくした。

昼間とは別人のようだな、と思った。

「ところでお前は何を悩んでいるのだ。話してみるがいい、何でも聞いてやるぞ。」
うーん。

「どうした。話づらいのか。」
そう。

「無理に話さなくてもいいぞ。明日、リディア殿に聞くから。」

「えーっと。それはだめだ。実は・・・戦費のことなのだ。」

「あっ。」

アレスミリアンは頷くと、

「だから言いにくかったんだ。このところ出費がかさんだので、国庫は空っぽに近いのだよ。

今度の遠征では、半年近くみなを引っ張ってしまった。その間の農作業は、今年をあきらめるか、人手を雇うかしてやったのだが、その保障と雇い賃を支払わねばならない。」

その目は、本当に困ったというかのように、あらぬ方向を向いている。

「かといって、増税は・・・そのつけをみなに回すことになる。戦争に駆り出された上に増税ではなあ。」

アリシアは、ここまで困った様子のアレスミリアンをみたのは初めてだった。

「キリアンデル殿と相談していたのだが、結局借金をするしかないだろうと。それも、返すまでには長い間かかるだろうと。」

アリシアは小首をかしげ、

「いったいいくらなのだ。」と聞いた。

「およそ金百万。銀だと一千万。銅だと十億。」

アレスミリアンは貧しかった頃のことを思い出し、その金額の大きさに頭がくらくらしてきた。

けれどもアリシアは一向に動じる様子も無く、
「そんなものでよいのか。」
と、平然と言い放った。

くっそー、さすが王宮住まいは金の心配などしないのだな。

「そっ、そんなところだよ。これを借金でまかなって、償還するのに何年かかるか。」
ええい忌々しい。

「わかった、しばらく待ってくれ。私が用立てる。」
一えっ。

「いや、金百万だよ。そんな簡単に言って大丈夫なのか。」
アリシアが怪訝な顔をした。

「ほら、お前がだまされて買ってくれたあの首飾り、あれいくらだったっけ。」
一あっ、いやなことを思いださせるな、とアレスミリアンが黙っていると、

「たしか金一万とかいていたが。」
「そうだが、あれはダメだぞ。」
「ふふっ。分かっている。一生の宝物だからな。」
一おっ、かわいいところもあるじゃないか。

「お前が、引っ掛けられた。」
一かわいくない。

「あれが百本もあればいいのだろう。」
「百本！いや、あれほどのものはあまり無いといていたじゃないか。」

「たしかに、あれほどのものはなかなか出回らない。でも作らせれば別だ。」
「えっ。」

「私の輿入れの荷物の中に、同じようなものがいくつか入っているはずだ。それを売ればよい。
あのシルヴェスタに頼めば十倍ぐらいの値で捌いてくれるだろう。」

「それはだめだ。」

「どうして。」

「だって輿入れの道具じゃないか。それはあなたのものだ。手をつけるわけにはいかない。」

「そういつてくれると、ちょっとうれしい。」

と、機嫌がいいときのちょっと甘えた顔をした。此れでよくだまされる。

「でもね、もともとそういう話だったとしたら。」
一話が見えなくなってきた。

「タラバスカニがそう言ったのだ。ペルジアは、あなたの国にあまり大きな借りは作りたくない」と。

感謝はしている、だが自由な国であるために借りは作りたくない、と。」

アリシアは自慢げだった。

なにかにつけ、アレスミリアンにはいいように振り回されることが多い。もちろんそれはアレスミリアンがアリシアのためを思っていることだし、それはわかっている。

「このたびの輿入れの荷物は、おそらく私が一生かかっても、使い切らぬものも入っているだろう。

でもそれ以外に、私が使うはずの無いものも相当入っているのだ。

タラバスカニからお前にでは、お前は受け取らないだろう。でも輿入れの道具であれば、中身も見まいし受け取れぬとも言わないだろう。これは私の持ち物だから。」

やられた、カニに一泡吹かされた。

「なんなら私が貸したことにしようか。」

だから、アリシアは、彼の役に立ったことが嬉しくもあり、自慢でもあった。

それだけのつもりだった。

アレスミリアンは、待てというようにし、しばらく考え込んでいたが、
「分かった。好意として受けよう。なんなら領地を授けるので公主にでもなられるか。」
「そんなことが出来るのか。」
「それで借金はチャラにさせていただく。」
「私が、領地を持つのか。」
アリシアの目が輝いた。

「今度の謀反組は、罰として財産をあらかじめ取り上げるつもりだ。
特に彼らが持っている地方の領地は、法外な金利の金貸しで、だますようにして手に入れたものが多い。
それらはあらたな領主を探るか、王国の保有とするつもりだった。
あのようなもの達が領主では、領民も苦勞しただろう。善政を施せば彼らも喜ぶと思う。」
アリシアの心の中心に、感じたことの無い震えが走った。

「よし、それでは契約成立だ。」

「王様。」
アリシアは、また例の甘ったれた声を出した。
「なんだ、気持ち悪い。」
「お前、便利だな。」

一たのむから、もう少しこちらのちゃんとした言葉を覚えてくれ。便利な王様っていったい。
アレスミリアンの頭の中に、アストアシタの床を磨いている自分の姿が浮かんた、かもしれない。

そうした騒ぎが少し落ち着いた後、
「ここは面白いな。」
と、アリシアが寄りかかったまま話し始めた。

「この館で、こうしているといろいろな音が聞こえてくるのだ。
窓から顔を出すと、下のほうで走っていく子供やら、立ったままいつまでも話をしている老婆やら。
馬に荷を乗せてどこかに運んでいく男もいる。そういうものを見ていると、ひとりでも飽きる事が無い。」

アレスミリアンが多忙で、そういう時は一人で過ごすことも珍しくない。
そうした環境の中で、アリシアが見つけたささやかな楽しみだった。

「夜になると、見るものがなくなるが、そうした音がよりいっそう不思議に聞こえてくる。
ずっとずっと何かの音がしている。何か得体の知れない大きな生き物の中に、身を横たえている
ような気がするのだ。」

「今夜はいろいろあって疲れた。もう動けない。このまま眠るぞ・・・。」
といったかと思うと、すうすうと寝息をたてはじめた。

アレスミリアンは、しばらく身を硬くして動かないようにしていたが、そーっと体を滑らせながらアリシアの体を抱きかかえ、寝台に寝かせようとし、頭と足が逆さまなことに気づき、しばらくどうしようかと頭を悩ませた挙句になんとかおちつかせることが出来た。

アリシアが、小さな声で「ばか。」といった。

アレスミアンにはもう一つ、仕事が残っていた。
クラコワの北方の農村、クルビスには彼の母が暮らしている。アリシアを、母に見合わせないといけないと思っていた。

その頃、アリシアは馬での移動に随分慣れていた。
輿は、人が担ぐものだけに移動に時間がかかりすぎる。馬車は、どうにもあのがらがらという車輪の轟音と、狭苦しさに耐えられないという。

侍女は「おひい様が行かれるのでしたら。」と自身も馬に乗りついていこうとしたが、なれないものはいたしかたがない。
「万一のときのために。」と、輿に付き添い、後からゆっくりと追いかけてくることになった。

はじめての遠出に、アリシアは一日で体がばらばらになるのではというほど揺さぶられ、夜は、姫が口には出せないところが痛くて、上を向いては眠れなかった。

翌日アレスミアンが、今日は休もうかといったが、
「お前が休みたければ、休めばいい。」
とって、自分はさっさと馬のところに行ってしまった。

二日目の夜も大体同じような状況だったが、日差しの中を、馬の背という高いところで風を受けながら走ることがすっかり気に入ったようで、体の痛みの割には上機嫌だった。

その村落は街道の両側に付属する小さな家並みを中心として、谷あいにはまばらに点在する家々のさまが心地よい調子をつむぐような村であった。

山の斜面には、放牧の牛や羊が緑の中にむき出した岩のように座っている。争い、いさかいの絶えない人の営みとは離れたのどかな光景だった。

「おい。このまま行くのか。」とアリシアが問いかけた。

「そうだよ、もうすぐだから。」

「そんな。埃だらけだし、髪も乱れているし、お前の母上に会うのに、これではあんまりだ。」

「いいさ。気にしないで。母は目が不自由だから。」

「そういうことではない！お前の母上に失礼だろう。私の気持ちの問題だ。」

そんなことを言っても、こんなところに着替えや何やかやが降って来るわけが……？
「何だあれは。」

目を細め、手で覆いを作り遠くを眺めると、白い小ぶりな天幕と手を振る人が見える。

「ひいさまー。」

確かにそんなふうに、呼んでいるように聞こえる。

「ひいさまー、お待ちしておりました。お着替えをなさいませんとー。」

「おー。ご苦労じゃ。」

「ちょっと待て、何かのまやかしじゃないのか。」

「何をいっている。この日中に、まやかしなぞあるものか。」

「でも、あなたの侍女は歩いてついて来ているはずでは。」

「そんなことは知らない。でもあそこにいるのは、オーダーだ。何とかしたのだろう。」

「何とかって、ありえないよ。」

そう二人が言い合っている間にも、天幕は近づいてきた。

「ひいさま。まあその格好では、ちょっと。」

「私もそう思っていたところだ。」

「では、中にお入りください。殿方はお待ちください。」

つんとした顔をして、アリシアに続いて中へと入っていった。

空高く、鳥が鳴き合いながら飛び交っている。

その遥か上を白い雲が流れていく。

そしてその上には、何があるのだろう。

不意に暗くなって、影の主の方をみやると、

「終わった。ここからは輿で参る。」

というアリシアがみおろしていた。

霧囲気の変わりように、アレスミリアンも

「ああ。」と、言葉少なに、立ち上がった。

傍らに馬を進めていると、輿の中から

「この緑は、母が好きだった。母はきっと緑が恋しかったのだろう。そういうところに生まれた

人だと聞いたことがある。だから私も緑が好きだ。」
という声が聞こえた。

夏草と木の陰からその館は遠慮がちに姿を見せた。

どこからどこまでがこの館の敷地という区別もなく、歩き続ければ小川に行き当たることもあれば、森の入り口に至ることもある。

一行が進んでいる道が、はたして屋敷の表に通じているのか、裏に通じているのかも解らない。その道を一行は無言のまますすんでいった。

そうすることが、この風景をたのしみ、間近に訪れるひと時のための心構えにふさわしいように思われた。

戸口と覚わしきあたりに、二つの人影が現れる。

リードヴェルトが、随分と背丈の大きくなったエルシーに添われて表へと現れた。

アリシアが輿の中から「止めなさい」と声をかけた。

輿が男たちの肩からそろりとおろされ、履物をそろえたオーダーが、流れるようなすばやさで簾をあげた。

アリシアは、馬を下りたアレスミリアンを一顧もせず、裳裾が草に擦れるのも構わず、小走りに走りよって、リードヴェルトの前に跪いた。

「アリシアでございます。お、おかあさま。」

その言葉を何年ぶりに口にしたらろう。

「まあ、よくおいでくださいました。遠いところを。」

顔を上げたアリシアの目に、慈しみにあふれた笑みを浮かべた、聖女の姿がうつった。とても、成人した男の母とは見えなかった。

この方は、歳をとらないのかしら。

その聖女は遠慮がちに手をのばした。

「よろしいかしら、私はあまり目が良くは見えないので・・・。」

アリシアは「はい。」と応え、自らベールをとり、手の来る方に背を伸ばした。

最初に頬に指を感じた。そのゆびは口元に移りそしてまた、頬の輪郭から眉と目を探り当てた。

アリシアの小振りな額から、オーダーの櫛が一本の乱れもないように梳きあげた髪をなで、肩に下ろした。

「まあ、美しい髪。」

そして、肩にあてた手に力を加えると、小さな力でそれを引き寄せた。

アリシアはそのままに、身体を寄せ、胸に顔をあてた。

「もう、大丈夫ですよ。」という声が、頭の上と胸からひびいてきた。

何が大丈夫なのだろう・・・。

そう不思議に思いながら、胸のきゅうとする辺りから、涙が泉のように湧いてきた、

「遠い国に、よくきましたね。」

そうか、もう大丈夫なのかわ。そう思うと、ひとりで「おかあさま。」とささやいていた。

アレスミリアンは、少し離れてその光景を見守りながら、このためなら王位を捨ててもいいとおもった。

内気なエルシーは、珍しく気が合うのか、侍女のオーダーと話をしている。

といっても、オーダーの言葉はまだたどたどしい。けれどもエルシーのゆるやかな性格には、それが愛らしく誠実に感じられた。

オーダーのアリシアを思う気持ちが、エルシーが送る日々とそりがあったのだろう。

そのあいだ、リードヴェルトにお茶を出し、というより、リードヴェルトに言われるがままに、お茶を出し菓子を揃えるのは、・・・恐ろしいことに、生まれてから一度もその様なことをしたことがないアリシアだった。

エルシーは、それを見ていて何度か冷や冷やとし、腰を浮かしたが、そのたび毎にオーダーに腕をとめられ、首を振って手を出してはいけないと止められた。

オーダーは、ただかいがいしく動き回るだけの侍女ではなかった。アリシアを一人前の女に育てるという信念が彼女にあった。だからこそ遠いクラコワの地まで彼女はやってきた。

とはいえ、皿の一枚、カップの一個も割れなかったのは、人類史上の奇跡といえるかもしれない。

「ふふっ。良くできました。」とリードヴェルトが褒めた。

アリシアは少し頬を上気させながら「お待たせいたしました。」

と、応えた。

母の死と共に失った時間を、大急ぎで取り戻している気がした。

その夕刻、落日が最後の朱い雫を山間に沈める頃、オーダーとエルシーは並んで夕食を作っていた。

エルシーは、クラコワの産物と東方の香料で味付けされたペルジアふうの食べ物に驚き、その作り方を書いて行けと言った。

オーダーは、得意げにそのほかのレシピも書き残したが、その総てがエルシーの口にあったというわけではない。

この館の屋根の下では、姫も侍女も担ぎ男も分け隔て無かった。いや分け隔てるほどの広さがなかった。そしてもちろん、王はかいがいしく動き回らねばならなかった。男手で、この家の勝手を知っているのは彼だけだったからである。

エルシーは、今日はもう自分の手を動かすことをあきらめ、その役目をアリシアに譲っていた。

アリシアは夜具を整え、水差しの水をかえ、リードヴェルトの髪を梳き、その日の最後に、一つ

願い事をした。

「一緒に休んでもいいですか。」

リードヴェルトは、

「いいですよ。でも・・・、子守歌は歌いませんよ。」と付け加えた。

ワーズウォードの強みは、彼の物怖じしない性格である。

都、ロンダルトで貴族の子として生まれ、幼少から貴族の師弟教育として宮廷での生活を経験した彼は、俊才として誉めそやされて少年期を過ごした。

彼は、ウェルモンテの毒に犯されなかった。

ウェルモンテが彼の趣味に会わなかったということもあるが、他の貴族のようにウェルモンテに対して平伏することを、良しとしなかったからである。彼の心の中では、ウェルモンテとて彼と同格の貴族の一人に過ぎなかった。

アレスミアンとウェルモンテの確執が、クワコワとロンダルト両国の間で深くひそかに進行していた頃、ロンダルトの貴族達はどちらにつくか、というかどちらに転んでも良いように、両方へのつながりを保とうとしていた。

そのころロンダルトにおいてクラコワの窓口となっていたのは、シルヴェスタとニールリングである。シルヴェスタは商人としてどこにでも入り込み、ニールリングは特権階級の権利を行使して、宮廷内に入り込んだ。

ニールリングは古王国の中でも古い家系に属し、その格式は、新王国の貴族とは比較することが出来ない。少し年上の、宮廷に登場するや女性達の噂話を独り占めにしたこの金髪の貴公子と出会い、生まれて初めてワーズは打ちのめされた。

北は北方の遊牧民から南はロンダルト、そして東はペルジアの動向を頭の中に描きながら、ニールリングは古王国と新王国の行く末を憂い、けれどもまるで世間話をするように話した。こういう憂国の情というものに若者は惹かれやすく、かぶれやすい。

「見ている世界がちがう・・・。」

大きいとはいえロンダルトも都市のひとつ、そのまた宮廷という建物の中で、ちやほやされていい気になっていた自分が惨めだった。

少年の人生は、挫折感を乗り越えていくところから始まる。

冬を越して春が来て、去年の夏のことを思い、アレハ誰ダツタカ、と思うときから本当の人生が始まる。

草原に設けられた、交渉のテーブルは、小ぶりな机と対面する椅子が二つだけだった。そのひとつに腰掛、ワーズは待っていた。

やがて、剣と金具の触れ合う耳障りな音が近づいてきた。

「まあたせたな。」

見るからに歴戦の、一筋縄ではいかないと言うような顔をした大柄な男が立っていた。体のあちこちから血のにおいがしそうである。

その後方には武装した集団が、威嚇的に立っている。

ワーズは何も言わない。

「若いな。なめてるのか。」

と男が言うがそれにも答えない。

「ちっ。」

と短くしたうちすると、空いた椅子に腰掛けた。

それをきっかけとして

「あなた方の依頼主は、すべて逮捕された。」

とようやく口を開いた。

「従って、あなた方への依頼も取り消されたということだ。そうそうに母国にお引取りいただく。」

男は腕を組んでから、もったいぶって口を開いた。

「はい、そうですか、と帰れるものか。俺達はまだ前金しか受け取っていない。残りもイタダかねえとなあ。」

一ああやだやだ。

「依頼主の領地・財産は没収されることとなった。お前たちが望む半金は手に入らない。」

「じゃーそっから払ってもらおうか。いろいろと物入りで大変なんだよ。」

一まったく。

「謀反人の財産は没収される。その前金も没収したい位だ。」

「なんだとう！」

とって男は机を叩いた。

一予想通りの反応で面白くない。剣ぐらい抜いてみろよ、もう。

「お前達が払ってくれねえなら、自分達で取り立てるしかねえな。町が二つ三つ無くなるかも知れねえが、いいのか。」

こういうことは、男は何度も経験済みだった。ましてや今度の交渉相手は若造だ。多少脅しをかければ、びびって引くだろう。そう考えた。

ワーズは右手を出し、指を立てた。

「四？」

左手をそれにくわえた。

「六？」

両手を広げた。

「十か。なんだそりゃ。」

「全部を足すとおよそ二十万。いまの我々の動員可能な兵力だ。」

男はその数に、ごくりとつばを飲み込んだが、さすがにそんな脅しは効かないとばかりに、「今すぐそれを揃えてみな。さすがの俺達もそれにはかなわねえだろうぜ。でもよ、いったい何ヶ月かかる。」

と、一度は押し返した。

ワーズはにっこりとして、

「ベールーガ、セントルーガはいいところらしいな。農地は少ないが、気候は温暖ですごしやすいとか。わが国は、北半分が冬には雪に埋もれてしまう。避寒地にいいかもしれない。しかもわが国の境からは三、四日の距離だ。」

「おいまさか。」

そういう脅しは予想外だった。

傭兵を雇う側は、自前の軍団を持たないのが普通だからだ。

「あなた方が勝手をなさるなら、我々もそうすることになるだろう。」

ワーズは掛け金を吊り上げにかかった。

「くっ。傭兵が脅しに引いたという評判が立てば、次から依頼が来なくなる。そうなりゃおまんまの食い上げだ。たとえねぐらを失ってもそれとは引き換えにはできねえんだよ！」

と、男は立ち上がり、ワーズを見下ろした。

ワーズはあわてず、そして騒がず、手札を一枚開いた。
「その心意気を買いましょう。貴族に遇する。ということでどうか。」
「あん？」
「まあ、おかけなさい。」

男はしぶしぶという体で、腰をおろし両手を組んでふんぞり返った。傭兵隊の頭領としては、これ以上の掛け金は無かった。

「わが国は才能を惜しむ。王は、寛大にも貴族の名を与えてもよいとおっしゃっている。」
男はそっぽをむいたまま、
「よくわからねえな。そんな、貴族になって飯が食えるか。」
といったが、才を惜しむ、という一言には少し耳が動いた。

「また通商の自由を認める。たとえばだ・・・。」
といって、手をパンと鳴らした。控えていた少年が、何やらをテーブルに置いた。

「これは狐の毛皮だ。そしてこちらは白テン。皮をなめした上に一度ひも状に切りそろえ、それを再びつなぎ合わせている。それを寄せて外套やマントを作る。」

再び手をパンと叩くと、
「これはペルジアの飾り刀。実用的ではないが、この見事な細工と宝石の輝きは、貴族の腰にふさわしい。
また、この壺は、乳香を収めるためのもの。ヒスイをくりぬき、金の針金を編み装飾している。貴族の奥方が良く使うものだ。」

男は、この小さな机の上に広げられた、昼の日の光にまばゆく輝く光景に目を奪われた。この光が文明ってやつか。周りの草地が今の俺達ってわけだ。

「これは差し上げよう。また、必要であれば商人を差し向けよう。お前達が付き合っていたような、ちんけな商人ではない。西と東の国を自由に行き交う大商人だ。」

うーん、と天をあおぎ、
「高けえんだろうなあ。」
検討がつかなかった。

「高いさ。が、売ればいい。」

「へっ？」

「我々の商人から買い、売ればいい。我々は、ほかの傭兵は知らない。」

くっくっく・・・とひとしきり笑ったあと、

「俺達は傭兵だぞ。商人ではない。うまい話だが、俺達の仕事じゃない。」

と、再び踵をテーブルの上に載せて組んだ。

「貴族なんていったってな。俺達には何の足しにもならねえ。貴族ですって名乗ったら、相手はびびってくれるのか。」

「名誉だ。」

「名誉で、戦争ができるか！」

「出来る。」

こいつの頭はいったいどうなってるんだ、と男は見つめた。今までの話は、力比べと売り物の話だ。駆け引きというものだ。これは俺にも分かる。何せ、傭兵は力を高く売りつけるのが根本だからな。

だが、傭兵に名誉はいらない、要るのは実のなる木だ。

「私は、今クラコワの四万の命を預かっている。この交渉が決裂すれば、お前達の七千と四万が衝突する。二万がそこらは死ぬか傷を負うだろうが、我々は勝つだろう。

そこで死ぬのは私ではない。この話しがどちらに転んでも、私の身には余り関係ないのだ。では、なぜここに私がいるか。それは、名誉のためだ。」

組んだ足越しに、相手をにらみつけた。

「お前を怒らせて、私は切られるかもしれない。でも、この話しがまとまれば、私は民から賞賛されるだろう。それは貴族として最高の名誉だ。

戦いがただ剣のみで行われるのではないことは、お前もよく知っているだろう。私はいま、名誉を掛けてお前と戦っている。」

ひゅーうっと、短く口笛を吹いて、

「俺達の依頼人は、たいてい貴族様なんだが、まあ戦のような面倒なことはおやりにならねえ。民とかなんだとかも、年貢がちゃんと上がっている分には気にはなさらねえ。貴族ってのはそんなもんだと思っていたんだが。」

「この国でもあなたの依頼人達は、そんなものだ。」

「じゃああんたは。」

「私が、じゃない。私の主が、アレスミリアン様がそういう方なのだ。」
ほう、「そいつは一度、会ってみてえな。」

「会えるさ、貴族様ならお目どおりがかなう。」

「そういうおまけ付ってのが気に入ったぜ。」

半金は入らなかったが、ここが引き時かもしれない。国を占領されては見も蓋もないからな。はったりだけ、とは思えない。なにせ、ペルジアまで遠征したのに比べたら、オレ達の国など近いものだから。

男は立ち上がり、右手を伸ばした。

「名前を聞いてなかったな。」

「ワーズウオード・コンスタンティン。」と答えて握り返した。

「はは、舌をかみそうな名だな。俺の名は・・・。」

「ありがとう。ザルカン隊長。」

ほう、準備万端てえわけか。

立ち去る背中に向けて、

「でも、本当に会いたかったら、鍛冶屋に行くほうが早いかもしれない。」と声をかけた。

ザルカンは、なんだそりゃ、というような顔を残して、陣を引き払った。

ワーズワードはしばらくその場に座って、相手の去った側をみている。

背後からニールリングがやってきて、肩の後ろを叩くとゆったりとした声音で、

「お見事。」と声をかけた。

イテカレスは、向こう側に回って椅子に座り、

「男だねえ。」と冷やかした。

もう、背伸びしなくていいんだ、と思ったら、背中の中の汗が急に冷たく感じられた。

翌朝、山間の村は日のさすのが遅い。が、空はもう青く澄んでいた。

「ここにいたい。」とアリシアがいった。

「クラコワは。」

「あそこも好きだ。」

「じゃあ、一度ロンダルトも見てみないか。」

「うん。そうだな。おかあさまも一緒に。」

「母上は、ここから離れない。ここにいるから母上なんだよ。」

「そうか。」

この館に近づき、リードヴェルトの姿を扉口に認め、抑えきれずに走り出したときのことを思い出した。

「それでは仕方が無いな……。お前は意地悪だ。」

オーデリたちは、どうやって先回りしていたのだろう。

「ペルジアの秘宝に空飛ぶじゅうたんがある。それを使ったのだ。ふふっ。」

ふふって。

オーデリ、どうやって先回りしたのだ。

「私達歩きました。」

歩くって、我々は馬に乗っていたのだ。馬のほうが速いに決まっている。

「夜も歩きました。追い越しました。」

はあー。そういうことだったのか。

こらうそつき、魔法のじゅうたんじゃないじゃないか。

「当たり前だ。じゅうたんが空を飛ぶぐらいなら、それに乗ってきているだろう。」

オーデリ、帰りはどうするの。

「あるきます。」

夜通し？

「少しは寝ます。ひい様より先に都に着く。だからもう出発します。」

オーデリと男達は、輿と荷物をまとめて早々に出立してしまった。

そのオーデリをエルシーが呼び止めた。

「これお弁当。もって行って。」

オーデリはエルシーの頬に自分の頬を押し付け、そのまま背をパンパンと叩いた。
ありがとう、あんたのことは忘れない。そんな感じだった。

「私達も出ようか。」

「もう行くのか。」

クラコワにやってきて以来、アリシアはアレスミリアンに対して、何かと不満顔だ。
いまも不満顔のまま見上げて、何か難癖をつける、とっかかりを捜しているようにも見える。

「ワーズ達に任せ切りだから。何かあれば、早馬が来るとは思うが心配だ。」

「彼らならうまくやるだろう。」

「そうは思っているのだけれど。」

「お前が、王だということをついつい忘れそうになる。」

「あなたも、もうすぐ王妃になるのだよ。」

「……」

「どうしたの。」

「退屈になりそうだな。」

「かもしれないね。」

そんな話をして、ぐずぐずしていると、

「まあ、まだ出発していないのね。あまり長いと別れがつかなくなるわ。」

というリードヴェルトの声がした。

アレスミリアンは、供のもの達を先に立たせた後、無駄とは思いながらも

「母上は、まだここを離れる気にはなられませんか。」

と、聞いた。

「ここにいると歳をとらないの。それに、こんなにいい村が他にあるかしら。」

と応えた。

アリシアは「おかあさま。」といったが、後は何を言うのも、うまく言葉になりそうになかった。

「そうね、王さまはお忙しいようだから、一人でおいでなさい。オーデリがいれば大丈夫ね。」

「エルシーも元気で。」

エルシーは、幼なじみの王さまにこっくりとした。

なぜアレスミリアンが王さまなのかは、まだ納得していなかったのだけれど。

二人はマクシミアに乗ると、館をあとにした。

馬の背に揺られながら、アリシアは、館の前に立っている二人がまた夏草に埋もれてしまうまで、その姿を見ていた。

朝の光が、右手に勢いを増してきた。

「うん？どこへいくのだ。方角が違うぞ。」

「北だよ。」

「北？」

「ニール、イテカ、ワーズ……このごみ掃除が終われば、もう国は大丈夫だ。だから、王をやめて、羊飼いになることにした。」

「出来るのかそんなこと。」

「小さい頃は、食べるために何でもやったからね。羊飼いぐらいどうってことない。」

アリシアはこの冗談に少し付き合うことにした。

「では、私はなにをすればいい。王女以外にやったことがない。」

「ヤギの乳絞り。」

「うーん。羊飼いのほうが楽そうぞ。」

そういう二人に、寝坊していた朝の光が差し込んだ。

山かげの村の朝日は遅くやってくる。朝日は、そのふちで山の稜線をじりじりと焼いた後、上へ上へと上っていく。

青みがかった朝の風景は一度にふきけされ、その本来の色を取り戻し始めた。

「美しい。」

秋の訪れはもうすぐだろう。今青々としている下草や葉の広い木は、赤や黄色、そして枯れ色に姿を変えてしまう。

霜が降りると、枯れ草の上に白銀が撒き散らかされ、やがて霜よりも大きな白い雪の粒が、この世界を白一色に変えてしまう。

そんなことすら、この子は知らない。

「帰ろう。おまえがいないと皆が迷子になってしまう。なにせ、おまえは羊飼いだからな。」
アリシアが、また見上げて言った。

マクシミアは回れ右をして、来た道に戻り始めた。
そのマクシミアにもまた、秋が訪れようとしていた。

クラコワでは、一万五千の兵士達が、彼の帰りを待っていた。

傭兵達は既に帰途に着き、ロンダルトとクラコワの境界地帯はウサギ達に返還されていた。にもかかわらず、彼らは、妻や子やじいさんや、ばあさんや犬や猫やニワトリの待つ故郷に帰る日を、少し先に延ばすことにしていた。

半年に近く苦楽をともにし、同じ水を分け合って飲んだ彼らの王と、別れのをきを共有したいと思っていたのである。

アリシアは「羊だ羊だ。」と喋ってからかった。

アレスミリアンは渋い顔でにらんだが、一向にこたえた様子は無かった。

「この時期に、酒を集めるのって大変なんですよ。」

とイテカレスがぼやいている。

新酒にはまだ早い時期だった。どこの酒倉にも、もうわずかしが残っていなかった。

「ところで知ってます？ニールリングが婚約者を呼び寄せたんですよ。」

「ほう！見たのか。」

「ふっふっふ。当たり前じゃないですか。ニールは大っぴらにはしないのですが、もうこの町の若い娘達の間では噂で持ちきり。なので、やつの屋敷の“つて”を使って、こっそり見てきました。」

「で。」

「それがもう、いかにも箱入りの、世間知らずのおしとやかなお姫様って感じで。」

いいな、あーいうのも。

「でも、箱入りだからといって、おしとやかとは限らないですけどね。」

「それは、どういう意味だ。」

と、離れたところから不機嫌な声がした。

「おおっ！聞いてたのか。」

アレスミリアンが茶化した。

「聞こえたのだ。どういう意味だ。」

イテカレスはやばい雰囲気と恐れをなし、こっそりこの場を抜け出そうと、じりじりと後ろに下がっていった。

「イテカレス。」

アリシアが呼んだ。珍しい。

「はっ！」

びくう。

「その“つて”を使って、私からの伝言を伝えてくれますか。一人で家を離れて寂しいでしょう。私やリディア様が話し相手になってあげます。レム・プラントの館まで遊びにいらっしやい、と。」

「承知いたしました。」

「で、そのつてというのは、やはり・・・。」

女の子なのか？

「いやだなあ、“つて”は“つて”ですよ。はっは一。」

と、妙なことを言いながら、ようやくごまかして去っていった。

「何でも筒抜けなのだな。大丈夫なのか、ロンダルトの私達の・・・。」

「アストアシタ宮？」

「そう。」

「ああ、絶対大丈夫。」

「どうしてそう請け負えるのだ。」

「セシリーという侍女がいるんだが、彼女には頭が上がらないんだ。だから大丈夫。」

「ああ。誰にでもいるのだな、そういう女が。」

と、男にとっては聞き捨てなら無い、不気味なことを言っただけだ。

秋が近づく風の中を、男達の騒がしい声が飛び交っていた。
アレスミリアンは男達の間を巡りながら、出来るだけ多くの人と言葉を交わそうとした。

ここから故郷に帰ったら、彼らの多くはまた変らない日々の繰り返しに戻っていく。

土を起こし、堆肥を鋤き入れ、種をまき、雨を待ち、鳥を追い払い、雑草を抜き、追肥をまき、風が涼しくなるのを待ち、刈り取り、祭りを楽しみ、体を休め、また土を起こす。

平凡な毎日の中で、彼らは平凡でなかった日々のことを時々思い返し、妻や子や、そして孫に話して聞かせる。自分がどんなに勇敢に戦ったか、敵がどんなに強かったか、そして“われらがアレスミリアン王”の起こした奇跡を。

子供達はまずこの国と名前と、アレスミリアン王の名前を覚える。
男の子は、棒切れを振り回し、だれがアレスミリアン王になるかを取り合うのだ。
女の子は、異国から来た美しい姫様にあこがれ、王様のお嫁さんになる。

王様のお嫁さん、アリシアは複雑な気持ちだった。
祖国ペルジアの軍を破った男達。東方一帯に安定を取り戻すために、遠征した男達。知らぬ間に運命の気まぐれに翻弄されて、彼らを統べる王の妃となる自分。

ペルジアの衣装を脱ぐ気にはなれないけれど、気がつくとベールを忘れておくことが多くなった。よほど気の入る行事でもなければ、オーダーも何も言わない。

「王妃様ー。」
えっ。

「おいしつれいだぞ。」
「王妃さまー。」

いい気分酒の回った顔の男が呼びかけている。
隣の男が止めるのも聞かずに、アリシアを繰り返し呼んでいる。こういう酔っぱらいは、横から何を言っても当人には効果がない。一通り言いたいことを言わせない限り、口をふさがない、

「王妃様、ひとつ聞きてえことがあるんでございます。」
「おいシツレイだって、このよっぱらい。」

「よい。でもわたしはまだ王妃ではありません。」

「あら！うちの王さんは、いったい何をしてやがらせませま・・・あれ？」

「どうしました。」

「王妃様。わしらの給金のために、お輿入れの道具を売りなさるって本当ですか、つときたもんだ。」

くっくっく・・・。

「本当です。みなには長い間苦勞をかけたが、これで賄うことができます。」

男は隣の男と、きたない顔を見合わせ、

「そんなもうしわけんねえ。大事なお輿入れの道具を売りなさるなど。うちの王様の甲斐性がねえからって、そこまでなさらねえでも・・・。でもありがてえー。」

「そう、おれらはもう半ばあきらめておりましたので、へえ。」

「王妃様、すまねえなあ。うちの王様は昔から貧乏でえ。」

近くで聞いていたアレスミリアンはもう、いたたまれなくなってきた。

アリシアは、先ほどからおなかを押さえて笑っている。

「心配しなくてもいいの。私には使いきれないほどあるものだから。みなのためになれば、私は幸せです。」

「いいひとだあー。」

「王妃様ばんざーい。」

「ばんざーい。」・・・

アリシアは、まだ笑いが収まらなかった。

もう、くどくどと考えるのはやめよう。この国の王妃となって、みなと歩もう。

まだ王妃様じゃないけれど。

ああ可らしい。

旅立ちの朝は曇り空だった。

輿入れの長い荷駄隊は、すでにロンダルトに入ろうとしていた。

ロンダルトのザルウィー伯からは、いつ戻るのかという矢のような催促が連日到着している。アレスミリアンは、そんなにいやかなあと笑っていたが、いまだ処分の片付かない五十人を幽閉しているうっとうしさを考えると、それもやむをえなかった。

これまでと同じように、クラコワをニールリングの手にゆだねると、アレスミリアンとアリシアは旅立っていった。カラバ公はそれを満足げに窓から見送った。

アリシアは輿を使うのをやめてしまった。馬になれたことと、この国にはそれを使うものがほかにいなかったからである。

オーデリは「仕方ありません」と荷物とともに無蓋の馬車に乗ることにした。毎度毎度、夜も歩くわけには行かなかったし、慣れてしまえばそれなりに快適だった。

警護の二十騎を従え、一行は四日間の移動をした。

ロンダルト入城を前に、恒例のおめしかえを、今回は近隣の村の家を借りて終えた後、一行は門をくぐった。

それと同時に、さまざまな貴族の紋章をつけた旗を持ち、盛装した騎士百騎が前につき、一行を先導した。

この日、異国から来た姫を一目見ようとして屋根から滑って怪我をしたもの七名。沿道の人垣で押し合いでけんかになって顔を殴られたもの十数名。一行の後をついて走り、馬の落とし物（失礼！）ですべて転んだ子供達二十数名。祝い酒だといって飲みすぎて、道端で寝転んで次の日も二日酔いで仕事を休んだもの数百名。

そして次の日、叫びすぎてのどが痛くなると、薬屋から水あめが消えてなくなった。

「おおっ。よくぞお帰りで我が王よ。」

「あいかわらず古風ですね。」

「そしてこちらが姫君であらせられる。」

「よろしくたのみます。」

「いや、もう私はこりごりでございます。金輪際……。今すぐお返しします。」

ザルウィー伯ヨクアルは、その貴族的な典雅な振る舞いを崩しはしなかったが、この数ヶ月の間に眉間のしわが深くなったようだ。

みずから宮殿のファサードまで出迎えにでたのも、一刻も早くその立場から逃れたいという気持からだ。

アレスミリアンが、不要になったマントを肩からはずすと、侍従がそれを受け取り、彼がホールから大廊下へと進んでいくと、この宮殿に仕えるもの達が総出で両側に立ち、口々に

「おかえりなさいませ」、

「おかえりなさいませ」

と述べては腰をおとして辞儀をする様は、風が草原を吹き抜けていくようだ。

主の帰還は言うまでもなく、ここしばらく続いたこの宮殿の異常事態を、何とか収束させて欲しいという期待感も、彼らにはあった。

最後に彼が、両側に大きく開かれた扉を入った部屋では、セシリーが待ち受けていた。

「おかえりなさいませ。よくぞご無事で……。」といった後は言葉にならなかった。

アレスミリアンは「うん。」とだけ応え、ザルウィーがもう座りたくないと言った椅子に腰掛けた。

ザルウィー、ザヒル、イテカレス、ワーズワードはその前にたち、ようやく納まるべき人が納まったという安堵感でそれを見た。

「彼らの処分は明日言い渡す。今日は皆引き取ってくれていい。私も今日は何もせず、過ごしたいのだ。」

ザヒルは久しぶりの若い呑み相手をみつけ、強引に引きずっていった。

ザルウィーも、もう今日は、いやこれからも何もしたくない気分だった。

男達はみな引き上げていった。

すっかりと人影が少なくなった。

「セシリー。」

とアリシアが呼んだ。

緊張した面持ちでセシリーがアリシアに近寄り、小さく腰をかがめた。

アリシアは、セシリーにもそうと分かるようにアレスミリアンをちらっと見ると、

「あの唐変木に聞かれるのはしゃくだから、あちらで話をしましょう。」

と、腕をからませて庭に向かって大きく広がる窓の側に歩んだ。

ペルジアの華やかな盛装の隣にいる自分が、少し惨めな気がした。

「私はこの格好がすき。そして、私にはオーデリという侍女がいる。この装束は、彼女にしか整えられない。」

ああ、来るべき時が来たんだわ。

セシリーは心に暗く深い穴が広がっていくのを見た。

「ここに来る前に、あの唐変木のお母さまにお会いしたの。」

「あの、わたくし……。」

といいかけたセシリーの口を指で押さえた。

「一生懸命、お茶を用意したりしたのだけれど……、ふふっ、もう二度とは出来ないわ。だってこの宮殿中のカップを割ってしまいそうですもの。」

セシリーは、できればこの場を早く逃げ出したかった。もう何も言わなくていいから、せめてこの部屋からだけでも出て行きたかった。

「あなたがよければ、ずっと王さまにお茶を入れて差し上げて欲しいの。

私にはできないし。

それは冗談ダケド、あの唐変木は自分のことは全然だから、誰かが気を配っていないと、大変なことになりそうな気がする。

この宮殿の裏方の世界をあなたに任せたいの。私は、半ばそういう世界で生まれ育ったから、その怖さを知っているつもり。」

「お願いできるかしら。」

セシリーはその真意がわからず、答えられずにうつむいていた。

「あなた、あの唐変木が好きでしょう。」

「いえっ、まさかそんなこと・・・」

見透かされた、ずっと隠していたのに、自分自身にもそんなこと無いて秘密にしてたのに。
「だって、それ以外にあなたがここに残る理由はないもの・・・。」

頬が赤くなったのを隠そうとして、顔を背け外を向いた。そして、偶然、ガラスに映ったアリシアの顔を見て、驚いて振り返った。

「おかしいでしょ。ペルジアを出てから泣いてばかりなの。それまでは何があっても涙なんか流さなかったのに。わたし、どこかが壊れちゃったみたい。

でも、悲しくて泣くのは今が初めて。」

「なにが・・・。」

「あなたの気持ちを知っているのに、何もして上げられない。つらいはずなのに、ここにとどまってとお願いしている。わたし、とってもひどいことを言っている。ごめんねセシリー。」

セシリーは、このとき初めてアリシアの顔を間近に見た。
そして気がついた。

セシリーの、この短い間の心の動きを、すべて言葉にして語るのは難しい。
ただ、彼女は決意したのだとだけ言っておこう。それは、人に尽くすことの喜びを知っているものだけが出来る決心だった。

ただ糊口に資するためだけに、身の回りに待るものにはできない。

私はきっとこの人を好きになるだろう。イーリアス様を慕ったように、この人を好きになれる気がする。

アリシアは、私を放り出すだろう。イーリアス様の影の残る私がいては、彼女には迷惑なだけだから、そう覚悟していたのに。

アレスミリアン様のために自分を捨て、私のために・・・きっとこのことを話すために多くのことを考えたのだ。まだ、十八なのに。

アリシアの肩越しに、オーデリと目が合った。

オーデリは、どうですうちのひー様は、たいしたものでしょう、というように胸をはっていた

。

それがおかしくて、うんうんと頷くと、こらえていた感情が噴出した。

二人は笑いながら泣いていた。いや、三人が。

そのとき唐変木は、すわった時の形のまま心地よさそうな寝息をたてていた。

「もお！ 本当にバカ。」

幽閉されていた貴族達は、王の婚礼を祝って罪一等を赦され、位階と財産と領地の没収と、国外への追放を命じられた。

財産の没収とはいえ、彼らには多かれ少なかれ人には知れぬ隠し財産があり、当座の暮らしには困らないはずだった。

アレスミリアンとアリシアの婚礼には、西の隣国などからも使節が訪れ、ロンダルトは国際都市の賑わいをみせた。もちろんシルヴェスタの思惑通り、ペルジア意匠の金細工は大評判となり、一時的にアルシャーファの市から商品が消えうせてしまった。

二人の成婚の祝宴が、アストアシタ宮を徐々に華やかに飾った。宴は五日間続き、夜毎大広間では楽士の音楽と、手をつないで踊る男女の影が絶えなかった。

「踊っていただけますか。」

とイテカレスがセシリーに申し込んだ。

そんな侍女が踊るなんてありえない、と拒もうとすると、オーデリが後ろから両腕で思いっきり突き飛ばした。

おもわずセシリーがイテカレスの腕の中に飛び込むと、イテカレスはそのまま彼女の手をとり、踊り始めた。

セシリーは、最初のうちは気の向かない顔だったが、踊っているうちにこれも悪くないと打ち解けた表情になった。

イテカレスは、ここぞとばかりに楽士に目配せを送ると、音楽は一転してゆっくりとした時間の流れを作り出した。イテカレスは、少しセシリーを引き寄せた。

「あなたに会うために帰ってきました。異国の空の下でも、夜の海の上でも、あなたを思わないことはなかった。」

「おじょうずね。ペルジアではどんなお方にそれを仰ったの。」

といつつも、悪い気はしなかった。

「とんでもない。そのようなこと。第一ペルジアではこういうことはいたしません。」

ああ、それで踊りになられないのね、あの方は。

「ペルジアといえば、初めてあの方を見たとき、初めてではないような気がしたんだよなあ。ほら、よくあるでしょう。前にも見たような気がするときって。」

セシリーは足を止めた。

「どうしました。」

「わからないの？」

「えつ。」

少し体に距離をおいて

「本当に分からないの？」となおも追求する。

「似てるでしょう。細い眉、緑がかった瞳、細い鼻梁、小さな口とあご。肌や髪の色は違ってもお二人は似ているの！」

「あっ！」

「まったく男って……。この唐変木！」

セシリーはむこうずねをけて、背中を向けて戻っていった。

それでもイテカレスは「また踊ってくださいねー。」と片足でたちながら、まったく懲りた様子は無かった。

セシリーは、もう少しいい衣装のときに誘えよバカ、と思いながらも満更ではないように笑っていた。

アレスミリアンとアリシアの前には、人の流れが絶えなかった。

「疲れたかい。」

「オーデリに、私は気を抜くと表情が無くなるから、気をつけろといわれた。だから顔が引きつりそうだ。」

「ええ、カタラナー州、ビヨルドフ伯爵。」

侍従が読み上げる。

「国王陛下、この度はまことにおめでとうございます。」

「ありがとう。遠路はるばる、痛み入る。」

「王妃様も、まことにお美しい。」

「ありがとう。」

「ご子息はお元気か。」

「おお、ご存知ただいておりましたか。いや、先の戦いでは、ザルウィー伯の揮下で槍を振るいました。あれ以来、何度も何度もその話しをしております。私がもう少し若ければ、息子ではなく私が城壁に立ちましたものを。全く残念です。」

「一度、アストアシタに遊びに来られよと。」

「それは息子も喜ぶでしょう。では……。」

ビヨルドフ伯爵はまた人々の中に戻っていった。

「よく覚えているな……。」

「なにを？」

「だからいまの、ピヨ何とか伯爵のご子息……」

「いや、初めて聞いたよ。」

……腑に落ちない。

「だっていま、言ってたじゃないか。」

「あーあれ。最初に“ええ”といえは息子。咳払いすれば娘。何も言わなければ、特にいない。」

「ああ……表情を保つのがバカらしくなってきた。」

「だめだめ、もう少し我慢して。」

「オッフオン。ええ……。」

祝宴はまだ続いているが、この物語はそろそろ幕を下ろさなければならない。

「とうとう殺めに来たか……。」

言葉の危うさとは裏腹に、老人の口調はむしろ朗らかだった。

しわだらけの手が、肘掛けからゆっくりと持ち上げられて、二三度、上下に振られた。

「もそっと近う寄れ。近頃は目が遠になっての。そんなところに居ってはよく見えんのじゃ。まあ、お前なら観ずとも雰囲気で判るがな。」

「あれからもう、三年になるか。いや四年か？まあどちらでも良いことじゃが……。」

この辺りの者は、どうにも言葉が通じぬので、退屈で仕方がない。初めの頃は、なんとか教え込もうとしたのじゃが、覚えの悪さにすっかりあきらめてしもうた。

「近頃は、人より獣の方がよっぽど愛想がよい。」

「食べ残しのパンくずを撒いて居ったら、小鳥が寄ってきおった。餌が有れば集まってくるなど、人も獣も一緒じゃ……と思うていたが、近頃はわしがろくすっぽ動けぬのを良いことに、机の上やら足下をちょんちょん飛び回っては、勝手に歌を歌って居る。

狸やら、鹿やら……。熊が通りがけに、こっちをじっと見て居たときは、さすがに身が縮みそうな気がした。そう何時までもここには居らんから、あっちへ行けといってやったら、好きにしろと言うように、背中を向けてどこかに行ってしまう居った。

「オオカミが一晩中鳴いて居たこともあったな。」

木漏れ日が、戸外に置かれた椅子に身体を預けた老人の上で揺れている。髪は薄くなり、髭は弱くなったが手入れはされている。衣服も、黒ではないが心地よさそうだった。

「寝所から、ここまで歩くのに一苦労じゃ。介添え無しで歩けぬような身になるとはのお。思いもせんじゃった。」

「ここは一体何処なのか……。てっきり領地の屋敷へ幽閉でもされるかと思ったが、そうであればまだ何とかなるだろうとな。が、着いてみればこの有様じゃ。何がどうやら、ここがどこやらさっぱり判らん。なにせ言葉が通じぬ上に、旅人の一人も立ち寄りぬときは、な。」

「王国の西の果てでございます。」

男が初めて口を開いた。

「西……。ああ、ザルウィーの所領か。なれば、通じんわけじゃ。ザルウィーは、結局あ奴になびいたのか。そうか……。いま……。王国はどうなって居るのじゃ。あ奴はどうして居る。」

「ペルジアのイズマイルを討ち果たし、その姫を娶られました。」

「なんだと！」

それまで、病人のように椅子の背に深くもたれていた身体が、精気が戻ったようにびくっと持ち上げられた。

「くっくっく・・・はっはっは・・・！」

老人はひとしきり笑った後、喉が間えるのか、暫し老人らしい咳をした。

「ハーあ。死ぬかと思ったぞ。あの男、退屈させんの。まあ、親父の仇の孫娘を、それと知った上で嫁にしようとした男だ。それぐらいのこと、なんの造作もない事だろう。ついに二つの国を手に入れたか。いやペルジアを含めて三つだな。」

その言葉の後、暫し無言であった。

「あ奴さえ現れねば。あ奴とアズレクンさえ居なければ、わしは今もあの宮殿に居たものを。おまえて、このような地の果てまでやってくる事もなかった。わしは今でもあの親子は許さん。あ奴を思い出すと、今も腑が煮えくりかえる。あの親子さえ居らねば・・・。」

「リードヴェルト様。」

「だれだと・・・。リードヴェ・・・。ああ、思い出した。あ奴の母の名だったな。確か、田舎の貧乏貴族の娘だったとかで、凶作の折りに領地を売って農民の借金の肩代わりをしたとか言っておったか。

・・・そのせいで家が傾き目まで見えぬようになったとか・・・お前はよくそんなことまで調べた・・・。それがどうかしたか。」

「あなた様にとっての、真(まこと)の仇。」

「女一人が、何の敵なものか。ばかばかしい。パリッシュお前も呆けたな。」

思いがけない客を迎えた庭には、元の静けさが還っていた。一度刈り取った夏草が、また茎を高く伸ばしている。濃い緑の葉の上を、種をぶら下げた綿毛が飛び越していく。

「パリッシュ。おらぬのか・・・。」

まだら模様の小さな虫が、草の頂上で飛行羽を甲冑の中から伸ばすと、何処かへと飛んでいった。

「夢か、・・・現(うつつ)か。」

老人は、目の前で手を握り、再び開いた。

「イーリアス・・・。イーリアス・・・」
夕暮れの近づく庭で、眠っている老人の頬が濡れていた。

最後に語り残したエピソードを一つだけ加えて、この物語を本当に終わりにしよう。

アレスミアンとアリシア。二人の結婚からおよそ一年が過ぎた。

その一年を祝して、この夜集まった人々は、二人にとっては気の置けない人々ばかりだった。楽士は妙なる音楽をかなで、それに合わせて人々は軽やかに踊る。

テーブルの上には尽きることなく料理が饗され、呑んでも呑んでも酒杯が乾くことはなかった。イテカレスは、今もセシリーを追いかけては袖にされている。セシリーは彼を避けているのではなかったが、節操の無さには愛想をつかしていた。

ワーズワードが恋をしたのは、意外にもとある田舎貴族の娘だった。都会風の洗練された衣装も、あか抜けた化粧もしない娘だったが、飾らない純情さが会うたびに彼の心にしみていった。

ニールリングは「予定通り。」許嫁との約束を、まもなく果たそうとしていた。イテカレスには「おまえも少しは恋愛しろよ。」とそそのかされたが、彼には子供の時からの関係を反古にする気はなく、「こんな所まで似なくてもなあ。」とあきれられてしまった。

いずれにしても「クラコワの娘の半分は死ぬだろう。」とイテカレスは予言し、「いい加減になさい。」とセシリーに足を蹴られた。

シルヴェスタは、
「結婚なんて、おおばかものすることだ。」と相変わらずいつている。

結婚はしなかったが、彼は子だくさんだった。身寄りのない子供を見つけきては、屋敷に住まわせ商売を覚えさせた。彼らは大きくなると、彼らの「おやじ」がかつてそうしたように、船や馬に乗り、世界に広がっていった。

キリアンデルとリディアはクラコワの屋敷を引き払い、プランタニスに本拠を移した。二度の戦いで生死を共にした一族は、レセクルとエスクロルの恩讐を乗り越えた。猫たちも今は安心して、プランタニスの町でうたた寝をしている。

次の年、男子が生まれ、年を開けずして女子が産まれた。住民達は皆、どちらかと言えば母親似だと噂した、

物語の登場人物は、王であり、貴族や農民や商人、市井の人であり兵士で有ったりする。だれもが歴史の波にも巻き込まれ、時にあらい、時に流され、時に命を落としたりした。

彼らの人生は、この物語からあふれだし、今も続いている。

キノツラは、家族との平穏な毎日の中で、畑を耕し汗を拭き、青い空を見上げては、ジュチが訪ねてくる日のことを心待ちにしている。

ジュチは、今もロンダルトの近くに残っている。彼は、炭と灰に覆われた故郷に、まだ帰る気持ちになれなかった。

靴職人のコルピンは、今日も靴を作り、息子の靴に、馬にでも履かせるとダメを出した。

セルディックは十四才の旅立ちを指折り数えて待っている。ソニアは、王様の結婚を聞いてがっかりしたが、あの時聞いた海の話は一生忘れないと心に決めた。

夜が更け、一人また一人と人影が広間から消えていく、ろうそくの火も燃え尽き始めていた。

アレスミリアンとアリシアは、二人が良くそうしているように、賑やかな宴の余韻の熱を楽しみながら、召使い達がそれをかたづけていく様子を眺めていた。

彼らもそれには慣れっこで、王が自分たちの仕事ぶりを見ているのを楽しみながら、あるいはわざと見せつけるように食器を積み上げたり、燭台を指の間に何本もはさんで運んだりした。

男が初めて娘の入り口に立ったとき、まるで迷子の子供のように見えた。自信なさげで、恥ずかしそうで、所在なく取りとめの無い言葉を話していた。

帰るところをなくしてしまった男と、どこにも行くところの無い娘。
過去を喪ってしまいそうになった男と、未来を見つけられない娘。

男は彷徨いの果て、入り江に隠れる小船のように娘のもとを訪れて、娘はその自由な航跡に、未来への憧憬を託そうとした。

そうして二人は船出した。

やがて、あらかたのものは片づいて、広間が次第にただのがらんとした床だけになったころ、「おまえも、いつも見てるだけはつまらないだろう。」とアリシアが立ち上がって声を掛けた。

アレスミリアンが何のことだろうと首をかしげると、アリシアは腕を伸ばし、「踊ってやってもいいぞ。」といった。

アレスミリアンは半信半疑でその手をとると、広間の真ん中へと導いた。すでに殆どのろうそくは燃え尽き、残りわずかな灯芯がオレンジ色の黄昏を二人にささげている。

腰に手を回し、ゆっくりと足を踏み出すと、アリシアもそれに合わせて身体を動かした。

「いつのまに。」

とアレスミリアンが問いかけた。

「セシリーに教わったのだ。おまえがいつも退屈そうなので、相手をしてやろうとおもって。」
床を踏む、二人の足音だけがしばらく続いていた。

退屈していたわけではないが、
「驚いた。とても上手だ。」
アリシアの足が、少し乱れた。

「少し疲れた。」
と言いつつするようにいうと、アレスミリアンに身体をあずける。
二人は、影踏みをするようにその場でささやかに身体をゆらし続けた。

耳元で、アリシアがささやいた。
「“やや”ができた・・・。」

アレスミリアンが動きを止め、アリシアを見つめると。
「おまえは、父親になるのだ。」と繰り返した。

「私が、父親に・・・。」
アリシアが頷いた。
「おとうさん。」

アレスミリアンの中に、今まで感じたことのない幸福感が生まれた、
まだ見ぬ子供と、三人の家族が生まれた。

音もなく壁に穴があくと、背の高い燭台が次々と運び込まれ、広間は再び、昼の明かりを取り戻した。

少し眠そうな楽士達が、あくび混じりに現れると、それぞれの楽器を調整し始める。
部屋の壁からは、この宮殿に仕えるもの達が次々と現れ、誰も見たことのない王と妃の輪舞を待ち受けた。

精妙な旋律が流れ始めた。

王と妃は互いに向き合い、小さく始まりの挨拶をした。

「黄金の麦畑」

連載中

「黄昏の王国」

イーリアス編

アリシア編

— 僕カノシリーズ —

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で 夏」

「僕と彼女のエリア」

「僕と彼女のインベンション」（次回）

— その他 —

夕暮れの赤ちょうちん

いもうと

サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス あのころの僕たち

花舞い、名残り雪

詞画集「ただ憧憬だけを」

写真集「空と雲と、ときどき月」

写真集「夢みる桜」